

一般国道9号（静間仁摩道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書3

古屋敷遺跡（C・F・H・I区）



2017年3月

国土交通省松江国道事務所
島根県教育委員会

一般国道9号（静岡仁摩道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 3

古屋敷遺跡（C・F・H・I区）

2017年3月

国土交通省松江国道事務所
島根県教育委員会

序

現在、一般国道9号の大田市静間町～仁摩町間は、急カーブや急勾配が連続する区間が多く、重大事故が発生しやすい状況にあります。また一般国道9号の代替路線がなく、交通事故や災害等の発生により、日常生活はもとより、地域の経済活動に多大な支障をきたしております。そのため、中国地方整備局松江国道事務所では、緊急時の代替路線の確保、医療・観光・物流活動の支援を目的として、静間・仁摩道路を平成20年度から事業化し、整備を進めています。

道路整備にあたり、埋蔵文化財の保護に十分留意しつつ関係機関と協議を行っていますが、回避することのできない埋蔵文化財については、道路事業者の負担により必要な調査を実施し、記録保存を行っています。本事業においても、静間・仁摩道路建設地内にある遺跡について島根県教育委員会の協力のもとに発掘調査を実施しました。

この報告書は平成26・27年度に実施した、大田市仁摩町大国に所在する古屋敷遺跡（C・F・H・I区）の発掘調査をとりまとめたものです。今回の調査では、島根県で初例となる杭列を伴う弥生時代前期の水路や縄文時代の漆塗り櫛など、当時の社会の様子をうかがうことのできる重要な資料を得ることができました。本報告書がふるさと島根県の歴史を伝える貴重な資料として、学術並びに歴史教育のために広く活用されることを期待します。

最後に、当所の道路整備事業にご理解、ご支援をいただき、本埋蔵文化財発掘調査および調査報告書の編纂にご協力いただきました地元の方々や関係諸機関の皆様に対し、深く感謝いたします。

平成29年3月

国土交通省中国地方整備局

松江国道事務所長

小林 寛

序

島根県教育委員会では、国土交通省中国地方整備局松江国道事務所から委託を受けて、平成25年度から一般国道9号(静間仁摩道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査を実施しています。本書は、このうち平成26・27年度に実施した古屋敷遺跡(C・F・H・I区)の発掘調査成果をとりまとめたものです。

古屋敷遺跡は、大田市仁摩町大国に所在する縄文時代後期から弥生時代前期の遺跡です。この調査で、島根県では初例となる弥生時代前期の杭列を伴う水路や縄文時代の漆塗り櫛が発見され、当時の社会や人々の生活の様子を知る上で貴重な資料を得ることができました。本書が地域の歴史を解明していくための基礎資料として、広く活用されることを願っております。

最後になりましたが、発掘調査及び本報告書の作成にあたりご協力いただきました国土交通省中国地方整備局松江国道事務所をはじめ、大田市教育委員会、地元の方々並びに関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成29年3月

島根県教育委員会

教育長 鴨木 朗

例 言

1. 本書は、国土交通省中国地方整備局松江国道事務所から委託を受けて、島根県教育委員会が平成26・27年度に実施した一般国道9号（静間仁摩道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査のうち、大田市仁摩町大国内に所在する古屋敷遺跡（C・F・H・I区）の成果をとりまとめたものである。

2. 調査組織は次のとおりである。

調査主体 島根県教育委員会

平成26年度 現地調査（C・F区）

〔事務局〕 廣江耕史（島根県教育庁埋蔵文化財調査センター所長）、渡部宏之（総務課長）
池淵俊一（管理課長）

〔調査担当者〕 増田浩太（調査第二課文化財保護主任）、松尾賢二（調査第二課臨時職員）、渡辺聡（同臨時職員）

平成27年度 現地調査（H・I区）

〔事務局〕 廣江耕史（島根県教育庁埋蔵文化財調査センター所長）、渡部宏之（総務課長）
池淵俊一（管理課長）

〔調査担当者〕 増田浩太（調査第二課企画員）、岩田剛（調査第二課臨時職員）、無川美和子（同臨時職員）

平成28年度 報告書作成

〔事務局〕 萩 雅人（島根県教育庁埋蔵文化財調査センター所長）、渡部宏之（総務課長）
池淵俊一（管理課長）

〔調査担当者〕 増田浩太（調査第一課企画員）、田中玲子（調査第一課臨時職員）

3. 現地調査および整理作業において、以下の方々から御指導いただいた。（五十音順、所属役職は当時）

会下和宏（島根大学ミュージアム准教授） 小畑弘己（熊本大学文学部歴史学科教授） 奥山誠義（奈良県立橿原考古学研究所研究員） 及川 穰（島根大学法文学部社会文化学科准教授）
片岡太郎（弘前大学人文学部保存科学特任助教） 千葉 豊（京都大学文化財総合研究センター准教授） 中村健二（公益財団法人滋賀県文化財保護協会企画調整課副主幹） 中村唯史（島根県立三瓶自然館） 濱田竜彦（鳥取県立むきびんだ史跡公園調査整備担当係長） 林成多（ホシザキグリーン財団研究員） 平部達哉（島根大学法文学部法文学部社会文化学科准教授） 星野安治（奈良文化財研究所研究員） 松本直子（岡山大学大学院社会文化科学研究科准教授） 村田泰輔（奈良文化財研究所埋蔵文化財センターアソシエイトフェロー） 山口雄治（岡山大学埋蔵文化財調査研究センター助教） 山田昌久（首都大学東京大学院人文社会学研究科教授） 山田康弘（国立歴史民俗博物館研究部准教授） 山本悦代（岡山大学埋蔵文化財調査研究センター教授）

4. 発掘調査作業（安全管理、発掘作業員の雇用、掘削、測量等）については、以下のとおり島根県教育委員会から委託した。

平成26年度：大畑建設株式会社／平成27年度：株式会社トーワエンジニアリング

5. 挿図中の北は、測量法による第三平面直角座標系 X 軸方向を指し、座標系の XY 座標は世界測地系による。また、レベル高は海拔高を示す。
6. 本書第2図は、国土地理院発行の1/25,000電子地図(仁万)を使用して作成したものである。
7. 本書に掲載した写真は、各調査員の他、株式会社ジェクトが撮影した。
8. 本書の執筆は、第1～6、8章を増田、第7章を渡辺正巳、株式会社加速器分析研究所、一般財団法人文化財科学研究センター、片岡太郎、村田泰輔、星野安治、奥山誠義、上山晶子が行った。また、本書の編集は増田が行った。
9. 本書に掲載した遺物及び実測図・写真などの資料は、島根県教育庁埋蔵文化財調査センターで保管している。
10. 表紙に使用した画像は、Burker microCT R製 CTvox Version 3.0 で作成した。

凡 例

1. 遺物実測図の断面は、縄文土器・弥生土器を白ヌキ、石製品は斜線で示している。木製品については断面に年輪方向を模式的に記入している。
2. 本書で用いた土器の分類及び編年観は下記の論文・報告書に依拠している。
 - (1) 縄文土器
柳浦俊一 「縄文土器の編年」『古屋敷遺跡 (A・E区)』一般国道9号(静間仁摩道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書1 国土交通省松江国道事務所・島根県教育委員会 2017
千葉豊『西日本の縄文土器 後期』2010
濱田竜彦「山陰地方における縄文時代晩期土器について」『縄文時代晩期の山陰地方』第16回中四国縄文土器研究会鳥取実行委員会 2005
 - (2) 弥生土器
『弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編』1992
3. 土器の色調は、小山正忠・竹原秀雄『新版標準土色帖』(農林水産省農林水産技術会議事務局監修/(財)日本色彩研究所 色票監修)第37版 2014 に従った。

目次

第1章 調査に至る経緯と経過	1
第2章 古屋敷遺跡の位置と歴史的環境	4
1. 古屋敷遺跡の位置と地理的環境	4
2. 古屋敷遺跡周辺の歴史的環境	4
第3章 発掘調査の方法	8
1. 調査区の設定	8
2. 調査の方法	8
第4章 古屋敷遺跡（C区）の調査	11
1. C区の土層	11
2. 第1遺構面の調査	15
3. 第2遺構面の調査	20
4. 第3遺構面の調査	26
5. 第4遺構面の調査	28
6. 第5遺構面の調査	28
7. 第6遺構面の調査	44
8. 第7遺構面の調査	61
9. 第8遺構面の調査	64
10. 第9遺構面の調査	64
11. その他の出土遺物	66
第5章 古屋敷遺跡（F区）の調査	69
1. F区の土層	69
2. 第1遺構面の調査	71
3. 第2遺構面の調査	72
4. 第3遺構面の調査	75
第6章 古屋敷遺跡（H・I区）の調査	77
1. H・I区の土層	77
2. 第1遺構面の調査	80
3. 第2遺構面の調査	91
4. 第3遺構面の調査	105
5. 第4遺構面の調査	119
6. 第5遺構面の調査	124
7. 第6遺構面の調査	130
8. 第7遺構面の調査	135
9. 第8遺構面の調査	136
10. その他の出土遺物	140

第7章 自然科学分析等	146
古屋敷遺跡H区発掘調査に伴う花粉分析	146
古屋敷遺跡H区における放射性炭素年代(AMS)測定	152
古屋敷遺跡H区出土木材の樹種	157
静岡仁摩道路発掘調査における樹種同定	162
X線CT観察による内部構造からみた古屋敷遺跡出土漆櫛の製作技術	164
島根県古屋敷遺跡素材束の分析	169
古屋敷遺跡(C・F・H区)から出土した赤色顔料付着遺物について	170
第8章 総括	174

表目次

第1表 遺構面と出土遺構・遺物の関係	174
第2表 古屋敷遺跡(C区)出土土器観察表	179
第3表 古屋敷遺跡(C区)出土石器観察表	184
第4表 古屋敷遺跡(F区)出土土器観察表	185
第5表 古屋敷遺跡(F区)出土石器観察表	185
第6表 古屋敷遺跡(H・II区)出土土器観察表	186
第7表 古屋敷遺跡(H・II区)出土石器観察表	193
第8表 古屋敷遺跡(C区)出土陶磁器一覧表	194
第9表 古屋敷遺跡(H・II区)出土杭観察表	195
第10表 古屋敷遺跡(C・H・II区)出土木製品観察表	195

挿 図 目 次

第 1 図	古屋敷遺跡の位置	4
第 2 図	古屋敷遺跡の位置と周辺の遺跡	5
第 3 図	古屋敷遺跡調査区配置図	9
第 4 図	古屋敷遺跡 (C・F・H・I区) グリッド配置図	10
第 5 図	C区北壁土層堆積状況 1	12
第 6 図	C区北壁土層堆積状況 2	13
第 7 図	C区西壁土層堆積状況	14
第 8 図	C区第 1 遺構面遺構配置図	16
第 9 図	C区SR01出土遺物	17
第 10 図	C区第 1 遺構面出土遺物	18
第 11 図	C区第 2 遺構面遺構配置図	19
第 12 図	C区SD01	21
第 13 図	C区SD01出土遺物	22
第 14 図	C区SX (炭だまり) 06	22
第 15 図	C区SX (炭だまり) 06出土遺物	23
第 16 図	C区第 2 遺構面出土遺物	23
第 17 図	C区第 3 遺構面遺構配置図	24
第 18 図	C区第 3 遺構面出土遺物 1	25
第 19 図	C区第 3 遺構面出土遺物 2	26
第 20 図	C区第 4 遺構面遺構配置図	27
第 21 図	C区第 4 遺構面出土遺物	29
第 22 図	C区第 5 遺構面遺構配置図	30
第 23 図	C区配石遺構 1	31
第 24 図	C区集石遺構 1	31
第 25 図	C区土器だまり 1	32
第 26 図	C区土器だまり 1 出土遺物 1	33
第 27 図	C区土器だまり 1 出土遺物 2	34
第 28 図	C区土器だまり 1 出土遺物 3	35
第 29 図	C区土器だまり 1 出土遺物 4	36
第 30 図	C区土器だまり 1 出土遺物 5	37
第 31 図	C区第 5 遺構面出土遺物 1	39
第 32 図	C区第 5 遺構面出土遺物 2	40
第 33 図	C区第 5 遺構面出土遺物 3	41
第 34 図	C区第 5 遺構面出土遺物 4	42
第 35 図	C区第 6 遺構面遺構配置図	43
第 36 図	C区土器だまり 2・3	45

第 37 図	C区土器だまり 2 出土遺物 1	46
第 38 図	C区土器だまり 2 出土遺物 2	47
第 39 図	C区土器だまり 3 出土遺物	48
第 40 図	C区SD02	49
第 41 図	C区SD02出土遺物 1	50
第 42 図	C区SD02出土遺物 2	51
第 43 図	C区第 6 遺構面部分拡大図	52
第 44 図	C区集石 2・集石 3、集石 2 出土遺物	53
第 45 図	C区SD03	54
第 46 図	C区SD03出土遺物	54
第 47 図	C区SX (SK) 72・SX (SK) 83・SK04	55
第 48 図	C区第 6 遺構面その他の遺構出土遺物	56
第 49 図	C区第 6 遺構面出土遺物 1	57
第 50 図	C区第 6 遺構面出土遺物 2	58
第 51 図	C区第 6 遺構面出土遺物 3	59
第 52 図	C区第 6 遺構面出土遺物 4	60
第 53 図	C区第 6 遺構面出土遺物 5	61
第 54 図	C区第 7 遺構面遺構配置図	62
第 55 図	C区第 7 遺構面出土遺物	63
第 56 図	C区第 8 遺構面遺構配置図	65
第 57 図	C区第 8 遺構面出土遺物	66
第 58 図	C区第 9 遺構面遺構配置図	67
第 59 図	C区第 9 遺構面出土遺物	68
第 60 図	C区その他の出土遺物	68
第 61 図	F区西壁土層堆積状況	69
第 62 図	F区第 1 遺構面遺構配置図	70
第 63 図	F区黒灰色粘質土・淡暗灰色粘質土出土遺物	70
第 64 図	F区第 2 遺構面遺構配置図	71
第 65 図	F区SX (地床跡) 02	72
第 66 図	F区第 2 遺構面出土遺物 1	73
第 67 図	F区第 2 遺構面出土遺物 2	74
第 68 図	F区第 3 遺構面遺構配置図	75
第 69 図	F区第 3 遺構面出土遺物	75
第 70 図	H区東壁・北側トレンチ北壁土層堆積状況	78
第 71 図	I区土層堆積状況	79
第 72 図	H・I区第 1 遺構面遺構配置図	81
第 73 図	H区SD01	82
第 74 図	H区SD01杭列	83

第75図	H区SD01杭	84
第76図	H区SD01配石・杭群	85
第77図	H区SD01出土遺物	86
第78図	H区SR01出土遺物 1	88
第79図	H区SR01出土遺物 2	89
第80図	H区第1遺構面出土遺物	90
第81図	I区第1遺構面出土遺物	91
第82図	H・I区第2遺構面遺構配置図	92
第83図	H区炭だまり17	94
第84図	H区炭だまり17出土遺物 1	95
第85図	H区炭だまり17出土遺物 2	96
第86図	H区地床02出土遺物	96
第87図	H区暗青灰色粘質土出土遺物 1	97
第88図	H区暗青灰色粘質土出土遺物 2	97
第89図	I区暗青灰色粘質土出土遺物 1	98
第90図	I区暗青灰色粘質土出土遺物 2	100
第91図	H区黒灰色粘質土出土遺物 1	101
第92図	H区黒灰色粘質土出土遺物 2	102
第93図	H区黒灰色粘質土出土遺物 3	103
第94図	I区黒灰色粘質土出土遺物 1	104
第95図	I区黒灰色粘質土出土遺物 2	105
第96図	H・I区第3遺構面遺構配置図	106
第97図	I区炭だまり02・03	107
第98図	I区炭だまり02・03出土遺物	108
第99図	I区炭だまり27・28	109
第100図	I区炭だまり27出土遺物	109
第101図	I区炭だまり28出土遺物	110
第102図	I区配石遺構	110
第103図	H区第3遺構面出土遺物 1	111
第104図	H区第3遺構面出土遺物 2	112
第105図	I区第3遺構面出土遺物 1	114
第106図	I区第3遺構面出土遺物 2	115
第107図	I区第3遺構面出土遺物 3	116
第108図	I区第3遺構面出土遺物 4	117
第109図	H・I区第4遺構面遺構配置図	118
第110図	I区炭だまり (SK) 06・07	119
第111図	I区炭だまり (SK) 06・07出土遺物	120
第112図	H区第4遺構面出土遺物 1	122

第113図	H区第4遺構而出土遺物2	123
第114図	II区第4遺構而出土遺物	124
第115図	H・II区第5遺構面遺構配置図	125
第116図	II区炭だまり (SK) 18	126
第117図	II区炭だまり (SK) 18出土遺物1	127
第118図	II区炭だまり (SK) 18出土遺物2	128
第119図	H区第5遺構而出土遺物	129
第120図	II区第5遺構而出土遺物	130
第121図	H・II区第6遺構面遺構配置図	131
第122図	II区柱根	132
第123図	H区第6遺構而出土遺物	133
第124図	II区第6遺構而出土遺物	133
第125図	H・II区第7遺構面遺構配置図	134
第126図	H区第7遺構而出土遺物	135
第127図	II区第7遺構而出土遺物	135
第128図	H区第8遺構面 (発掘停止面) 遺構配置図	137
第129図	H区黒褐色粘質土4出土遺物	138
第130図	H区黒褐色レキ層出土遺物	138
第131図	II区黒褐色レキ層出土遺物	138
第132図	H区白灰色粘質土出土遺物	139
第133図	H区濃褐色粘質土出土遺物	139
第134図	H区その他の出土遺物1	141
第135図	H区その他の出土遺物2	142
第136図	II区その他の出土遺物1	143
第137図	II区その他の出土遺物2	144

写真図版目次

- 図版1. 古屋敷遺跡C区全景（平成26年12月北から）
古屋敷遺跡C区全景（平成27年1月東から）
- 図版2. C区表土掘削前風景（北から）
C区北壁セクション上層部（東から）
- 図版3. C区北壁セクション（南から）
C区西壁セクション（東から）
- 図版4. C区SR01全景（上空から）
C区東壁セクション（南から）
- 図版5. C区SR01出土土器（北から）
C区SR01出土土核
- 図版6. C区SD01完掘状況（北西から）
C区SD01完掘状況（西から）
- 図版7. C区SD01セクション（東から）
C区SX（炭だまり）06（北から）
- 図版8. C区配石遺構（北から）
C区集石1（西から）
- 図版9. C区土器だまり1南半部（西から）
C区土器だまり1調査状況（南から）
- 図版10. C区土器だまり1西半部（北から）
C区土器だまり1出土浅跡（西から）
- 図版11. C区土器だまり2（東から）
C区土器だまり3（西から）
- 図版12. C区第6遺構面全景（上空から）
C区SD02全景（南東から）
- 図版13. C区SD02（西から）
C区集石2（南東から）
- 図版14. C区SD03（東から）
C区SX（SK）72半裁状況（東から）
- 図版15. C区SX（SK）83半裁状況（西から）
C区SK04半裁状況（東から）
- 図版16. C区出土櫛（東から）
C区第7遺構面（東から）
- 図版17. C区調査区完掘状況（南東から）
C区調査区完掘状況（南西から）
- 図版18. F区調査前風景（南から）
F区SX（地床跡）02半裁状況（東から）
- 図版19. F区南壁西側セクション（西から）
F区南壁東側セクション（東から）
- 図版20. F区調査区完掘状況（南から）
F区調査区完掘状況（北から）
- 図版21. 古屋敷遺跡H・I区全景（平成27年12月北から）
古屋敷遺跡H・I区全景（平成27年12月南から）
- 図版22. H区SD01完掘状況（西から）
H区SD01東側樹皮検出状況（南から）
- 図版23. H区SD01東杭列検出状況（南西から）
H区SD01東杭列完掘状況（南西から）
- 図版24. H区SD01東杭列完掘状況（西から）
H区SD01東杭列堀上げ時（南から）
- 図版25. H区SD01西杭列完掘状況（北西から）
H区SD01西杭列完掘状況（北から）
- 図版26. H区SD01西杭列堀上げ時（北東から）
H区SD01西杭列堀上げ時（北西から）
- 図版27. H区SD01配石と杭群（北から）
H区配石（西から）
- 図版28. H区配石（南西から）
H区配石・素材束（南から）
- 図版29. H区SD02・03（東から）
H区炭だまり17（南から）
- 図版30. I区炭だまり02（西から）
I区炭だまり03（北から）
- 図版31. I区炭だまり27半裁状況（西から）
I区炭だまり28半裁状況（北から）
- 図版32. I区配石（南から）
I区炭だまり07完掘状況（南から）
- 図版33. I区炭だまり（SK）18完掘状況（南から）
I区杭06半裁状況（北西から）
- 図版34. I区P26半裁状況（南西から）
I区杭07半裁状況（北西から）

- 図版35. H区完掘状況（東から）
H区完掘状況（西から）
- 図版36. II区完掘状況（南から）
II区拡張部完掘状況（北から）
- 図版37. C区SR01出土遺物(1)
C区SR01出土遺物(2)
- 図版38. C区第1遺構面出土遺物
C区SD01、SX（炭だまり）06出土遺物
- 図版39. C区第2遺構面出土遺物
C区第3遺構面出土遺物(1)
- 図版40. C区第3遺構面出土遺物(2)
C区第4遺構面出土遺物(1)
- 図版41. C区第4遺構面出土遺物(2)
C区土器だまり1出土遺物(1)
- 図版42. C区土器だまり1出土遺物(2)
C区土器だまり1出土遺物(3)
- 図版43. C区土器だまり1出土遺物(4)
- 図版44. C区土器だまり1出土遺物(5)
C区土器だまり1出土遺物(6)
- 図版45. C区土器だまり1出土遺物(7)
C区第5遺構面出土遺物(1)
- 図版46. C区第5遺構面出土遺物(2)
C区第5遺構面出土遺物(3)
- 図版47. C区第5遺構面出土遺物(4)
C区第5遺構面出土遺物(5)
- 図版48. C区土器だまり2出土遺物(1)
C区土器だまり2、3出土遺物
- 図版49. C区土器だまり3出土遺物(2)
C区SD02出土遺物(1)
- 図版50. C区SD02出土遺物(2)
C区SD02出土遺物(3)
- 図版51. C区SD02出土遺物(4)
C区集石2、SD03出土遺物
- 図版52. C区第6遺構面、その他の遺構出土遺物
C区第6遺構面出土遺物(1)
- 図版53. C区第6遺構面出土遺物(2)
- C区第6遺構面出土遺物(3)
- 図版54. C区第6遺構面出土遺物(4)
- 図版55. C区第6遺構面出土遺物(5)
C区第6遺構面出土遺物(6)
- 図版56. C区第6遺構面出土遺物(7)
C区第7遺構面出土遺物
- 図版57. C区第8遺構面出土遺物
C区第9遺構面、その他の遺構出土遺物
- 図版58. F区黒灰色粘質土、淡暗灰色粘質土
出土遺物
F区第2遺構面出土遺物(1)
- 図版59. F区第2遺構面出土遺物(2)
F区第2遺構面、第3遺構面出土遺物
- 図版60. H区SD01出土素材束
H区SD01、SR01出土遺物(1)
- 図版61. H区SR01出土遺物(2)
H区第1遺構面出土遺物
- 図版62. II区第1遺構面出土遺物
H区炭だまり17出土遺物(1)
- 図版63. H区炭だまり17出土遺物(2)
H区炭だまり17出土遺物(3)
- 図版64. H区地床炉02、暗青灰色粘質土出土遺物(1)
H区暗青灰色粘質土出土遺物(2)
- 図版65. II区暗青灰色粘質土出土遺物(1)
II区暗青灰色粘質土出土遺物(2)
- 図版66. II区暗青灰色粘質土出土遺物(3)
H区黒灰色粘質土出土遺物(1)
- 図版67. H区黒灰色粘質土出土遺物(2)
H区黒灰色粘質土出土遺物(3)
- 図版68. H区黒灰色粘質土出土遺物(4)
H区黒灰色粘質土出土遺物(5)
- 図版69. II区黒灰色粘質土出土遺物(1)
II区黒灰色粘質土出土遺物(2)
- 図版70. II区黒灰色粘質土出土遺物(3)
II区炭だまり02、03出土遺物
- 図版71. II区炭だまり27、28出土遺物
H区第3遺構面出土遺物(1)

- 図版72. H区第3遺構面出土遺物(2)
H区第3遺構面出土遺物(3)
- 図版73. II区第3遺構面出土遺物(1)
II区第3遺構面出土遺物(2)
- 図版74. II区第3遺構面出土遺物(3)
II区第3遺構面出土遺物(4)
- 図版75. II区第3遺構面出土遺物(5)
II区第3遺構面出土遺物(6)
- 図版76. II区炭だまり (SK) 06、07出土遺物
H区第4遺構面出土遺物(1)
- 図版77. H区第4遺構面出土遺物(2)
II区第4遺構面出土遺物
- 図版78. II区炭だまり (SK) 18出土遺物(1)
II区炭だまり (SK) 18出土遺物(2)
- 図版79. H区第5遺構面出土遺物(1)
H区第5遺構面出土遺物(2)
- 図版80. II区第5遺構面出土遺物(1)
II区第5遺構面出土遺物(2)
- 図版81. H区第6遺構面出土柱根
H区第6遺構面出土遺物
- 図版82. II区第6遺構面出土遺物(1)
II区第6遺構面出土遺物(2)
- 図版83. H区第7遺構面出土遺物
II区第7遺構面出土遺物
- 図版84. H区黒褐色粘質土4、黒褐色レキ層出土遺物
II区黒褐色レキ層出土遺物
- 図版85. H区白灰色粘質土出土遺物
H区濃褐色粘質土出土遺物
- 図版86. H区その他の出土遺物(1)
H区その他の出土遺物(2)
- 図版87. H区その他の出土遺物(3)
H区その他の出土遺物(4)
- 図版88. II区その他の出土遺物(1)
II区その他の出土遺物(2)
- 図版89. H区その他の出土遺物(3)
H区SD01東杭列出土遺物
C区出土櫛

第1章 調査に至る経緯と経過

一般国道9号は京都府京都市から山口県下関市に至る総延長約750kmの、山陰地方の諸都市を結ぶ幹線道路である。この内、鳥根県大田市静間町～大田市仁摩町間の現道は急カーブや急勾配が連続する区間が多く、重大事故が発生しやすい状況にある。また、この区間では、国際規格コンテナの通行支障トンネルや、事故・災害発生時の通行止めが発生し、大幅な迂回が必要となるなど、社会経済活動に大きな支障をきたしている。こうした問題を解決するため、静間町から仁摩町大田に至る延長7.9kmを結ぶ自動車専用道路が計画され、平成20年度から「静間・仁摩道路」として事業着手されている。

この計画に先立ち、国土交通省から鳥根県教育委員会に対して計画地内の埋蔵文化財についての照会があり、平成16・17年度に最初の分布調査を実施した。その後、平成18年2月、平成22年2月にも分布調査を実施した。鳥根県教育委員会では、平成22年5月25日付け鳥教文財第233号で、本線予定地内に所在する8遺跡と4カ所の要注意箇所を回答している。平成23年度末には工事用道路部分の分布調査を行い、これについては、平成24年4月9日付け鳥教文財第49号で回答した。

これらの結果を受けて、国土交通省と鳥根県教育委員会の間で、予定地内の埋蔵文化財の取り扱いについて協議が行われ、平成25年3月26日付け国中整松一官第248号で文化財保護法第94条第1項の規定による通知が、国土交通省から文化庁長官あてに提出された。それに対し、平成25年3月26日付け鳥教文財第11号の62で、鳥根県教育委員会教育長から10遺跡について記録保存のための発掘調査の実施が勧告された。

この間の平成21年5月には、静間仁摩道路の計画線に近い大田市五十猛町に所在する鳴滝山鉛鉱山跡について、世界遺産である石見銀山の操業に関わる鉛鉱山である可能性があることから、同年7月に現地協議を行った。平成23年3月に再度分布調査を行った結果、坑道そのものは事業地内に含まれていないことを確認したが、坑道に至る古道、及びそこから枝分かれする通称「御大師山古道」の取り扱いについては、平成25年8月19日付け国中整松調設第50号で文化財保護法第94条第1項の通知があり、平成25年8月20日付け鳥教文財第15の35で発掘調査の実施が勧告された。鳴滝山鉛鉱山古道と御大師山古道については、平成25年9月に周辺の測量と発掘調査を行った。

静間仁摩道路と仁摩温泉津道路の接点で、仁摩・石見銀山インターチェンジに隣接する大田市仁摩町大田地内には庵寺石塔と呼ばれる岩窟があり、宝篋印塔などが納められている。この遺跡は、平成14年3月の仁摩温泉津道路計画地内の分布調査で確認されていたが、平成15年7月に仁摩温泉津道路に関して鳥根県教育委員会教育長から国土交通省へ回答した際には、仁摩温泉津道路建設予定地内には含まれていないと認識されていた。その後、平成19年7月には『石見銀山遺跡とその文化的景観』が世界遺産に登録されると、この付近は世界遺産のバッファゾーンとなった。岩窟内に安置される宝篋印塔は、元禄2(1688)年銘がある福光石製石塔で、保存状態がよく、紀年銘があることから石見銀山にある同型式の石塔類研究の基準資料となるもので、貴重なものとされた。この石塔と周囲の遺跡の保存について、平成22年10月の取り扱い協議で、静間仁摩道路に事業地内に含まれることが判明したため、鳥根県教育委員会から国土交通省に対し重要性を説明。同月、大田市石見銀山課が国土交通省に対し、「石見銀山景観保全条例」との調整について協議を行った。それを受けて、国土交通省では工法変更により岩窟付近を保存することになったが、工事の影響を受ける岩窟前面の

テラス部分については遺構の広がりを確認する必要が生じた。

静間仁摩道路建設予定地内の試掘確認調査は、平成24年度古屋敷遺跡を最初に、平成25年10月に大田市五十猛町地内で、平成26年7月から12月には大国地頭所遺跡など6カ所で行った。平成27年度は静間町及び仁摩町地内で7カ所の試掘確認調査を実施した。その結果、古屋敷遺跡・垂水遺跡・松林寺遺跡・大国地頭所遺跡・庵寺石塔群（テラス部分）の発掘調査を実施することとなった。

平成25年度には古屋敷遺跡（A・B区）を、平成26年度には古屋敷遺跡（C・D・E・F区）を、平成27年度には古屋敷遺跡の残された部分（G・H・I区）、大国地頭所遺跡の発掘調査を行った。なお、平成25年度には、工事用道路に関連する大田市仁摩町宅野地内の城ノ内遺跡の発掘調査を行う予定であったが、工事の都合により延期された。この年の6月10日には、城ノ内遺跡周辺の石塔類について、立正大学文学部教授の池上悟氏、元鳥根県文化財保護審議会委員の田中義昭氏の調査指導を受けた。

平成28年度には垂水遺跡、松林寺遺跡、庵寺石塔群（テラス部分）の発掘調査を行うとともに、古屋敷遺跡の遺物整理作業を行い、本報告書を含む古屋敷遺跡報告書3冊が刊行された。

古屋敷遺跡 古屋敷遺跡は大田市仁摩町大國に所在し、以前から遺物散布地として知られていた。県道仁摩瑞穂線改良工事に伴い、圃場整備事業が計画されたことから、当時の仁摩町教育委員会が平成7・8年度に発掘調査を実施している。この時の調査は、現市道沿いの約600mについて行われ、青磁や青花などの中近世の遺跡に伴う遺物が出土した他、弥生前期の壺や土坑を検出している。

その後計画された静間仁摩道路では、古屋敷遺跡付近にインターチェンジや橋梁に関わる大きな橋台が造成されることとなった。平成23年度までの分布調査結果では、10,000m以上の広大な範囲が調査対象地とされていたが、鳥根県教育委員会では、平成24年5月と11～12月に試掘確認調査を実施し、調査対象範囲を約9,000mとしたが、複数の遺構面が重なり、地表下3m近くまで続く遺物包含層の存在が明らかになり、調査の難航が予想された。

古屋敷遺跡の発掘調査は、平成25年5月から2班体制で着手した。調査区南端のA区700mと調査区北側にあるB区1,400mについて実施することとなったが、A区の調査範囲を930mまで拡張した。しかし、調査は予想以上に難航したため、終了予定だった12月末からはさらに1班を増援し、翌年2月末まで調査を行った。

古屋敷遺跡A区の調査では縄文晩期の木棺墓と考えられる土坑を検出し、それを受けて平成25年11月9日に現地説明会を行い、80名が参加した。平成25年9月21日には「第62回にしえ倶楽部親子で発掘体験 in 仁摩」を開催し、46名が発掘調査を体験した。また、平成25年10月22日には及川穰氏、10月24日には中村健二氏、11月20日には山田康弘氏と濱田竜彦氏、平成26年1月20日には中村唯史氏の調査指導を受けた。また、平成25年12月10日に土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアムの松下孝幸氏・松下真実氏の調査指導を受け、木棺墓出土の人骨と思われる遺存体の取り上げ、鑑定を依頼した。

平成26年度は、3パーティーを投入し、調査区中程のC区約1,800m、D区約1,800m、県道沿いで橋脚が計画されているE区約100m、北西側のF区約400mについて調査を実施した。D区では棺材が良好に残る木棺墓（SK01）を検出したため、6月30日に及川穰氏、平郡達哉氏、7月7日に会下和宏氏、7月20日に山田康弘氏に調査指導を受けた。また、10月にはD区で水さらし場遺構が発見されたことから、11月5日に及川穰氏、平郡達哉氏に再び調査指導を受けるとともに、12月8日に山田昌久氏の指導を得た。11月4日には、自然科学の立場から中村唯史氏の指導を受けている。

この間、7月25日には花園大学の高橋克壽氏と徳島文理大学の久久保徹也氏、10月20日には千葉豊氏、11月19日には山本悦代氏、山口雄治氏、12月11日には松本直子氏が来訪し、指導を得た。

11月8日には現地説明会を開催し、約80名が水ざらし場遺構を中心に見学した。8月7日には埋蔵文化財調査センター主催で『教員のための文化財活用講座』が仁万まちづくりセンターで行われ、参加者が古屋敷遺跡を見学した。平成26年度も調査期間を延長し、翌年1月末まで現地調査を行った。

平成27年度には2パーティーを投入し、残る2,500㎡(G・H・I区)の調査を実施した。調査区内を縦断する水路の移設工事が9月までずれ込んだため、まず水路周辺部分を残して調査を進め、水路移設の後にあらためて該当部分の調査を行った。H区では弥生時代前期の水路に伴って杭列が出土したため、5月25日に会下和宏氏の指導を受けた。10月26日には出土した種子等について小畑弘己氏の指導を受けた。11月14日には現地説明会を開催し、約80名の参加を得た。また平成28年2月には、弥生時代前期の水路跡から出土した水生昆虫について、林成多氏の指導を受けた。

調査にあたっては平成25年度の調査開始当初から各年度・調査区とも共通した1辺10mのグリッドを設定し、各グリッドは調査区北西側を起点に、南北方向にアルファベットを、東西方向に数字を割り振って、A1、A2・・・などと呼んだ。耕作土の除去はバケットに平爪を装着したバックフオーを使用し、遺物包含層の掘削は、主にスコップを用いて人力で掘り下げたが、遺物が集中する箇所は草削り・移植ゴテで掘り下げた。

平面図は、遺跡調査システム「遺構くん」を用いて測量し、出力後補正を行った。必要に応じて手測りで平面図を作成し、その他報告書掲載が見込まれる遺物は遺跡調査システムで出土位置を記録した上で取り上げた。遺構の写真は、原則として35mmデジタルカメラで撮影し、必要に応じて記録保存のため6×7判フィルムカメラによる撮影も行った。

古屋敷遺跡(C・F・H・I区)の遺物整理作業は、現地調査と並行してスタートし、平成28年度から本格的に実施した。7月には奥山誠義氏に素材束の分析を、8月には片岡太郎氏のグループに漆塗り櫛の分析を依頼した。9月13日には中村唯史氏に再度石材の鑑定をおねがいをした。

報告書作成はDTP方式を採用し、遺物図面は実測図を、遺構図面は平面図・断面図等をレイアウトした下図をデジタルトレースした。トレースや図の加工などはAdobe社製Illustrator CS5・Photoshop CS5を用いた。遺構・遺物写真はデジタルカメラで撮影した後、Photoshop CS5を用いて調整しEPSデータ化した。最終的な原稿執筆、編集作業はAdobe社製In Design CS5を用いて行った。

第2章 古屋敷遺跡の位置と歴史的環境

1. 古屋敷遺跡の位置と地理的環境

かつて石見国であった鳥根県西部は中国山地から北に伸びる丘陵が日本海に迫り、深い入り江とよなつたリアス海岸と、その間に開けた平野や砂丘が交錯する変化に富んだ地形となっている。このうち、古屋敷遺跡の位置する大田市仁摩町は、石見東部に当たり、北に大田市五十猛町、南に大田市温泉津町、東には世界遺産『石見銀山遺跡とその文化的景観』の中心部である大田市大森町に接している。遺跡のある大田市仁摩町大田地区は、大田市仁摩町冠方面から大きく蛇行して日本海に注ぐ潮川の下流部に位置し、狭い山間を抜けた潮川が仁万平野で、急に開ける場所に当たる。古屋敷遺跡は、西流する潮川が運んだ堆砂によって形成された平野の最奥部に位置しており、周囲の標高は約9m、日本海からは東へ約2.2kmの位置にある。大田市仁摩町付近では、海岸線が南北方向に伸びており、西に日本海が広がっている。よって、国道9号線・JR山陰本線は北へ向かうと出雲・松江方面へ、南に向かうと江津・浜田方面に向かうことになる。

遺跡の南側にある丘陵尾根上には平成24年までに発掘調査が行われた庵寺古墳群^(注1)があったが、現在では仁摩温泉津道路の石見銀山・仁摩インターチェンジとなっている。また、遺跡に接して、元禄二(1688)年銘のある宝篋印塔などを納めた岩窟があり、岩窟とその周辺は庵寺古墳群と呼ばれる遺跡となっている。遺跡の北東には標高153mの竜嵩山があり、その山頂付近は平坦面や土塁等が残っ

ている。この竜嵩山の山頂周辺は、石見城跡として世界遺産『石見銀山遺跡とその文化的景観』の構成資産に含まれている。遺跡の北側には潮川が西流し、潮川北岸は斜面が迫っている。潮川右岸には大田地頭所遺跡、松林寺遺跡など弥生時代から中世に至る遺跡が知られている。



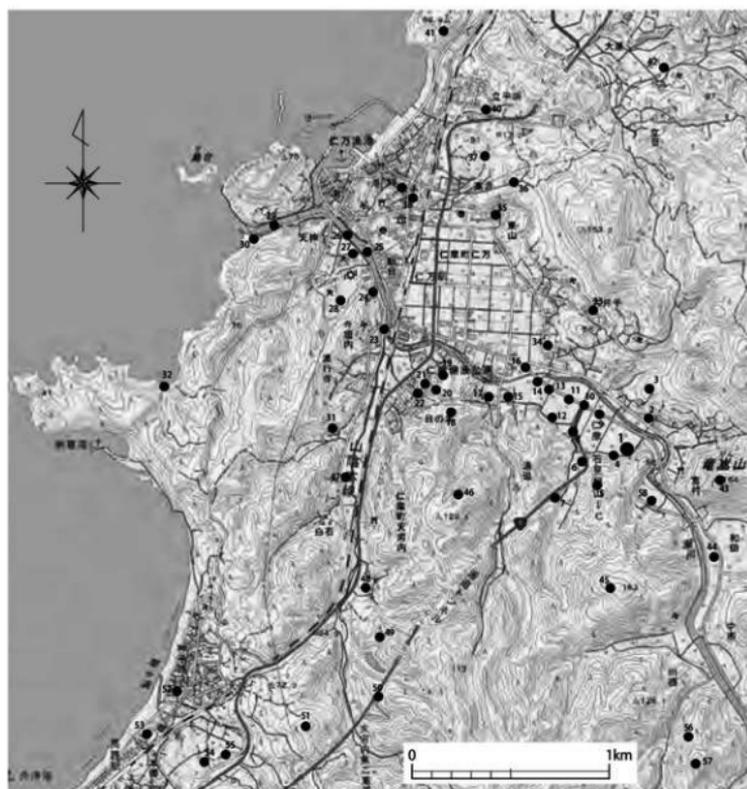
第1図 古屋敷遺跡の位置

て土器の出土が知られようになる。これらの遺跡は、いずれも仁万平野縁辺の低湿地や海岸近くの砂丘にあり、当時、入り込んでいた入り海の周囲に縄文人の生活環境が広がっていたことが想像される。古屋敷遺跡から南東約20kmに位置する三瓶山北麓では三瓶小豆原埋没林が発見されており、炭化木片について 4310 ± 80 yrsBPの年代が測定^(注2)され、この頃に三瓶山の大規模な噴火があったことが推定される。三瓶山の東側にあたる飯南町の志津見ダム関連の発掘調査では厚い火山噴出物層

2. 古屋敷遺跡周辺の歴史的環境

旧石器・縄文時代 大田市仁摩町周辺では旧石器時代の遺跡は知られていない。

久根ヶ曾根遺跡(52)、鳥居原遺跡(55)、仁万大橋遺跡(24)などで縄文前期にさかのぼる土器が出土している。中期・後期になると川向遺跡(26)や坂灘遺跡(29)の他、古屋敷遺跡にも近い五丁遺跡(8)など、次第に遺跡数が増加する。縄文晩期の尖帯文土器の時期になると庵寺遺跡(6)、千後田遺跡(14)など



1	古屋敷遺跡	2	大國地頭所遺跡	3	松林寺遺跡	4	庵寺石塔群
5	庵寺古墳群	6	庵寺遺跡	7	於才迫遺跡	8	五丁遺跡
9	孫四田遺跡	10	大月遺跡	11	コラスミ遺跡	12	ヒヨトリヶ市遺跡
13	京円原遺跡	14	千後田遺跡	15	入石遺跡	16	清石遺跡
17	白石遺跡	18	千人塚遺跡	19	楡ノ木谷横穴群	20	楡ノ木遺跡
21	安養寺古墳群	22	飯田遺跡	23	善興寺橋遺跡	24	仁万大橋遺跡
25	中配前遺跡	26	川向遺跡	27	毘沙門塚古墳	28	毘沙門遺跡
29	坂灘遺跡	30	坂灘古墳	31	矢迫屋横穴群	32	田尻遺跡
33	藪田遺跡	34	大井手遺跡	35	大寺遺跡	36	高浜遺跡
37	明神古墳	38	墓原遺跡	39	打落し遺跡	40	立平浜遺跡
41	赤崎山横穴群	42	宝隆寺裏古墳群	43	石見城跡	44	志源寺遺跡
45	大國城跡	46	天垣内城跡	47	横屋前遺跡	48	白石上屋敷遺跡
49	半城跡	50	ナメラ迫遺跡	51	狐城跡	52	久根ヶ曾根遺跡
53	琴ヶ浜遺跡	54	鳥居原古墳	55	鳥居原遺跡	56	虹ヶ谷城跡
57	茶白山城跡	58	駒岩遺跡				

第2図 古屋敷遺跡の位置と周辺の遺跡

が確認されているが、仁摩町周辺は三瓶山の北西に当たるため三瓶山の噴火の伴う噴出物等はほとんど見られない。

弥生時代 圃場整備に伴って旧仁摩町が発掘調査を行った古屋敷遺跡^(註3)からは、多量の前期の土器とともに複数の土坑が検出されている。古屋敷遺跡に隣接する五丁遺跡(8)や庵寺遺跡(6)でも、縄文晩期から弥生前期に流れていたとみられる自然流路が見られ、庵寺遺跡では34点もの田下駄をはじめ木製品が出土している。川向遺跡(26)では円形に配された杭列遺構をはじめ、前・中期の土器・石器・木製品など多くの遺物が出土している。

庵寺古墳群(5)では、仁万平野を見下ろす丘陵上で弥生後期の短期間に営まれた加工段が発見され、いわゆる高地性集落として注目される。楡ノ木遺跡(20)からは後期の竪穴建物跡が検出された。この他、同時期の遺跡としては大寺遺跡(35)、孫四田遺跡(9)などがあり、仁万平野周辺の丘陵部に遺跡が点在している。

古墳時代 仁万平野を望む位置に築かれた安養寺1号墳は12×8mの方形で、箱式石棺をはじめ、4基の主体部を持つ。安養寺古墳群(21)や坂灘遺跡(29)からは壺棺と見られる大型の土師器壺が出土している。坂灘古墳(30)では、石を2～3段に積み上げた床面に石敷きの箱式石棺が明らかになっており、人骨や鹿角装刀子が出土している。また、古屋敷遺跡を見下ろす庵寺古墳群(5)でも、八禽鏡を出土した1B号墳など複数の古墳が前期に遡ることが確認された。

古墳時代後期になると、明神古墳(37)、鳥居原古墳(54)、五十猛の赤井穴ヶ迫古墳^(註2)など、小平野毎に有力な古墳が築かれるようになる。庵寺古墳群でも、横穴式石室を持つ1A号墳が築かれるなど各地で横穴式石室が見られるようになる。この内、明神古墳は全長10.1mの巨大な横穴式石室に家形石棺を納め、金銅装門頭大刀や銅碗など優れた副葬品を持っていたことが知られ、鳥居原古墳でも双龍頭頭大刀など優れた遺物が出土した。五十猛町の赤井穴ヶ迫古墳は石見地方では唯一の切石製横穴式石室を持つ古墳で、海上交通を介した出雲地方などとの交流を伺わせる。また、楡ノ木谷横穴群(19)、矢迫屋横穴群(31)、赤崎山横穴群(41)など横穴墓も非常に多く知られる地域となっている。一方、大寺遺跡(35)・藪田遺跡(33)など古墳時代の遺物を出土する遺跡は少ないが、住居跡を伴う集落遺跡の発見は少ない。

古代 この付近は、『和名類從抄』では瀬摩郡大國郷に含まれると思われ、近隣には託農郷がある。また、『延喜式』に見える石見国には波祢、詫濃、楠道、江東、江西、伊甘の6驛家があったとされている。古代山陰道の位置は判明していないが、託農郷が現在の大田市仁摩町宅野付近であれば、比較的近くを山陰道が通っていた可能性がある。近隣での古代の遺跡の様相は明らかでないが、大田市温泉津町の中祖遺跡では古代の瓦を葺かれた建物跡が発見された。また、大田市水上町の白環遺跡からは「延喜九(909年)」と記された木簡が出土し、末端官衙の可能性が指摘されている。近隣では、五丁遺跡(8)で糸里制の畦畔が検出されている。

中世・近世 平安時代末～鎌倉時代の遺跡には白石遺跡(17)などがある。多数の掘立柱建物跡の他、白磁・青磁などの貿易陶磁が出土した。

大永七年、石見銀山が再発見され、銀鉱山開発が活発すると、戦国大名の争奪の場となる。大田地区においても世界遺産に含まれる石見城跡(43)があり、銀山開発初期に銀鉱石を運んだとされる石見銀山街道(峠)が近くを通っている。

天正十五(1587)年、九州攻め中の豊臣秀吉の元に陣中見舞いに向かう細川幽斎は、その行程を『九

州道の記』に残している。丹後から日本海沿いに西に進む幽齋は石見銀山にも立ち寄り、それによると、大浦に泊まり、大浦から仁万まで海路で移動し、仁万から石見銀山へ向かったとされていることから、仁万から銀山へ向かう、つまり、瀬川沿いに古屋敷遺跡の対岸を石見銀山へ向かう道が当時のルートの一つであったと考えられる。

古屋敷遺跡南側の岩盤に穿たれた岩窟には元禄二(1688)年の銘を持つ大型の宝篋印塔や正徳五(1715)年銘の方柱状石塔などが納められ、その周辺を含め庵寺石塔群(4)と呼ばれている。特に宝篋印塔は石見銀山最盛期に当たる17世紀代のもので、組み合わせ式でありながら、すべての部材が良好にそろう、保存状態も良いことから、きわめて貴重な資料となっている。

〈註〉

- (1)『庵寺古墳群Ⅱ・大迫ツリ遺跡・小釜野遺跡』鳥根県教育委員会 2014年
- (2)『三瓶埋没林調査報告書』鳥根県環境生活部景観自然課 2000年
- (3)『五丁地区遺跡群発掘調査報告書』仁摩町教育委員会 1996年

〈参考文献〉

- 『増補改訂鳥根県遺跡地図Ⅱ(石見編)』鳥根県教育委員会 2002年
- 『鳥根県生産遺跡分布調査報告書Ⅱ 石見部製鉄遺跡』鳥根県教育委員会 1984年
- 『鳥根県中近世城館分布調査報告書〈第1集〉石見の城館』鳥根県教育委員会 1997年
- 『三瓶川流域遺跡他詳細分布調査Ⅱ』大田市教育委員会 1984年
- 『日本歴史地名体系第33巻 鳥根県の地名』平凡社 1995年
- 『角川日本地名大辞典 32 鳥根県』角川書店

第3章 発掘調査の方法

1. 調査区の設定

周知の埋蔵文化財包蔵地である古屋敷遺跡は、14,000㎡にもおよぶ範囲が登録されている。工事計画の調整や試掘調査結果に基づいて調査対象を絞ったものの、最終的な調査対象面積は、道路の築堤が建設される約8,900㎡と、潮川に架けられる橋梁の脚台部約100㎡となった。また、地表下約3mに亘って複数の遺構面が存在することが判明したため、調査区を分割し、3カ年をかけて調査を実施(第3図)した。

古屋敷遺跡の周辺は、平成8年に圃場整備が行われ、現状では水田となっている。平成7・8年度には、圃場整備事業に伴って仁摩町教育委員会(当時)が発掘調査^(註1)を行っている。この時の調査区は、今回の調査地の東側に当たり、4つの調査区(第3図右側の仁摩町A～D区)を設けて行われた。この調査で、掘立柱建物跡や白磁・青磁などが出土した中世の遺構面(第5層)は標高約9.2m、弥生時代前期とされる遺構面(第9層)で標高約8.8mであり、東側の丘陵から緩い勾配がついている。今回の調査地は現地表面の標高がすでに8～9m程度あり、弥生時代前期の遺構面がその0.5m程度下に位置していることを考慮すると、遺跡全体が西向きな緩傾斜地であることが想定できる。

調査初年度となる平成25年度には、築堤部分の南北両側にあたるA・B区について実施し、平成26年度には、その間のC・D・F区、橋脚部にあたるE区について調査を行った。平成27年度には、残るG・H・I区の調査を実施した。古屋敷遺跡ではG・H・I区を横断するように用水路が通っており、当初からその処遇が懸案であった。平成26年1月、C区とF区から用水路側面までそれぞれサブトレンチを掘削したところ、いずれの場所でも用水路直下に遺跡が残存することが明らかになった。用水路の移設が平成27年9月下旬にずれ込んだため、この年の調査は当該部分以外から始め、10月以降に用水路下へ調査区を拡張する形で対応した。

古屋敷遺跡の調査に際しては、測量法の第Ⅲ座標系 X=94913.4586、Y=22659.14076 を基点にし、現水田面の区画方向に合わせて1辺10mのグリッドを設定した。(グリッド南北軸は座標系のX軸から27.284度東に振れている)各グリッドは、南北方向を北からアルファベットを、東西方向を西から数字を振り、平成25年度から平成27年度まで共通して使用している。

2. 調査の方法

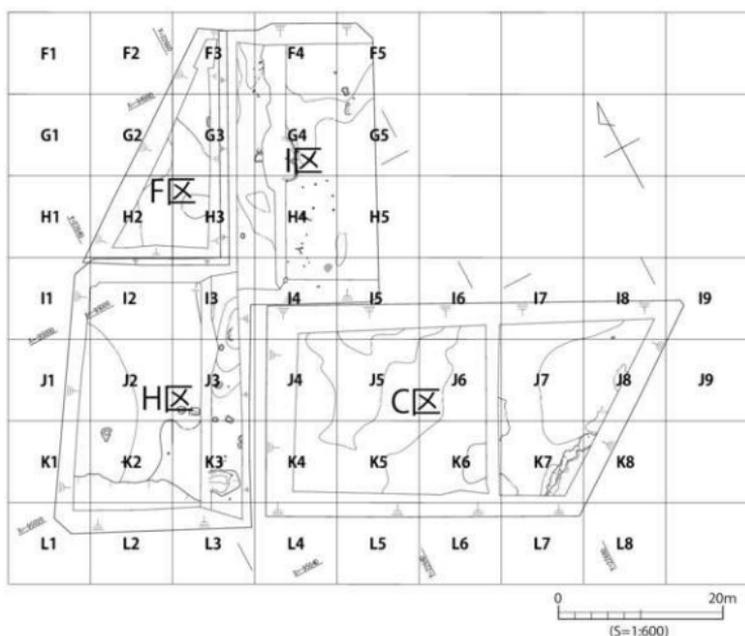
各調査区の発掘にあたっては、調査区の周囲に土層観察を兼ねた排水溝を掘削した。排水溝は、崩壊を防ぐための勾配を確保した上で、その時点での調査面から0.5～1m程度低くなるように掘削し、調査面が下がるのに従って随時先行して掘り下げを行った。また必要に応じて調査区を横断するサブトレンチとセクションベルトを設定し、これらの相互関係を考慮しながら掘削した。

調査に際し、まず重機を使用して耕作土を0.5～0.8m除去し、これより下層を人力で掘削した。包含層の掘削においては、排水溝の土層断面を参考に土色や土質を考慮しながら掘削し、遺構等が確認された場合は面的に精査して遺構面を確定させた。この方法で調査区によっては9面もの遺構面を確認した。

古屋敷遺跡は水田地帯に位置し、調査区周囲も含め現役の水田であったため、湧水対策が大きな課題であった。常時湧き出す地下水と、降雨による雨水の流れ込みは、時として排水能力を超



第3図 古屋敷遺跡調査区配置図 (1:1,000)



第4図 古屋敷遺跡(C・F・H・I区)グリッド配置図(1:600)

え、調査区が冠水することもあった。また遺跡を3m近く掘り下げる必要があり、堆積土自体の含水率が高かったため、調査区の法面が緩んだり崩落することもあった。法面角度は必然的に緩くせざるを得ず、結果として調査区の面積は下層にいく程小さくなっている。またH・I区は、既掘区と耕作中の水田に四方を囲まれているため法面の維持が難しく、1t土嚢を積み上げて土留め壁としたり、調査区外(既掘部)の埋土をすいて土圧を弱めるなどの工夫が必要であった。こうした対策の結果、I区の東壁とH区の西壁は重機によりほぼ垂直に掘削され、土嚢でガードされることとなった。I区が第2遺構而以降で見かけ上、東側に拡大するのはこのためである。

古屋敷遺跡H・I区では南北方向に用水路が横断しており、東西に堤を配して水田を区画していた。事前調査により、この用水路下には包含層が残っていることが判明しており、用水路を移設した後、堤も含めて発掘調査を行った(以下、拡張区と呼称する)。用水路移設が遅れたため、調査区本体と一体で調査することはできなかった。本体と拡張区は層位的に齟齬がないよう調査を進めたが、部分的に多少の高低差が生じてしまった。また、本体調査時に排水路として先行掘削した部分や、法面崩落により調査不能となった部分は、遺構の一部が検出できなかったり、記録が採れないことがあった。

〈註〉

(1)『五丁地区遺跡群発掘調査報告書』仁摩町教育委員会 1999年

第4章 古屋敷遺跡(C区)の調査

1.C区の土層

第5～7図は、古屋敷遺跡(C区)の土層堆積状況を示している。遺跡全体が北東から南西へ傾斜していることから、北壁では土層全体が西へ傾斜しており、西壁においてもやや南向きに傾斜した堆積となっている。ただし、遺構面によって微妙に傾き方が異なるので注意を要する。

C区の地表面は、調査区東側で標高約8.8m、西側では標高約8.4mとなっており、北西方向に向けてごくわずかに傾斜している。地表から約20～30cmの厚さで水田耕作土とその床土があり、その下には圃場整備に伴って持ち込まれたと考えられる客土が見られる。客土下層は、圃場整備以前の水田層に伴うと考えられる水路跡や、圃場整備時の轍が入り乱れており、複雑な土層堆積をしている。圃場整備以前の水田層自体は削平され、基本的には残っていないが、水田を構成していたと考えられる杭が部分的に残されており、東西南北方向に区画された水田が存在したことが分かる。近世以降の水田に伴うものである。^{註1}

耕作土・圃場整備に伴う客土(第1層)の直下には、緑灰色粘質土1(第2層)が存在する。圃場整備時の造成等に伴い、必ずしも調査区全体で残っているわけではないが、弥生時代前期(1-2様式)の遺物を含む包含層である。この粘質土は、直下に位置する緑灰色粘質土2(第3層)と土質が似通っており、空気に触れると酸化して色が変化する事もあって分層が難しい。調査においては、第2層と第3層の間で遺構が確認されたため、これを目安として両者を切り分けた。この遺構面を第1遺構面とした。

第1遺構面下には、緑灰色粘質土2(第3層)が存在する。既に述べたとおり、第2層との分層が難しいが、概ね調査区全体で確認され、約20～50cm程度の厚さがあった。第3層には弥生時代前期(1-2様式)の土器とともに縄文時代晩期の突帯文土器を含んでいる。直下には、弥生時代前期の溝であるSD01をはじめとする遺構群が存在し、この遺構面を第2遺構面とした。

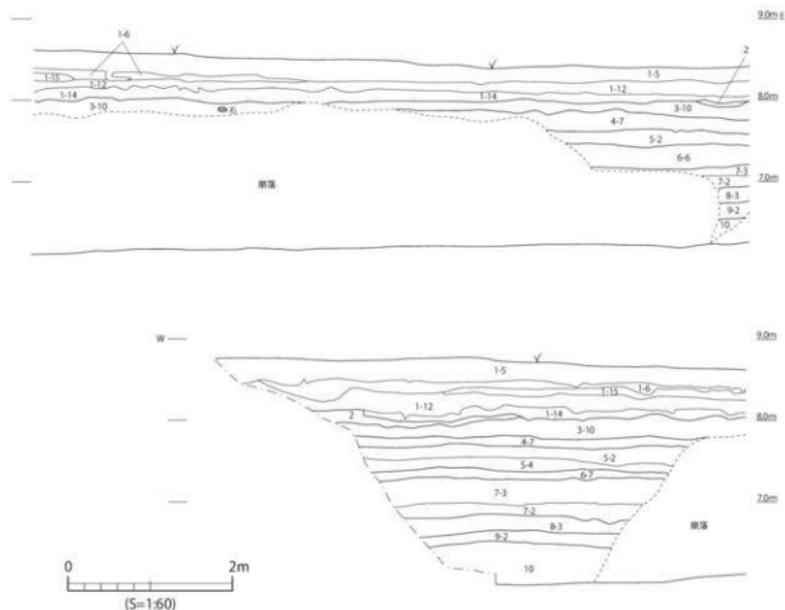
第2遺構面下には、緑灰色粘質土3(第4層)が存在する。低酸素状態で、すぐに変色する土質は、上層と同様である。突帯文土器でも新しい要素を持つものを主体とする包含層で、若干だが弥生時代前期の土器が混じる。直下には地床炉や炭だまりのある遺構面が存在し、これを第3遺構面とした。

第3遺構面下には、灰白色砂質土(第5層)が広がっている。酸化後の色調が若干淡色である点を特徴とする。厚さは概ね20cm程度で、出土遺物も多くない。第5層直下に地床炉を確認したため第4遺構面としたが、第5遺構面とのレベル差は僅かである。

第4遺構面直下には、黒灰色粘質土(第6層)があり、酸化後の土色はやや暗色を呈し、多くの遺物を含んでいる。突帯文期の包含層で、特に遺物のまとまっていたJ4、L4、L5グリッド付近は土器だまり1として取り上げた。直下にあたる第5遺構面は、地床炉、炭だまりの他、集石遺構、小規模な配石遺構が出土しており、調査区内でも最も遺構が集中する。

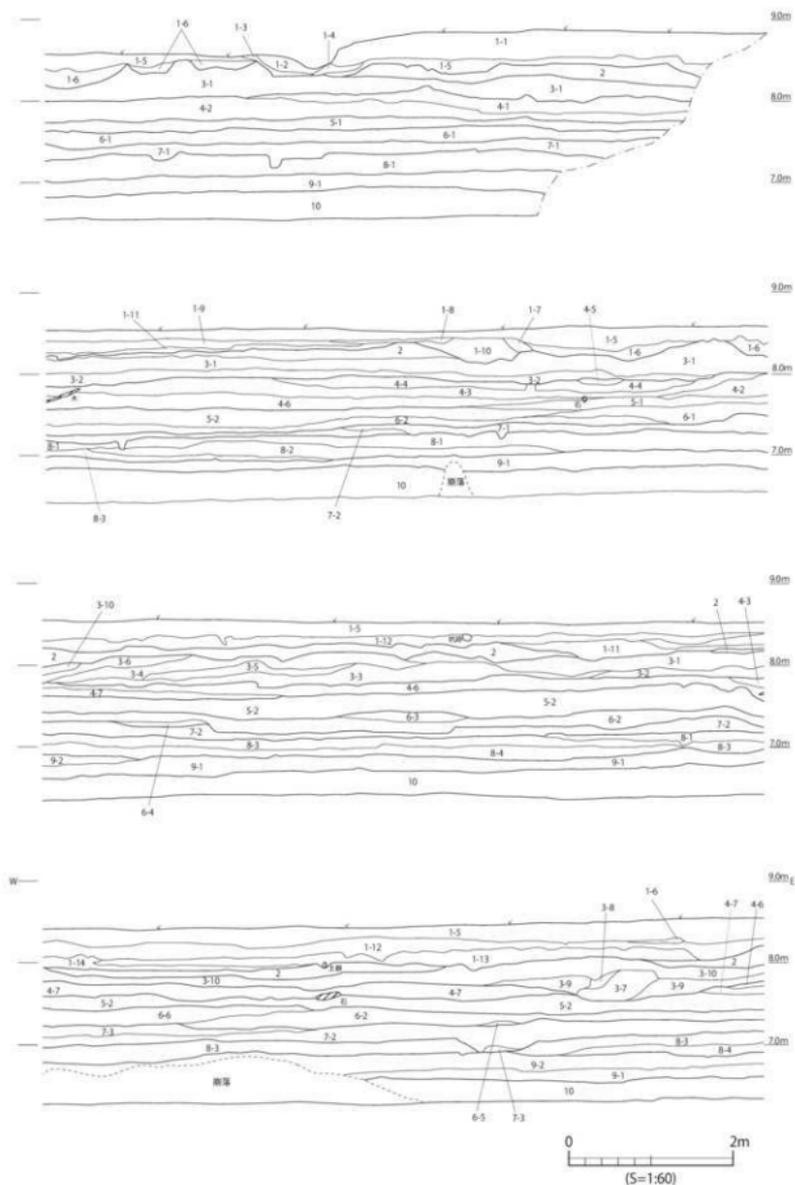
第5遺構面直下には、黒色粘質土(第7層)がある。第6層と同様に、酸化後の土色は暗色を呈し、多数の遺物を含む包含層である。おおむね突帯文期の遺物を含み、地床炉や炭だまり、集石遺構、溝状遺構ビット群が検出されたため、第6遺構面とした。これらの遺構は5cm～10cm程度のレベル差をもって重層的に検出され、互いに細かな時期差があることは明らかであるが、厳密に切り分けることは困難であった。北壁及び西壁のセクション図上でも、遺構に関連すると思われる細かな切り合

第4章 古屋敷遺跡(C区)の調査



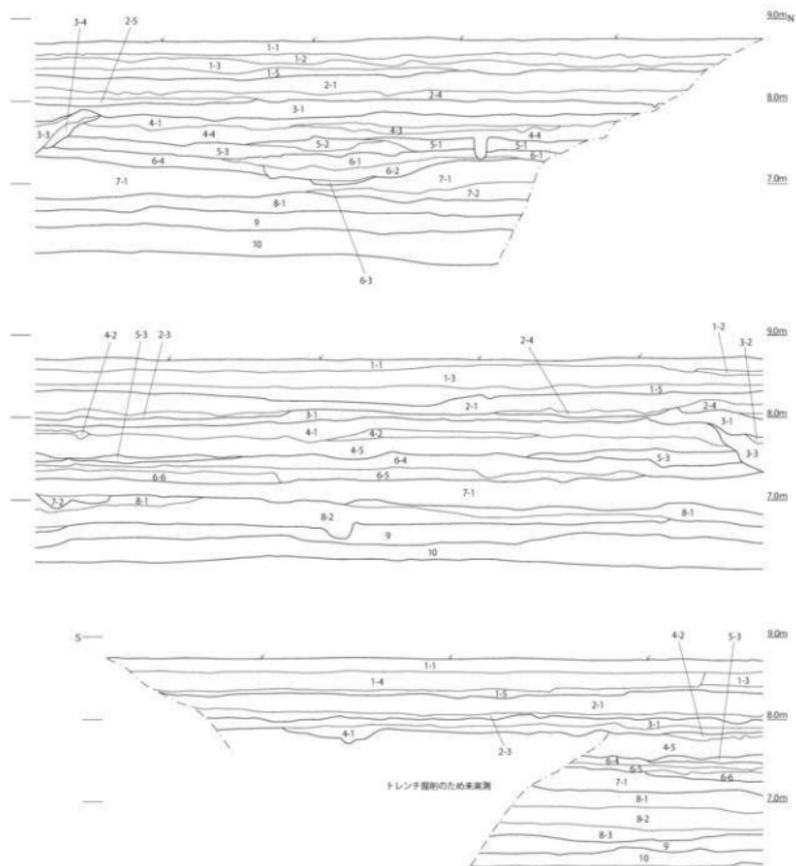
- | | | |
|------------------------|----------------------------|------------------------|
| 1 造成土(築坪整備時の客土) | 4 緑灰色粘質土3 | 7 黒色粘質土 |
| -1 表土および耕作土 | -1 やや黒色を呈する粘質土 | -1 多量の炭粒を含む。 |
| -2 耕作土 | -2 上層より薄い黄みがかった粘質土 | -2 1cm大の炭粒を含む。黒色を呈する。 |
| -3 築坪整備後の水路埋土 | -3 黄色がかった砂層 | -3 炭粒を含む。 |
| -4 築坪整備後の水路埋土 | -4 暗白色の砂層 | 8 灰色粘質土 |
| -5 築坪整備の基礎層1 | -5 やや黒色を呈する粘質土 | -1 5mmから1cm大の炭をやや多く含む。 |
| -6 礎の埋土 | -6 炭を含む黒色の粘土層 | -2 やや黒色を呈する砂質土 |
| -7 粘土ブロック | -7 炭粒を含む粘質土 | -3 5mmから1cm大の炭を多く含む。 |
| -8 礎の埋土 | 5 灰白色砂質土 | -4 やや黒色を呈する砂質土 |
| -9 築坪整備客土 | -1 灰白色の砂質土 | 9 暗灰色粘質土 |
| -10 築坪整備以前の水路を埋めたものが | -2 灰色を呈する目の細かい砂層 | -1 炭粒を含む。 |
| -11 築坪整備以前の水路を埋めたものが | -3 やや赤みを帯びた砂層 | -2 炭粒を含む。 |
| -12 築坪整備基礎層2 | -4 赤褐色の砂層 | 10 暗オリーブ灰色粘質土 |
| -13 築坪整備客土 | 6 黒灰色粘質土 | |
| -14 築坪整備基礎層3 | -1 目の粗い、砂をブロック状に含む。 | |
| -15 築坪整備客土 | -2 やや黄色みのある暗い砂を含む砂層 | |
| 2 緑灰色粘質土1 | -3 砂をブロック状に含む。 | |
| -1 5cm未満の炭を含む多少小礫を含む砂層 | -4 やや黄色みのある黒色を呈する。 | |
| -2 黒色を呈する粘質土 | -5 黒色を呈する。 | |
| -3 砂混じりの粘質土 | -6 黒色を呈する。層分的に砂がブロック状に置ける。 | |
| -4 炭粒を含む砂質土 | -7 やや黄色みのある砂を多く含む。 | |
| 3 緑灰色粘質土2 | | |
| -1 上層よりやや色の薄い粘質土 | | |
| -2 やや黒色を呈する粘質土 | | |
| -3 やや砂の混じったしまりのない土 | | |
| -4 砂の混じった粘質土で、炭粒を含む | | |
| -5 砂混じりの粘質土 | | |
| -6 砂混じりの粘質土 | | |
| -7 SD01 埋土 | | |
| -8 SD01 埋土 | | |
| -9 SD01 埋土 | | |
| -10 SD01 埋土に混る砂レキを含む砂層 | | |

第5図 C区北壁土層堆積状況1(1:60)



第6図 C区北壁土層堆積状況2(1:60)

第4章 古屋敷遺跡(C区)の調査



C区西壁

1 造込土(築明整備時の寄土)

- 1 赤土および粉作土
- 2 粉作土
- 3 粉作土2
- 4 築明整備の基礎層
- 5 築明整備の基礎層

2 緑灰色粘質土1

- 1 5cm大までの炭を含み多少小礫を含む砂層
- 2 やや黒色を呈する粘質土
- 3 砂質じりの粘質土
- 4 黄色の砂れしを含む砂層

3 緑灰色粘質土2

- 1 上層よりやや色の薄い粘質土
- 2 S001 埋土
- 3 S001 埋土
- 4 S001 埋土

4 緑灰色粘質土3

- 1 やや黒色を呈する粘質土
- 2 上層より薄い青みがかった粘質土
- 3 やや白い砂層
- 4 黄色の砂層
- 5 やや黒色を呈する粘質土

5 灰白色砂質土

- 1 灰白色の砂質土
- 2 赤褐色の砂れしを含む砂層
- 3 やや赤みを持つ砂層

6 黒灰色粘質土

- 1 やや黄褐色のある砂を多く含む。
- 2 やや黄褐色のある粗い砂を含む砂層
- 3 粘性の強い黒色の粘土
- 4 やや青みのある黒色を呈する。
- 5 緑の粗い砂をブロック状に含む。
- 6 黒色を呈する。部分的に砂がブロック状に混じる。

7 黒色粘質土

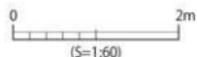
- 1 1cm大の炭粒を含む。黒色を呈する。
- 2 多量の炭粒を含む。遺構埋土。

8 灰色砂質土

- 1 5mmから1cm大の炭をやや多く含む。
- 2 やや黒色を呈する砂質土
- 3 やや黒色を呈する砂質土

9 暗灰色粘質土

- 1 暗オリーブ灰色粘質土



第7図 C区西壁土層堆積状況(1:60)

いが見られる。

第6遺構面直下には、灰色砂質土(第8層)がある。出土遺物は急激に減るものの、直下の第7遺構面には250ヶ所を超えるピット群が検出された。

第7遺構面直下には、暗灰色粘質土(第9層)がある。遺物量は少ないが、突帯文土器がほとんど見られなくなることから、縄文時代晩期初頭から前期頃の包含層と考えられる。直下には第8遺構面があり、ピットが約50ヶ所検出された。

第8遺構面直下には、暗オリーブ灰色粘質土(第10層)がある。出土遺物は少なく、時期を明確にできないが、縄文時代晩期初頭頃の包含層と考えられる。直下には第9遺構面があるが、遺構は限られる。

2. 第1遺構面の調査(第8図)

第1遺構面は、表土下の耕作土および圃場整備各土を取り除いた後、包含層である緑灰色粘質土1の直下で確認した遺構面である。緑灰色粘質土1は圃場整備時の整地、掘削により残っていない場所があり、緻密には一枚の面として把握できたわけではない。圃場整備時の轍などの凹みも見られたが、図上では省略している。また、調査区西側では第2遺構面との高低差が10cm以下の場合もあり、あるいは掘りすぎている部分もあるかもしれない。標高は調査区東端で約8.3m、西端で7.8mで、基本的には北西向きに緩斜面であるが、8ライン付近からややきつい傾斜となって落ち込んでいく様子が見られる。

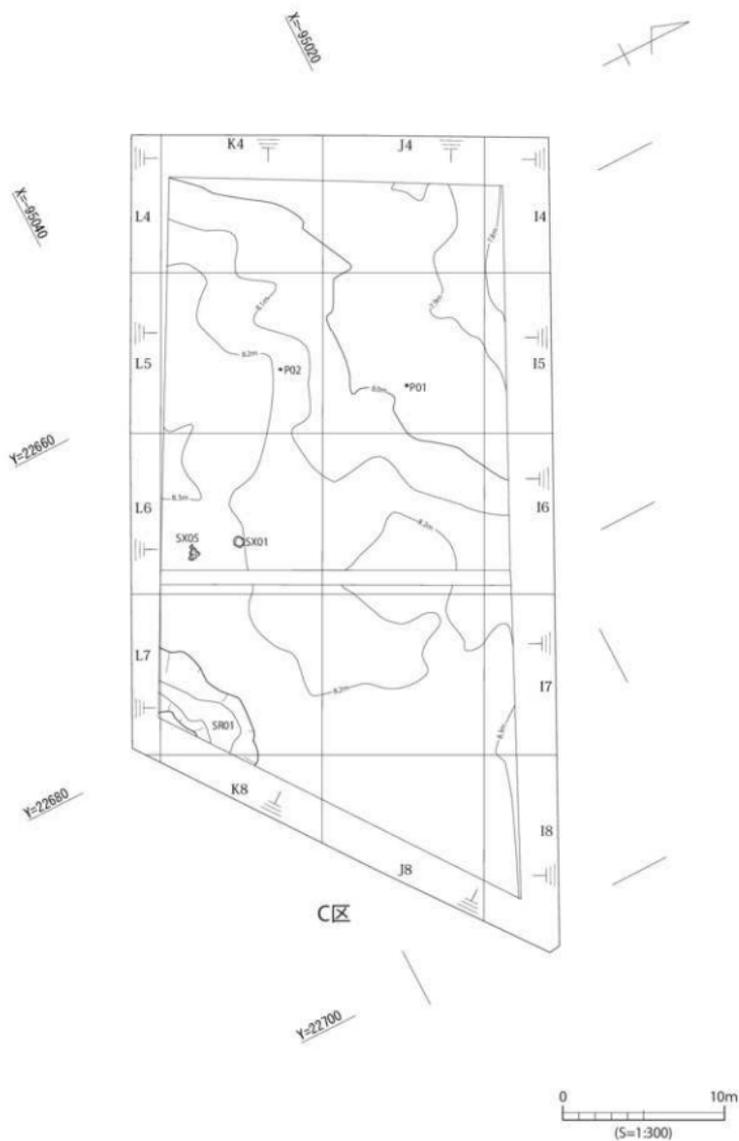
第1遺構面には、地床炉2カ所と自然河道(SR01)、ピット1ヶ所を検出した。遺構数は少ないが、これらは明らかに第2遺構面より高い標高で検出しており、第1遺構面の遺構として区別することとした。

SR01

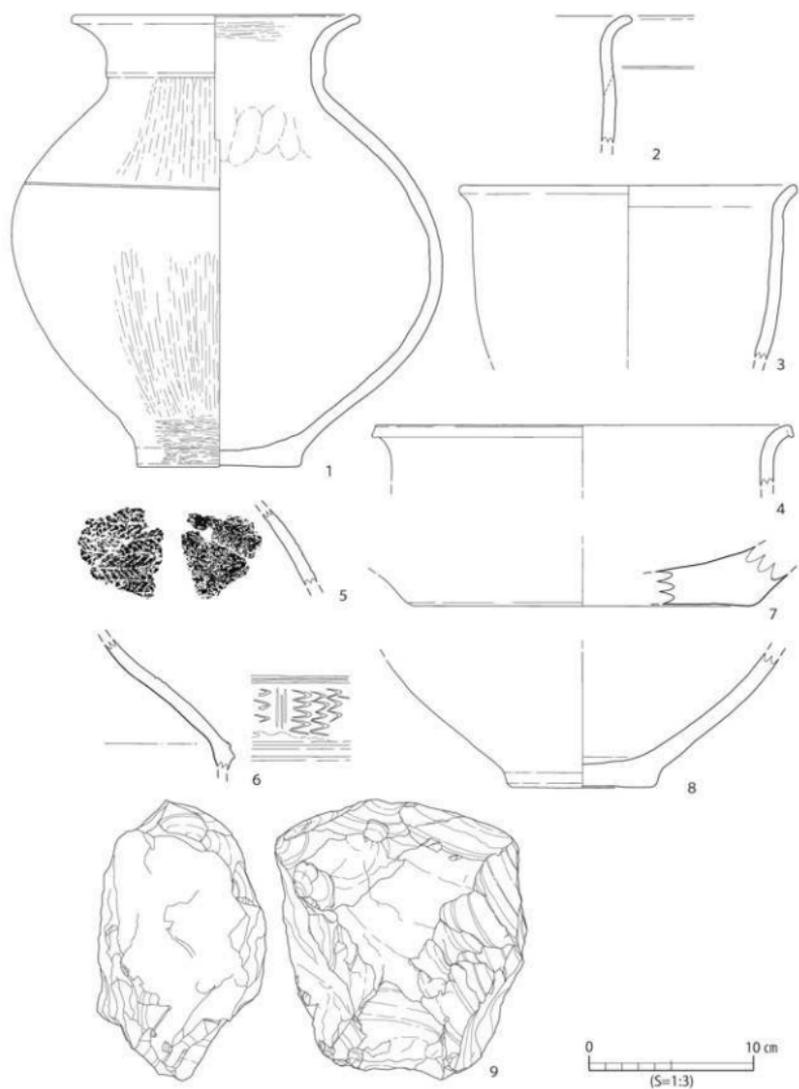
SR01は調査区東端に検出した自然流路である。各時期の遺構面、包含層を切って本調査区の発掘停止面まで存在しており、河岸の位置が変化する様子から、埋没と浸食を繰り返していたことがうかがえる。SR01は直上を圃場整備時の客土で切られているため、本調査区の結果のみからは下限を確定することが難しい。しかし、他の調査区も含め、SR01から出土した遺物は弥生時代前期(Ⅰ-2様式)の土器を下限としており、これらが最終的な埋土に伴う遺物群である可能性が高い。

SR01の出土遺物(第9図)

前記の通りC区内の出土遺物は弥生時代前期のものに偏っている。突帯文期の土器も若干あったが、基本的には弥生時代前期の土器である。古屋敷遺跡の弥生時代前期の土器は鮮やかな明橙色の胎土が特徴である。9-1は口縁の一部のみを欠く壺である。肩部に一条の凹線を廻らし、頸部から口縁部にかけて段をつけて外反させる。頸部から胴部下半まで緻密な縦方向のミガキがなされており、口縁部は横方向のミガキを施す。底部は平底である。-2~-4は口縁端部のみを外傾させる甕で、緩やかにカーブを描くものと、唐突に外傾するものがある。口縁端部は丸く取めるものと、-4のように明確な平坦面を整形するものがある。-5は重層化した羽状文、-6は連続するV字文を肩部に施す壺である。-6では文様帯を区画する沈線が入り、最大径部分には段が付くようである。-7、-8は壺、甕類の底部



第8図 C区第1遺構面遺構配置図(1:300)

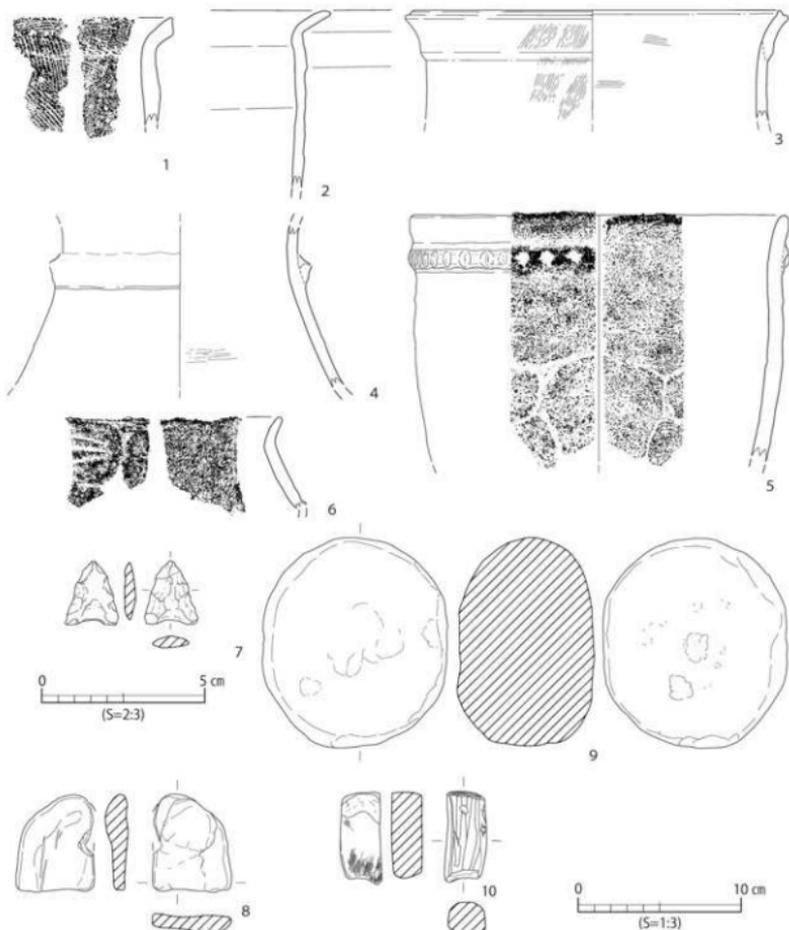


第9図 C区SR01出土遺物(1:3)

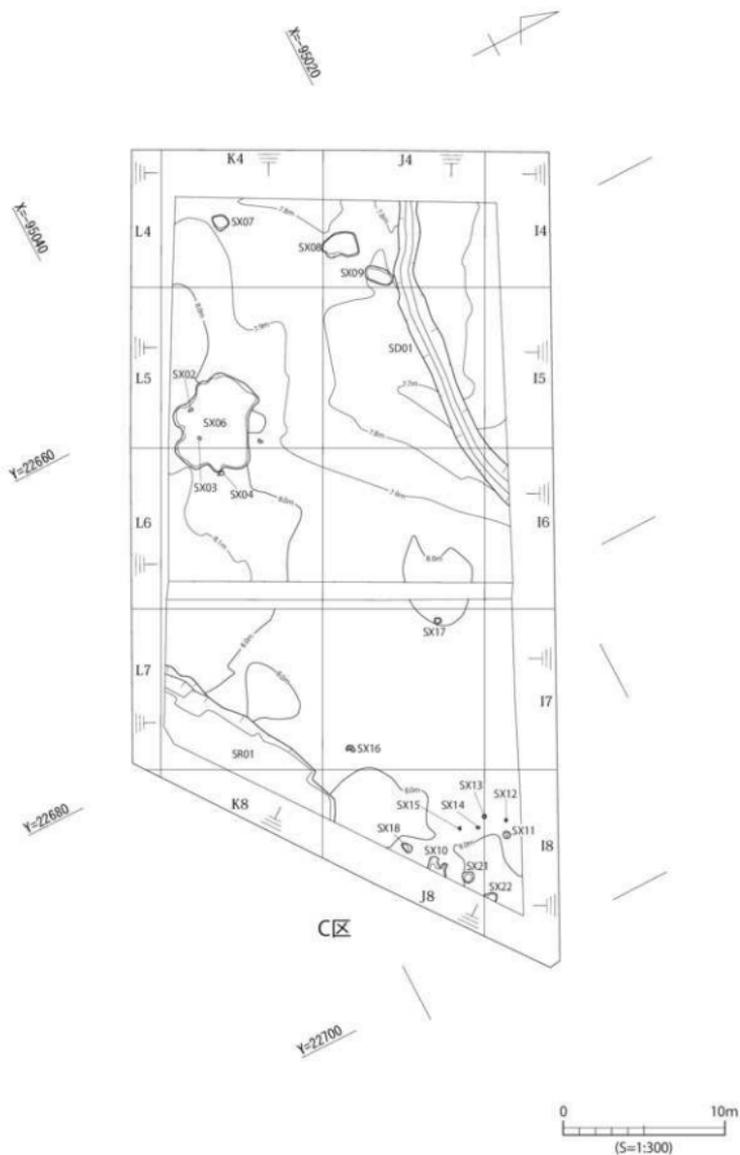
で、-7は底部復元径が20cmを超える大型のものである。-9はデイサイト製の石核である。自然面もかなり残されており、作業途中で放置されたものか。

第1遺構面出土遺物(第10図)

第10図には第1遺構面出土遺物を並べた。-1～-3は弥生時代前期の甕で、1-2様式に位置づけられる。口縁部を緩やかに外傾させるものと、角度をもって外に屈曲するものがある。内外面は刷毛目調整である。-2、-3は口縁部下端に段を持つ。-4は壺の頸部である。最小径の位置に断面三角形の突帯を廻らす。-5は貼付突帯を持つ深鉢である。突帯の位置は口縁端部よりかなり離れているが、幅



第10図 C区第1遺構面出土遺物(1:3・2:3)



第11図 C区第2遺構面遺構配置図(1:300)

広で高さが低い。突帯上の刻目は浅く、間隔が広い。-6は浅い横方向の凹線を組み合わせた三田谷文様を持つ小片で、屈曲する鉢の口縁部と考えられる。

-7は安山岩製の石鐮だが、表面はかなり摩滅している。-8～-10は凝灰岩製石器類である。-8は、古屋敷遺跡出土品に多い、白色で目の細かい凝灰岩を研磨によって薄く加工した個体で、おそらく意図的に一部を欠いている。-9はやや目の粗い凝灰岩製で、両面に敲打痕を持つ。-10は凝灰岩を棒状に加工したもので、側面には幅の狭い研磨面が並ぶ。一面だけ面積が広く、斜め方向の研磨痕が明確に残る。本来はもっと長いものだったが、両端を打ち欠いて、破断面を研磨している。用途不明の石器である。

3. 第2遺構面の調査(第11図)

第2遺構面は緑灰色粘質土2の直下に位置する遺構面である。標高は調査区西端で約7.6m、調査区東端で約8.0mの緩い西向き傾斜地である。第2遺構面では地床炉12カ所と炭だまり6カ所、人工的に掘削されたと考えられるSD01を検出した。地床炉は調査区北東部のグリッド18・J8に濃密に集中している。SD01は北側に隣接するD区から伸び、調査区北西部を横断して西に隣接するH区へ抜けている。南東端にはSR01が流れており、平面的には第1遺構面よりも広い面積を占めている。

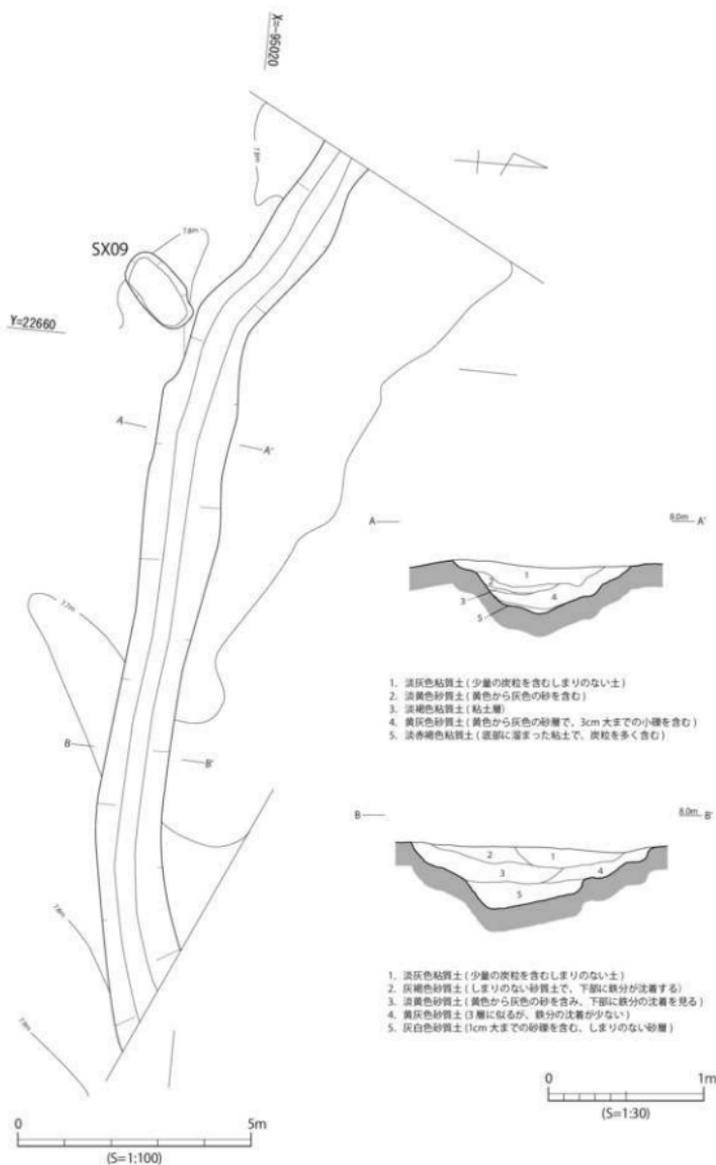
SD01(第12、13図)

SD01は断面がV字形を呈する素掘りの溝である。他地区の調査結果から、古屋敷遺跡北東端付近に始まり、B区・D区を南西方向に縦断し、C区内で西に向きを変えてH区へと抜けている。H区内では、溝に付帯する施設として2ヶ所の杭列と、取水・排水施設の可能性がある配石群が出土している。C区内における溝の規模は、長さ約17m、最大幅約2.0m、最小幅約1.2mである。底部は西に向かって緩い勾配が付く。SD01の埋土は鉄分付着の多い砂質土が占め、底部には薄く粘質土が堆積している。埋土中には有機物の小片や1cm程度の炭粒を含んでいる。埋土中の遺物は少なかったが、他の調査区では突帯文土器と弥生時代前期(I-2様式)までの土器が混在しており、弥生時代前期まで機能していたと考えられる。13-1は口縁端部が屈曲する弥生時代前期の甕片である。-2は黒曜石製石鐮である。古屋敷遺跡では縄文時代の石鐮は安山岩製を主体としており、黒曜石製はほとんど出土していない。この石鐮も弥生時代まで下るものか。

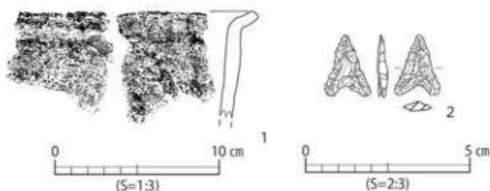
SX(炭だまり)06(第14図)

東西長約5.8m、南北長約6.4mの炭だまりである。一応の外形は把握できるが、基本的には明確な輪郭がなく、ゆるい傾斜をもって凹んだ部分に、炭粒を多く含む黒色の埋土がたまっている。A-A'セクションで示したとおり、東側には点々と炭粒を含む土が見られたが、輪郭を把握することができなかった。範囲内には2カ所の焼土面を含み、地床炉02、03としている。いずれも熱を受けて赤色化している部分が径20～30cm程度の小規模な地床炉である。

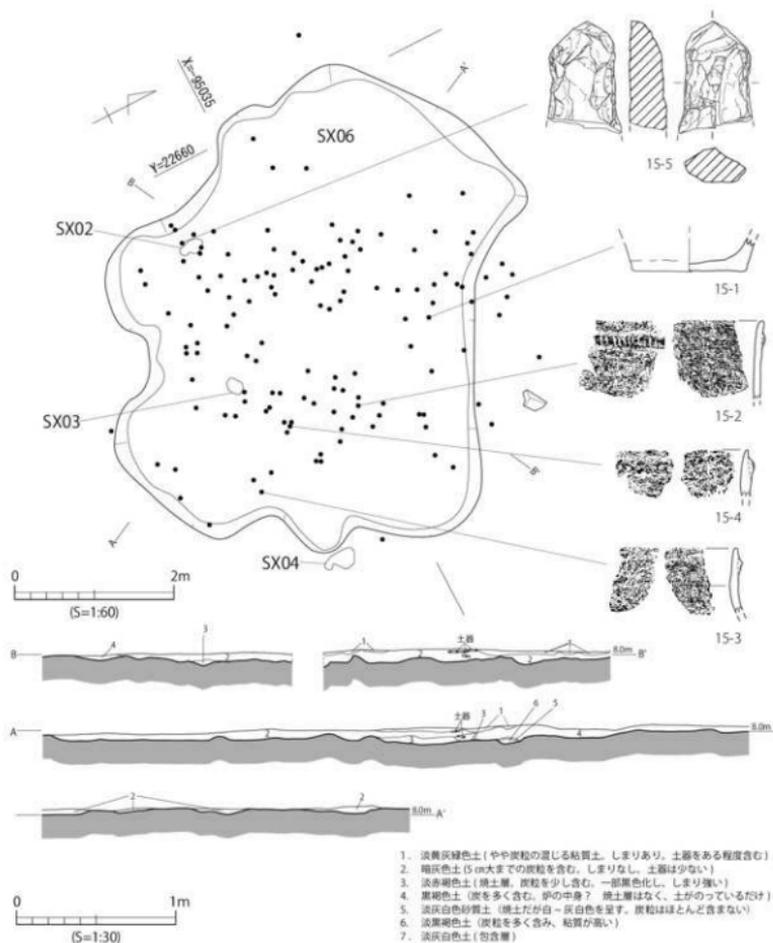
出土遺物は多く、遺構全体に分布しているが、いずれも出土レベルが若干高い。また小片化した土器が多く、ほとんど接合できない。



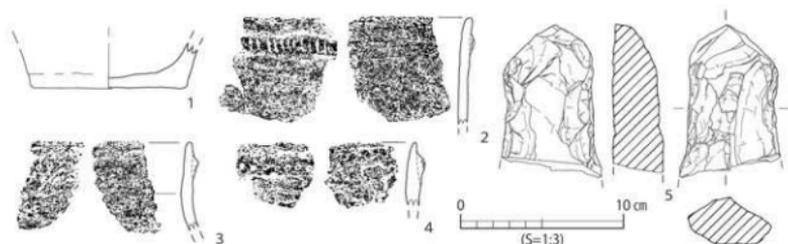
第12図 C区SD01(1:100・1:30)



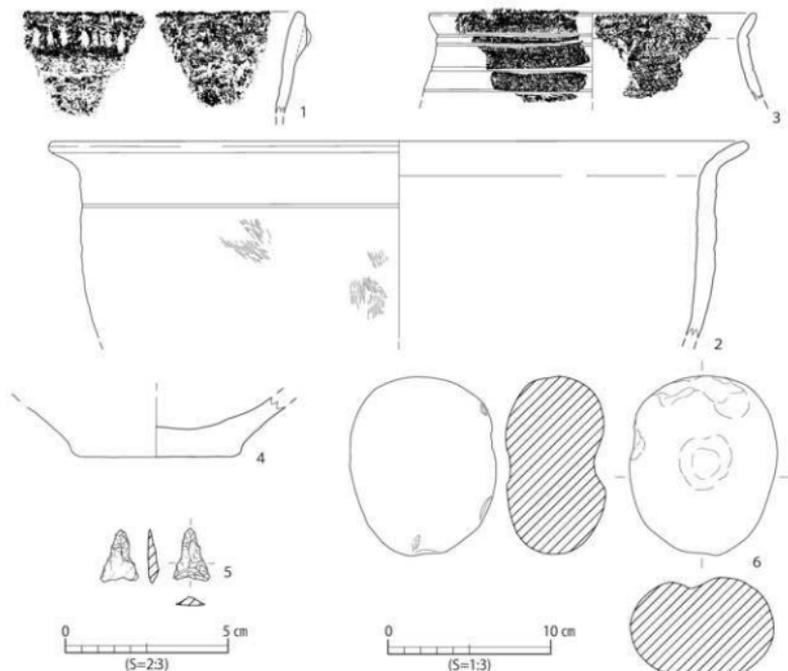
第13図 C区SD01出土遺物(1:3・2:3)



第14図 C区SX(炭だまり)06(1:60・1:30)



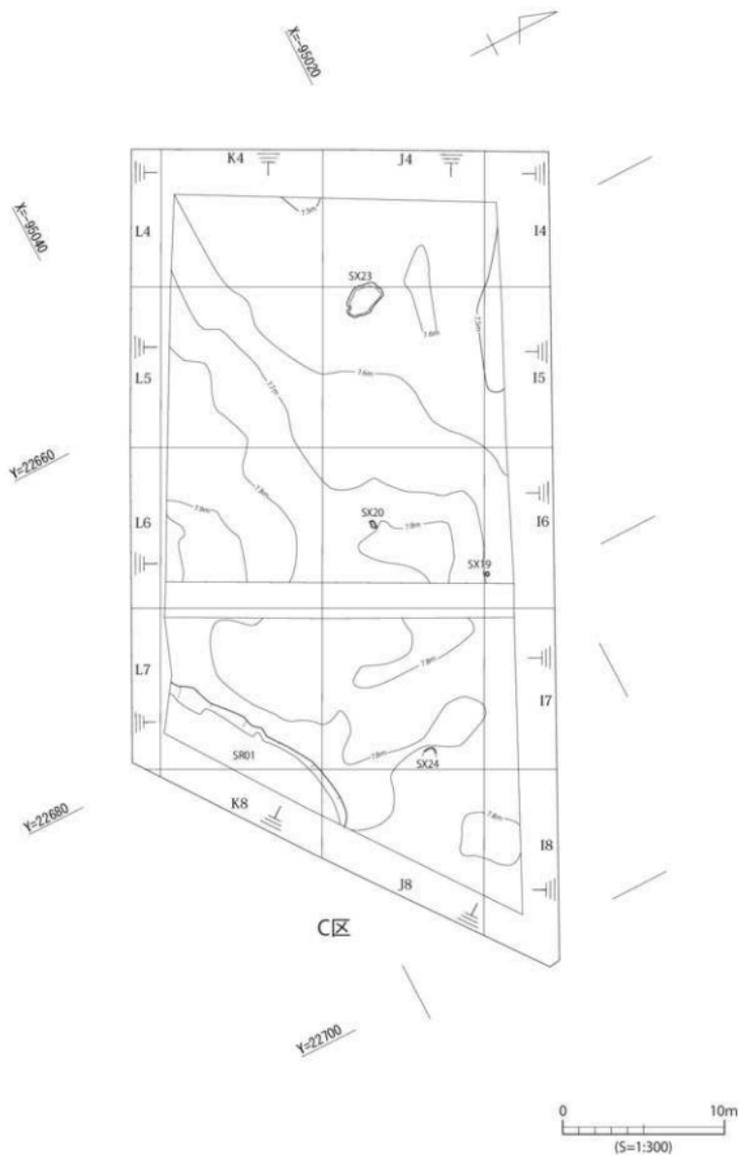
第15図 C区SX(炭だまり)06出土遺物(1:3)



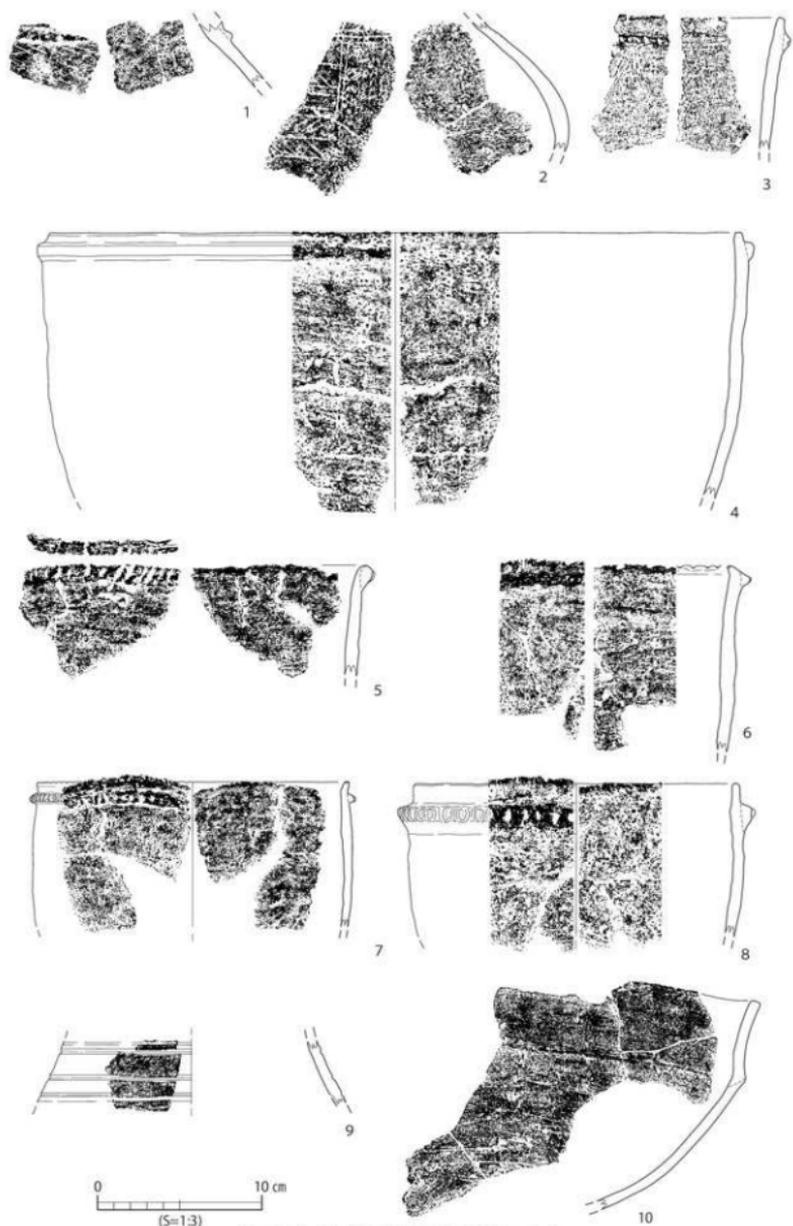
第16図 C区第2遺構面出土遺物(1:3・2:3)

SX(炭だまり)06出土遺物(第15図)

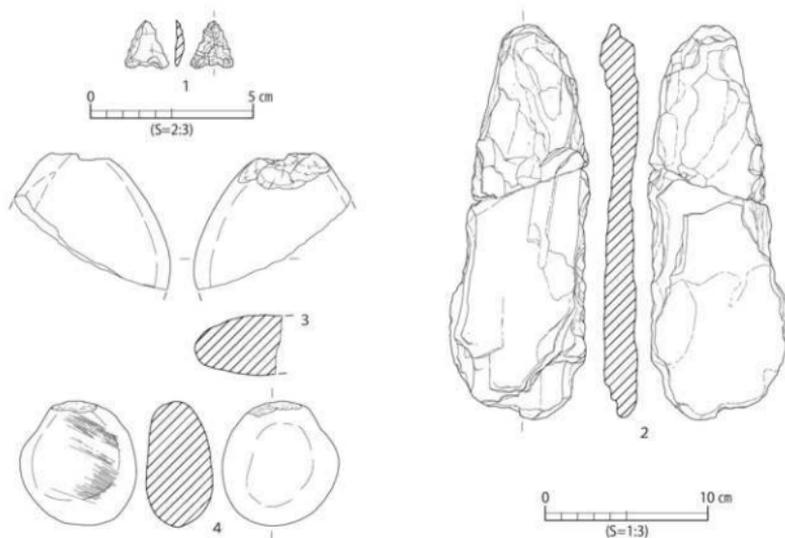
前記の通り出土数が多いが、小片が多く、図化できる個体が少ない。15-1は約1.5～2.0cmと厚さのある底部である。-2～-4は貼付突帯を持つ深鉢の口縁部である。いずれも口縁端部の厚さを減じて細めている。突帯は低く、幅広に採り、-2では細い沈線による刻目、-3、-4は連続する竹管刺突により刻まれる。-5は古屋敷遺跡では数少ない流紋岩製の打製石斧の破損品である。剥離痕を見る限り、再加工はなされていない。



第17図 C区第3遺構面遺構配置図(1:3)



第18図 C区第3遺構而出土遺物1(1/3)



第19図 C区第3遺構面出土遺物 2(1:3・2:3)

第2遺構面出土遺物(第16図)

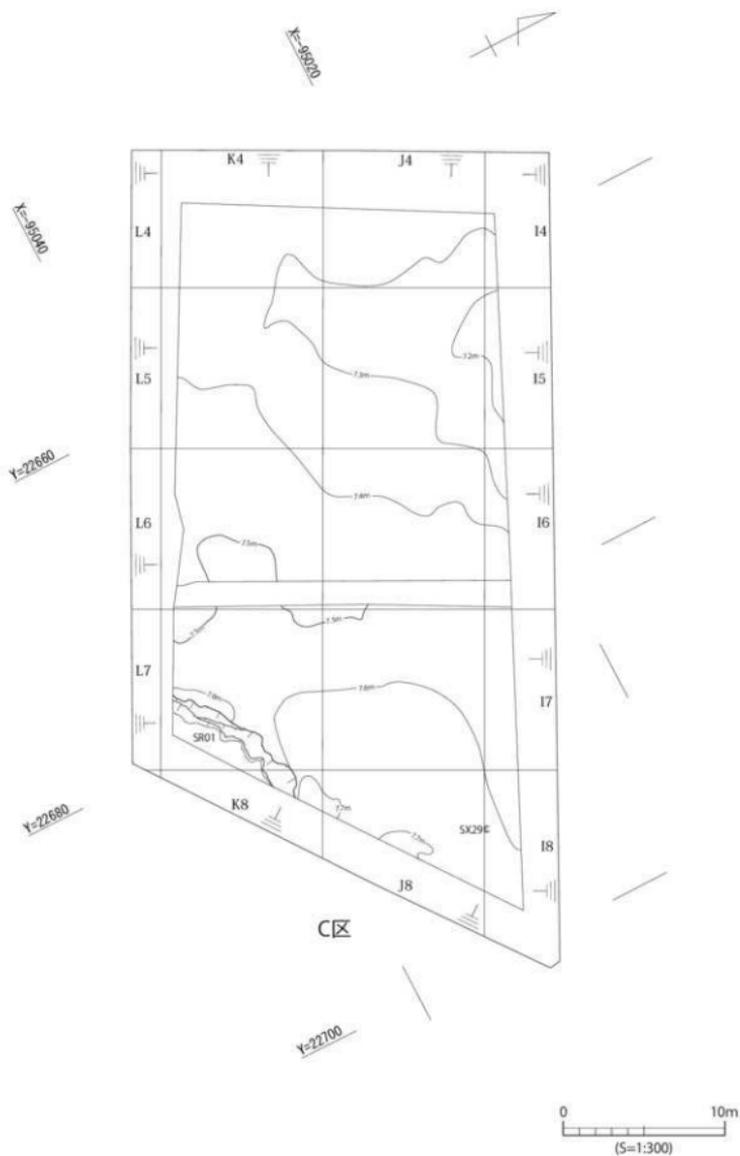
第16図には第2遺構面出土遺物を並べた。16-1は、幅広で高さの低い貼付突帯に複雑な刻目を入れている深鉢口縁である。-2は弥生時代前期の甕で、口縁部を大きく外傾させ、下端に凹線を一条廻らす。-3は浅い凹線の入る口縁部で、凹線がわずかにカーブを描くことから、三田谷文様的一种と考えられる。-5は安山岩製の石鏝であるが、片面の加工が途中で終わっている。-6は凝灰岩製のいわゆる凹石である。凝灰岩でもやや目の粗い円礫の両面を凹ませている。側縁の一部にも敲打痕、剥離痕が残る。

4. 第3遺構面の調査(第17図)

第3遺構面は、緑灰色粘質土3層直下に位置する遺構面である。標高は約7.5～7.8mで、西向きに緩傾斜地である。出土遺構は炭だまり1、地床炉3と他の遺構面に比べ低調である。遺構分布に極端な偏りはみられない。SRO1は依然として調査区南東端に存在し、遺構面を切っている。

第3遺構面の出土遺物

第3遺構面の遺構では図化可能な出土遺物がなかった。第18図には緑灰色粘質土3層に含まれる遺物をまとめた。18-1、-2は弥生時代前期の壺である。-1は頸部に突帯が巡り、連続するV字文が描かれる。-2は2条線で仕切られた区画内に羽状文が描かれている。いずれもI-2様式と考えられる。-3～-8は貼付突帯を持つ深鉢類である。突帯の位置や口縁端部の形状はバラエティーに富んでいるが、刻目の深さが全体に浅く、間隔がバラつくなどの傾向が見て取れる。-4は突帯上に刻目を施さず、比較的しっかりした稜線を整形する個体で、口縁端部はわずかに内湾する。-3は突帯上に刺突で刻み、突帯から下方へ円弧を描く複数の沈線を施す。-5は口縁端部外面に貼り付け突帯を施すもので、突帯



第20図 C区第4遺構面遺構配置図(1:300)

第4章 古屋敷遺跡(C区)の調査

上を斜めの沈線で刻む。-6、-7は突帯上面と口縁端部の二カ所を刻むもの、-8は突帯上のみを刻むものである。

-9は浅い凹線が複数廻り、16-3に類似するものだろうか。-10は口縁部下端で屈曲する浅鉢である。緩い波状口縁を持つと考えられる。

19-1はSX(炭だまり)23から出土した石鏝で、古屋敷遺跡では稀な閃緑岩製である。-2は泥質片岩製の打製石斧で、全長24.3cmと大型である。両側縁の加工は丁寧だが、刃端部の加工が粗く、未成品かもしれない。柄部に近い側で折損しており、これが原因で放置されたものか。-3は砂岩の端部を打ち欠いたものである。加工痕の位置から石錘の破損品と考えた。-4は両面に擦痕が残る溶結凝灰岩の円盤で、側縁部の一部には顕著な打痕が残る。

5. 第4遺構面の調査(第20図)

第4遺構面は、灰白色粘質土直下に位置する遺構面である。標高は調査区東側で7.6m、西側で7.3mで、緩い南西向きの傾斜地である。灰白色粘質土層は約20～40cmの厚さがあったが、遺物量は多くなく、第4遺構面の遺構も極端に少ない。直下にあたる第5遺構面と同一面と捉えられないか検討したが、第5遺構面との標高差は約25cmあり、別の遺構面と判断した。

第4遺構面の遺構は、小型の地床炉1ヶ所のみである。調査区南東隅は依然としてSRO1に切られているが、出土遺物を見る限りSRO1は弥生時代前期の埋土で埋まっており、遺構面と同時期の川岸でないことが明らかである。

第4遺構面出土遺物(第21図)

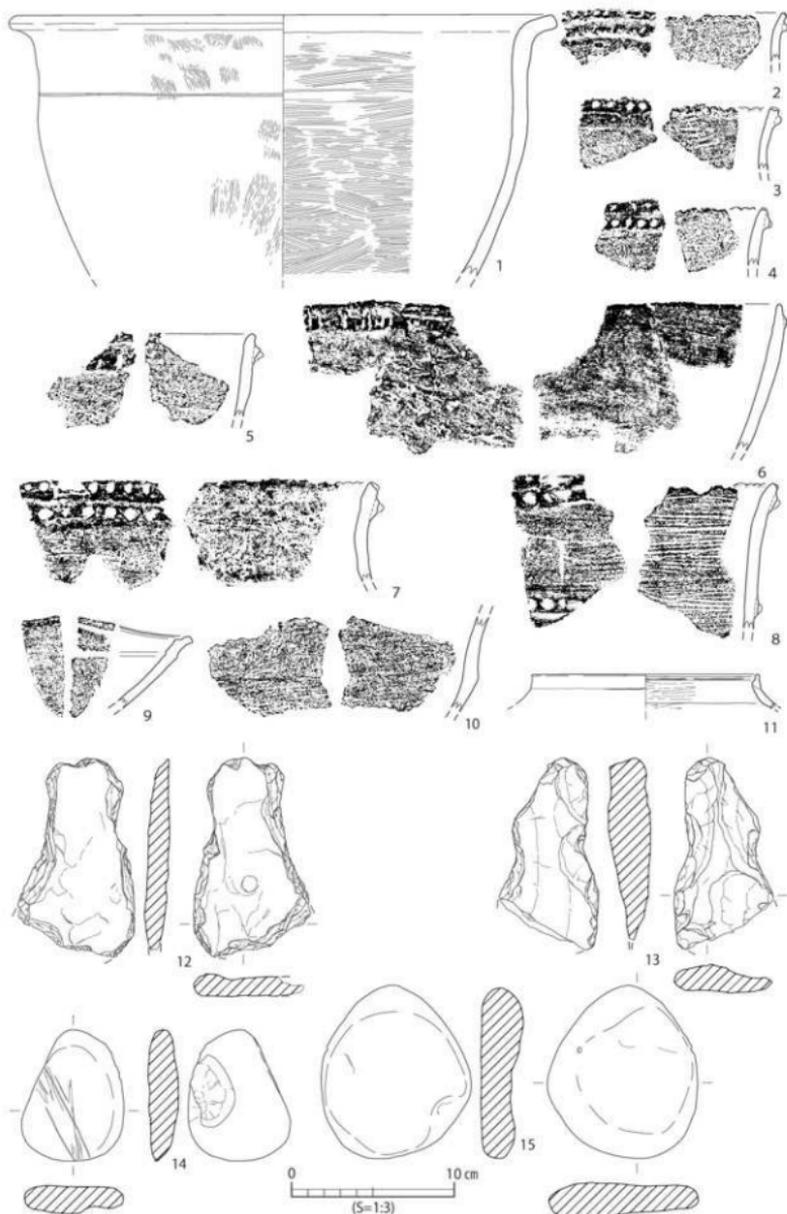
第21図には、灰白色粘質土出土遺物を並べた。21-1は橙色系の胎土を持つ弥生前期の甕である。頸部に一条の沈線が入り、口縁部は大きく外反する。口縁端部はナデで平坦面を作る。内外面ともハケメ調整である。-2～-8は突帯文期の深鉢である。口縁端部を細くすぼめるものが多く、-2から-4は刻目を入れている。貼付突帯は細く華奢な印象があり、位置は高めである。刻目も小さめの刺突や押し引きの線が多用されている。-8は小片だが、肩部に2条目の貼付突帯を廻らすもので、突帯間は横方向の条痕が目立つ。-9、-10は口縁部が外反する浅鉢で、-9は内面にも凹線を廻して段を作り出している。-11は口縁部が内向きに傾きながら立ち上がる口縁部で、口縁端部内面に段を作っている。段にわずかな赤色顔料が残っている。

-12、-13は打製石斧の破損品である。-12は泥質片岩製だが、黒光りする特徴的な石材である。刃部再生を試みたようだ。-14、-15は凝灰岩製の石器類で、摩耗が激しい。-14は斜め方向の線刻が入っている。

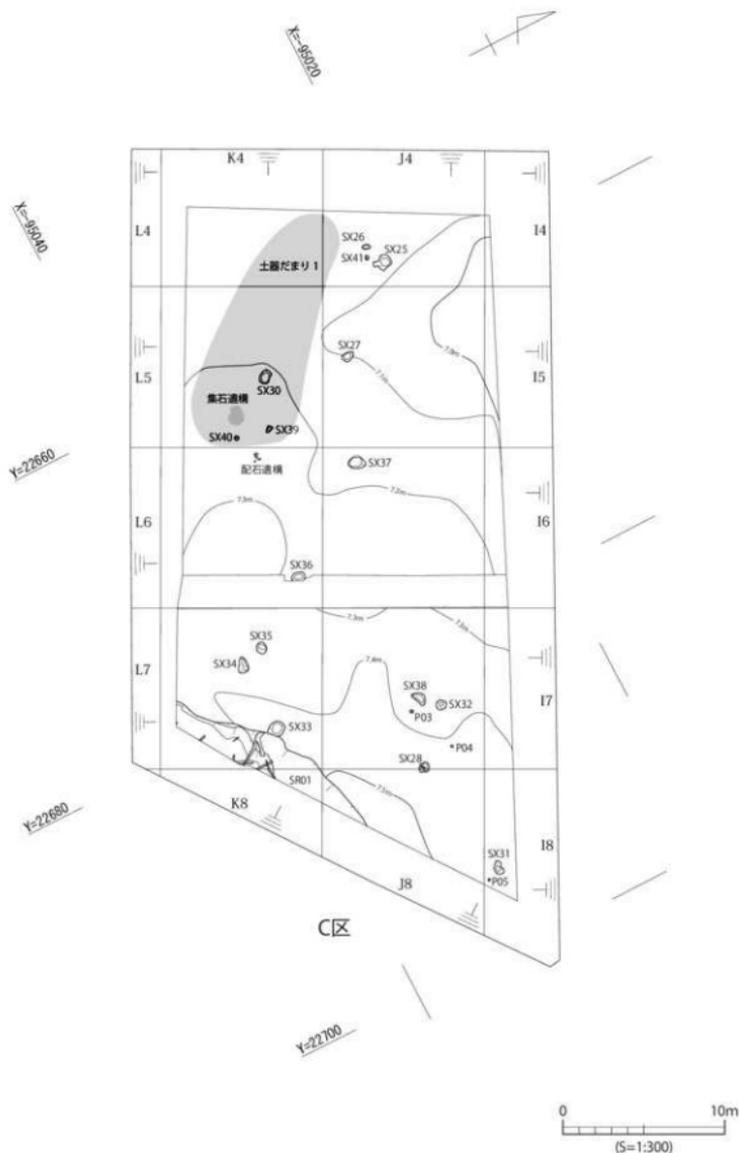
6. 第5遺構面の調査(第22図)

第5遺構面は黒灰色粘質土直下に位置する遺構面である。標高は調査区東側で約7.5m、西側で約7.0mの西向きの緩傾斜地である。

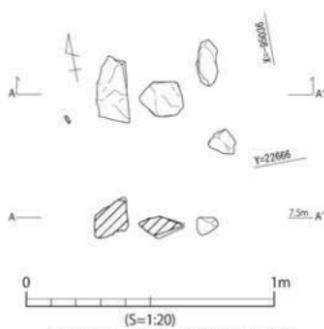
第5遺構面では比較的纏まった数の遺構が出土している。地床炉は調査区の全域に散在しており、厳密には個々に多少の時期差があるかもしれないが、切り合わない限りそれを把握することは難しい。また、J4、K4、L4グリッドに広がる土器だまり1や隣接する集石遺構、小規模な配石遺構、地床炉



第21図 C区第4遺構而出土遺物(1:3)



第22図 C区第5遺構面遺構配置図(1:300)



第23図 C区配石遺構1(1:20)

16ヶ所を検出した。土器だまり周辺には集石遺構、配石遺構、地床炉がまとまっており、相互に関係のある遺構かもしれない。

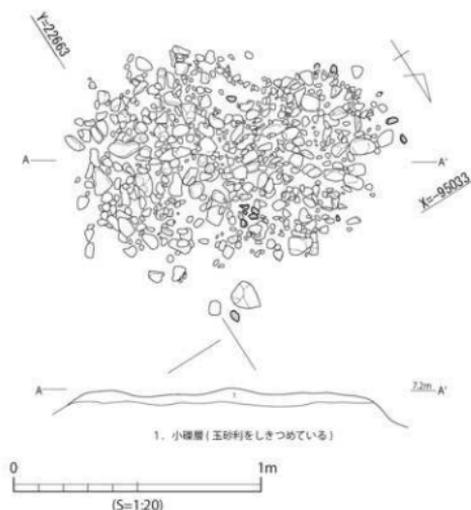
配石遺構1(第23図)

K6グリッドで確認した、計4点の礫からなる小規模な配石遺構である。礫のサイズは最大でも30cmに満たない。古屋敷遺跡の包含層においては、こぶし大以上の角礫が混じる事がなく、礫のサイズは小さくとも人為的に持ち込まれた可能性が高い。最も西側に位置する礫は、平坦な面が側面になるように立てて据えられている。古屋敷遺跡では、D区・I区で配石遺構が確認されており、I区のそれは同様に小規模なものである。

集石遺構1(第24図)

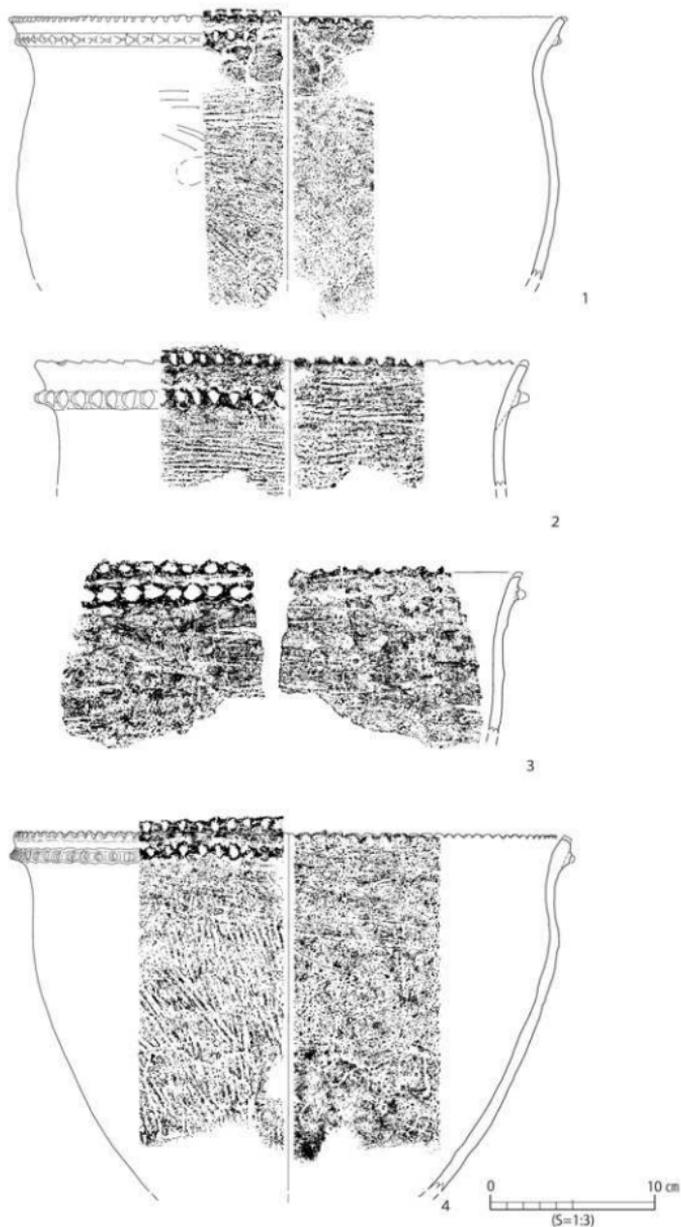
K5グリッドで確認した、玉砂利群である。2~15cm大の礫を一面に敷きつめたもので、長径約1.4m、短径約95cmの楕円形を呈する。調査の都合上、遺構が台状に残されてしまったが、本来は平坦な遺構面に敷かれたものであろう。角の取れた円礫で構成されるが、大きさや形状にバラツキがあり、一点一点を選別して集められたものではない。数点の土器片が混じるが、いずれも小片である。明確な被熱痕跡はない。

集石遺構1の周辺には地床炉3ヶ所と配石遺構1が存在し、径5mほどの範囲に纏まっている。また、西側には土器だまり1が広がっており、これらの遺構群が何らかの繋がりを持っていた可能性が高い。

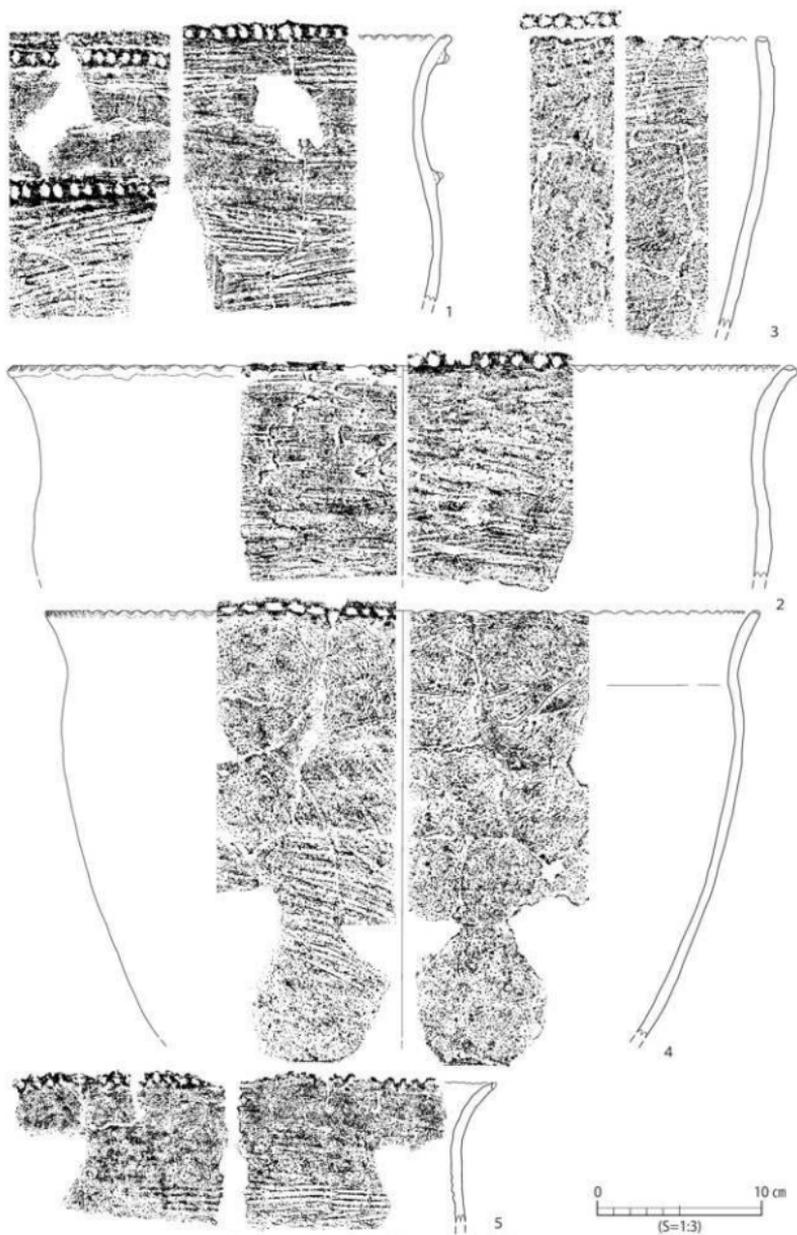


1. 小礫層(玉砂利をしきつめている)

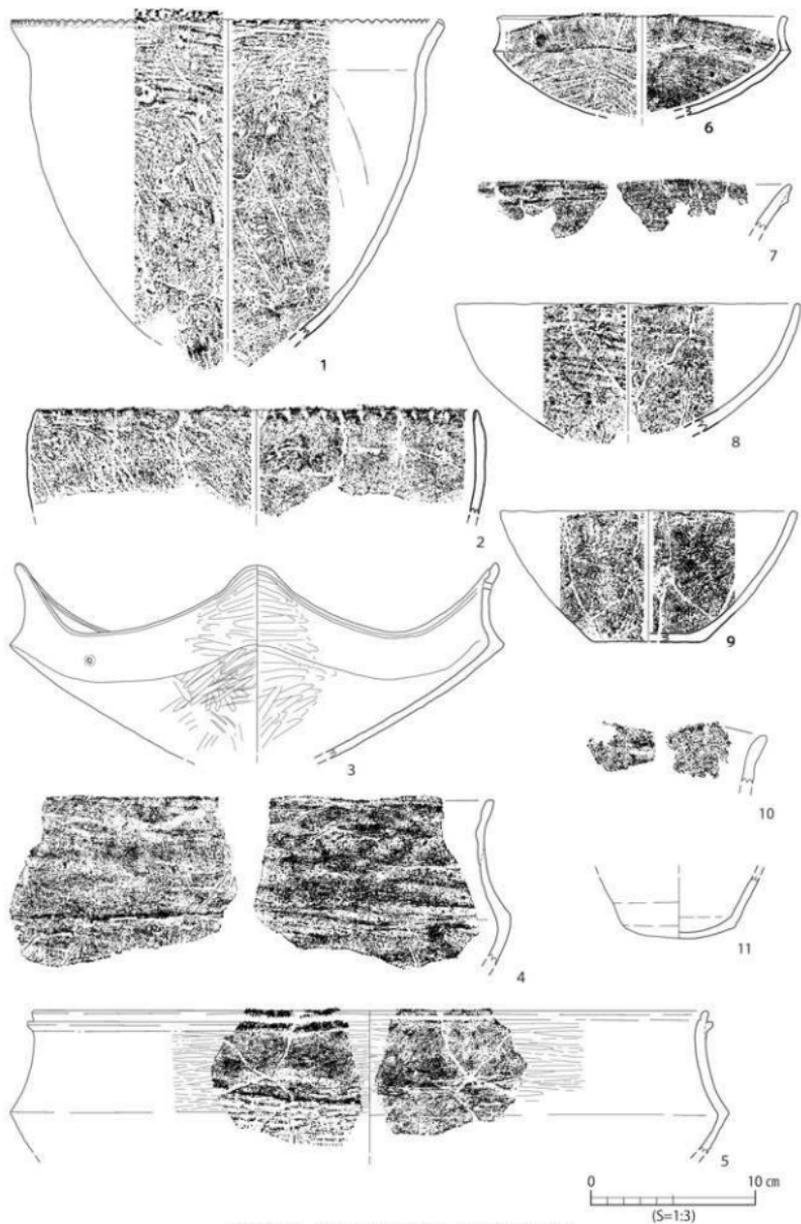
第24図 C区集石遺構1(1:20)



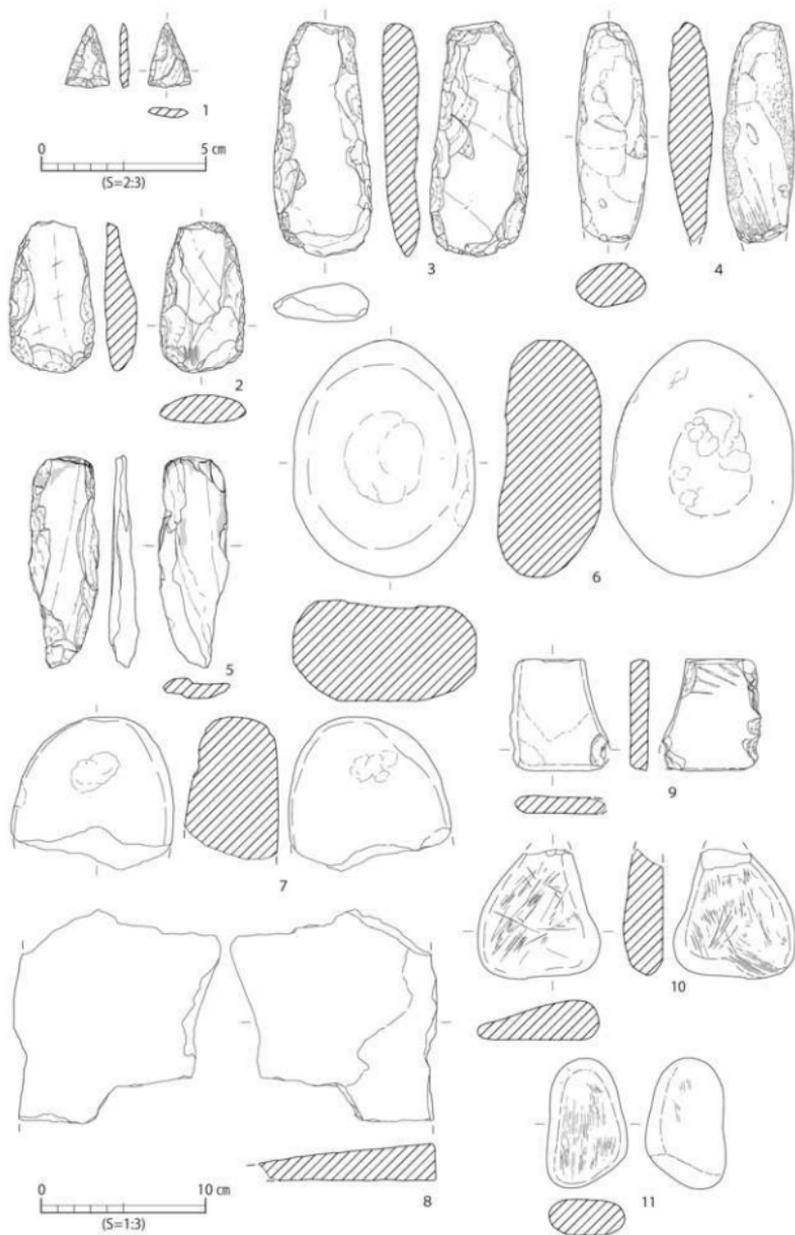
第26図 C区土器だまり1出土物1(1:3)



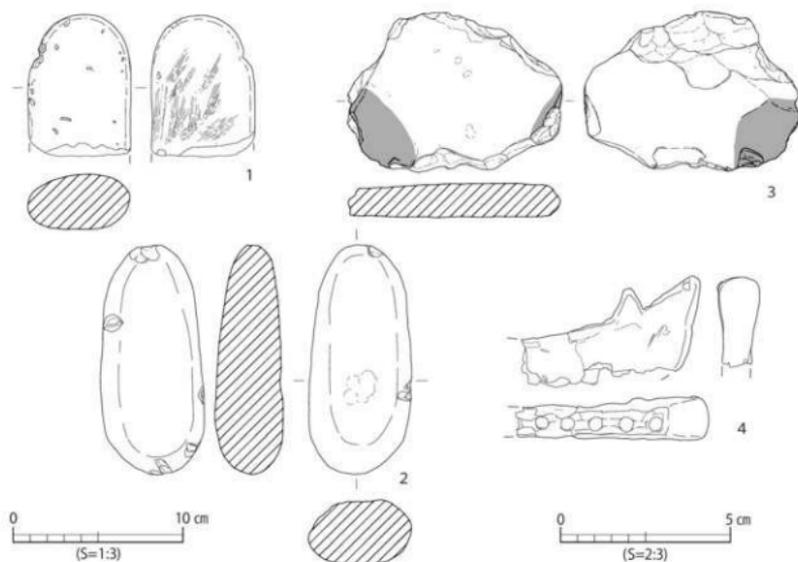
第27図 C区土器だまり1出土遺物2(1:3)



第28図 C区土器だまり1出土遺物3(1:3)



第29図 C区土器だまり1出土遺物4(1:3・2:3)



第30図 C区土器だまり1出土遺物5(1:3・2:3)

土器だまり1(第25図)

調査区の西側、K4・L4グリッドに、7m×15mの範囲にわたって広がる土器だまりである。北東側の一角は出土位置を測量せず取り上げてしまった遺物があるため、本来はもう少し範囲が広がった可能性が高い。明確な焼土面は伴わないが、覆土には炭粒をやや多く含んでいる。遺物は土器だまりの中心部やや南寄りに密度の高い部分があるが、さほど偏りはない。各個体の破片は比較的纏まって出土しており、その場で潰れたと考えられる個体も見られる。ただし、28-1のように4m近く離れて出土したものもあるので注意を要する。

土器だまり1出土遺物(第26～30図)

土器だまり1からは、粗製深鉢、浅鉢等の土器が出土している。26-1～28-2は粗製深鉢類を並べた。いずれも突帯文期の深鉢で、貼付突帯を持つ一群と、突帯を持たず口縁端部のみを刻む一群の2群がある。貼付突帯を持つ個体は、突帯が口縁端部からやや離れた位置に巡るものが多く、深さと幅のあるしっかりした刻目が多い。また口縁端部を併せて刻む傾向がある。口縁部は肩が緩く張り、外反する。外反する部分は横方向の調整が施される。27-1は前記の突帯文土器と同じ特徴を持つが、肩部に2条目の突帯を持つ個体である。突帯を持たない深鉢も、基本的なプロポーションや表面の調整方法は同じである。口縁部は緩く外反し(27-3を除く)、この部分だけが内外面とも横方向を主体とする調整を施す。

28-2は内湾する口縁を持つ個体で、ボール状の鉢である可能性もある。口縁端部の内面側に線刻風の刻目を施す。-3は口縁部が大きく屈曲し、落差のある波状口縁となる浅鉢で、平面形はほぼ正方形の個体である。2ヶ所に焼成後穿孔を施す。内外面とも丁寧なミガキを施すが、外面の底に近い位置は二枚貝条痕が残る。-4、-5、-6は口縁部が内側に傾きながら立ち上がる浅鉢で、鉢部外面は二枚貝条痕、口縁部と内面はミガキを施す。-5は口縁部外面に刻みのない突帯を1条廻らすほか、端部内面にも浅い段を作っている。-7は端部外面に断面三角形の低い突帯を廻らす口縁部である。-8、-9はボール状の鉢で、-9はしっかりした平底を持つ点特徴的である。-10は口縁部をわずかに膨らませ、RL縄文を施すもので、他の土器よりも古手のものである。-11は小型壺の底部であろうか。

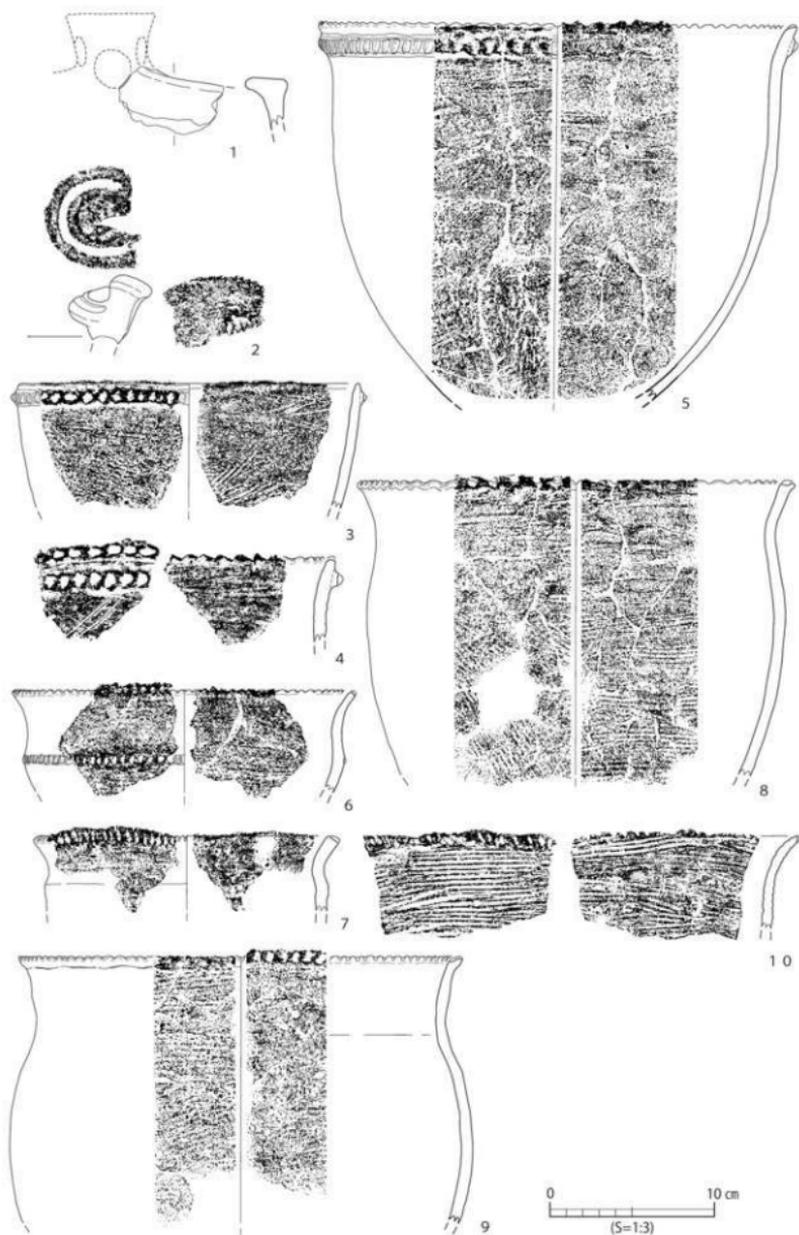
29-1は安山岩製の石鏃である。-2～-5は緑色片岩～塩基性片岩の石器群である。-2、-3は打製石斧であるが、未製品かもしれない。-4、-5はよく研磨された面を持ち、磨製石斧の破損品、再生品と考えられる。-5は片面のみに連続する剥離が施されており、再生途上かもしれない。-6、-7は敲石・擦石の類である。両面に敲打痕が残るほか、側縁には擦痕が見られる。-8は安山岩製石皿の破片で、両面ともよく磨かれている。29-9～30-3は白色系凝灰岩の石器類である。-9は厚さ1cm程度の板状の石片で、端部に細かい剥離痕が残るほか、片面には4条の線刻が見られる。-10、-11は研磨痕が残る鏃で、-10は両面に方向不定の線刻が見られる。30-1と-2は敲打痕と研磨痕が見られる個体である。-3は板状の凝灰岩の角部分を加工したもので、一部は被熱の影響で黒色化している。これらの凝灰岩製石器類は非実用品である可能性が高いが、用途不明である。

-4は黒色の漆塗り櫛である。土器の小片とともに取り上げてしまったため、詳細な出土位置は不明である。頭部端に翼状の突起を持ち、さらに角状の突起を1ヶ所作っている。棒状の櫛歯材の一端を紐で結束し、漆を主体とする壘形材で固めた、いわゆる結歯式堅櫛である。X線CT撮影の結果、櫛の本体である木質部は全く残っておらず、壘形材の中に木質部が中空として残った状態であった。詳細は第8章の分析報告に譲るが、中空部分のデータを元に立体化すると、歯を束ねた具体的な方法が明らかとなった。また突起部は骨組みを持たず、壘形材のみで整形されていることも判明した。現状で1/2～1/3程度が残存していると想定され、復元幅は10cmを超えると考えられる。

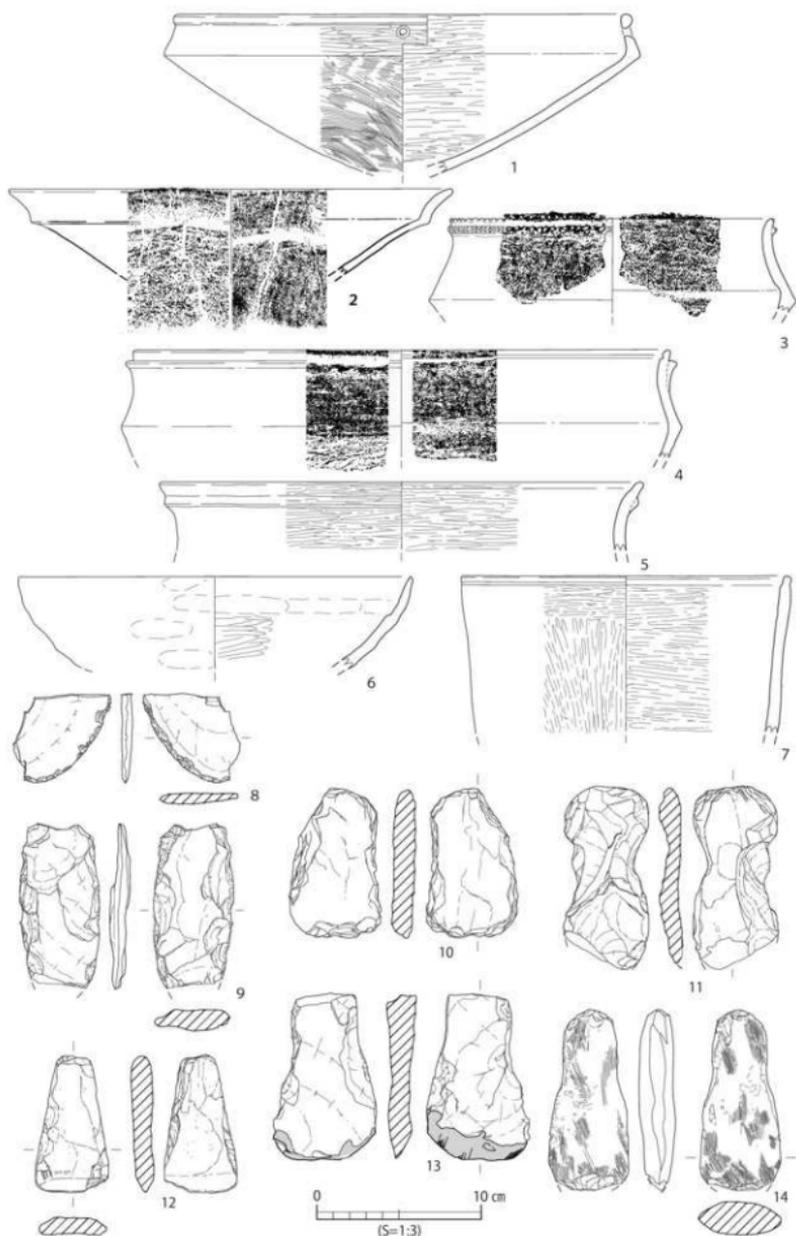
第5 遺構面の出土遺物(第31～34図)

第31図～34図には、第5遺構面の出土遺物を並べた。出土遺物の特徴は、既に掲載した土器だまり1の出土遺物とほぼ同じである。31-1、-2は当遺構面では著しく古手の土器である。-1は肥大させた口縁部の小片で、全体像はつかみ難いが、円形透かしの一部が残っており、環状突起の透かし部分と考えた。縄文は施さない。-2は口縁部部に付けられた渦巻き状の突起である。口縁部部に太い沈線を一条入れ、縄文は施さない。両者とも緑帯文期でも古手のものではなかろうか。この時期の遺構面や包含層は、他の調査区で検出されており、経緯は不明ながらこれらが混入したものであろう。

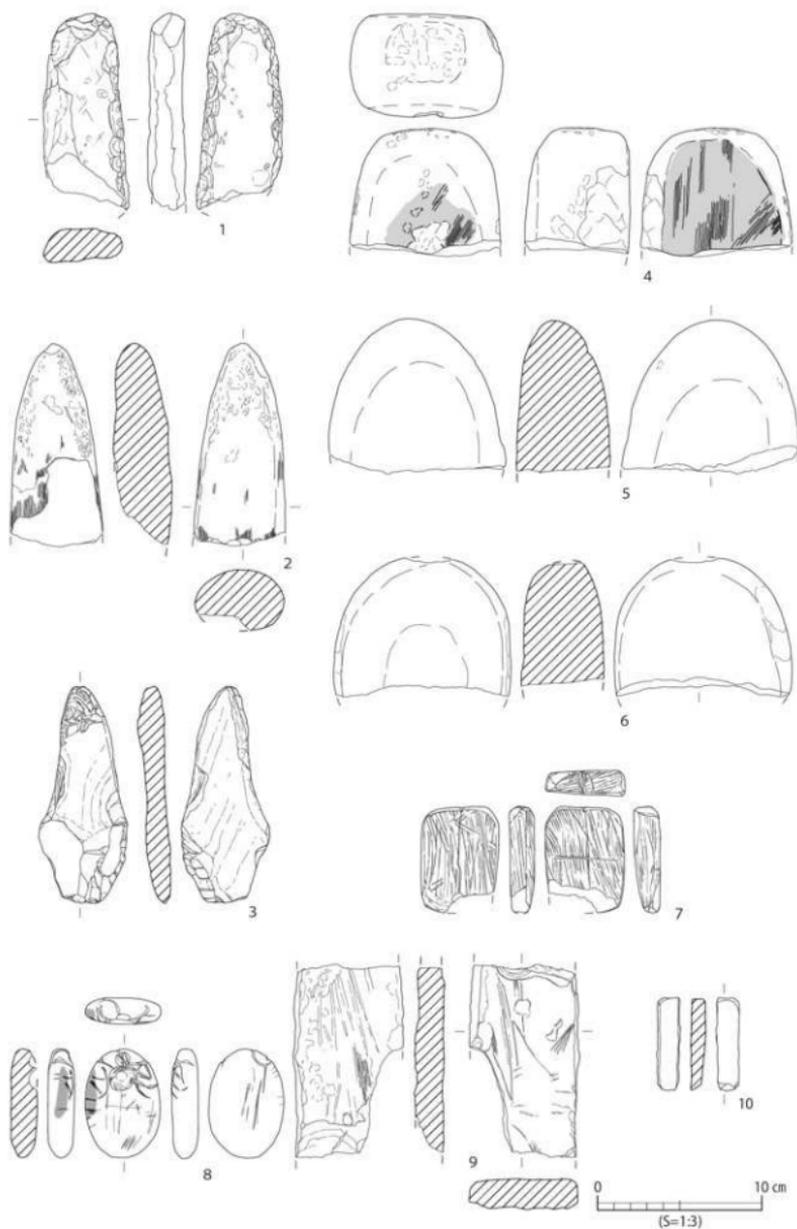
31-3～10は粗製深鉢で、貼付突帯を持つ一群と、突帯を持たず口縁部部を刻む一群に分けられる。基本的な形状は、肩が緩く張り、口縁部を外反させるものである。貼付突帯の位置はやや低く、深さのある刻みをしっかり入れている。口縁部部には刻目を入れている。-3は直線的に立ち上がる口縁部を持つが、端部を細めて刻みを入れない。突帯を持たない個体は、口縁部部のみを刻んでいる。-6は肩部に一条の刺突列点を廻らすものである。明確な突帯はないが、わずかに厚さを増しており、突帯を意識したものかもしれない。-7、-10は口縁部部の刻目が浅い押し引きで施され、間隔は乱れている。



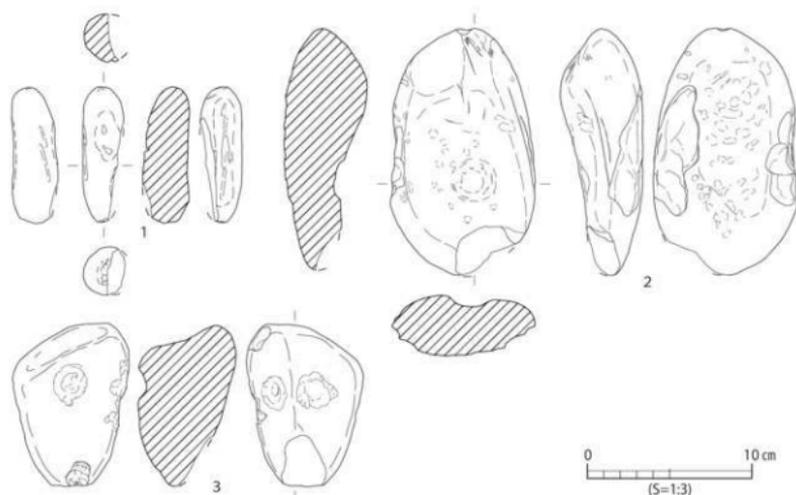
第31図 C区第5遺構而出土遺物1(1:3)



第32図 C区第5遺構面出土遺物2(1:3)



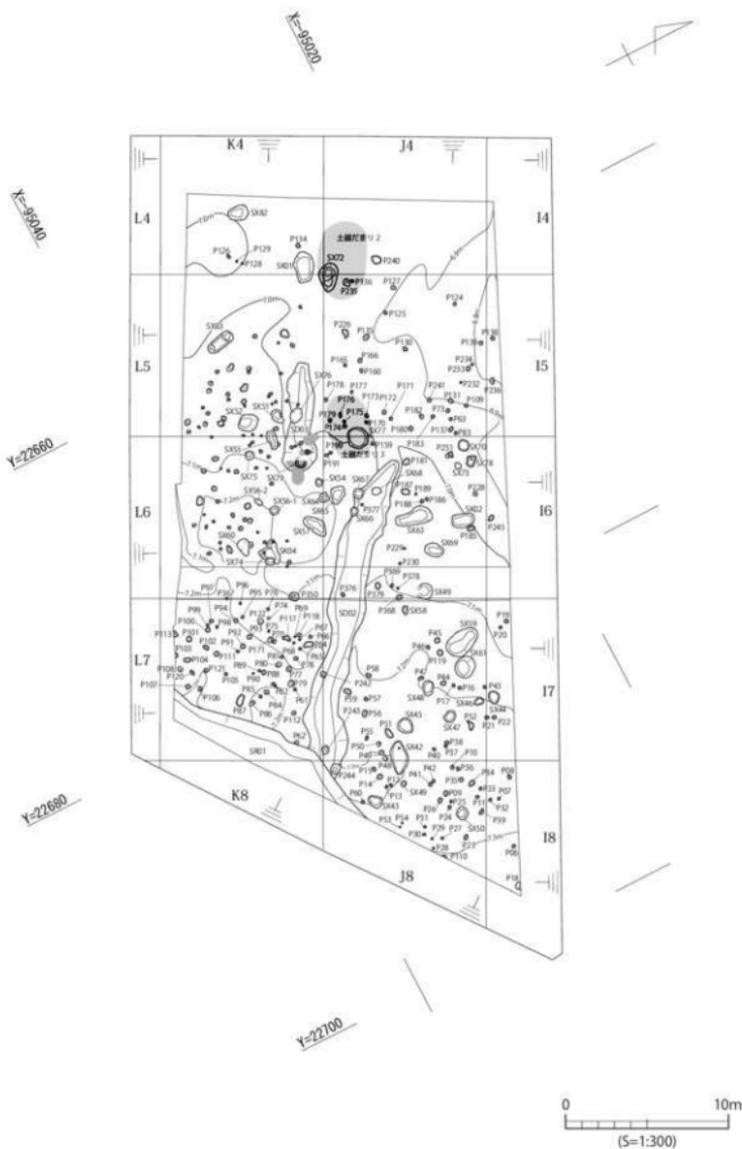
第33図 C区第5遺構面出土遺物3(1:3)



第34図 C区第5遺構面出土遺物4(1:3)

32-1～6は浅鉢類を並べた。-1、-3～-5はいずれも屈曲した口縁部が内側に倒れ込みながら立ち上がるものである。特に-3～-5は底の深い同一系列の浅鉢だろう。口縁部外面に貼付突起を持ち、端面内面には段を作る。-2は口縁部が大きく外反する浅鉢である。波状口縁を持つとすれば、もう少し立ち上がったプロポーシオンに復元できるかもしれない。-6はボール形の浅鉢で、内外面はミガキを施すが、一部に指頭圧痕が残るなど徹底されていない。-7はまっすぐ立ち上がる口縁部だが、口縁部が大きく開く皿状の個体である可能性もある。

-8はサヌカイト系安山岩のスクレイパーである。両面調整であるが、片面は加工が疎らである。-9は加工の様子からスクレイパーとしたが、石斧の破損品を再加工したものかもしれない。-10～-14は泥質片岩～塩基性片岩の石斧とその破損品である。-10は石鎌状に湾曲するもの、-11は柄部に抉りを伴うものである。-12、13は刃端部が著しく摩耗しており、一部には欠損も見られる。柄部の大きな剥離痕が目立ち、これらも再加工品かもしれない。-14は刃端部欠損品だろう。33-1～-2は敲打痕や粗い剥離面が残り、石斧の未製品と考えられる。-3も未製品のようなが、一端を意図的に細めているようにも見える。-4～-6は両面が研磨され、周囲に敲打痕を持つ碟で、いずれも半蒔されている。磨石・敲打類と考えられるが、-4は側縁に面を作る意図が働いているように見え、いわゆる石冠の一種かもしれない。-7から-9は白色系の凝灰岩製線刻碟を並べた。-7はマッチ箱状に加工した後、側面から片面にかけて線刻を施している。表面は粗い研磨が施されている。-8は扁平な円碟に複雑な線刻と円形の抉りを施すものである。線刻は円弧と短い直線を組み合わせたもので、一部は側面まで入り込んでいる。円弧の一つは裏側に回り込んでいるが、厳密には一周しない。裏面は縦に長い線刻が数本見られるのみである。-9は片面に自然面が残る凝灰岩の板状破片で、両面に不規則な線刻を施す。古屋敷遺跡で出土する線刻碟では類例を見ないが、研磨や線刻を試みていることは明らかなので、ここでは線刻碟としておく。-10は棒状に加工されたデイサイト片で、用途不明である。



第35図 C区第6遺構面遺構配置図(1:300)

34-1～-3は白色系の凝灰岩を加工した用途不明品である。-1は棒状に加工された後、破砕されている。-2、-3は断面三角形の礫の側縁に大きな剝離痕があり、各面には敲打痕と円形の凹みが残る。木の枝や石を回転させ、抉ったようである。

7. 第6遺構面の調査(第35図)

第6遺構面は黒色粘質土掘削後に確認した遺構面である。標高は調査区東側で約7.3m、西側では約6.9mである。調査区内では最も遺構が密集しており、土器だまり2ヶ所、溝状遺構2ヶ所、土坑および地床炉約40ヶ所、集石遺構2ヶ所、ピット群約250穴を確認した。

第6遺構面は、第5遺構面までと比較して、ピット数が飛躍的に増えるのが特徴であるが、これがどのような構造物だったかを把握することは困難である。また、K5、K6グリッド付近では、複数の遺構が切り合ったり、5～10cm程度の高低差を持って重なっていることがあり、同一遺構面とはいえず多少の時期差があることが確実である。

土器だまり2・3(第36図)

J5・J6グリッド付近で出土した土器だまりで、6m程度の間隔をあけて確認した。いずれも径3～4m程度の範囲に土器がまとまっている。遺物の出土レベルは後述するSD02・SD03よりも若干高く、厳密にはやや新しい時期のものであろう。

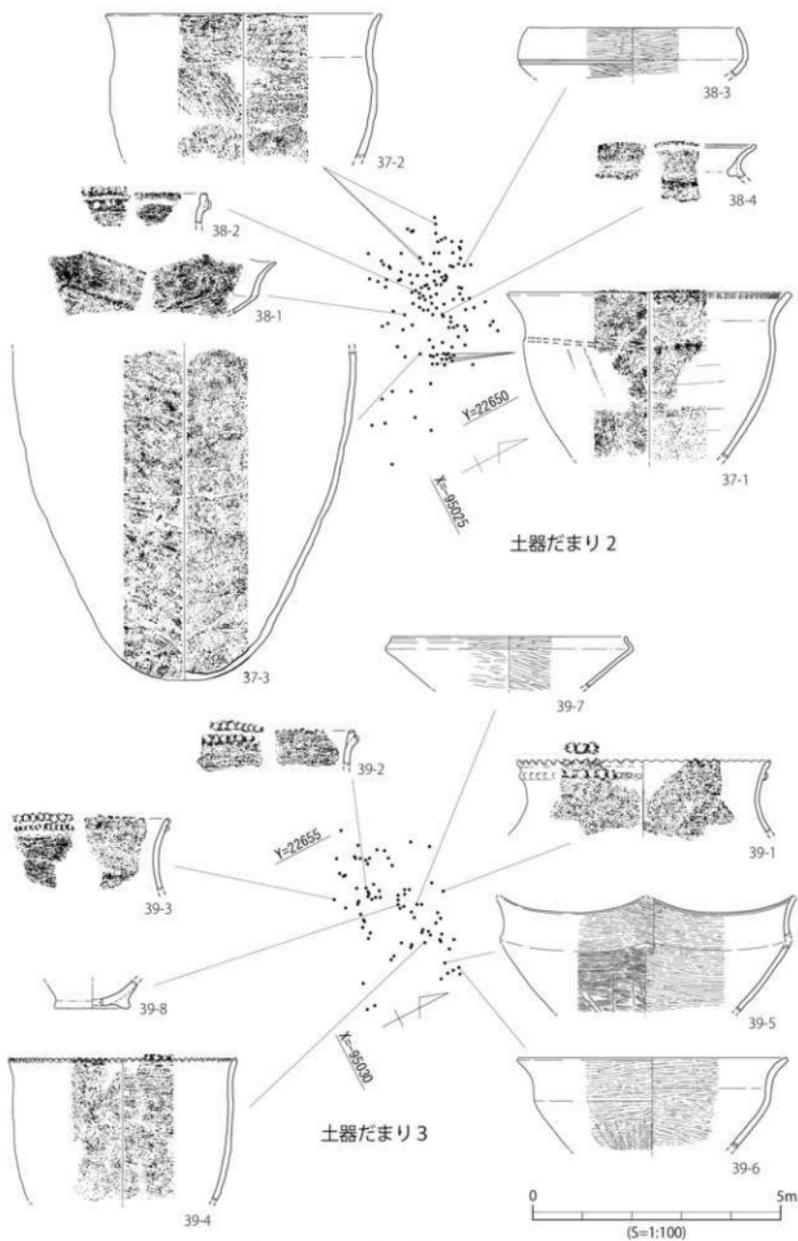
土器だまり2・3出土遺物(第37、38、39図)

第37図には土器だまり2出土の粗製深鉢を並べた。-3は口縁部を欠くが、-1や-2のように外反するものと考えられる。外面は粗い斜め方向の条痕、口縁部は横方向の条痕を使い分ける。-1は、口縁部内面と外面肩部に半裁竹管の押し引きによる2条の列点が並ぶ。38-1は波状口縁を持つ浅鉢で、口縁部下端に明確な屈曲を持ち、平面形が四角形もしくは五角形になる個体である。-2は口縁部外面に貼付突帯を持つ精製の鉢である。突帯の各面は磨かれて面取りされており、頂部に刺突列点を施す。-3は肩部に凹線が廻り、口縁部が内湾する浅鉢である。-4は外反する口縁部の内面を肥大化するものである。あるいは口縁部下端から大きく屈曲する浅鉢かもしれない。

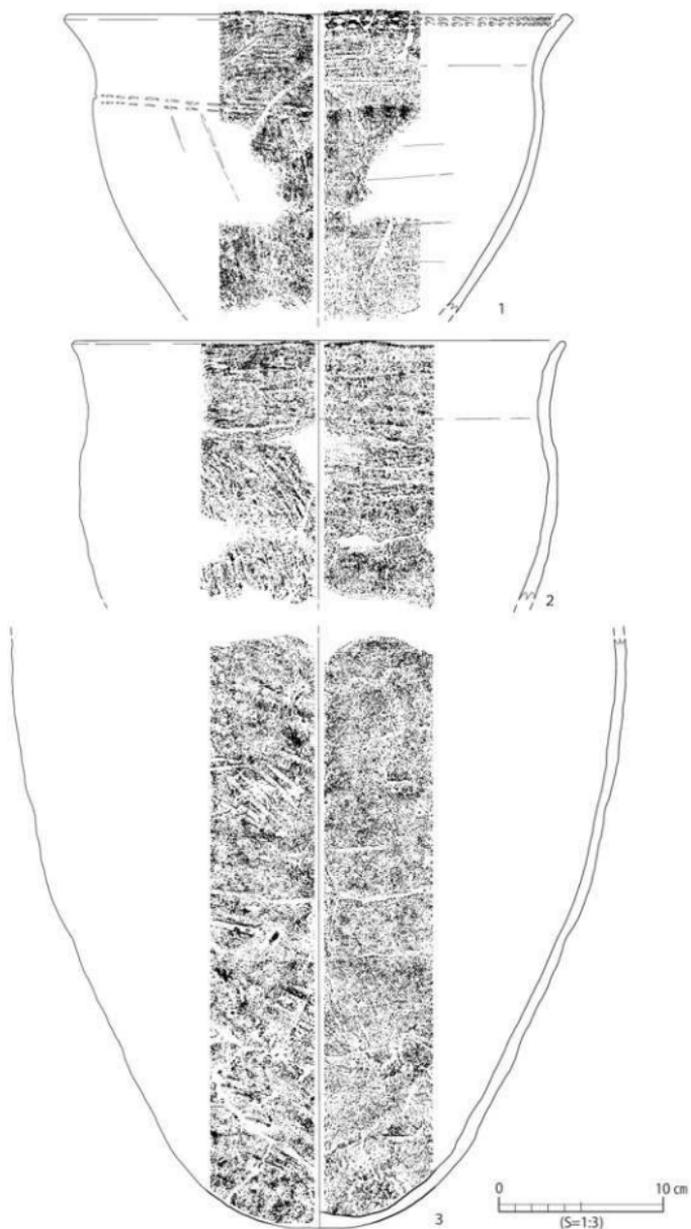
第39図は土器だまり3出土の土器群である。-1～-4は粗製の深鉢類で、土器だまり2と同様口縁部が外反するものである。-1～-3は貼付突帯を刻むが、-2は口縁部側に粘土紐を廻らす変則的なものである。-4は貼付突帯を持たないが、口縁部を刻む点は共通する。-5～-7は精製の浅鉢類で、-6は口縁部下端の屈曲が明確でない個体で、緩い波状口縁を持つかもしれない。-7は口縁部が内傾する個体で、端部に僅かにアクセントが付く。-8はやや上げ底気味の底部である。

SD02(第40図)

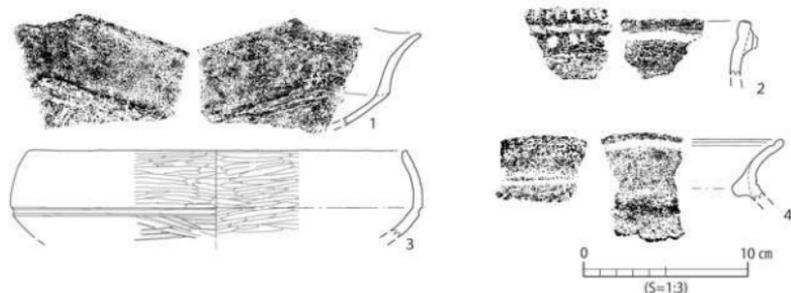
調査区東側から北西へ向けて約17mの長さで検出した溝である。深さはさほどなく、最深部でも約35cm程度である。東側はSR01に切られており、全体の規模は不明であるが、あるいは同時期のSR01に接続していた可能性もある。埋土は炭粒を多く含む暗色系の粘質土で、遺物が散在している。



第36図 C区土器だまり2・3(1:100)



第37図 C区土器だまり2出土遺物1(1:3)



第38図 C区土器だまり2出土遺物2(1:3)

SD02 出土遺物(第41、42図)

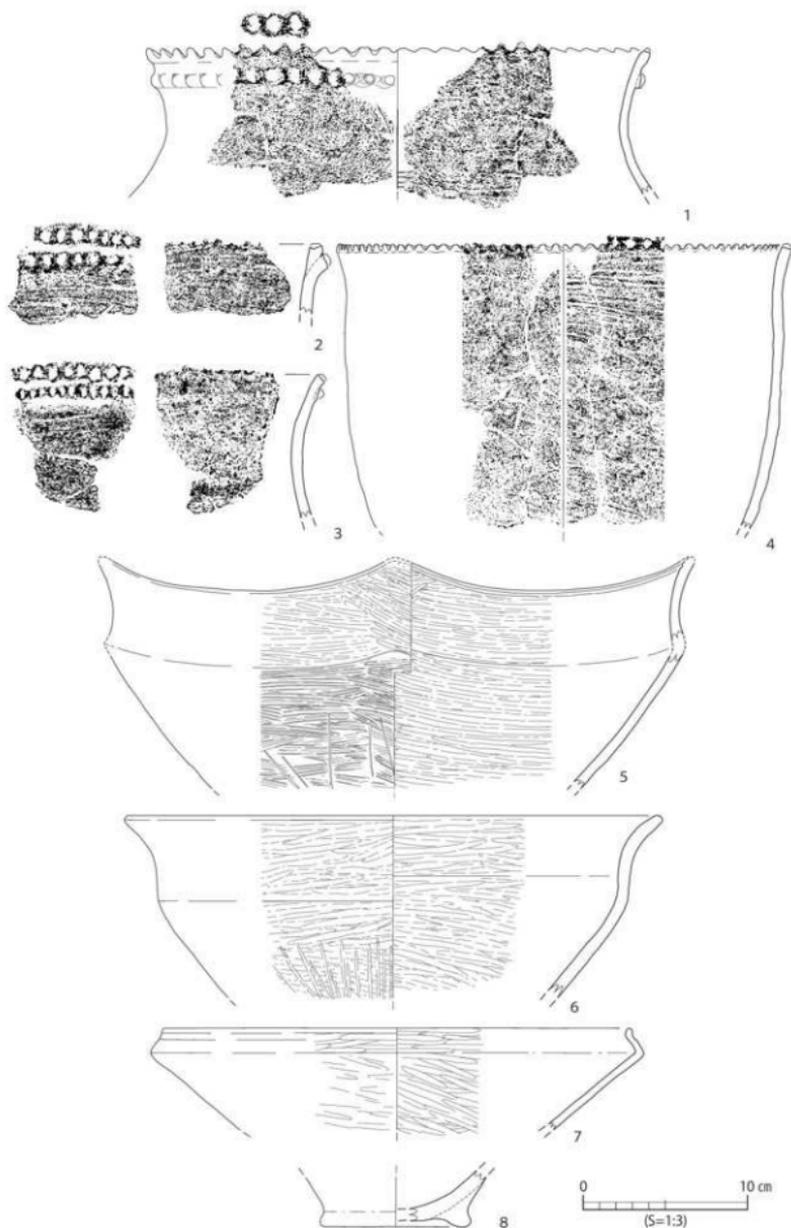
第41、42図にはSD02出土遺物を並べた。貼付突帯を持つ個体はほとんど見られない。-1は口縁端部に環状の飾りを持つ深鉢で、端部内面のわずかに下に刺突列点を廻らす。-2～-6は粗製の深鉢類で、口縁端部内面に刺突や押し引きによる刻目を入れるものである。-4は非常に小さな突帯が廻るもので、貼り付けたものではなく、つまみ出したものか。内面には竹管の刺突が並ぶ。-3以外は、口縁部が外反する個体である。

-7～-9、42-1～-3は浅鉢類である。-7は口縁部を屈曲させて段を作るもので、端部には角状の突起が付く。-8は肩部に凹線を廻らしてから、口縁部を外反させるもので、波状口縁の個体らしい。-9、42-1～-3は口縁部下端に明確な屈曲を持つもので、-2のように内面の屈曲点も明確な個体が多い。口縁部はあまり開かず立ち上がる傾向が強い。-2は波状口縁を持つ可能性がある。-4、-5は小型の壺である。-4は小片で全体像が分からないが、口縁端部を内側に折り返す。-5は口縁部が外反する深鉢を小型化したような個体で、胴から肩にかけて3条の凹線が廻り、二枚貝の刺突により文様帯を作り出す。肩から口縁部は丁寧なミガキが施される。底部を欠くが、二枚貝による条痕で整形されているようだ。-6は土器片を加工した土製円盤。角を丸めた様子がうかがわれるが、徹底されていない。

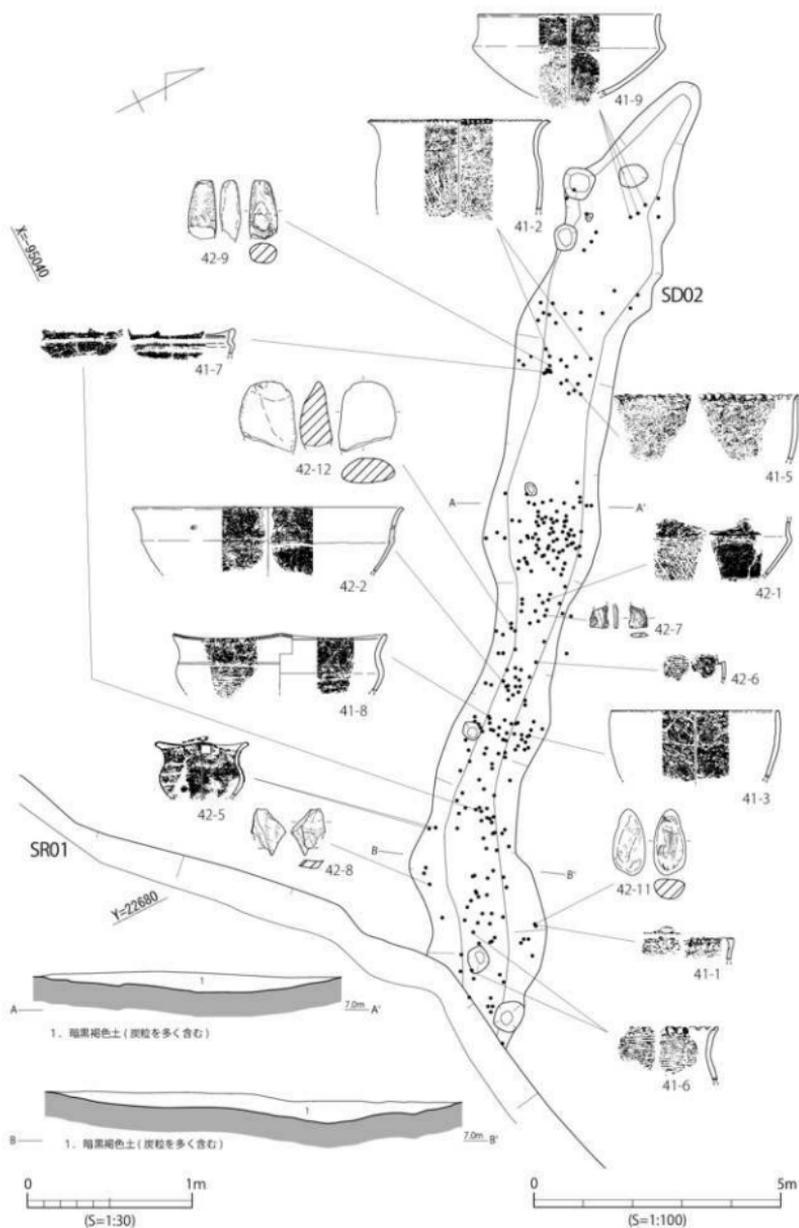
-7、-8は安山岩の小剥片である。いずれも二次加工が見られる。-9は石斧の破損品である。-10は円盤状に磨かれた小礫、-11、-12は白色系凝灰岩を敲いたり擦ったりしたものである。用途は不明である。

集石2・集石3(第44図)

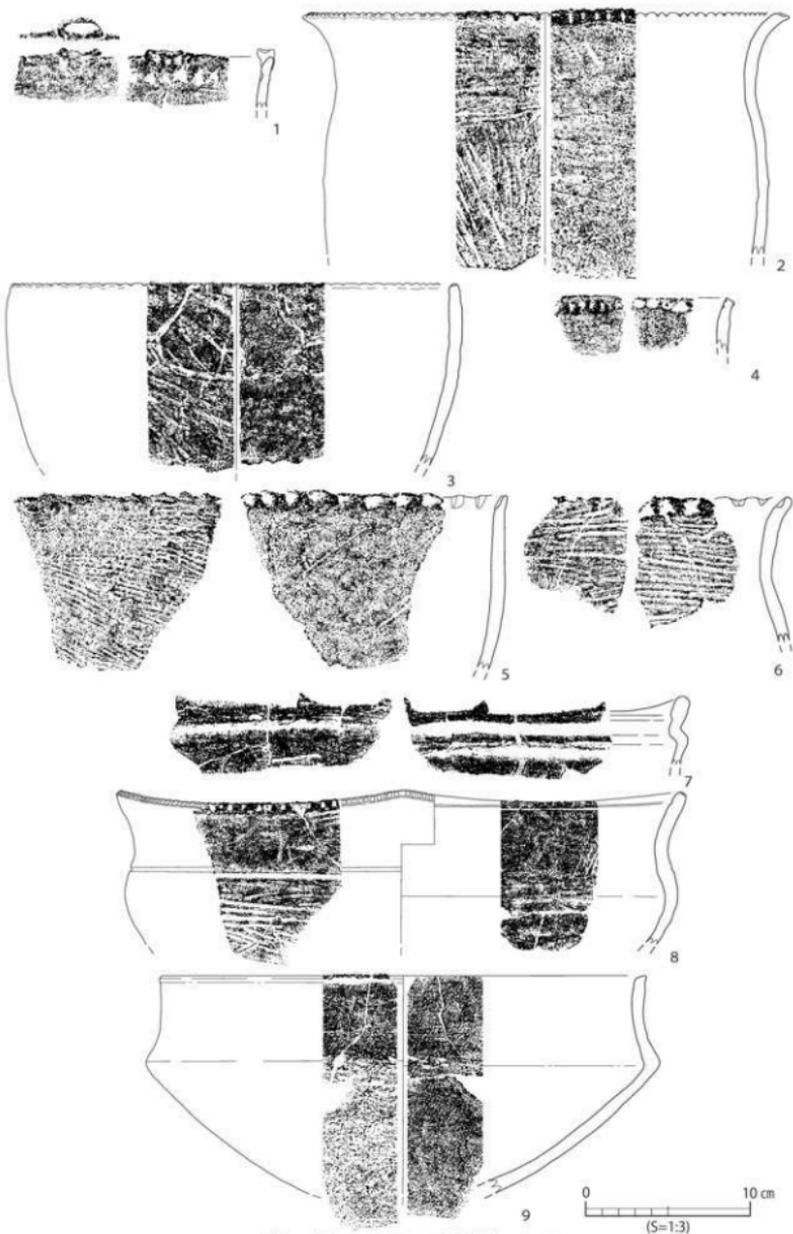
K6グリッドで確認した円礫群である。両集石の出土レベルはほぼ同一で、一連の遺構と考えられる。第5遺構面の集石1と同様に、径20cm程度までの角の取れた礫を敷き詰めたものである。礫に明確な被熱痕跡はなく、直下にも焼土はなかった。集石の下約5cmの位置にSX(地床炉)79があり、平面的には重なるが、両者に時間差があるのは間違いない。これに伴う遺物はほとんどないが、円礫に挟まるようにして外反する口縁部を持つ深鉢の破片が出土している(44-1)。口縁部下端に刺突列点が廻る。49-6とよく似た特徴を持つが、接合できず、同一個体かどうか分からない。



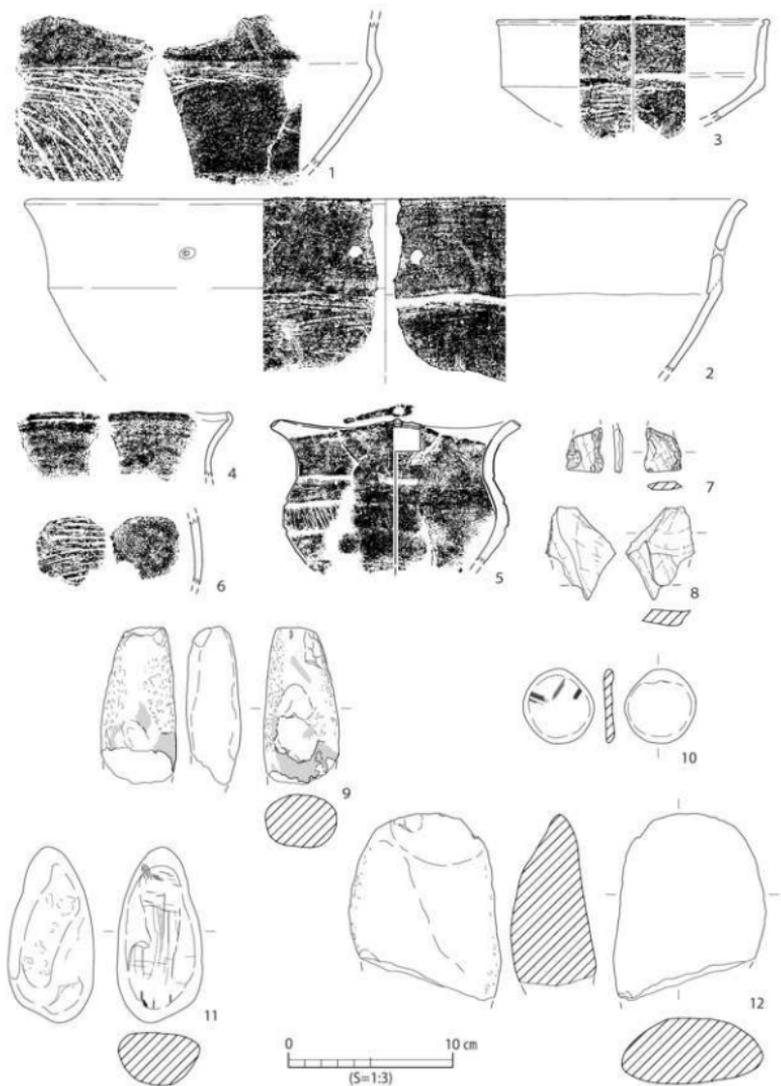
第39図 C区土器だまり3出土遺物(1:3)



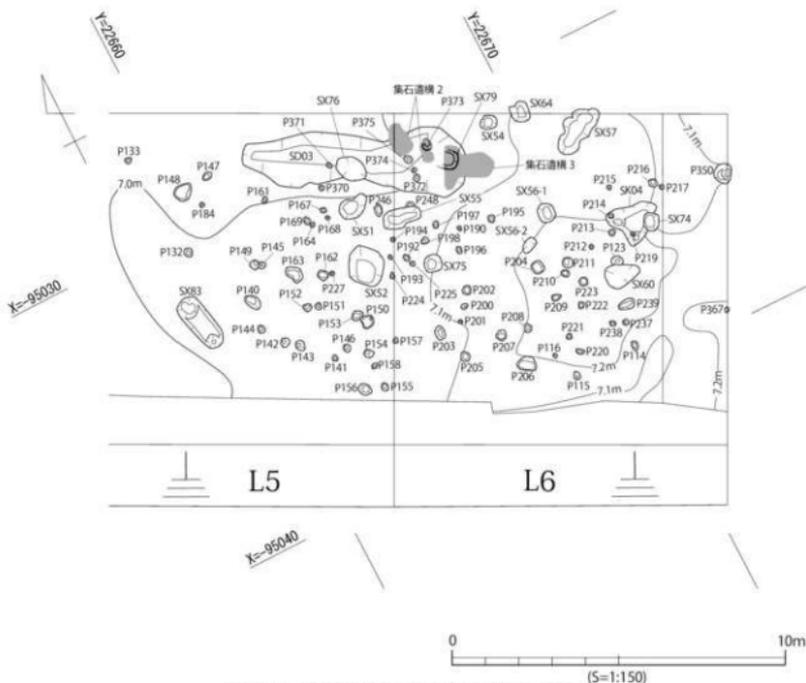
第40図 C区SD02(1:100・1:30)



第41図 C区SD02出土遺物1(1:3)



第42図 C区 SDO2 出土遺物 2 (1:3)



第43図 C区第6遺構面部分拡大図(1:150)

SD03 (第45図)

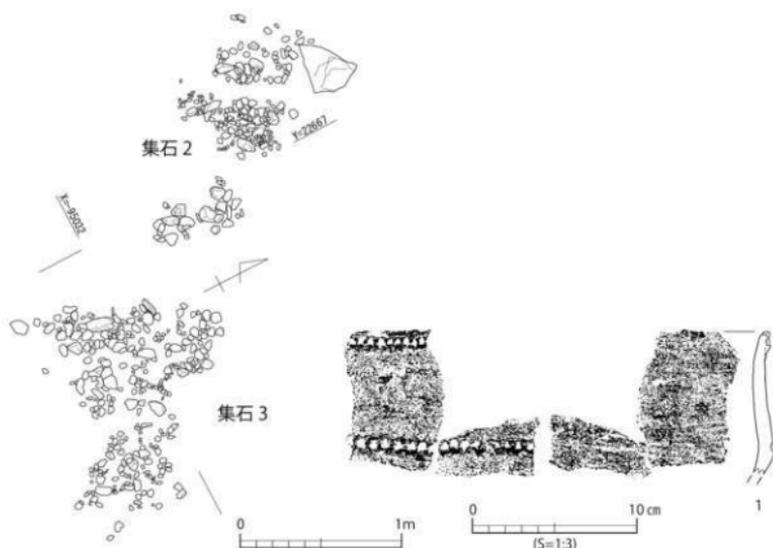
K5・K6グリッドに検出した溝状遺構である。東側は明確なV字断面であるが、西側へ行くほど薄くなり、輪郭が明確でない。埋土はSD02と同様に暗色の粘質土で炭粒を多く含む。平面的に重なるSX(地床炉)76とビット5穴はすべて埋土上に存在しており、SD02埋没後の遺構である。

SD03 出土遺物 (第46図)

図化する出土遺物は少ない。46-1は口縁部を外反させる粗製深鉢で、口縁端部を刻んでいる。-2はやや内湾しながら立ち上がる口縁を持つ鉢である。-3は外面に粗い二枚貝条痕の調整が残るボール形の浅鉢である。

SX (SK) 72 (第47図)

J4グリッドで検出した土坑である。平面形が長楕円の土坑だが、中央部が急激に落ち込む特徴的な形状である。出土遺物は接合しない破片ばかりだが、粗製深鉢を主体とする。埋土は大きく2層に分かれ、いずれも大量の炭粒を含んでいる。遺物は下層にはほとんど認められず、上層に集中しており、平面的にも中央部の径60cm程の範囲にまとまっている。48-1は深鉢の口縁部と考えられ、口縁端部内側に刺突列点が通る。



第44図 C区集石2・集石3(1:30)、集石2出土遺物(1:3)

SX (SK) 83 (第47図)

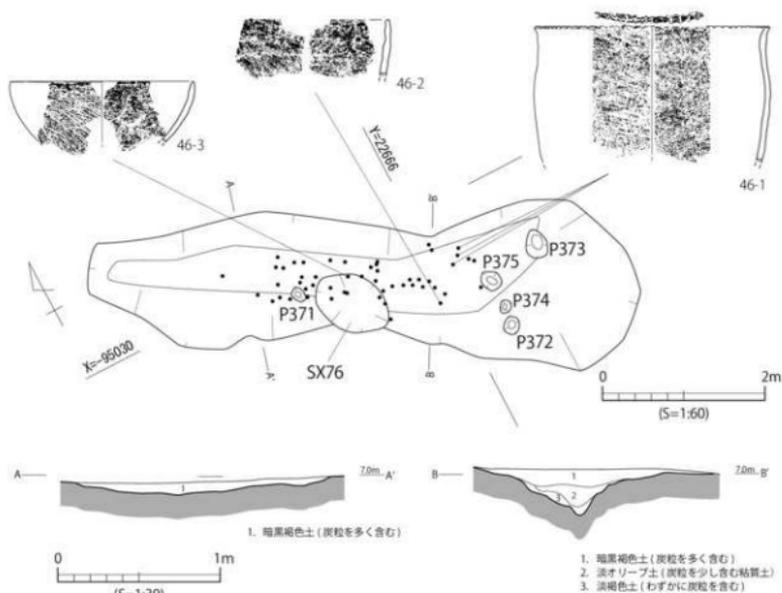
L5グリッドで検出した土坑である。平面形は長楕円であるが、両端側がやや深くなっている。また20～30cm程度の礫が複数落ち込んでいる。埋土には炭粒を多く含むが、下層のほうがより密度が濃い。出土遺物は小片が多いが、深鉢と浅鉢、石斧がある。48-4は緩い波状口縁を持つ浅鉢で、口縁下端に明確な段を持ち、口縁端部の内側にも段を作っている。

SK04 (第47図)

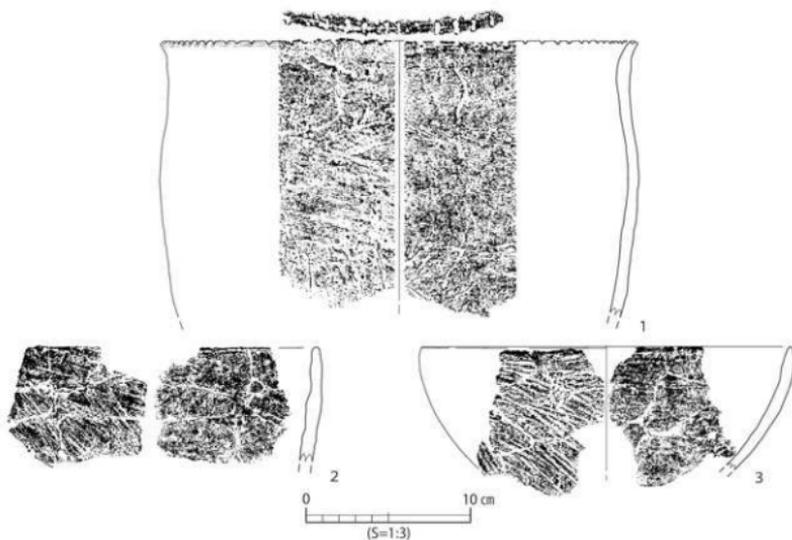
K6グリッドに確認した土坑で、SX(地床跡)74を切って掘削されている。平面が三角形に近い不整形な土坑で、深さは20cm程度である。出土遺物は南側の隅に集中しており、48-5のような粗製深鉢の破片が多くを占める。またSK04に伴う遺物とは言いがたいが、SK04西側隅の埋土直上から漆塗り櫛の破片(48-3)が出土した。大部分を欠損しているが、結歯式の竖櫛の一部と考えられる。X線CT撮影によれば、断面円形の櫛歯が辛うじて残っており、両面から塑形材で固められている。表面には水銀朱が塗られている。分析の詳細は、第7章を参照されたい。

第6遺構面出土の遺物(第49～53図)

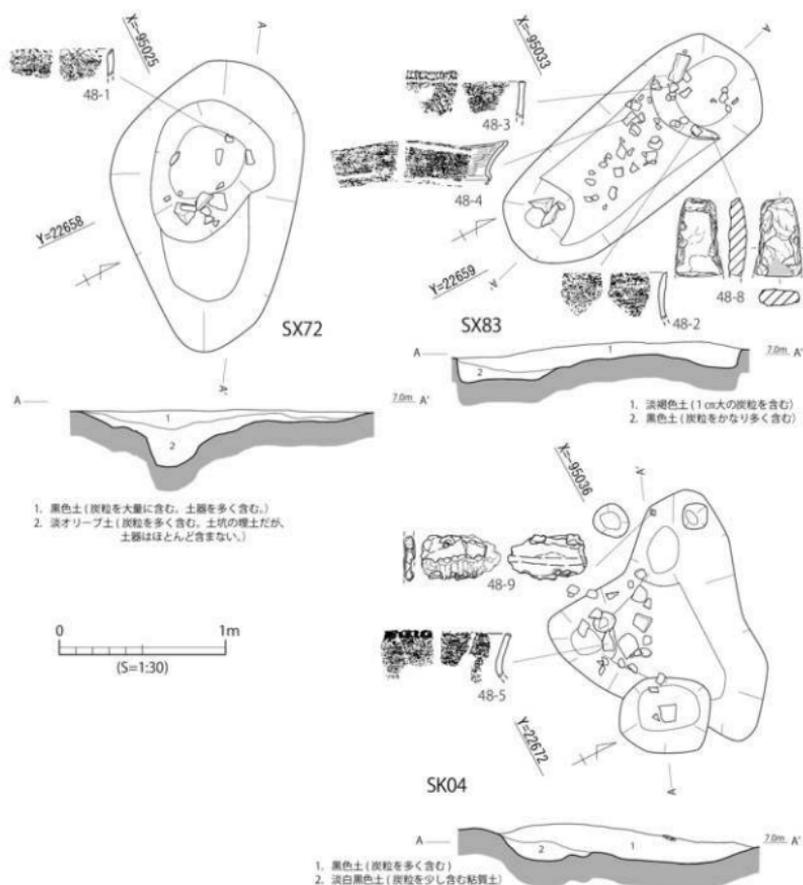
49-1～50-4は粗製深鉢である。49-1は口縁端部に耳状の小突起を持つ深鉢で、口縁端部は広い間隔を持って刻んでいる。-2～-7は貼付突帯を持つもので、いずれも口縁端部を刻んでいる。口縁部は外反するものを基本とする。口縁部は横方向の二枚貝条痕が目立つ。-6は口縁部下端に刺突列点



第45図 C区SD03(1:60)



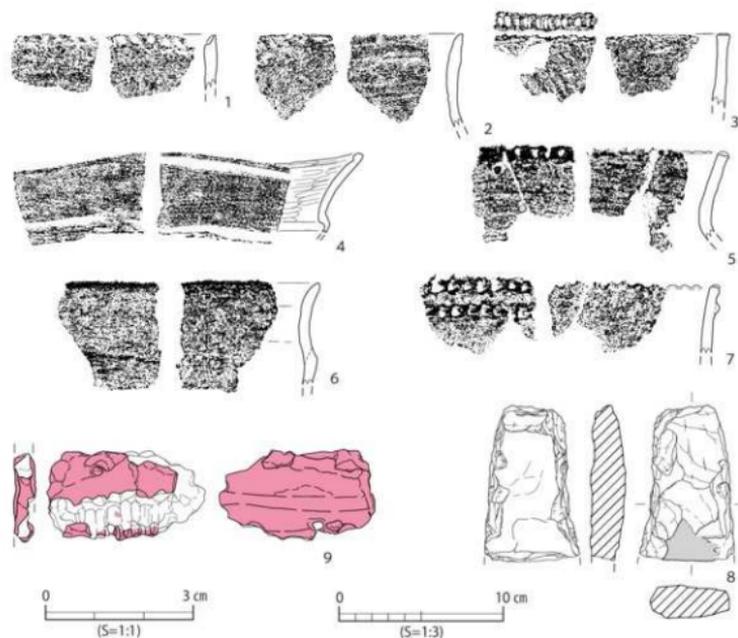
第46図 C区SD03出土遺物(1:3)



第47図 C区SX(SK)72・SX(SK)83・SK04(1:30)

を廻らすものである。44-1に類似するが、接点がないので、別個体として掲載しておく。-8は口縁部がわずかに内湾する個体で、端部のみを刻む。この形態の粗製深鉢は外部の調整が口縁部まで一定である。50-1～-3は貼付突帯を持たず、口縁端部のみを刻むもので、口縁部は外反する。-4は形態は同じであるが、口縁端部を刻まない個体である。

50-1～-8は波状口縁を持つ精製浅鉢である。いずれも口縁部下端に明確な段を持ち、口縁部は大きく外反させる。鉢部外面は粗い二枚貝条痕、口縁部外面と内面は丁寧なミガキが施される。-5、-6、-8のように平面形が五角形もしくは四角形を指向するものが多いようだ。-7は口縁端部の段が控えめだが、やはり平面四角形を意図した造形が見られる。-6の底部は僅かに上げ底で、内面に粗い二枚貝条痕が見られる。穿孔は焼成後に行われている。

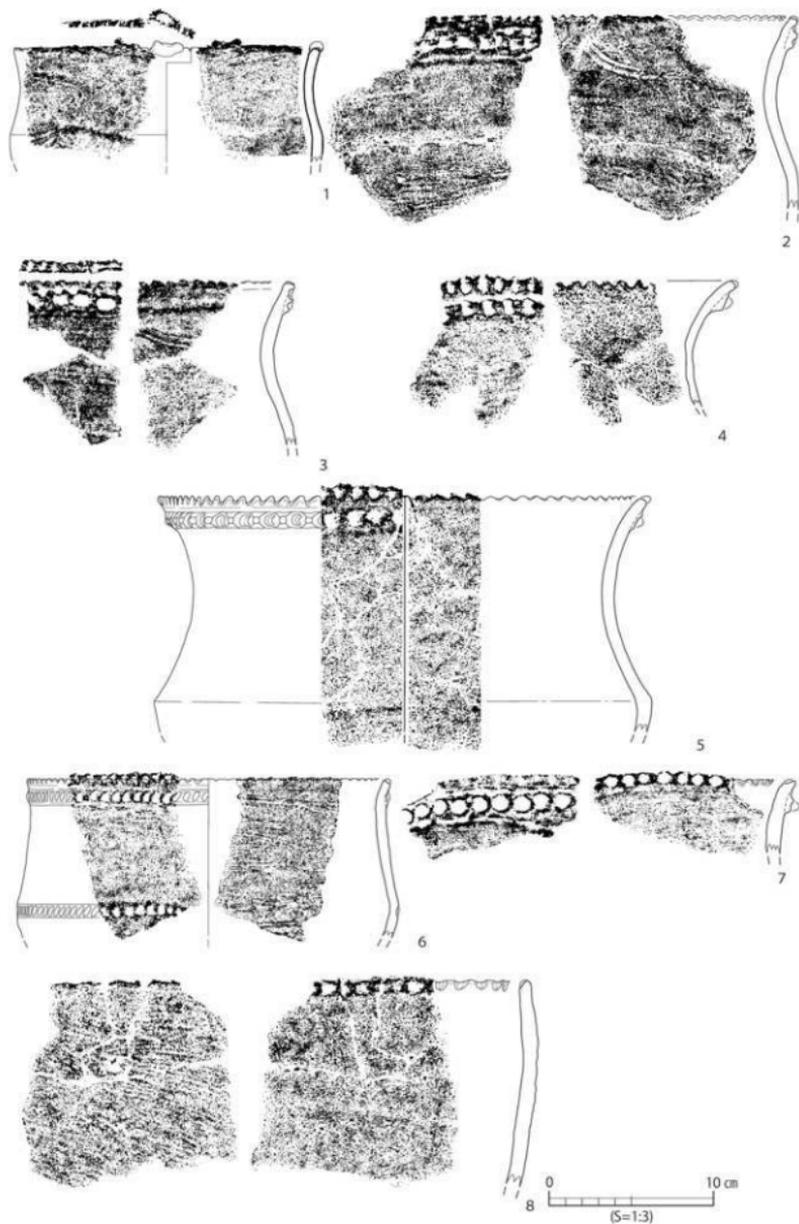


第48図 C区第6遺構面その他の遺構出土遺物(1:3・1:1)

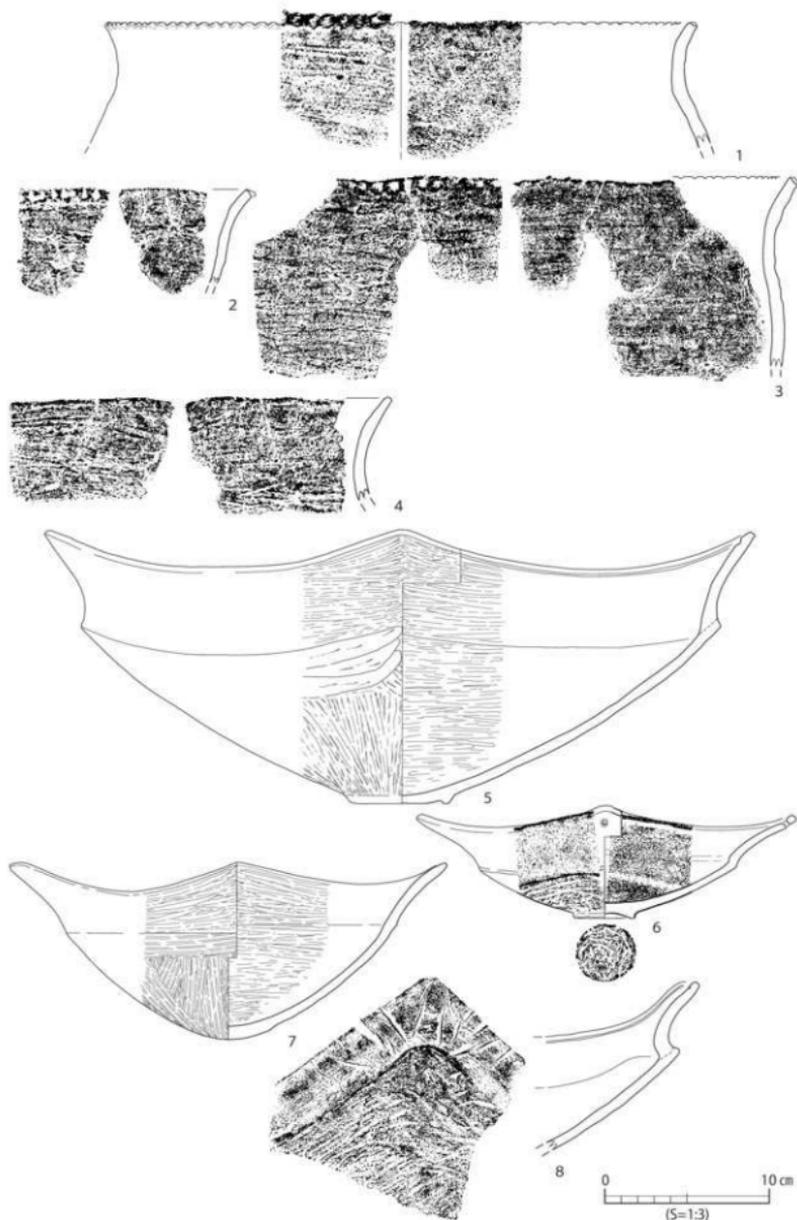
51-1～-5は口縁部が直線的、あるいはやや内傾しながら立ち上がる浅鉢である。この形態の浅鉢は、口縁部内面下端に明確な段や稜を作らない傾向があるようだ。-1は内外面ともミガキ調整を主体とする点が特徴的である。-2～-5は鉢部外面を二枚貝条痕、口縁部の内外面をミガキ調整する。-5は口縁部直下と口縁部下端に細い貼付突帯を施し、その頂部を刻むもので、深鉢との区別が難しいが、内面のミガキ調整を重視して浅鉢の範疇に含めた。-6は小型の壺で、手づくね土器のような歪みのある個体である。

51-7～-14は打製石器類を並べた。-7は安山岩裂無茎石鏃である。-8は古屋敷遺跡では希な黒曜石製の小片で、剥片とするには分厚すぎるが、片面に丁寧な押圧剥離を連続して施している。-9はガラス質安山岩製の剥片で、片側縁に両面調整が施される。-10～-12は緑色片岩製の刃器で、おそらく石斧の再加工品である。-10は破損後、片面のみ再加工されているものである。-11は両面ともかなり摩滅しており、先端部が欠損した後もしばらく使われたようだ。-12は明確な使用痕が見つからないが、形状から見て、石斧が薄く剥離された後に再加工されているようだ。-13は流紋岩製の石斧で、柄部にしっかりした抉りがあったようだが、欠損している。また刃端部も大きく破損している。-14はデイサイト製石斧の刃端部のみである。

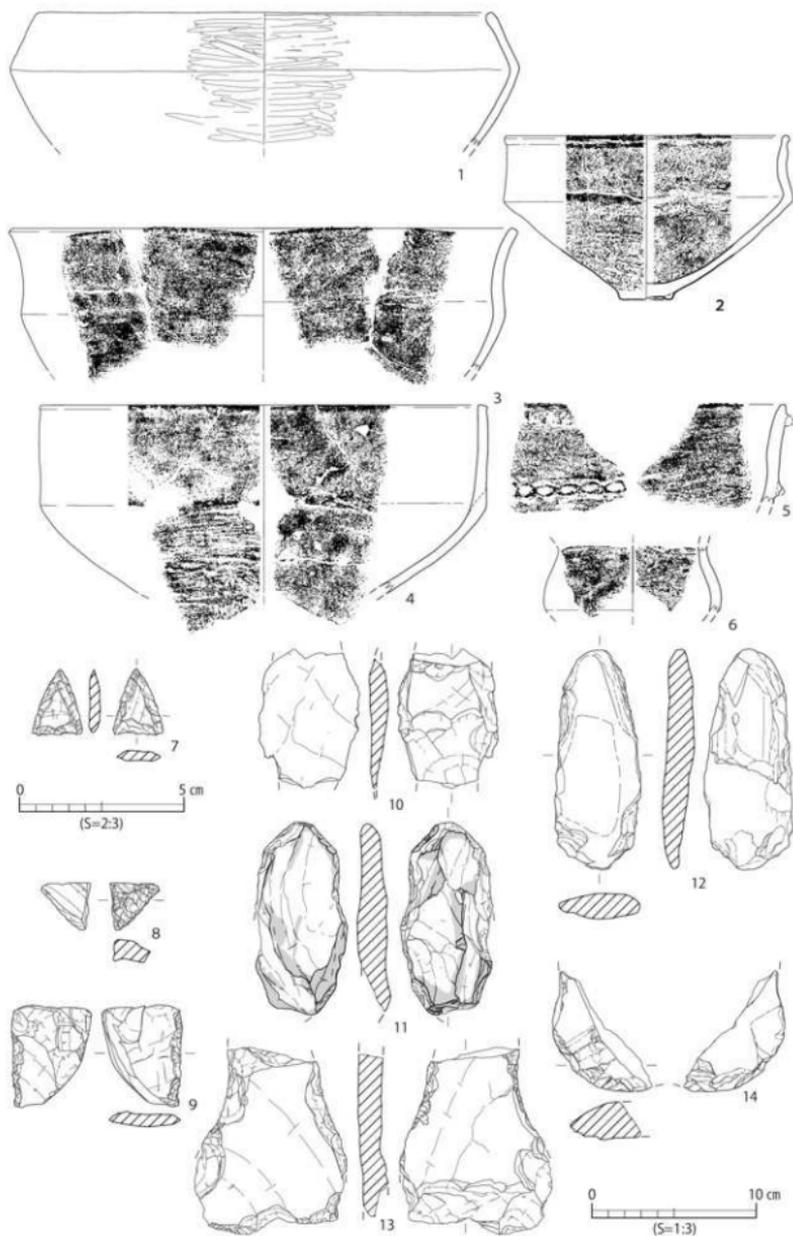
52-1～-3は塩基性片岩製の磨製石斧である。-1は刃部の研磨がなく、敲打痕が多く残るため未製



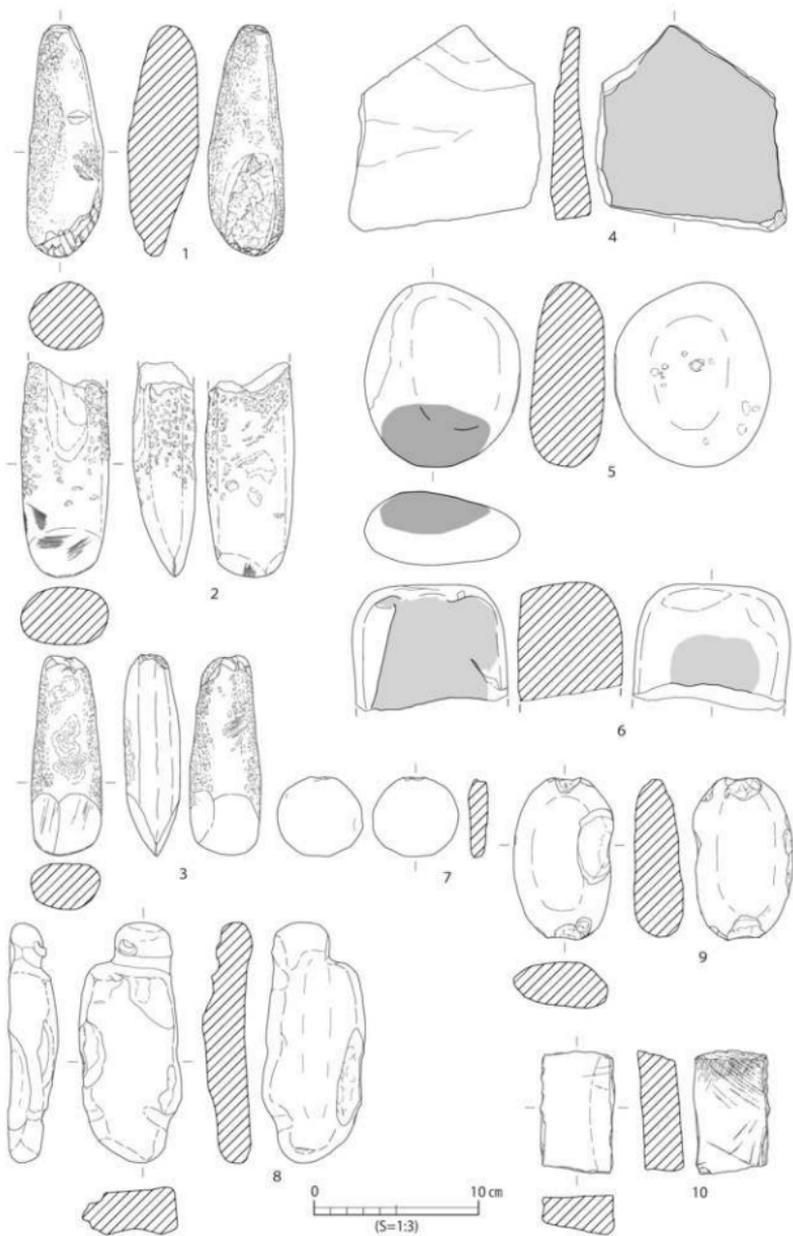
第49図 C区第6遺構而出土遺物 1(1:3)



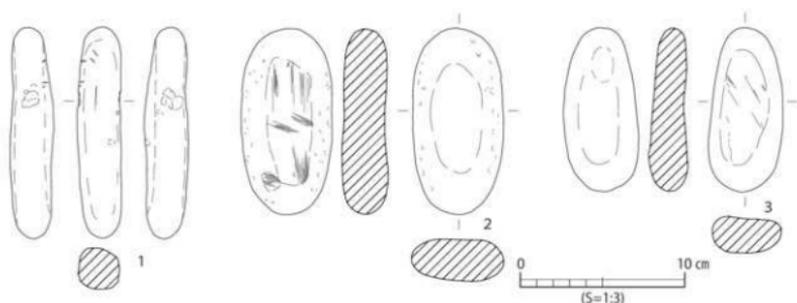
第50図 C区第6遺構面出土遺物2(1:3)



第51図 C区第6遺構而出土遺物3(1:3・2:3)



第52図 C区第6遺構面出土遺物4(1:3)



第53図 C区第6遺構面出土遺物5(1:3)

品と考えた。-2は柄部を欠いている。-4は目の粗い凝灰岩製の石皿片で、使用面は緩く凹んでいる。-5は石英脈の円礫が磨かれたもので、一部が被熱により変色している。-6は同様に磨かれたデイスaitの礫だが、面を作るように研磨されている。研磨後に半裁されているが、形態的にはいわゆる石冠に近い。-7は厚さ1.2cm程の円盤で、発達した片理の影響で表面はツルツルであるが、角部も面取りするように丁寧な研磨が施されている。側縁の一ヶ所だけ打ち欠きがある。-8は白色系の凝灰岩を加工したもので、一端を突起状に研磨加工しているが、意図の分からない石器である。あるいは石棒の範疇に入るかもしれない。-9は両側縁を打ち欠いた石錘である。-10は白色系の凝灰岩を柱状に加工したものである。側縁部に剝離痕が残っており、研磨途中の状態かもしれない。

53-1～-3は白色系凝灰岩の礫で、-1は棒状に細く研磨されたものである。一部に敲打痕が残っており、何かをピンポイントに敲打らしい。-2、-3は円礫を扁平に研磨したもので、両面が平坦あるいはやや凹む程度まで研磨されている。周縁部に敲打痕が残っている。

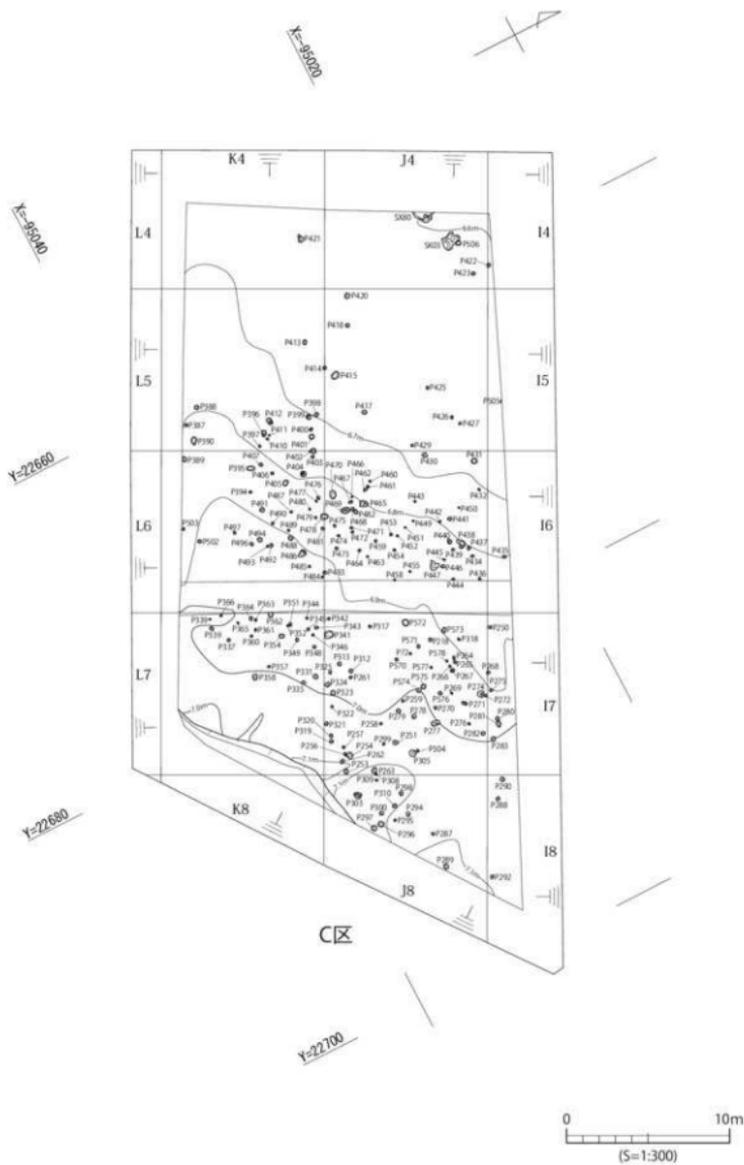
8. 第7遺構面の調査(第54図)

灰色砂質土層の直下に位置する遺構面である。標高は7.1～6.6mの緩斜面である。上層の遺構面とは様相が大きく異なり、地床炉はわずか1ヶ所、土坑1ヶ所のみである。また250穴を超えるピットが検出されている。地床炉と土坑の出土位置は5ライン以西に纏まっており、ピット群の出土位置はほぼ5ライン以東、特に6ラインから8ラインまでの幅約20mの間に集中している。

ピット群(第54図)

第6遺構面とほぼ同規模の約250穴を確認した。ピットは径25cm以下の平面円形のものが多いを占め、埋土を分層しがたいものが多い。また、P412やP447、P465のように規模のやや大きなものや平面不整形なものも、調査時に隣接するピットを区別できなかつた可能性が高い。

これらのピット群が具体的にどのような構造物の遺構なのか、把握することは難しいが、いくつかの特徴的な分布状況を指摘することができる。ピット群は大きく3群に大別できる。第1群はJ5グリッド周辺に分布するピット群で、隣接するピットとの間隔が約2.5～3.0mと広い点を特徴とする。第2群は6ラインから8ラインの間に分布するピット群で、密集度が高く、径20cm以下の丸太を打ち込んだ痕跡と考えられるような小型のピットが多数を占めるものである。遺構配置図上では、J7グリッド

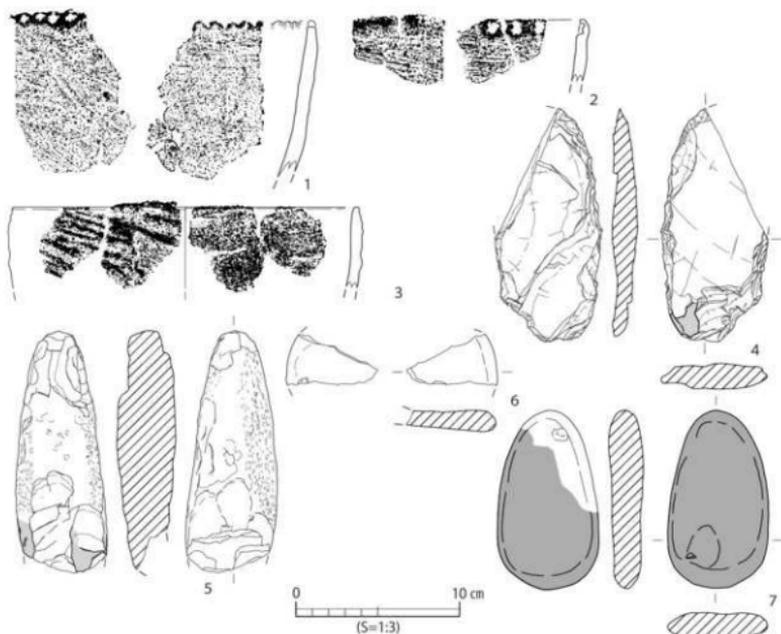


第54図 C区第7遺構面遺構配置図(1:300)

下北西側、K7グリッド北西側に集中する一群があるように見えるが、調査時に7ラインに沿って設定した排水溝内の遺構検出作業が不十分であったことや、直上の第6遺構面に存在するSDO2の掘削により消滅したものと考えられ、基本的には一連のピット群と考えられる。第3群はSR01に隣接するピット群で、径35～50cmと一回り大きなものが多数を占める。厳密な時期は明確でないものの、遺構面を切っているSR01は突帯文期の流路と考えられ、ピット群自体も元来はさらに東側に広がっていた可能性が高い。

第7遺構面出土遺物(第55図)

第7遺構面出土遺物の多くがピットであることから、遺構に伴う遺物はほとんどない。55-1～-3は粗製深鉢類の口縁部である。いずれも口縁部が外反しないものであるが、口縁端部を刻むもの、端部内面に刺突の入るもの、端部に僅かに段を付けるが刻まないものと多様である。-4は緑色片岩製のスクレイパーで、石斧が層状に剥離・破損したものを再加工したと考えられる。-5は石斧刃端部を欠く破損品である。柄部側に多くの敲打痕や剥離痕を残し、製作途上の破損品かもしれない。-6はツルツルに磨かれた凝灰岩の破片で、白色系の柔らかいものではなく、比較的硬質な石を用いている。-7は扁平な玄武岩を磨いたもので、大部分が熱を受けて変色している。



第55図 C区第7遺構面出土遺物(1:3)

9. 第8遺構面の調査(第56図)

第8遺構面は暗灰色粘質土直下に位置する遺構面である。標高は調査区東側で約6.9m、西側で約6.5mの南西向き緩斜面である。出土遺構は第7遺構面よりもさらに少なくなり、不整形な土坑1ヶ所、地床1ヶ所、ピット48ヶ所である。依然として調査区東端にSR01が見られるが、おそらく後の時代に浸食したものであろう。

ピット群の配置を見ると、J6・J7・K6グリッドに集中して検出されていることが分かる。J6・K6グリッドに集中するピット群は、平面楕円形にまとまっているように見え、またJ6・J7グリッド付近のピット群には北西/南東方向に列状に並ぶ一群があるようにも見える。推測はいかようにも可能であるが、何らかの構造物が存在したことは確かである。

第8遺構面出土遺物(第57図)

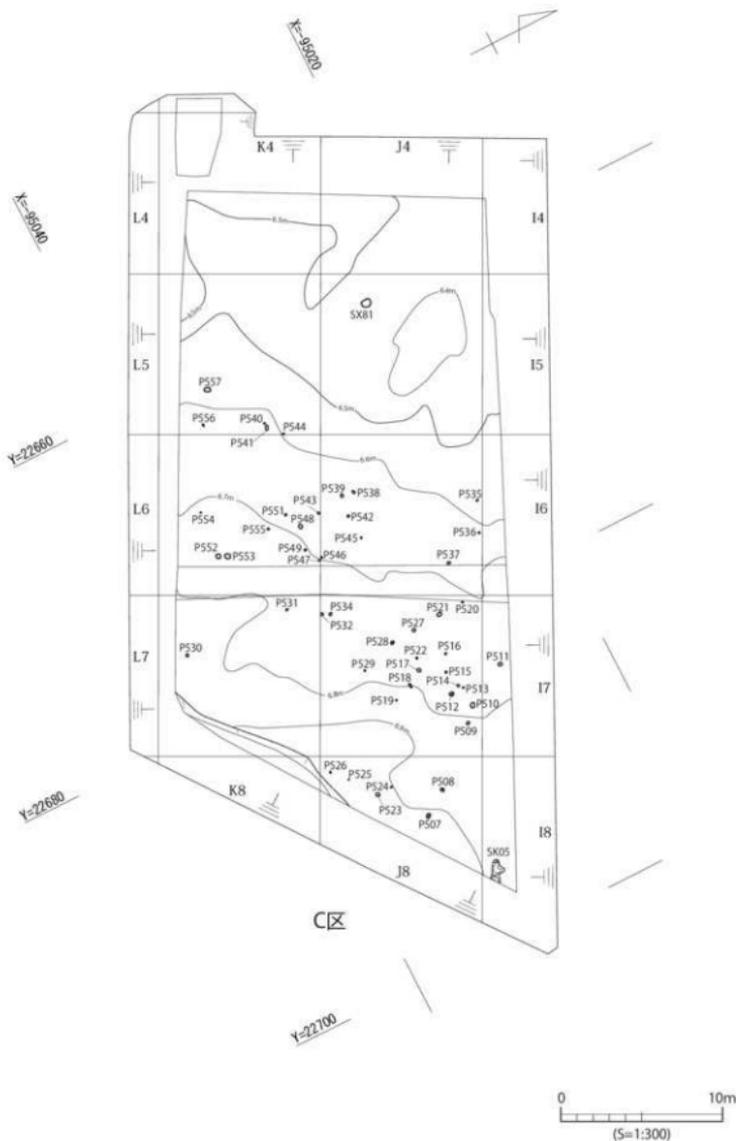
第8遺構面は、遺構の減少と同様に遺物量も少なくなる。図化可能な遺物は掲載したが、それでも数えるほどである。57-1～-2は粗製深鉢である。-1は口縁端部から離れた位置に貼付突帯を持つものである。古屋敷遺跡では最初期の突帯文土器だろうか。-2は口縁部が外反するもので、口縁端部に刻みが入る。-3は口縁部が内側に傾きながら立ち上がる浅鉢だろうか。内外面とも丁寧なミガキを施す。-4は深鉢の可能性もあるが、内外面の調整が丁寧で、ボール形の鉢かもしれない。口縁端部は軽く刻まれている。-5はサヌカイトの剥片であるが、片側縁に両面調整が見られる。製作中の破損品であろうか。-6は両側縁を打ち欠いた石鉢で、玄武岩製である。-7は角柱状の石片で、古屋敷遺跡ではあまり見かけない濃青色の頁岩である。形状からは弥生時代の柱状片刃石斧を想起させるが、いわゆる刃部側にはきりした研磨痕がなく、一端が摩滅したような形状も、使用によるものではない。研磨痕らしきものは側面に僅かな擦痕があるのみである。人為的に加工した根拠に欠くが、一部を研磨しているのも事実であり、ここでは不明石製品として取り上げておく。

10. 第9遺構面の調査

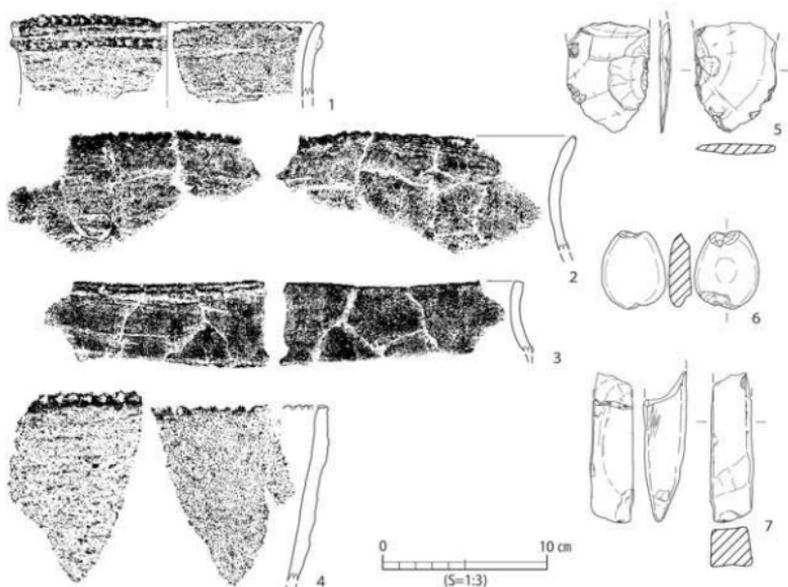
第9遺構面は暗オリーブ灰色粘質土層直下にあたる遺構面である。標高は6.7～6.2mの、緩やかな西向きの傾斜面である。出土遺構は上層に比べさらに減少し、3ヶ所の土坑とピット数穴のみである。土坑はいずれも深さ5～15cmの浅いもので、炭粒を含む埋土で埋まっており、どちらかと言えば炭だまりに近いものである。埋土に含まれる遺物はなかった。ピットは径25cmまでの小規模なもので、J7グリッド南西側に集中していることから、一連の構造物が存在した可能性がある。

第9遺構面出土遺物(第59図)

第59図は第9遺構面の出土遺物である。暗オリーブ灰色粘質土に含まれる遺物は量が少なく、土器片が小さいこともあって、図化できるものは少ない。-1は口縁部が外反する粗製深鉢で、口縁端部には明確な面を作り出して、楕円形の刺突を施す。-2は磨製石斧破損品である。刃部の一端に使用時の欠けが見られる。-3はデイサイト製の円礫を半裁したもので、表面にはわずかに敲打痕が残るが、大部分はツルツルに磨かれている。磨石の破損品、もしくはいわゆる石冠と同様の性格を持つものかもしれない。



第56図 C区第8遺構而遺構配置図(1:300)

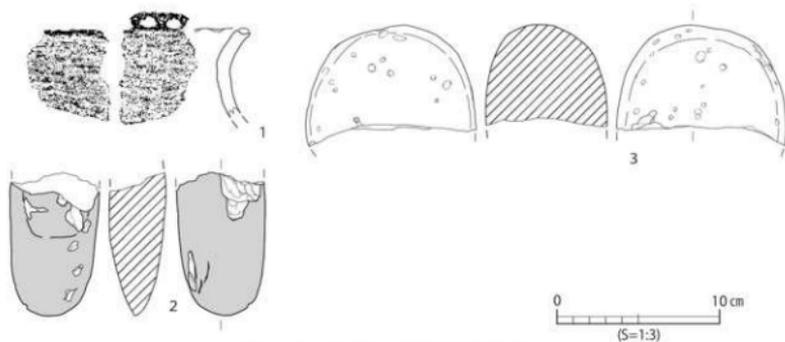


第57図 第8遺構面出土遺物(1:3)

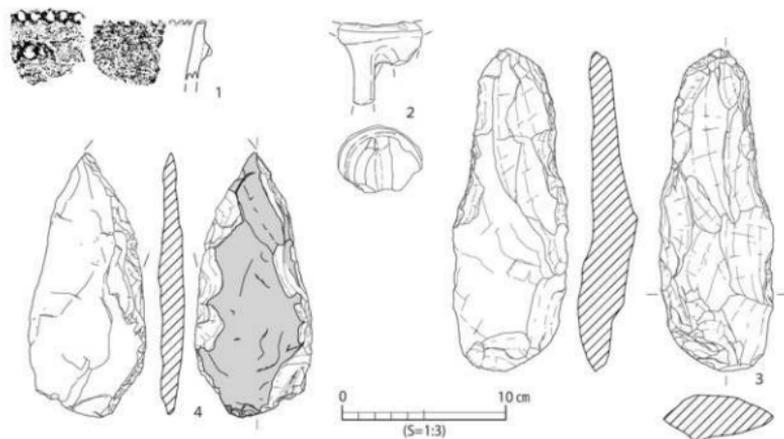
11. その他の出土遺物

第60図には、排水溝掘削中などに出土した出土層位不明の遺物を挙げた。-1は貼付突帯を持つ深鉢の小片である。口縁端部にも併せて刻目を持つ。-2は判断の難しい破片だが、器面をなす部分に透かしの入った筒状の脚台が付くものである。緑帯文期の鉢の口縁部なども候補になるが、決め手を欠く。-3は長さ20cmクラスの大型の打製石斧で、石鐮の範疇に入るものだろう。刃部の片側に新らしい剥離面が集中しているので、これらの剥離は使用時の欠損かもしれない。-4は片面がかなり摩滅した泥質片岩製の石斧で、両側縁が後に加工されている。古屋敷遺跡でよく見られる、板状に剥離した石斧破損品を再加工したものである。柄部の破損状況を見ると、元々は大型の石鐮だったようだ。

註1 伊藤智編 2017 一般国道9号(静岡仁摩道路)改築事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書1『古屋敷遺跡(A・E区)』第9図掲載の杭列A・Bの延長線上に位置する杭列を検出した。いずれも近世から圃場整備時までの、いずれかの時期の水田に伴うものである。



第59図 C区第9遺構面出土遺物(1:3)



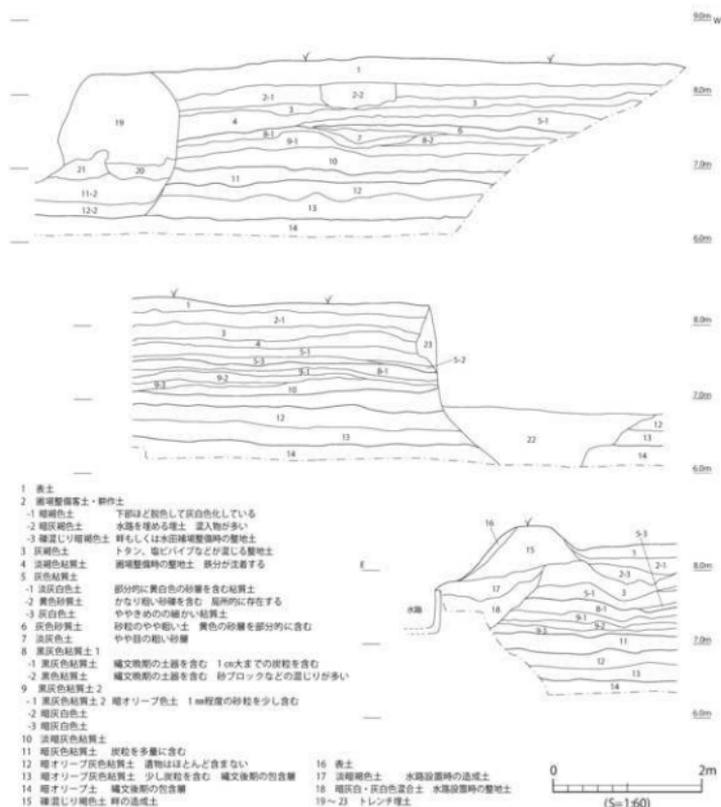
第60図 C区その他の出土遺物(1:3)

第5章 古屋敷遺跡(F区)の調査

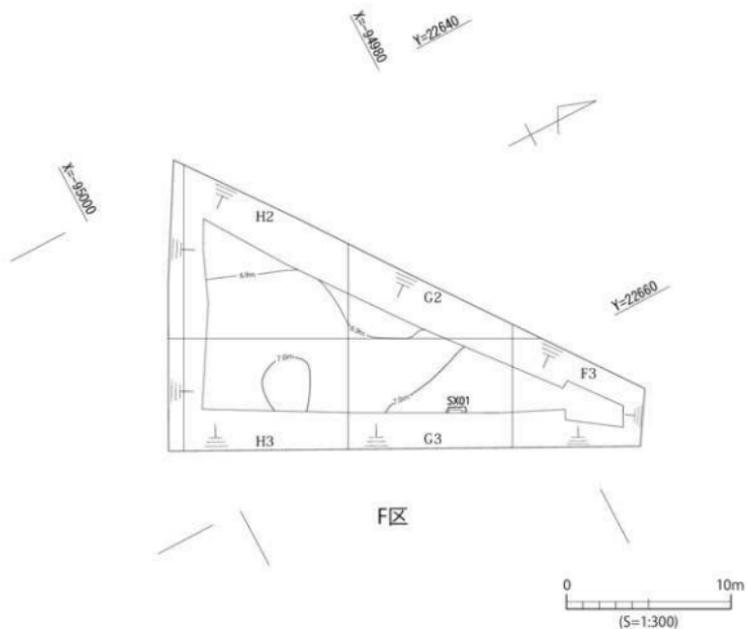
1. F区の土層(第61図)

F区は道路用地の区割りの関係で、平面長三角形の狭小な調査区である。第61図には古屋敷遺跡(F区)南壁の土層堆積状況を示した。中央部の大きく欠けている部分は試掘調査時のトレンチ跡である。

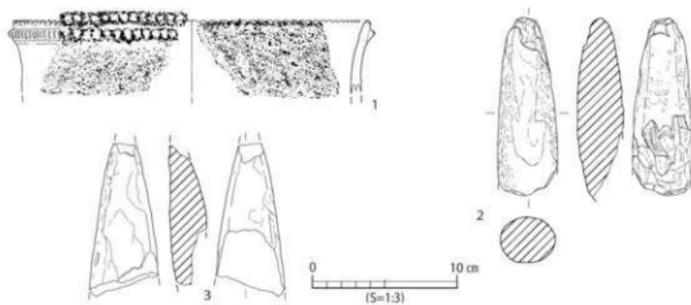
古屋敷遺跡は南北に横断する水路によって東西の地表高が異なっており、水路西側に隣接するF区は一段低い水田面を形成している。調査前の標高は約8.4mである。表土下には耕作土や圃場整備時の造成土が堆積しており、6層以下が縄文時代晩期の包含層である。弥生時代前期に位置づけられる遺物は出土していない。6層から10層は、全体的に暗色を呈する粘質土で、図上ではかなり細分してあるが、それぞれを面的に掘削することはできなかった。調査区北端では、河川氾濫時の堆積と考



第61図 F区西壁土層堆積状況(1:60)



第62図 F区第1遺構面遺構配置図(1:300)



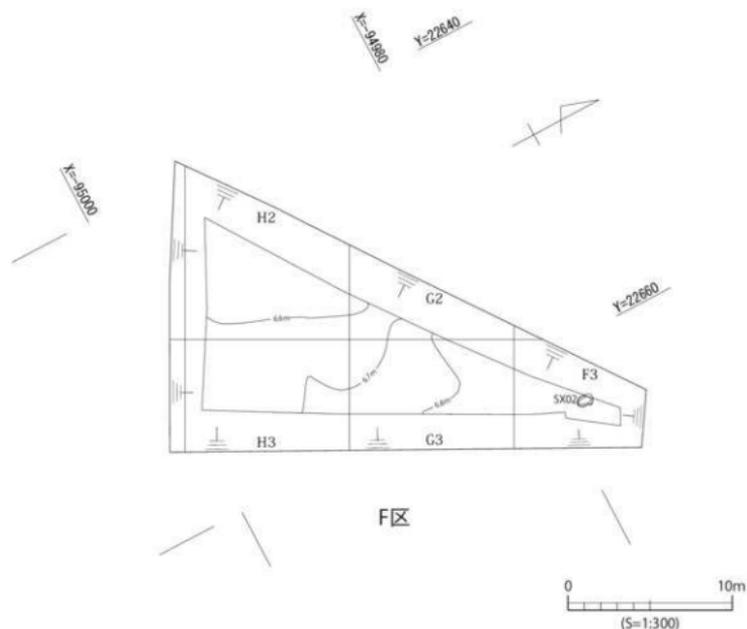
第63図 F区黒灰色粘質土・淡暗灰色粘質土出土遺物(1:3)

えられる黄灰色砂礫層がGライン付近まで入り込んでいるが、非常に局所的である。北側に位置する潮川がここまで氾濫したことがあったのであろうか。遺構は、11層上面に地床炉1基が確認されている。

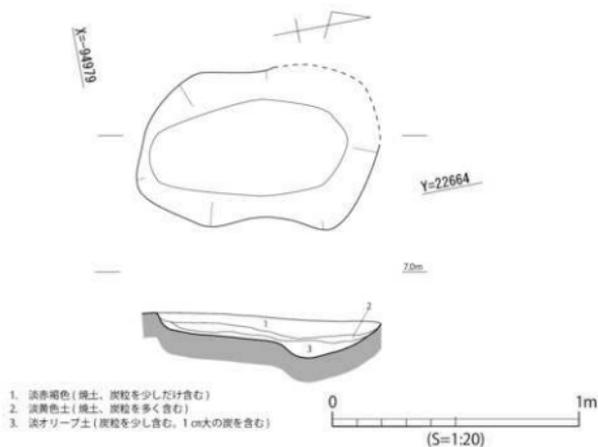
11層から12層は突帯文土器を含まず、土器の特徴から縄文時代後期末から晩期初頭と考えられる包含層である。11層は遺物がわずかだが、12層はF区内では最も遺物が多く含まれており、他の調査区の遺構面との前後関係を把握する上で有効である。後述の通り、滋賀里Ⅲa 並行期の鉢類が出土している。遺構は、13層上面に地床炉が1基存在するが、全体に低調である。13層から14層は、縄文時代後期の包含層と考えられるが、出土遺物は数えるほどしかないため、詳細な時期は把握できない。14層上面には不整形なピットが6基検出されたが、性格は不明である。

2. 第1遺構面の調査(第62図)

F区の調査では、排水用の溝を調査区隅に先行して掘削しながら発掘を行った。耕作土下の包含層は黒灰色粘質土1、黄色砂礫層、黒灰色粘質土2の3層に分けて掘削したが、遺構は皆無であった。掘削した土量に対し、遺物の出土量も非常に少ない。黄灰色砂礫層は河川の氾濫等により短期間に堆積したものと考えられ、出土遺物は図化できない小片、摩滅したものばかりであった。その下層にあたる黒灰色粘質土2の掘削後、東壁に隣接してSX(地床炉)01が出土した。径1.7m程度の焼土面



第64図 F区第2遺構面遺構配置図(1:300)



第65図 F区SX(地床炉)02(1:20)

を持つが、古屋敷遺跡の典型的な地床炉と比較してさほど焼けていない。関連する遺物は皆無であった。

第1遺構面出土遺物(第63図)

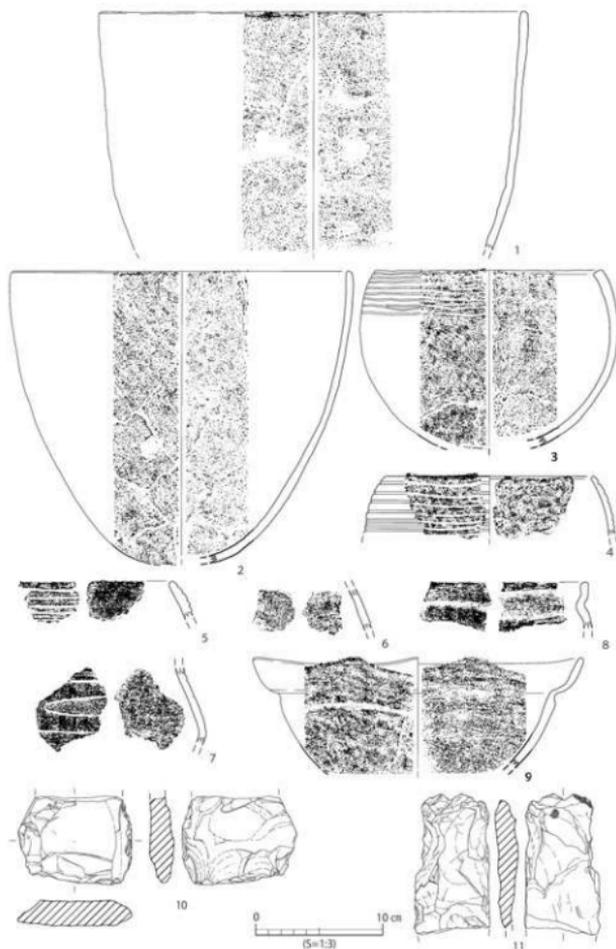
隣接する調査区に比べ、出土遺物は少ない。63-1は口縁端部にも刻目を持つ突帯文土器で、黒灰色粘質土から出土した。図化できない小片にも突帯文土器が数点見られる。63-2、3は塩基性片岩の磨製石斧で、刃部を欠いている。-3は柄部側の端部も欠いているようである。古屋敷遺跡に多い、破損後未加工のまま、放置されたものである。

3. 第2遺構面の調査(第64図)

第2遺構面上には、暗灰色粘質土(11層と12層)が載っており、特に12層の出土遺物が多かった。突帯文土器は全く出土しておらず、それ以前の包含層であることが明らかである。出土遺物の特徴から、後述するように縄文時代晩期初頭の滋賀里Ⅲa並行期に位置づけられる可能性が高い。第2遺構面は南西方向に向けて緩い傾斜地になっており、0.3～0.4m程度高低差がある。遺構はSX(地床炉)02を確認したのみである。

SX(地床炉)02(第65図)

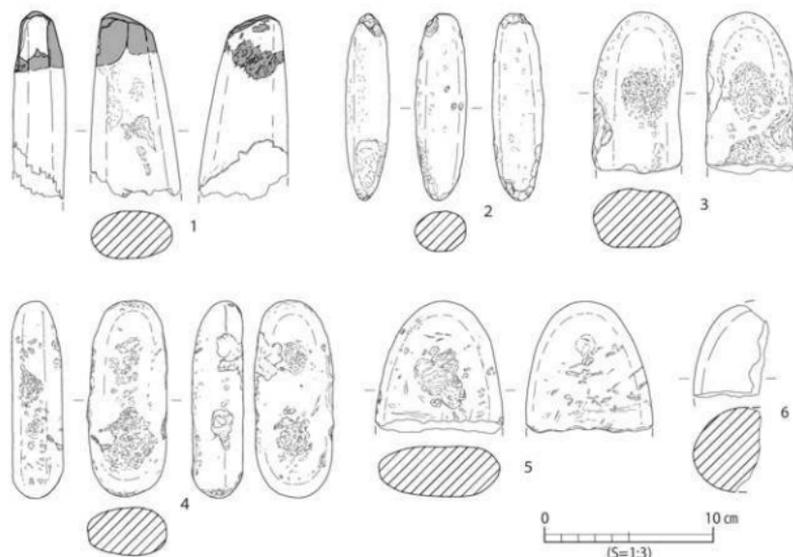
SX02は、古屋敷遺跡の地床炉としては比較的明確な焼土面を持ち、これに伴うと思われる炭粒は、最大30cm程度の深さまで拡散している。SX02を覆う暗灰色粘質土は、F区で最も遺物の多い包含層であるが、SX02に伴うと思われるものは皆無であった。



第66図 F区第2遺構面出土遺物1(1:3)

第2遺構面出土遺物(第66、67図)

暗灰色粘質土(11、12層)は、古屋敷遺跡を特徴付ける突帯文土器を全く含まない。66-1、-2は貼付突帯も刻目も持たない深鉢である。肩部に屈曲の少ない砲弾型である。晩期初頭の深鉢には、口縁部のくびれが明確なものもあるが、一定量この形態の深鉢が含まれるようだ。-3～-5は口縁が内



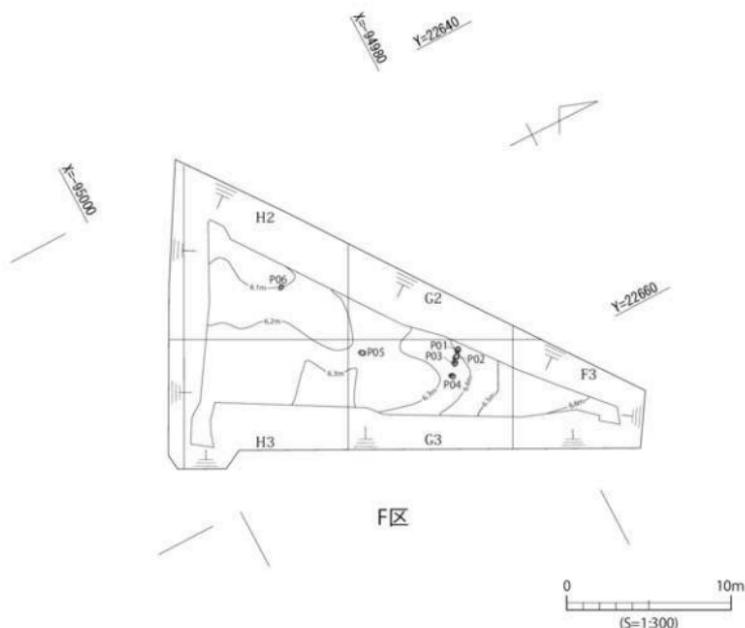
第67図 F区第2遺構面出土遺物2(1:3)

湾するボール状の鉢で、口縁外面に横方向の凹線を複数施す。凹線の間隔は乱れ、やや稚拙な感がある。復元径は3点ともほぼ同じであるが、口縁部の形状から別個体と思われる。-3は、口縁端部に明瞭な平坦面を形成するもので、凹線の間隔はやや密な傾向にある。-4は上段ほど間隔を広くとり、5本目以下になると急に間隔が狭まる。-5は小片だが、単なる横方向の凹線ではなく、一定間隔で端部を折り返して単位を構成しているように見える。現時点では遊賀里Ⅲ a 並行期と考えたい。

-7は磨消し縄文を持ち、やや古手の鉢類であろうか。-9は緩い波状口縁を持つ浅鉢である。口縁下端に明確なくびれを持ち、やや肥大させた口縁が花びら状に立ち上がる。古屋敷遺跡出土品ではあまり見かけないが、隣接するI区に類似例がある。

第66、67図には石器を並べた。実用品としては破損した打製石斧と磨製石斧がある。66-10は柄部を欠き、刃部端にも使用による欠損が見られる。-11は刃部を欠く破損品であるが、柄部側にも局所的に摩滅痕が残っており、使用状況ははっきりしない個体である。再生途上で破損したのであろうか。67-1は刃部を欠く磨製石斧であるが、柄部に顕著な擦痕があり、一部が変色している。あるいは柄に装着されたまま破棄されたのかもしれない。

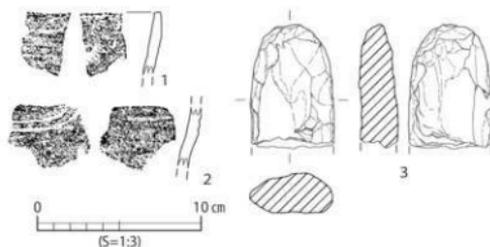
67-2～-6は、いずれも白色系の凝灰岩製石器類である。両面や側縁部に明瞭な打撃痕を持ち、部分的に擦痕が残っている。-3、-4は両面とも端部に近い2ヶ所に分かれて敲打痕が集中しており、途中で持ち替えた様子がうかがわれる。また、-3、-5、-6の3点はおそらく意図的に破砕されている。いずれも実用品ではなく、祭祀等に用いられた可能性が高いが、出土位置を見る限り特定の場所に集中する様子はうかがうことができない。



第68図 F区第3遺構面遺構配置図(1:300)

4. 第3遺構面の調査 (第68図)

第3遺構面は暗黒オリーブ土の上面にあたり、上には暗オリーブ土(13層)が載っている。暗オリーブ土に含まれる遺物は少なく、時期が決めがたいが、縄文時代後期の範疇に含めて良いと考えられる。この遺構面も南西へ向けて傾斜しており、調査区の南北端で約50cmの高低差が生じている。たまたまこの位置に穿たれていた地層確認用のボーリング孔から絶えず湧水を生ずることもあって、排水を怠ると瞬く間に水没するため、調査は困難を極めた。



第69図 F区第3遺構面出土遺物(1:3)

湧水のため遺構確認もままならないまま調査を進めたこともあって、遺構は限られており、G3グリッドを中心にピットが6基確認したのみである。ピットはいずれも不整形かつ浅く、列状に並んでいるようにも見えるが、間隔は定まらない。

第3遺構面出土遺物(第69図)

第3遺構面とこれを覆う暗オリーブ土は、出土遺物が少なく、また小片ばかりでほとんど図化できない。69-1は口縁部が直線的に立ち上がり、端部を平坦にする鉢類の口縁部だが、全体像は把握がたい。-2は明確な出土層位が不明の遺物だが、二条沈線の入る鉢の肩部であろうか。いずれも時期を類推することは難しい。

-3は打製石斧の破損品と考えられるが、柄部側の剥離が中途半端に見え、磨製石斧の未製品かもしれない。

第6章 古屋敷遺跡(H・I区)の調査

1. H・I区の土層

第70、71図には古屋敷遺跡(H・I区)での土層堆積状況を示した。両調査区は既掘区に周囲を囲まれており、湧水も多かったことから、法面の崩落や地滑り現象(土圧により壁面底部が調査区内に押し出されてくる現象)が度々発生したため、セクションを図化できた場所は限られる。基本的な層序はH区・I区で同一であるが、調査の都合上、一部土層名が異なっている。

H区では、調査の早い段階から西壁側に崩落防止用の土嚢を積み上げたため、これの測量ができず、東壁を図化した。(第70図)この壁面は拡張区の調査に伴い調査中に消滅した。白色レキ層以下の土層は調査区本体に2本設定したサブトレンチの北壁を図化している。これらの土層観察から、表土面(標高8.2~8.4m)から標高4.2mまでの層序が把握できた。

I区は、東壁の崩落対策のため既掘区(D区)側に大きく開削したため、オリジナルの土層が残っておらず、また西壁は大規模な地滑りが生じて土層が動き、図化できなかった。辛うじて残った南壁部分を第71図に示した。また、状況確認のため設定したトレンチの北壁部分をあわせて示した。これらの土層観察から、表土面(標高8.6~7.9m)から標高5.1mまでの層序を確認することができた。

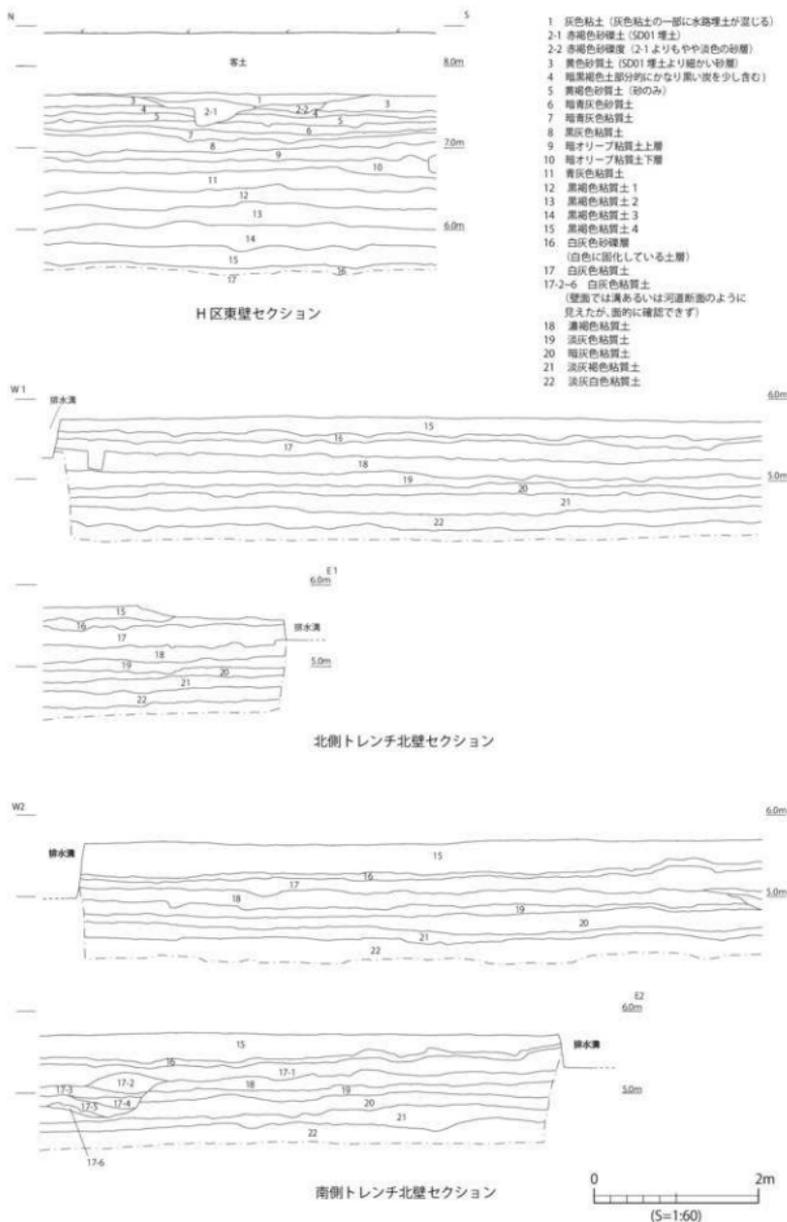
土層の状況

調査区の地表面は、南北を貫く用水路を境に2段の水田面から構成され、用水路西側の水田面が0.3~0.4m程度標高が低い。また各調査区内においても、東端と西端で0.2~0.3m程度高低差があり、おおむね西に向けて緩やかに傾斜している。地表下の土層も基本的に同様の傾斜が見られるが、層位によっては北西側が高い場合もある。

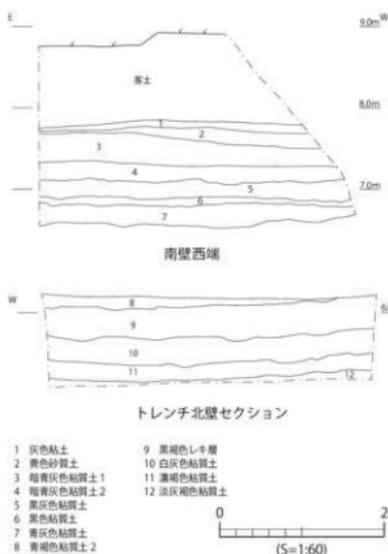
まず、地表から約0.8~1.2m程の厚さで水田耕作土とその床土があり、その直下には重機による轍がのこされていた。これらは圃場整備によって持ち込まれた客土と考えられる。焼し瓦片や石見焼などの近世以降の遺物を多少含むが、当遺跡とは直接関係しないものである。

耕作土・圃場整備に伴う客土を除去すると、灰色粘土が現れる。灰色粘土は、調査区内での厚さが均一でなく、場所によってはほとんど見られない。標高から考えて、北側に隣接するB区の水田遺構の続きが残っている可能性があったが、検出できなかった。遺物量はわずかな小片のみだが、弥生時代前期(Ⅰ-2様式)の土器を含む包含層で、以降の遺物は全くない。その下には黄色砂質土以下の一連の砂質土が堆積している。これらの砂質土もまた、調査区全体には広がっておらず、H区北側とI区南西側に集中して堆積している。H区東壁セクションでは、弥生時代前期に位置づけられる溝状遺構(SD01)がこれを切って掘削されているが、西進するにつれ砂質土は薄くなり、やがてより下層の暗青灰色粘質土を切って流れていく。したがって、SD01のある弥生時代前期の遺構面(以下第1遺構面と呼ぶ)は、H区東壁付近では黄色砂質土上面であるが、調査区中程から西部では暗青灰色粘質土Ⅰの上面に遷移するので注意を要する。SD01内部には、酸化して明褐色化した砂礫が詰まっており、流水があったことが判る。

同時期には、自然河道(SR01)が遺跡の縁辺部を流れていたことが分かっているが、当調査区ではH区の南端をわずかにかすめているだけで、東壁セクションには登場しない。SR01内は鉄分を多く含む砂礫層が幾重にも重なっており、長期間に亘って浸食と堆積を繰り返してきたことがうかがわれ



第70図 H区東壁・北側トレンチ北壁土層堆積状況(1:60)



第71図 I区土層堆積状況(1:60)

面に比べ数は少ない。遺構は大部分がI区の東側にまともっており、H区にはほとんど検出されていない。南端に位置するSR01は依然河底に達しておらず、包含層を切っている。この面を第3遺構面とした。

その下には、青灰色粘質土が広がっており、縄文時代晩期の土器を含むが、突帯文土器はほとんど見られなくなる。下層には炭だまりや地床炉が検出されており、I区東側とともにH区の西側にもまとも存在している。調査区南端で包含層を切っていたSR01は完全になくなる。この面を第4遺構面とした。

第4遺構面下には黒褐色粘質土1が堆積している。縄文時代晩期でも突帯文期以前の土器を含む土層である。下面に存在する遺構には炭だまりや地床炉があるが、数は少ない。またI区北東端では柱穴群が確認され、一部には柱痕が残っていた。この遺構面を第5遺構面とした。

第5遺構面下には青褐色粘質土1と黒褐色粘質土2が堆積しており、下面には若干の炭だまり・地床炉と柱穴群がある。柱穴群は第5遺構面と同様I区北側に集中するが、平面的に重複しないので、より古い別の遺構面であることは明らかである。この遺構面を第6遺構面とした。遺物量は少ないが、およそ縄文時代晩期初頭の土器を含む。

その下層は青褐色粘質土2と黒褐色粘質土3で、遺物は明らかに少なくなる。出土した粗製深鉢の口縁端部に内側に肥大させるものがあり、縄文時代後期中葉頃と考えられる。下面の遺構は炭だまりがわずかにあるが、いずれも規模が小さく、遺物も伴わない。この面を第7遺構面とした。

第7遺構面以下は、先行したH区で明確な遺構がなかったため、I区ではサブトレンチのみを掘削した。両調査区で、同じ層序が確認されている。この深さでは、いずれの土層も酸欠状態にあり、掘削直後から急激に酸化して変色するため、土層を把握しながら面的に掘削するのが困難であった。し

る。SR01は、縄文時代晩期の包含層を切って青灰色粘質土(H区7層)まで達しており、埋土に多量の土器を含む。縄文時代晩期以降の土器を含むが、河道自体の上限は明確でない。砂礫層上層部では弥生時代前期までの土器を含むことから、下限は同時期に求められる。

第1遺構面より下層には、暗青灰色粘質土と黒灰色粘質土が広がっており、弥生時代前期の土器と突帯文期の土器を含んでいる。調査区の中では最も遺物量が多い土層で、両土層間には明確な遺構が確認できなかったが、出土遺物には多少とも時期差がある可能性が高い。その下面は多くの炭だまりや地床炉が存在し、第2遺構面とした。

第2遺構面以下には、黒色粘質土および暗オリーブ土が堆積しており、突帯文土器とそれよりやや古手の土器を含む。下面には炭だまりや地床炉、柱穴群が確認されているが、第2遺構

たがって、それぞれの土層から出土した遺物も、前後との混入があるかもしれない。黒褐色砂レキ層、白灰色砂レキ層は非常にしまりの強い層で、遺物はほとんど含まない。地下水脈の関係で、鉄分などが沈着し、礫同士が固着したのかもしれない。白色粘土層は、急激に酸化、オリーブ色化する粘土層で、わずかに遺物を含む。H区内に設定した南トレンチでレンズ状の堆積を確認したため、人為的かどうかはともかく、何らかの凹みや溝が存在すると考えられたが、面的に把握することができなかった。濃褐色粘土層は酸化してもなお暗黒色を呈する粘質土で、調査区内では最も古い包含層である。

以下、H区のトレンチでは暗灰色粘質土、淡灰褐色粘質土、淡灰白色粘質土が堆積しているが、2本のトレンチ内で遺物が皆無であったため、面的な発掘は行っていない。

2. 第1遺構面の調査

第1遺構面は、耕作土・造成土下にある遺物包含層(灰色粘質土・黄色砂質土)を除去した面で、I区東端で標高約7.7m(推定:後述の通り、面的に把握できていない。)、H区西端で標高約7.4mである。H区を東西に横断する溝状遺構(SD01)とそれに隣接する小規模な溝状遺構(SD02, 03)、地床炉や炭だまりなどを検出している。H区南端には、東から回り込んできた自然流路(SR01)が遺構面を切って入り込んでいる。

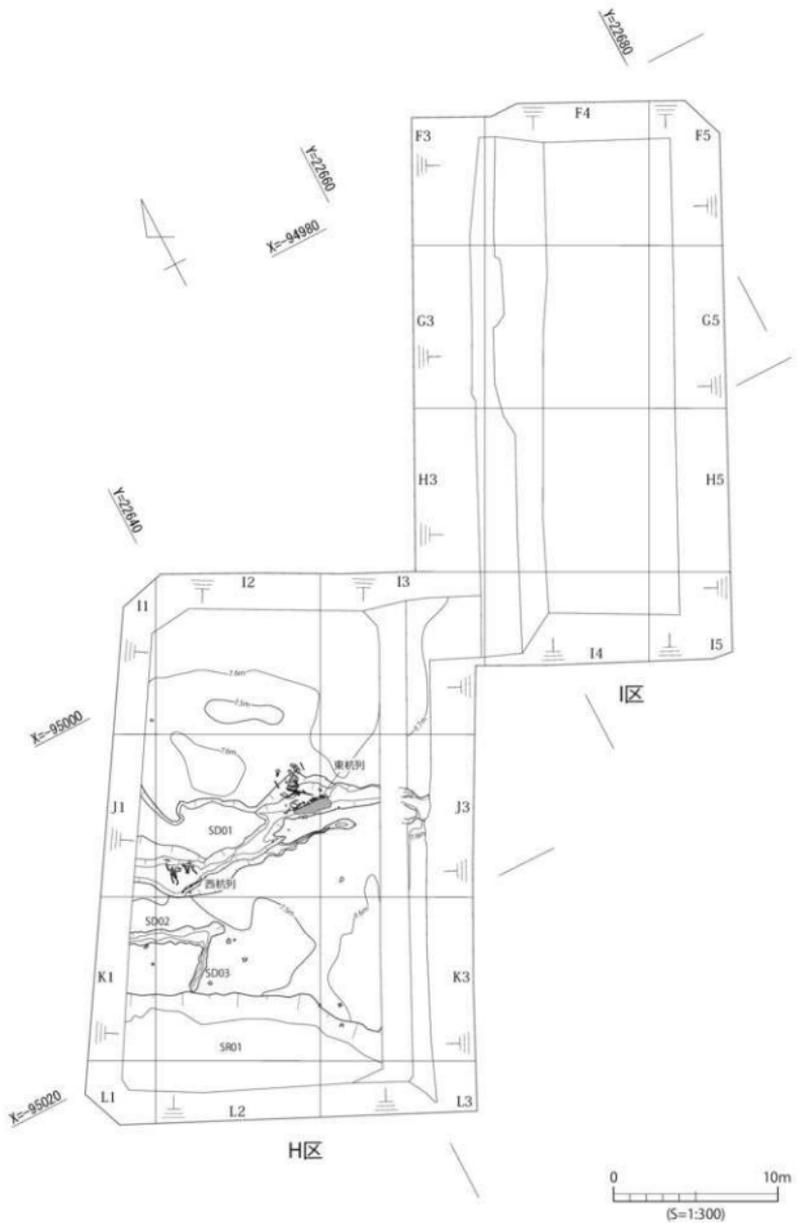
SD01は遺跡を北東から南西に向けて横断する溝状遺構で、B区からH区に至る延長120mが確認されている。溝の規模は、幅約120cm、深さ約50cmで、西に向けて緩い傾斜が付けられている。大部分は素掘りであるが、H区内の二カ所で片岸のみ杭列による護岸が設けられている。埋土には弥生時代前期(1-2様式)の土器を含み、この時期に機能していたことが想定できる。

I区では耕作土・造成土掘削後、遺構面を求めて掘り下げたが、第1遺構面の覆土である灰色粘土と第1遺構面の直下にあたる暗青灰色粘質土は、境界が遷移的であり、明確な遺構もなかったため、両者を面的に切り分けることが難しかった。調査中は、妥当な遺構面を把握したつもりであったが、後に層位や検出レベルを参照すると、I区本体部分はH区やI区拡張部と乖離があり、同一遺構面とは言い切れないことが判明した。結論から言えば、I区本体部分で第1遺構面と認識していた面は、より下層の遺構面である可能性が極めて高く、本来の第1遺構面を確認できなかった可能性が高い。実際、I区本体部分の灰色粘質土に含まれる遺物には縄文土器をかなり含んでおり(第81図)、本来の弥生時代前期の遺構面を認識できないまま、縄文時代最晩期の包含層(暗青灰色粘質土層)も併せて掘削してしまったと判断する。

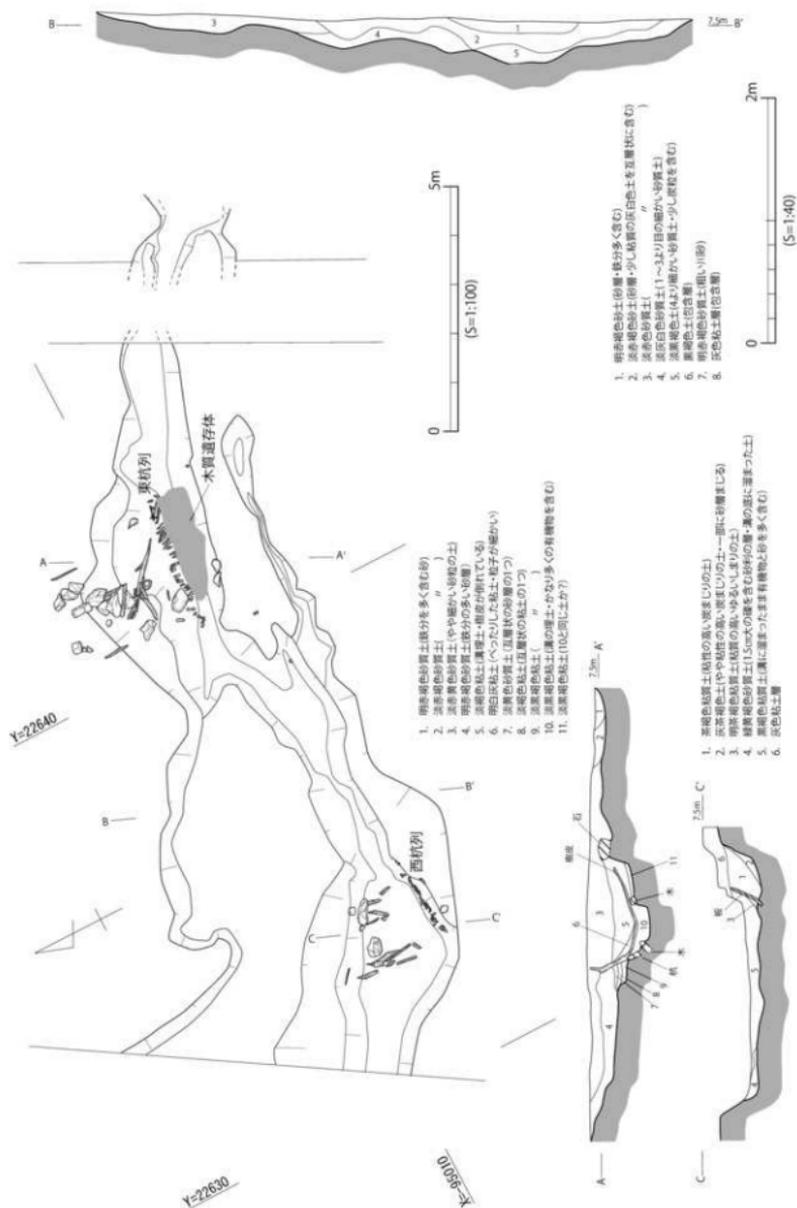
SD01(第73図)

H区の中央部を東西に横断する溝で、調査区内中程でS字形に蛇行している。H区東側では黄色砂質土を切っているが、やがて黄色砂質土がなくなるとより下層の暗青灰色粘質土を切って西流する。断面形は基本的にV字形で、幅約1m、深さ約50cm程度の溝であるが、時として決壊、氾濫したらしく、蛇行部分の岸は広く抉れている。埋土は砂礫、砂質土が互層状に堆積しているが、場所によっては底面に有機質の多い暗色系の粘土層がある。

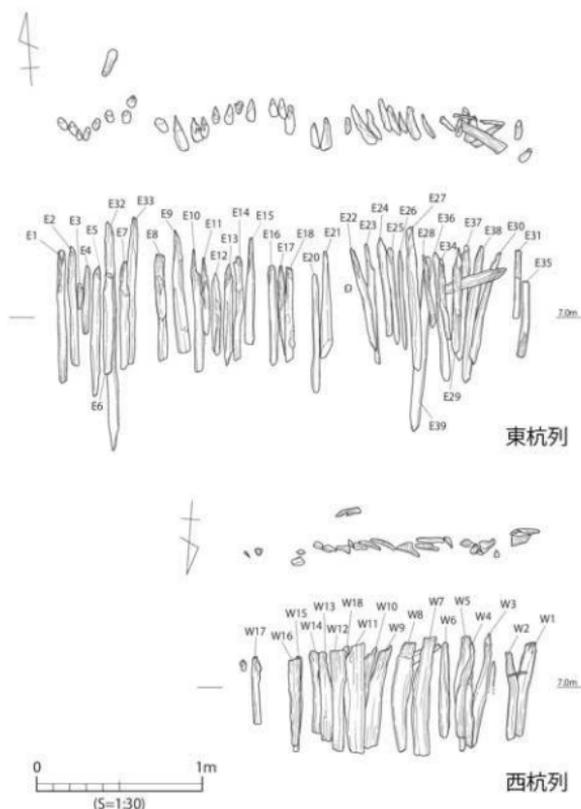
また、2ライン付近では、溝内に薄い木質遺存体が残されていた。溝の断面図を見ると、この木質遺存体はちょうど溝に覆い被さるようにたわんで落ち込んでおり、溝の底部との間には有機質を多く含んだ暗色の粘質土が堆積している。この粘質土からは、水生昆虫であるガムシの遺骸も出土してい



第72図 H・I区第1遺構而遺構配置図(1:300)



第73図 H区SD01(1:100・1:40)



第74図 H区SD01杭列(1:30)

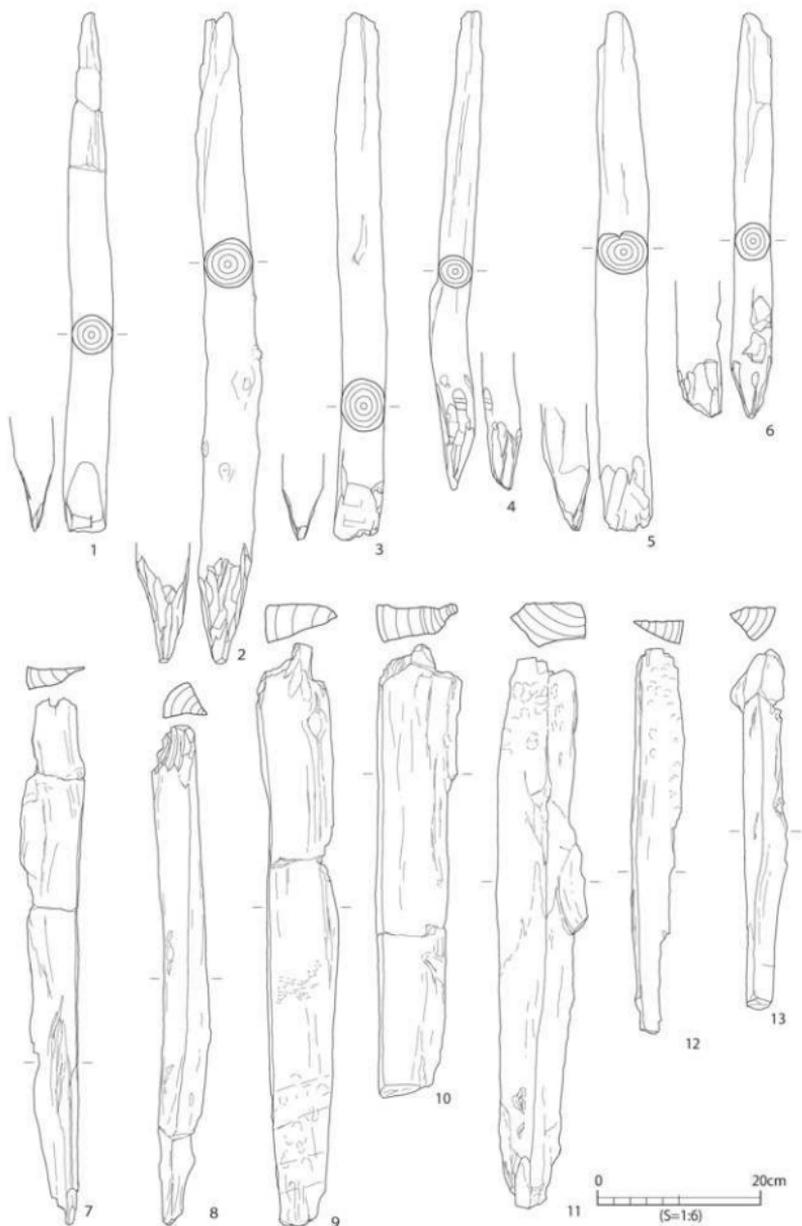
る。¹¹ こうした点から、これらの有機物は溝が水で満たされた、水路として機能している時期に底に溜まったものと考えられる。出土した木質遺存体は東西長約3.1m、南北長約0.7mにわたって広がっており、厚さ0.5～1cm程度と非常に薄く分布していた。樹皮あるいは薄い板のようなものかもしれないが、残存状態が非常に悪く、材質等の詳細は不明である。

杭列(第74図)

SD01は他の調査区も含め基本的に素掘りの溝であるが、H区内の一部分のみ杭を打ち込んだ護岸が設けられていた。杭列は東西2カ所に分かれており(以後、東杭列・西杭列と呼称する)後述するようにそれぞれ内容が異なっている。また東杭列北側に隣接して配石および杭群が確認された。

(1) 東杭列

3ライン付近に東西2.2mにわたって打ち込まれた杭列で、溝本体の北岸のみに存在する。杭列は



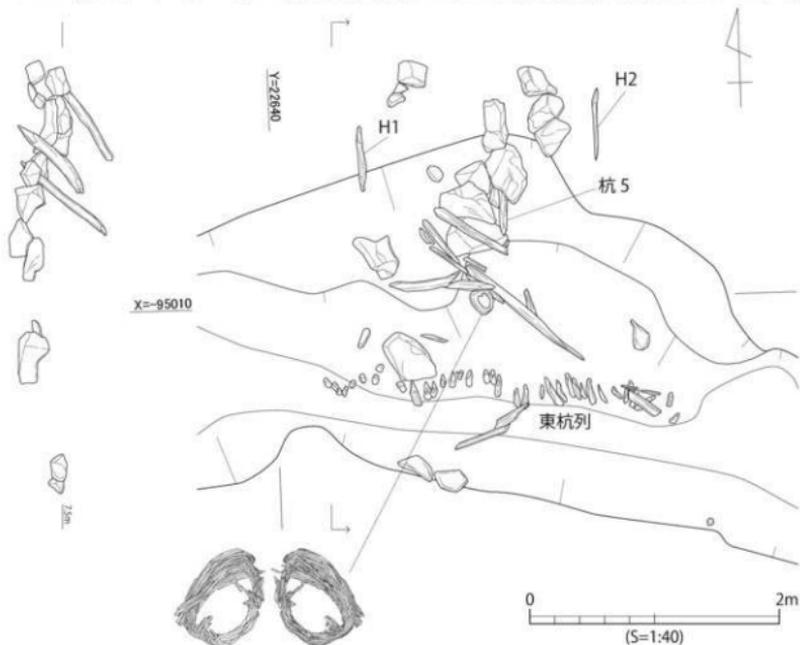
第75図 H区SD01杭(1: 6)

隙間ができないように連続して打ち込まれているが、隣同士の杭が重なり合ったり、斜めに打ち込まれているものも散見される。また、下端のレベルにかなりバラツキがあるなど、整然と揃えて打ち込むことは難しかったようだ。使用された杭は全て丸木材で、39本出土した。径は4～7cmで、周囲が腐食して心材だけになっているものもあるが、種皮が残っているものも多い。下端部は削り込んで尖らせてあるが、①全周削り出しの多角錐形、②2方向削り出しのV字形、③一部のみ削り出しの片刃形と、3形態が存在する。上端の形状は腐食が激しいため分からない。比較的状态の良い2本について樹種同定を試みたところ、サカキであった。

ところでE32、E33は本来の溝から少し離れた位置にあり、他の杭よりも深く打ち込まれている点特徴的である。杭自体も径が若干太く、E32は全長もかなり長い。E32の樹種同定を試みたところマキ属であった。したがって、サカキからなる護岸目的の杭とは別の、例えば後述する配石や杭群とともに機能するものかもしれない。

(2) 西杭列

2ラインの東側に約1.8mに亘って打ち込まれた杭列で、溝本体の南岸のみに存在する。杭列は隙間ができないよう、幅1～3cm程度重なるように連続して打ち込まれており、下端部は標高6.6～6.7mに揃えられている。一部に1枚程度の歯抜けがあるが、抜き取り痕は確認できなかった。使



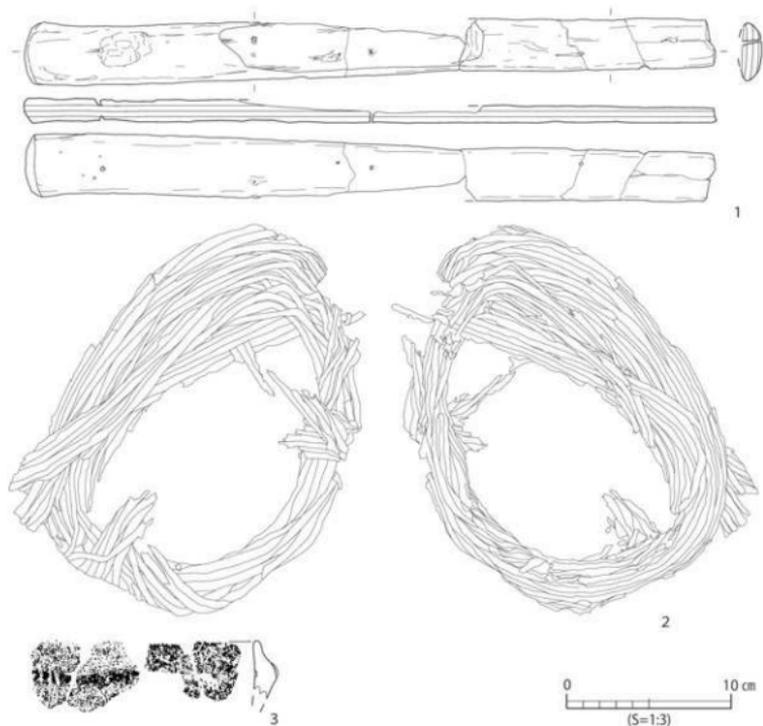
第76図 H区SD01配石・杭群(1:40)

用された杭はスダジイの割板で、断面形がくさび形のいわゆる「ミカン割り材」である。原木の外皮は残ったままである。分割角度はバラツキがあるが、原木の太さが太いものは鋭角で板状に、原木が細いものは鈍角で棒状に加工される傾向があるようだ。

(3) 配石および杭 (第76図)

SD01は東杭列付近から下手にかけて、北側に拡大し、浅い段を形成する。この場所はSD01がS字蛇行する部分にあたることから、何らかの施設が存在したか、氾濫痕跡である可能性が高い。

注目されるのは、東杭列の背後に位置する配石および杭群である。木片が散乱しており、全体像がつかみがたいが、25～70cm大の角礫14個と径8～10cmの杭(H1、H2、杭5)3本が出土している。第1遺構面では他にこのサイズの礫は見つかっておらず、人為的に持ち込まれた可能性が高い。礫群のうち、東の一群は石列を形成するように南北方向に並んでいるが、氾濫などの影響で元位置にないものもあるだろう。また3本の杭は、東杭列の丸木よりも一回り太く、先端を多角錐状に削り込んで尖らせており、礫群を挟んで約35～45度の角度を持って斜めに打ち込まれている。樹種同定分析によれば、マキ属の丸木である。これらの杭は、SD01に対してほぼ同方向、同角度を持って打



第77図 H区SD01出土遺物(1:3)

ち込まれており、具体的な構造はともかくSD01に伴う施設である可能性が極めて高い。氾濫原に散在する木片群も、この施設に伴う構造物の残骸である可能性があるが、即断できない。

SD01の性格と時期

SD01は各調査区を西進するにしたがって、徐々に底面の標高が下がっていく傾向があり、水を流す意図があった事が明白である。取水位置は不明だが、おそらく北東に位置する潮川か、後述するSR01を起点とし、遺跡内に水を引き入れる人工の水路であった可能性が高い。

では、これに付帯する杭列と配石・杭群の性格はどのようなものだろうか。まず東杭列・西杭列が溝の蛇行する外側（攻撃面）のみに設置されている点に注目したい。護岸としての性格を考慮すれば、当然の配置である。一方で、SD01は他の調査区においては素掘りの溝に過ぎず、本調査区内のわずかが数m、しかも片側だけに杭が打ち込まれている点に違和感がある。また、使われている杭が東西で異なり、両方で機能や打ち込まれた時期が異なっている可能性もある。

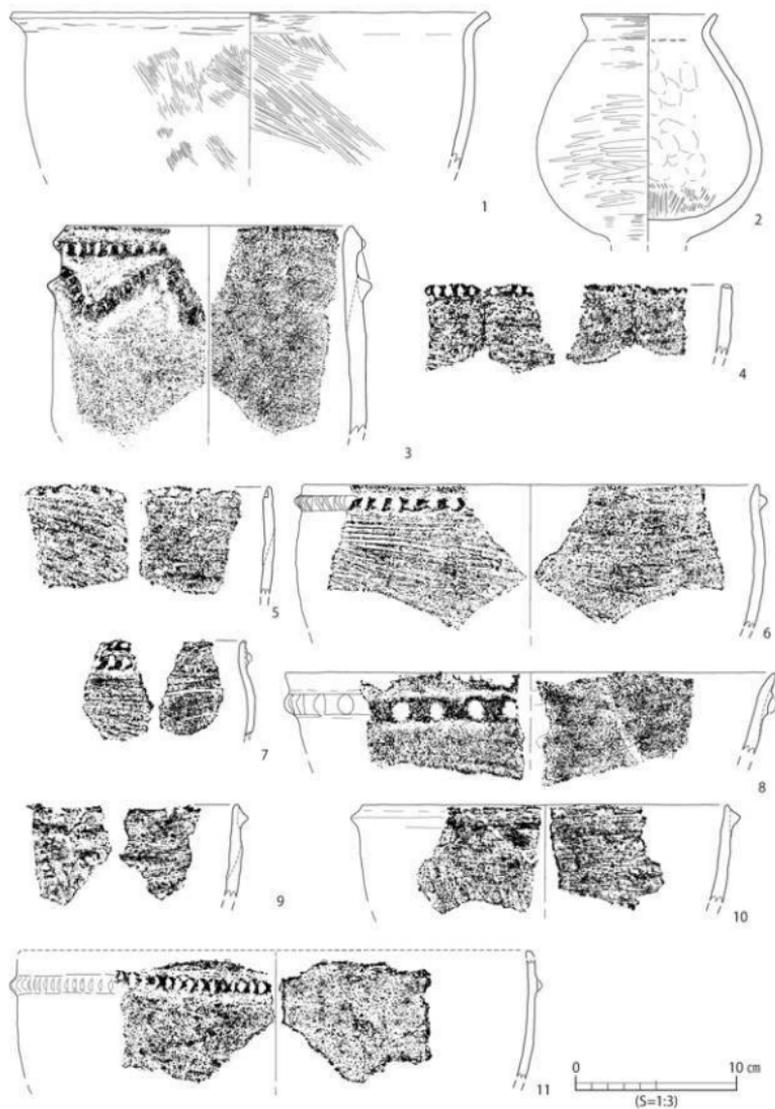
さて、ここで東杭列に隣接する配石と杭群との関係について確認すると、3本の斜め杭の配置が明らかにSD01を意識している点や、東杭列に隣接する杭（E32、E33）と同様のマキ属の丸木を採用している点、杭先端の加工が共通している点などから、一体の構造物として機能していた可能性を見いだすことができる。詳細な構造を解明することは困難であるが、取水あるいは排水施設を想定できよう。弥生時代前期では、九州北部や大阪平野などで水田に伴う灌漑設備が発見された例があるが、管見に触れる限りではこうした配石と杭列を組み合わせた類例を見いだせなかった。

SD01出土遺物（第75、77図）

75-1～-13は杭列に用いられた杭である。1～6は東杭列に用いられた丸木で、一部には樹皮が残っている。いずれも杭頭は朽ちており、原形をとどめない。先端部は、既に述べたように①2方向削り出し、②全周削り出し、③片方向削り出しの三形態がある。削り出し面には粗い剥離痕があり、石斧などを用いて加工したようだ。-7～-13は、西杭列に用いられたミカン割り材である。一部には樹皮が残っている。基本的には打割された後、そのまま使用されたようだが、-9や-11のように先端を削り、薄く加工するものもある。

77-1は西杭列付近の溝埋土から出土した棒状の木製品で、断面が木葉状に加工された板材である。片面から穴が開けられているが、貫通しているものもあれば、先の尖ったグギ状のものを打ち込んだかのような、断面形がくさび形で貫通していない穴もある。何らかの意図を持って製作されたものであろうが、明確な使用方法も定かでないため、不明木製品としておく。-2は東杭列背後の配石などのある氾濫原から出土した、有機物の束である。幅4～5mm程度の有機物を束にし、一端を揃えてから、撚りを加えながら一巻きしただけの簡単なものである。残念ながら植物の同定はできなかったが、繊維を採るための加工はなされておらず、未加工の植物束であることが判明した¹¹²。縄文時代においては東名遺跡（佐賀県佐賀市）などで出土した、加工用の素材を束ねて保管した例が知られており、この素材束も同様のものと考えられる。

SD01本体は埋土中にほとんど土器を含まず、図化できたものは1点だけである。-3は貼付突帯を持つ深鉢の小片で、高さのない突帯に控えめな刻目を入れている。突帯文土器でも最晩期に位置づけられる。



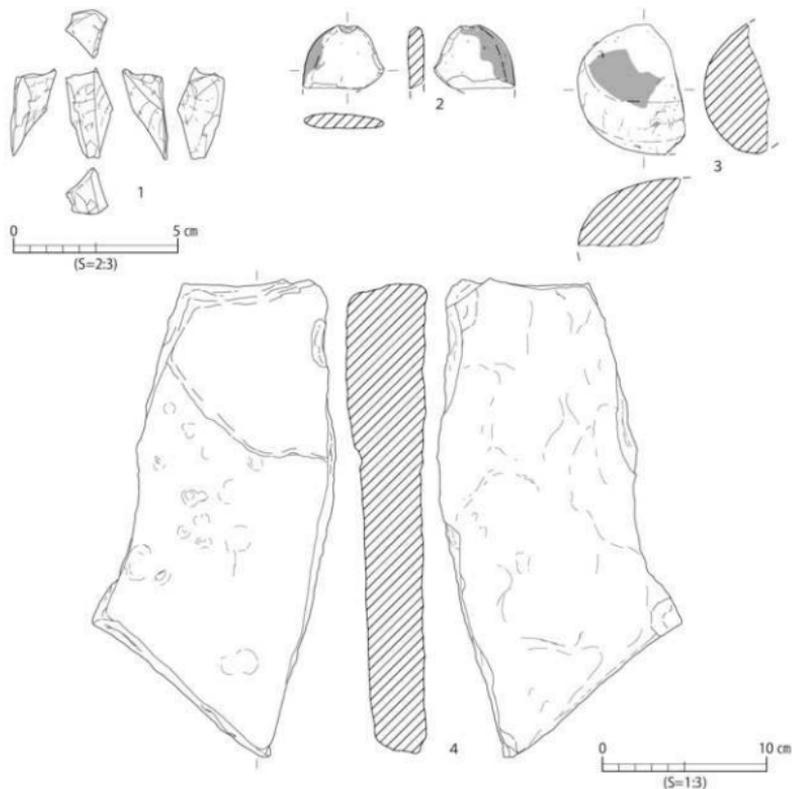
第78図 H区 SRO1 出土遺物 1 (1:3)

SD02・03

SD01の背後に検出した溝で、南端はSR01に抜けている。SD01に類似したV字形の断面が明確な溝で、人為的に掘削されたものと考えられるが、性格は不明である。出土遺物は小片のみで図化できなかった。

SR01

遺跡の縁辺をめぐる自然河道である。H区の南端部に幅約5mほど掛かっており、暗青灰色粘質土を切っている。2cm程度までの玉砂を多く含む砂礫層で埋まっており、遺物が散在していた。鉄分の沈着した砂礫層が互層状に堆積していること、大型の礫や角礫を全く含まないことから、河道が長い時間をかけて徐々に埋まったものと想定できる。他の調査区の成果から、SR01は縄文時代後期初頭には存在したと考えられ、時期毎に流れを変えながら埋没と浸食を繰り返し、弥生時代前期頃までに完全に埋没したようである。H区では、SR01の中でも最も新しい埋土の部分が検出されており、



第79図 H区SR01出土遺物2(1:3・2:3)

縄文時代晩期でも終わりに近い時期から弥生時代前期にかけての流路と考えられる。

SR01 出土遺物 (第 78, 79 図)

SR01 の埋土からは、突帯文期から弥生時代前期にかけての遺物が出土している。78-1～-2 は弥生時代前期 (1-2 様式) の甕と壺である。-1 は内外面にハケメ調整を施す甕である。-2 は小型の壺で、底厚を深く採り、外面は横方向のミガキを施す。古屋敷遺跡のこの時期の土器は、突帯文土器などの縄文土器と明らかに胎土が異なっており、長石などの白色の結晶を含む橙色系の粘土を用いている。

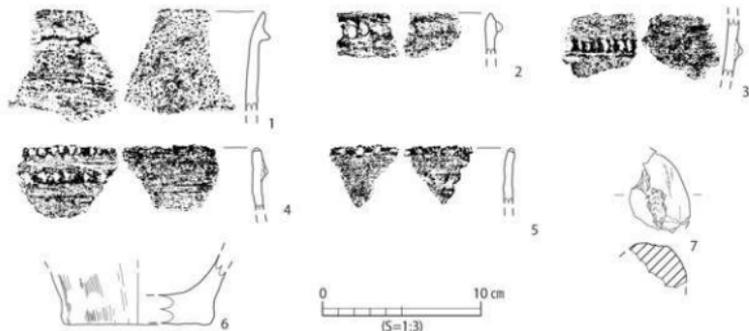
-3～-11 は突帯文期の深鉢である。貼付突帯の位置が口縁に近づく点や、刻み目が浅いなど、比較的新しい要素を持つものが多いが、以下のように貼付突帯の位置や刻み方にもバラエティーがあり、河道による包含層の浸食と埋没を繰り返す中で、幅広い時期の遺物を取り込んだものと考えられる。-3 は、高さの低い幅広の貼付突帯を波形に付加している。-4 と -5 は貼付突帯を持たず、口縁端部に刺突を加えるものである。-6、-7 のように貼付突帯を刻まないものもある。

79-1 は古屋敷遺跡では希な頁岩の小片、-2 は石鍾の破片であろうか。-3 は片面に広い研磨面を持ち、石皿の破片と考えられる

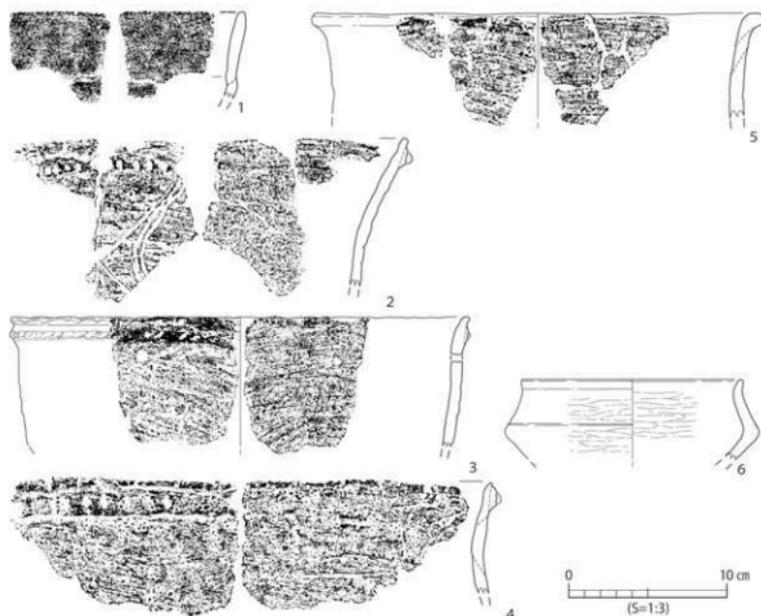
第 1 遺構面出土遺物 (第 80, 81 図)

H 区出土遺物を見ると、突帯文期から弥生時代前期にかけての遺物が出土している。80-1～-5 は突帯文期の深鉢である。貼付突帯を持つものと持たないもの、突帯を刻むものと刻まないものが混在している。-4、-5 のように口縁端部に連続刺突を施し、刻み目状にするものもある。-6 は胎土の特徴から弥生時代前期の甕もしくは壺の底部であろう。-7 は石英脈の丸礫で、層状に濃淡を持つ乳緑色が特徴的な礫である。表面がつるつるに磨かれているいわゆる磨石であるが、何らかの理由で人為的に破碎されている。

既に述べたとおり、I 区の出土遺物はより下層の暗青灰色粘質土に含まれる遺物も含んでいる可能性があるので注意を要する。81-1 は口縁がまっすぐに立ち上がる弥生時代前期の壺である。口縁内面には横方向のミガキを施す。-2～-4 は突帯文期の深鉢で、口縁端部直下に刻目突帯を持つ。-5 は口縁端部を丸めて外側にひねりだしており、刻目は施さない。形態的には弥生時代前期の甕にみえるが、二枚貝条痕による仕上げや粘土の積み方、胎土の特徴は縄文時代晩期の深鉢と同様である。-6 は口径



第 80 図 H 区第 1 遺構面出土遺物 (1:3)



第81図 I区第1遺構面出土遺物(1:3)

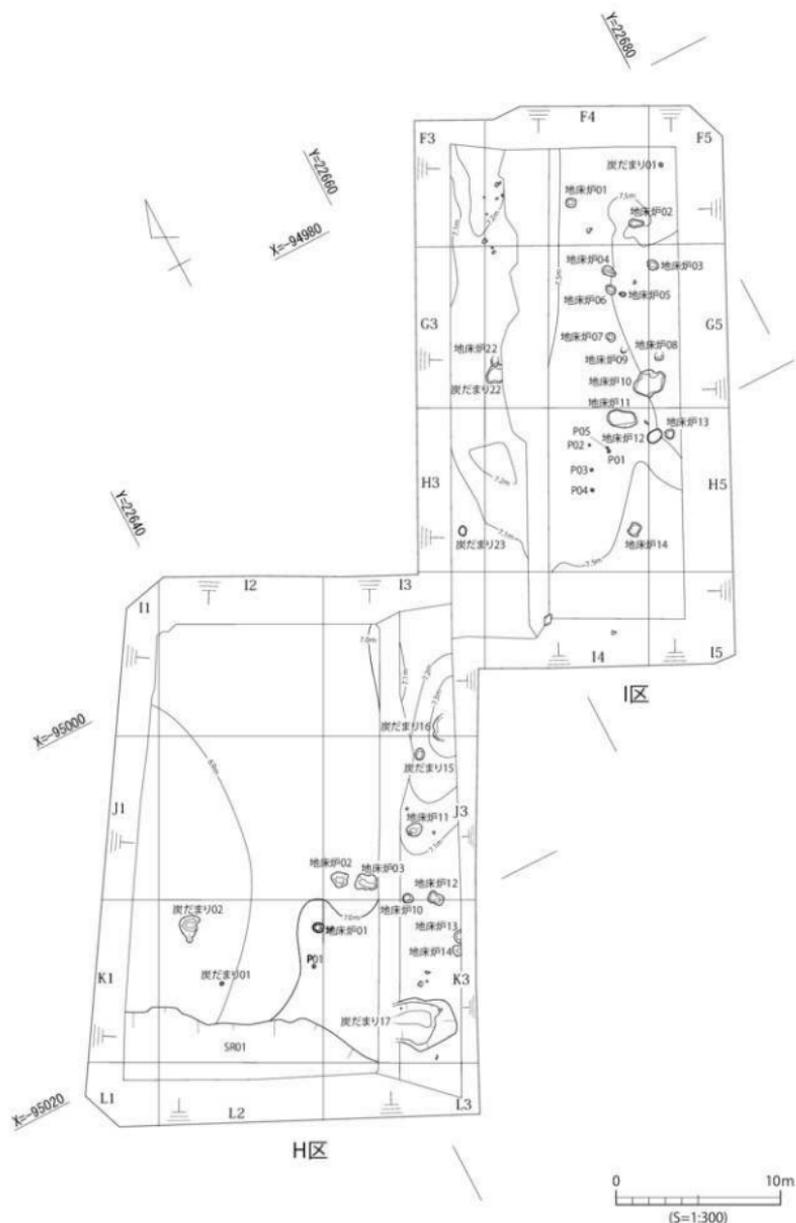
の小さい精製浅鉢である。

3. 第2遺構面の調査

第2遺構面は、暗青灰色粘質土および黒灰色粘質土を除去した面で、I区東端で標高約7.5m、H区西端で標高約6.9mである。既に記したように、I区本体部分は調査時に第1遺構面と認識していたが、出土遺構のレベルや層位を考慮し、第2遺構面と同一か、それに近い時期の面をとらえていると考えたい。

H区、I区ともに地床炉と炭だまりが複数確認されており、調査区の中でも最も遺構が集中する遺構面である。数は少ないがピットも確認されており、何らかの構造物をともなった可能性もある。第2遺構面では、H区で8カ所、I区で14カ所の地床炉を検出した。炭だまりは小規模なものも含め、H区で5カ所、I区で1カ所検出した。遺構の分布は3ライン以東に偏っており、土地利用に差異があったことが想定できる。

地床炉は各遺構面の中で最も濃密に分布しており、面的に重なったものはなかったが、厳密には層位的に上下関係があるようにも見え、全てが同時期に併存した訳でなく、多少の時間差があると考えられる。一口に地床炉と言っても、表面が淡く赤化をしたものや、深さ10cm程度まで被熱変色したもので様々であるが、人為的に掘りくぼめた坑の中で火を焚いたことが明確なものはなかった。ま



第82図 H・I区第2遺構面遺構配置図(1:300)

た地床炉に伴うと判断できる遺物もほとんどない。炉に伴う炭粒に混じり、わずかに骨らしき白色の小片が含まれることもあったが、種別や部位を特定できるものはなかった。

炭だまりには20～30cm程度の円形に広がるものと、数mの範囲に亘って広がるものがあり、この遺構面でも両者が混在している。H区炭だまり01とI区炭だまり01は小規模な前者である。一方、後者にあたるH区炭だまり17はかなり規模が大きいが、平面規模に対して嵩がなく、明確な堀形も持たない。地表面の凹部に木炭を含んだ土砂が堆積した状況である。

ピットはI区のH4グリッド内で5カ所検出した。いずれも径10～15cm、深さ6～14cmと小規模である。埋土には全体に木炭粒を含み、分層が難しい。径10cm程度の丸木を打ち込んだものだろうか。P02～04は直線上に並んでいるかに見えるが、一連の構造物に伴うものかどうかは不明である。

H区炭だまり17 (第83図)

H区炭だまり17は、調査区南東端で、東西約3.8m、南北約2.4mを検出した。調査時に排水溝として掘り上げてしまった西側にも続くと思えば、それ以上の規模が想定される。平面規模に比べて嵩がなく、明確な堀形や床面も存在しないことから、地表面の凹部に炭粒を含んだ土砂が堆積した可能性が高い。埋土には多量の炭粒を含み、土器、石器等の遺物を点々と含んでいる。後述するように、出土遺物が多様で、祭祀跡などの特殊な状況も考えられるが、土器類は完形に復元できるものがなく、祭祀遺物がそのまま放置されたとは考えにくい。祭祀等に用いられたものだとすれば、二次的に廃棄されたものであろう。にわかには性格を判断しがたい遺構である。

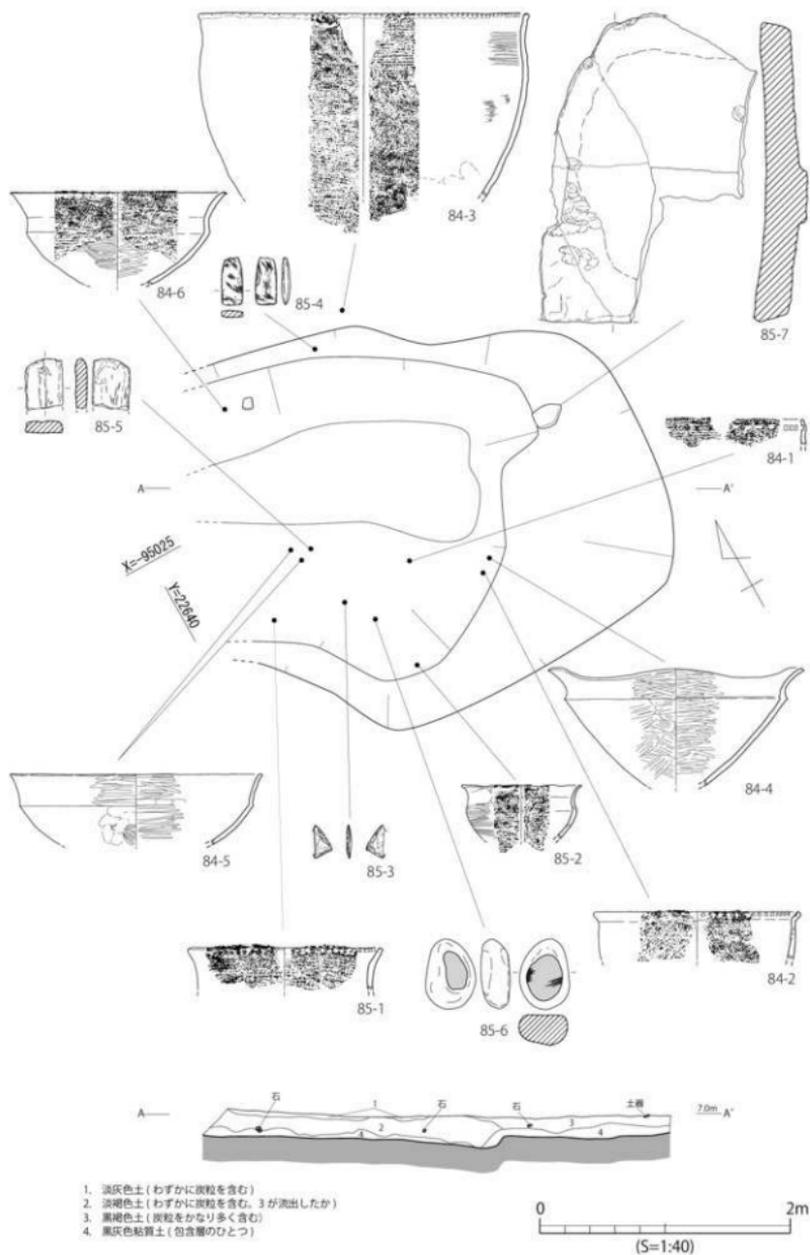
H区炭だまり17出土遺物 (第84, 85図)

出土状況から見て、一括性の高い遺物群と考えられる。84-1～-3は粗製深鉢で、貼付突帯を持たず、口縁端部から内側にかけて刺突を施すものである。若干外反する口縁部のみが横方向の条痕、以下胴部は方向不定な条痕で整形される。-4～-6は精製浅鉢で、-4は明確な波状口縁を持つ。-5、-6は直線的な口縁で図化したが、波状口縁の可能性もある。85-2は小型の精製壺で、胴部外面は細かい条痕調整、口縁部が横方向のミガキであり、浅鉢と同様の仕上げである。

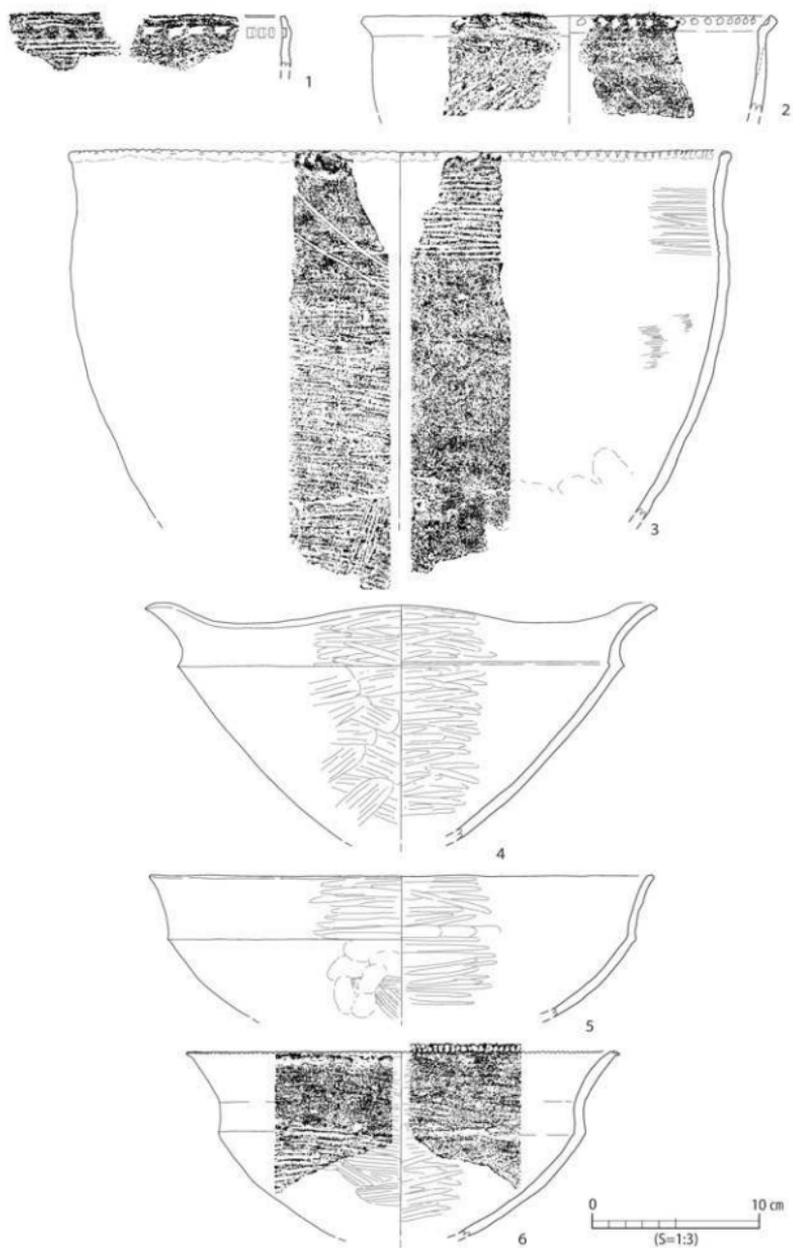
石器類はバラエティーに富んでいる。-3はガラス質安山岩(いわゆるサヌカイト系の安山岩)の切片石器が破損したもので、両面調整を施している。扁平菱形の石鎌か刃器の類であろう。-4は古屋敷遺跡では希な小型の磨製石斧で、鑿のような使用目的が想定される。-5は直線的な溝が穿たれた線刻礫で、表面にも線刻がある。線刻された後に破砕されているが、残りの部分は出土していない。-6は用途不明ながら、両面に擦り跡のある白色系の凝灰岩である。-7は石皿の破損品で、包含層出土の破片と接合し、全体の約3/4が復元できた。

H区地床炉02出土遺物 (第86図)

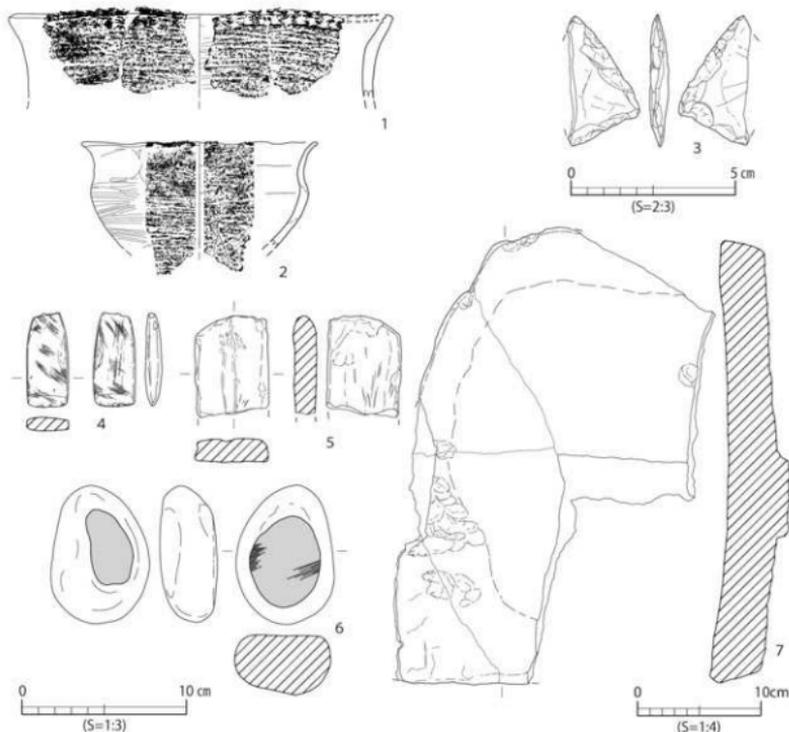
地床炉は堀方を伴わない焼土面であるため、基本的には遺物を伴わないが、希に上面付近に出土遺物を伴う例がある。86-1はH区地床炉02の上面で出土した石鎌である。ただし被熱痕跡もないため、この地床炉に直接伴うものかは判断しがたい。



第83図 H区炭だまり 17(1:40)



第84図 H区炭だまり17出土遺物1(1:3)



第85図 H区炭だまり17出土遺物2(1:3・2:3)

第2遺構面出土遺物(第87図～93図)

第2遺構面上には暗青灰色粘質土と黒灰色粘質土の2層の包含層があり、それぞれ分類して取り上げている。黒灰色粘質土は厚さ10cm程度の薄い部分もあったが、第2遺構面を覆うこともあって、まとまった量の遺物が出土している。

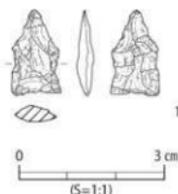
暗青灰色粘質土出土遺物

87-1は耳状の凸部を持つ深鉢の破片で、内外面ともナデ調整である。

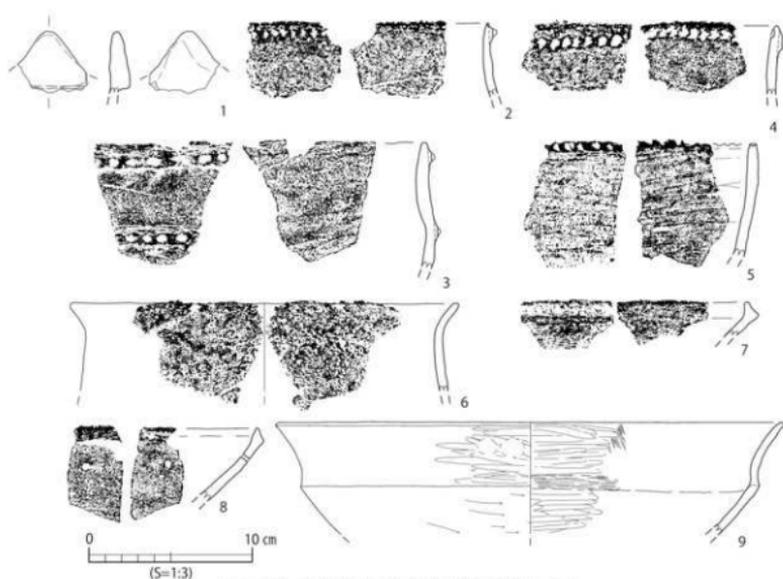
-2～-5は粗製の深鉢である。突帯と刻目・刺突の様子は異なっており、

-2は貼付突帯を刻むもの、-3は二条貼付突帯をそれぞれ刻むもの、-4は貼付突帯を刻み、口縁端部内側に半截竹管による連続刺突を行うもの、-5は口縁端部に連続刺突を施すものである。総じて突帯文土器でも新しい要素を持つものが多い。-6は弥生時代前期の甕であろうか。表裏ともナデ調整のようだが、表面はかなり摩滅している。

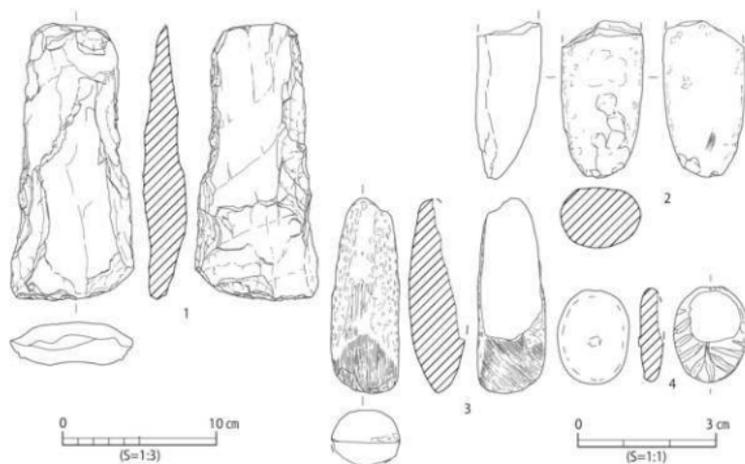
-7～-9は精製の浅鉢である。-7、-8は口縁端部を断面三角形状にまとめるものである。-8には補修孔と思われる焼成後穿たれた孔がある。-9は口縁部が開く大型の浅鉢で、口縁部は平坦に復元した



第86図 H区地床跡02出土遺物(1:3)



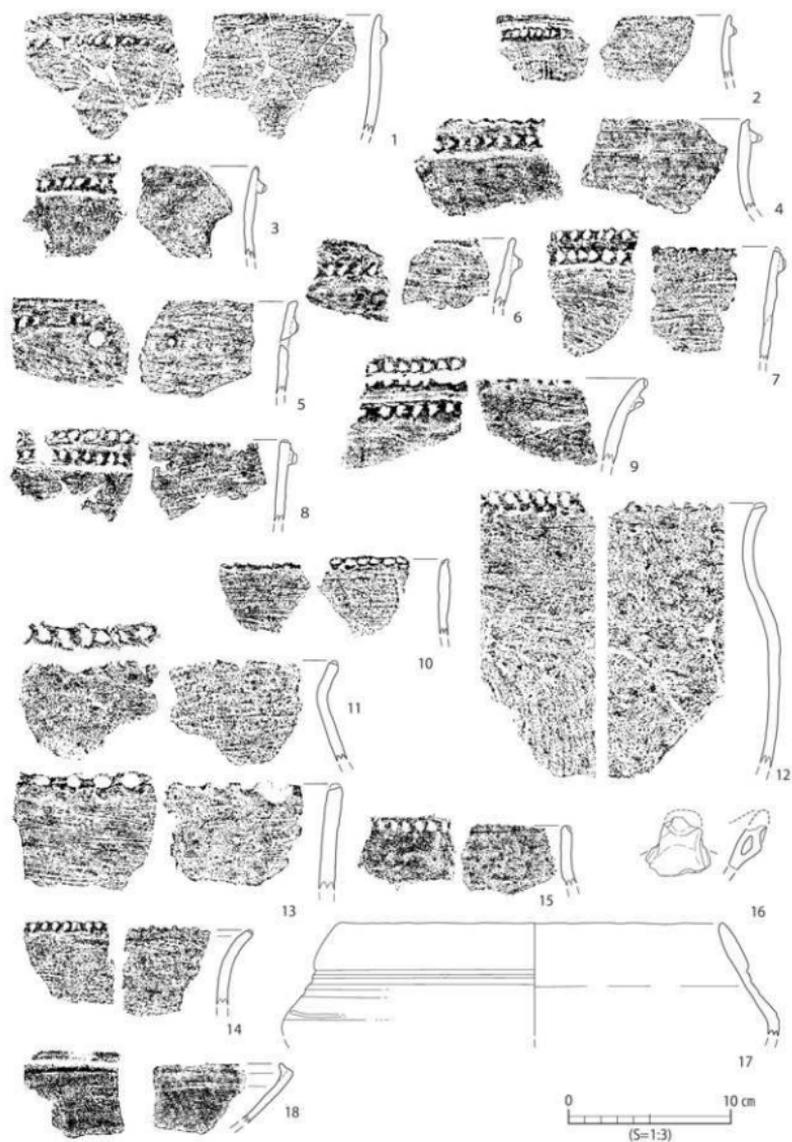
第87図 H区暗青灰色粘質土出土遺物1(1:3)



第88図 H区暗青灰色粘質土出土遺物2(1:1・1:3)

が、緩い波状口縁の可能性もある。口縁部内面は丁寧な横方向のミガキ、本体外面は二枚貝条痕を施す。

88-1は打製石斧で、いわゆる石鎌の範疇に含まれるだろう。-2は粗い敲打痕の残る様子から磨製石斧の未製品と考えられる。柄部が欠損したため放置されたのであろうか。-3は顕著な使用痕の残る磨製石斧の破損品である。-4は縦2.1cm、横1.5cm、厚さ0.5cmと極小サイズの線刻礫で、出土



第89図 I区暗青灰色粘質土出土遺物1(1:3)

時に一部を欠いてしまったが、中心線を境にシメトリカルな斜線を刻んでいる。灰緑色の凝灰岩で、裏面は全く加工されていない。これほど小型の線刻礫は、管見に触れる限りでは他に事例が見つからなかった。護符等の可能性もあるが、詳細は不明である。

89-1～-16は深鉢である。刻目を持つ貼付突帯のみのもの、併せて口縁端部を刻むもの、口縁端部のみを刻むものに大別される。口縁端部のみを刻むものは、肩が張り、口縁部のみが横方向の条痕調整で、外反する傾向が強い。

-15、-16は口縁端部に付く突起と考えられ、肥大させた突起部側面に小穴が貫通している。-7は内傾する口縁部を肥大させた鉢で、胎土も粗い砂質である点が特徴的である。横方向の凹線が入るがはっきりしない。-18はH区出土品にも見られる、口縁端部にアクセントのつく精製浅鉢である。

90-2はガラス質安山岩の刃器で、石斧の破損品を再加工したスクレイパーの類であろうか。-3、-4は磨製石斧の破損品で柄部のみである。-5は白色系凝灰岩の円環で、端部と両面に打痕が残る。-6、-7は石皿の破片で、両面とも使用した痕跡がある。

黒灰色粘質土出土遺物

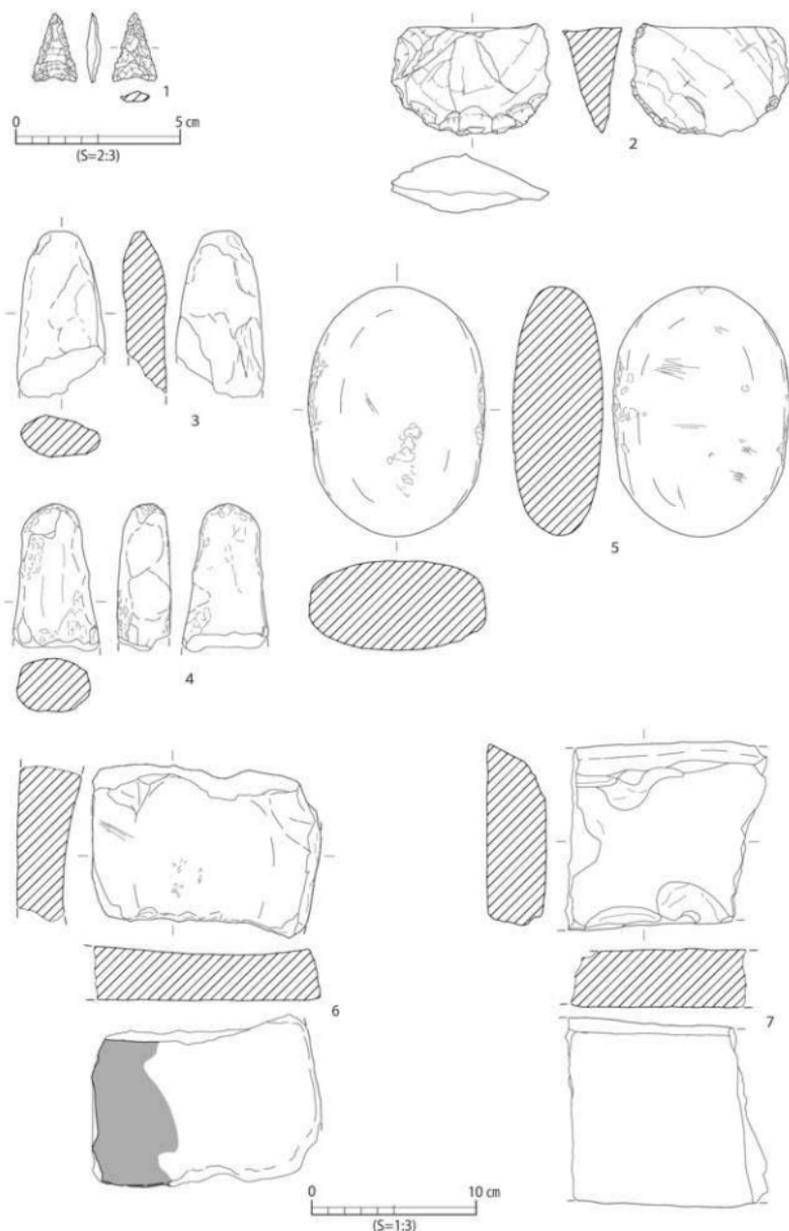
91-1～-4は深鉢の口縁部である。二条突帯のものは皆無で、一条の突帯が付くか、口縁端部を刻むものしか見られない。-5～-9は精製浅鉢で、口縁部が大きく開くものと、内傾するものがある。口縁部は丁寧なミガキ、本体部外面は粗い条痕調整を基本としている。前者は緩い波状口縁を持ち、口縁端部を玉縁状にしたり、刻目を施す場合がある。後者は浅鉢としては深めの器形を探ることが多いようだ。

92-1は表面の二枚貝条痕が目立つ粗製の鉢で、焼成時の影響かかなり歪んでいる。-2は口縁端部内面に沈線を持つ精製刃器で、器形は不明だが浅鉢の口縁部である可能性もある。3は石器素材であろうか、頁岩の大型剥片である。古屋敷遺跡では頁岩製品自体が少ないが、材質が均一でなく、あまり良い石材のものではない。-4～-11は泥質片岩～塩基性片岩からなる石器の一群で、-4は挟りのある石斧の破損品だが、再加工を施した痕跡がある。石鎌のような使用方法も考えられる。-5～-8は石斧やその破損品で、-6は両側縁の押圧剥離が目立つものの、先端部にはそれに先行する摩滅が見られ、層状に薄く剥離した石斧破損品を再加工したもののようである。-9、-10は柄部に粗い敲打痕が残っており、未製品かもしれない。-11は石材や加工の様子こそ他の磨製石斧に似るが、断面形が円形に近く、細身である点に違和感がある。石棒の可能性も捨てきれない。-12は剥片、おそらく石斧の破損品を再加工した刃器である。-13は石錐破損品だが、これも石斧破片の再加工品である可能性が高い。

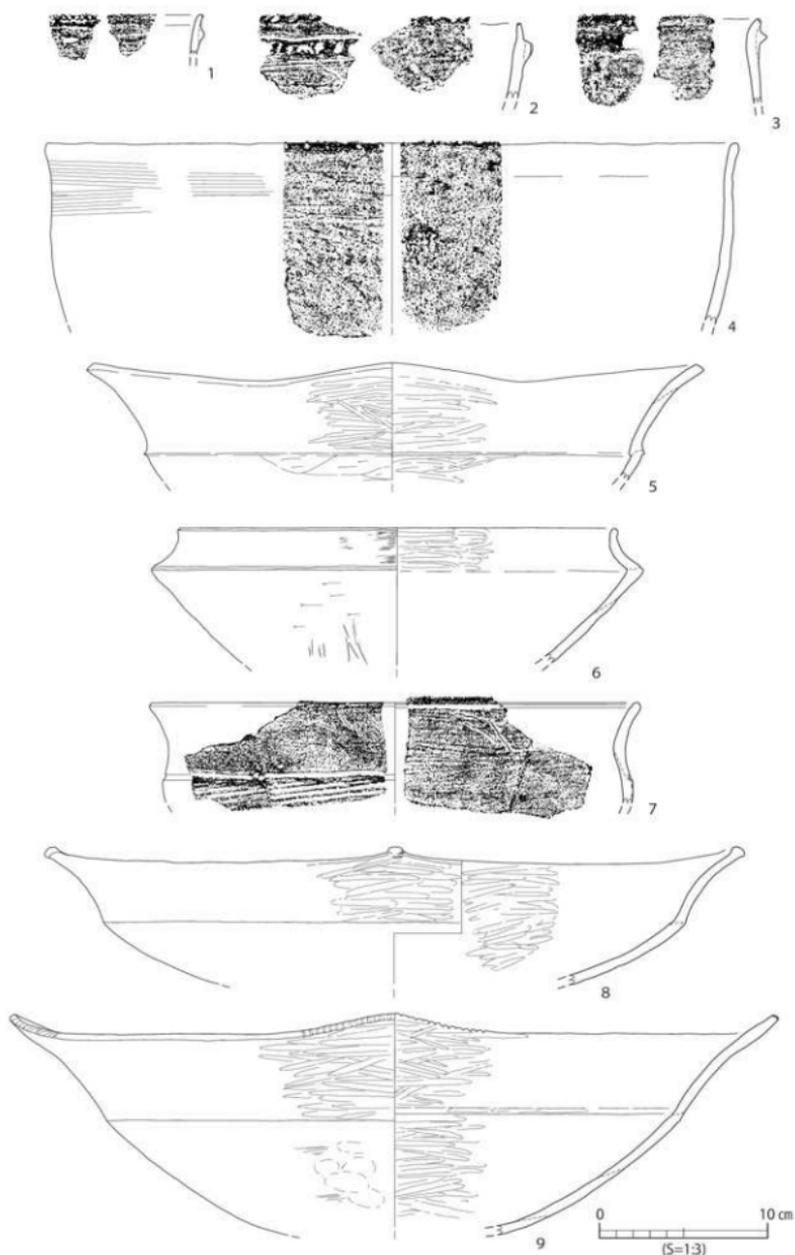
93-1～-3は敲石・摺石類である。古屋敷遺跡出土品で多く見られるように、-2、-3はきれいに半裁されている。-4、-5は石皿の破片である。-6、-7は白色系凝灰岩を用いた刃器で、部分的に敲打痕が残る。

94-1～-7は粗製の深鉢で、一条突帯が付くもの、さらに口縁端部を刻むもの、突帯を伴わないものがある。-2は口縁内面にも、端部から少し離れて連続刺突が施され、異彩を放っている。-7は口縁部が内湾する鉢で、粗い二枚貝条痕調整である。-8、-9は精製の浅鉢で、口縁端部に段を付けたり玉縁を付けるタイプである。

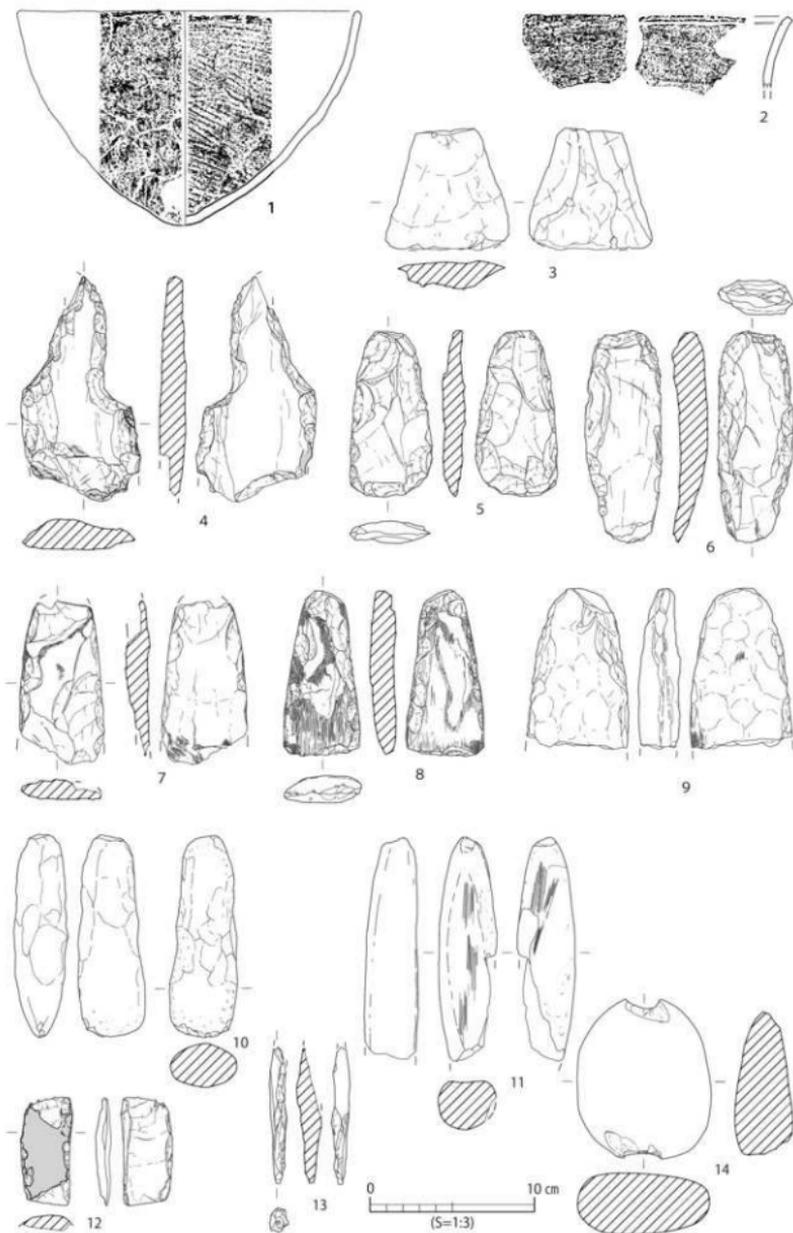
-10～-12は剥片石器を並べた。-11は石匙で、使用に伴うと考えられる光沢が両面とも見られる。-12は両面調整の刃器で、もう少し幅があったようだが、両端を欠いている。-13は厚みのある緑色



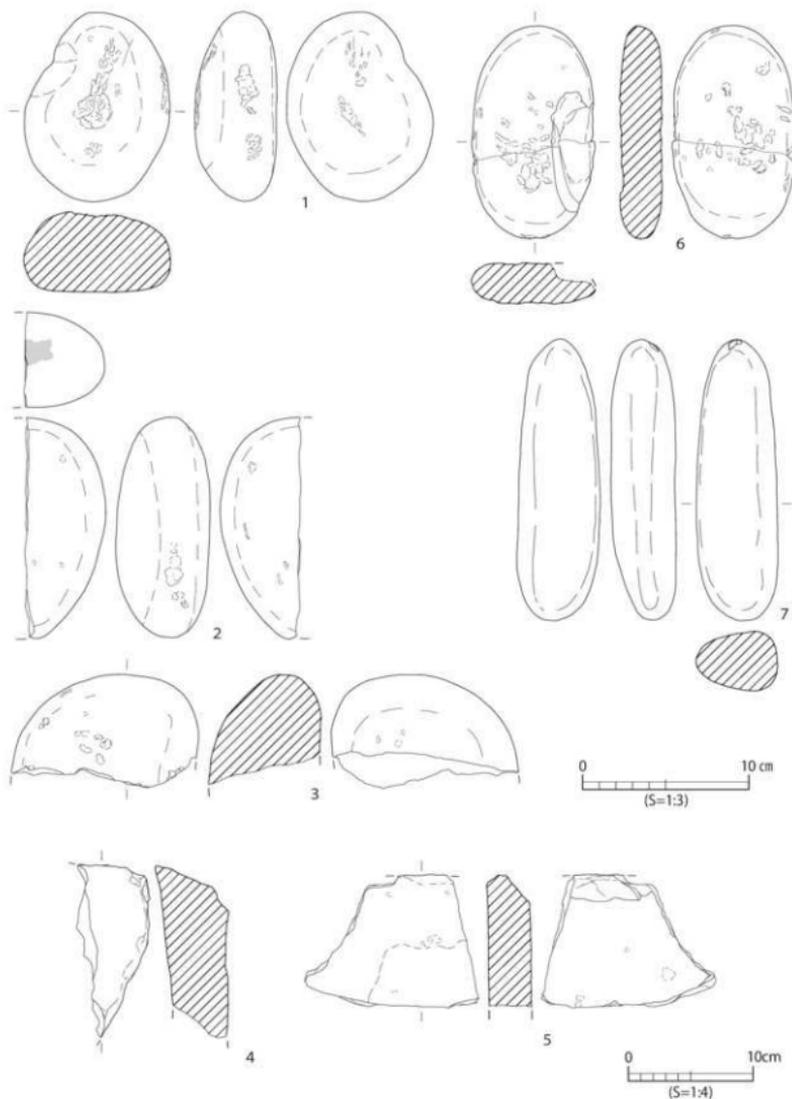
第90図 Ⅰ区暗青灰色粘質土出土遺物2(1:3・2:3)



第91図 H区黒灰色粘質土出土遺物1(1:3)

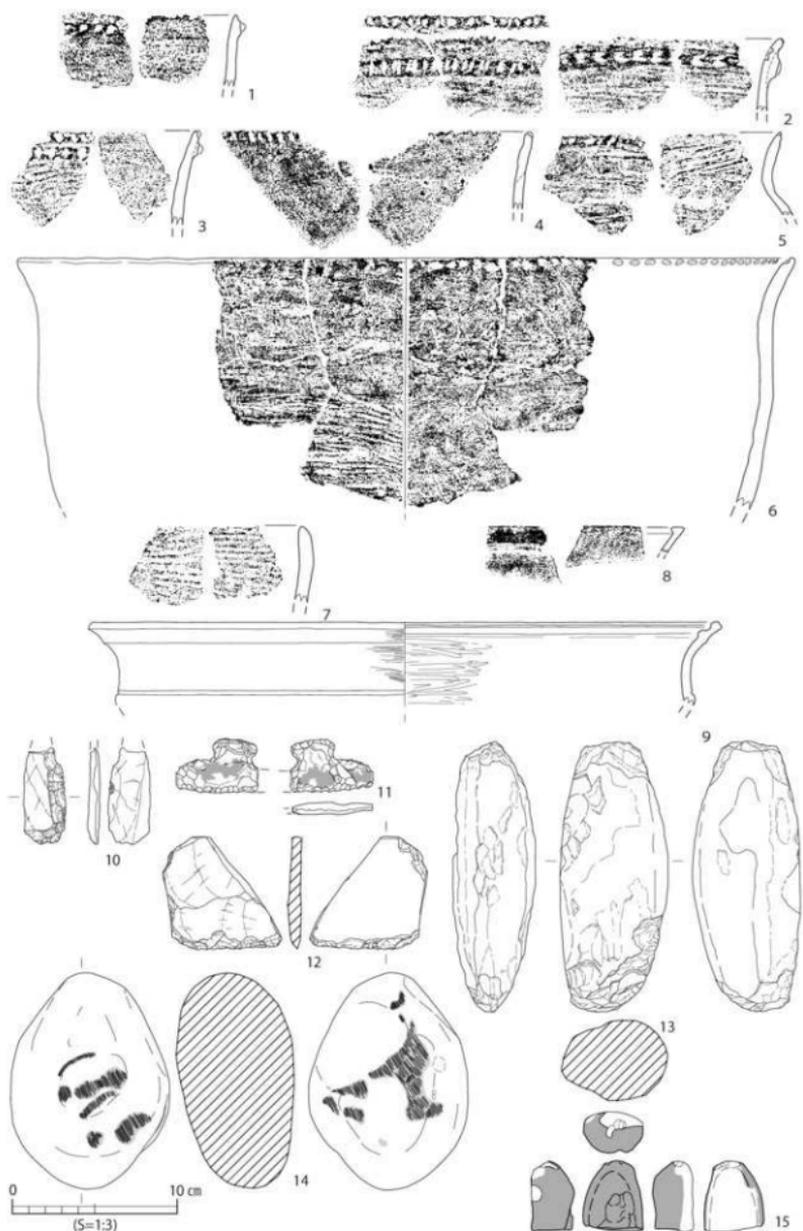


第92図 H区黒灰色粘質土出土遺物2(1:3)

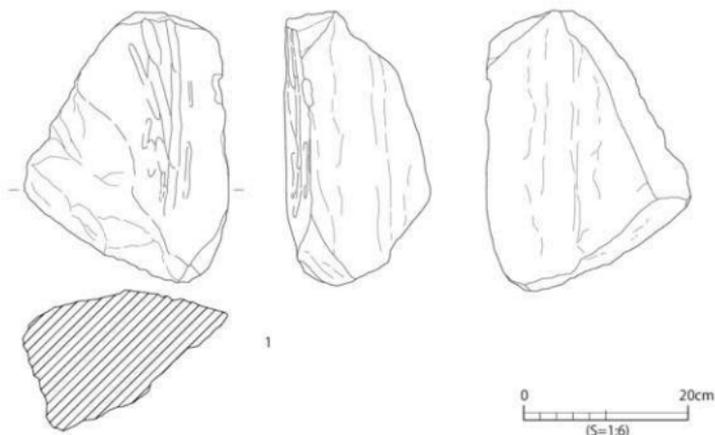


第93図 H区黒灰色粘質土出土遺物3(1:3・1:4)

片岩～塩基性片岩の塊で、粗い敲打痕が見られること、一端を薄く加工している様子が見られることから石斧の未製品である可能性が高い。-14は凝灰岩の円礫で擦痕が目立つ。-15は被熱痕跡の目立つ凝灰岩で、半裁されている。



第94図 Ⅰ区黒灰色粘質土出土遺物1(1:3)



第95図 I区黒灰色粘質土出土遺物2(1:6)

95-1はI区拡張区に単独で出土した人頭大の礫で、一面に溝が切られている。溝は緩い弧を描いて残され、溝内には連続する擦痕も見えることから、比較的長いストロークをもって擦られていたことが分かる。一見して玉砥石のようだが、古屋敷遺跡で数多く出土している石斧類の研磨に用いられた可能性もある。石材は目の粗い凝灰岩で、石皿などに用いられているものと同質であり、近隣から持ち込まれた可能性が高い。

4. 第3遺構面の調査(第96図)

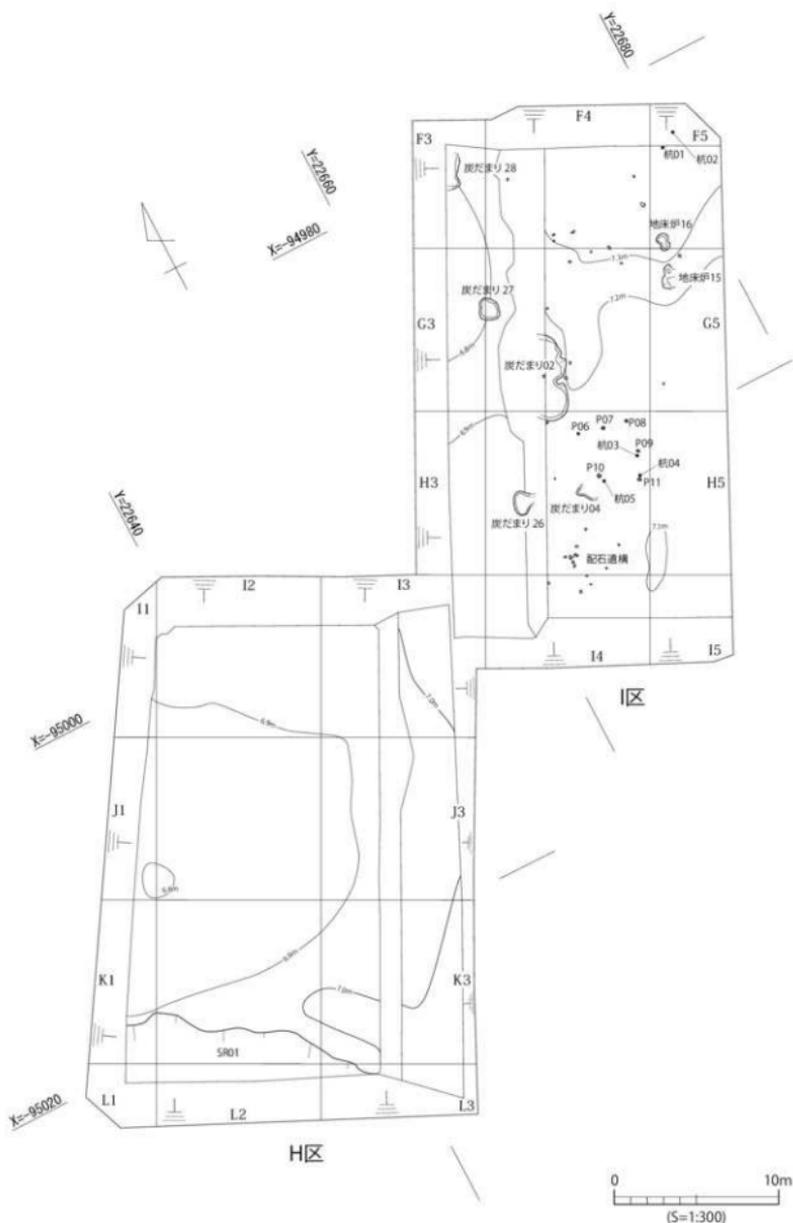
第3遺構面は、黒灰色粘質土を除去した面であり、I区東端で標高約7.3m、H区西端で標高約6.7mである。地床礫と炭だまり、ビット群が検出されているが、第2遺構面に比べ密度は低い。H区には明確な遺構が全く確認できず、全てI区側に偏っている。

注目されるのは、I区南側に小規模ながら配石遺構が見つかった点である。古屋敷遺跡内では、自然堆積した礫や大型の角礫は基本的に存在しないため、出土する礫は何らかの目的意識を持って人為的に持ち込まれたものと考えられる。この遺構面ではI区拡張部北側にも同じようなサイズの角礫が点在しており、同様に何らかの意図を持って持ち込まれた可能性がある。

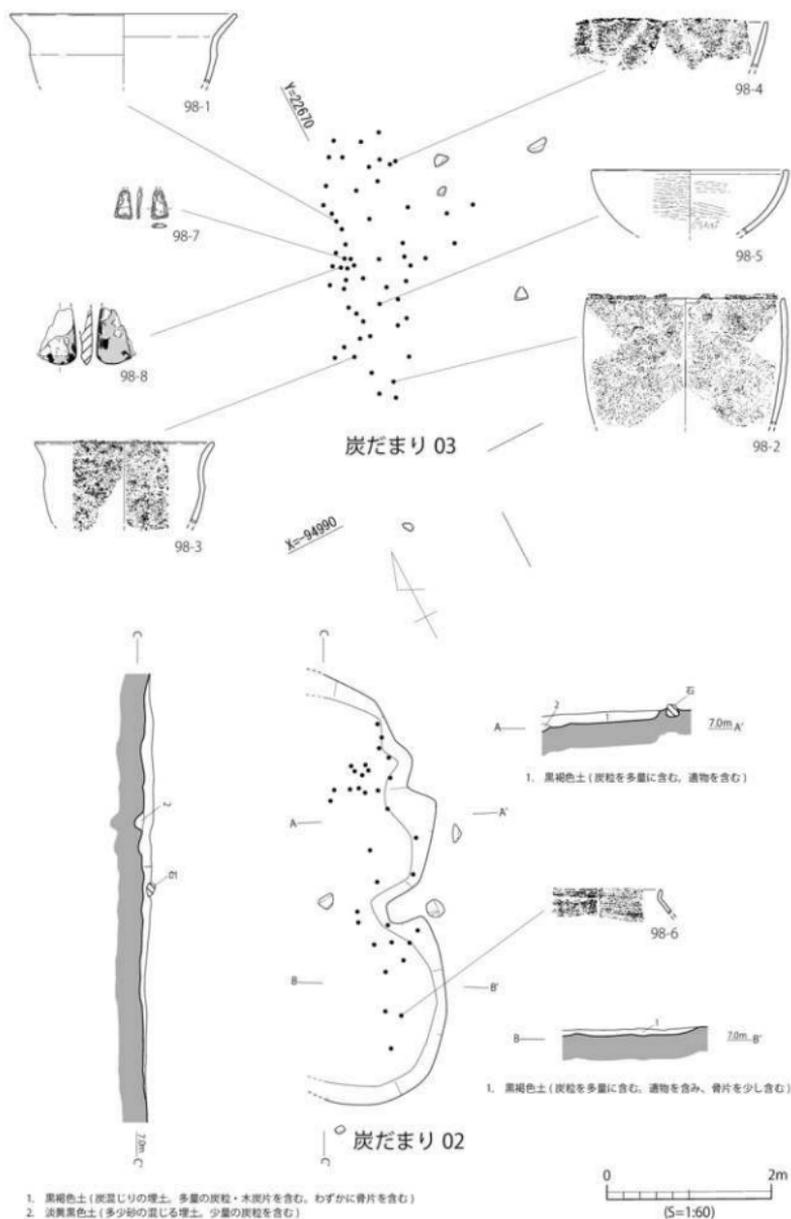
またビット群の中には柱根が残っているものが5カ所見られた。いずれも明確な堀方を持たず、木材を直接打ち込んだものと考えられる。

I区炭だまり02・03(第97図)

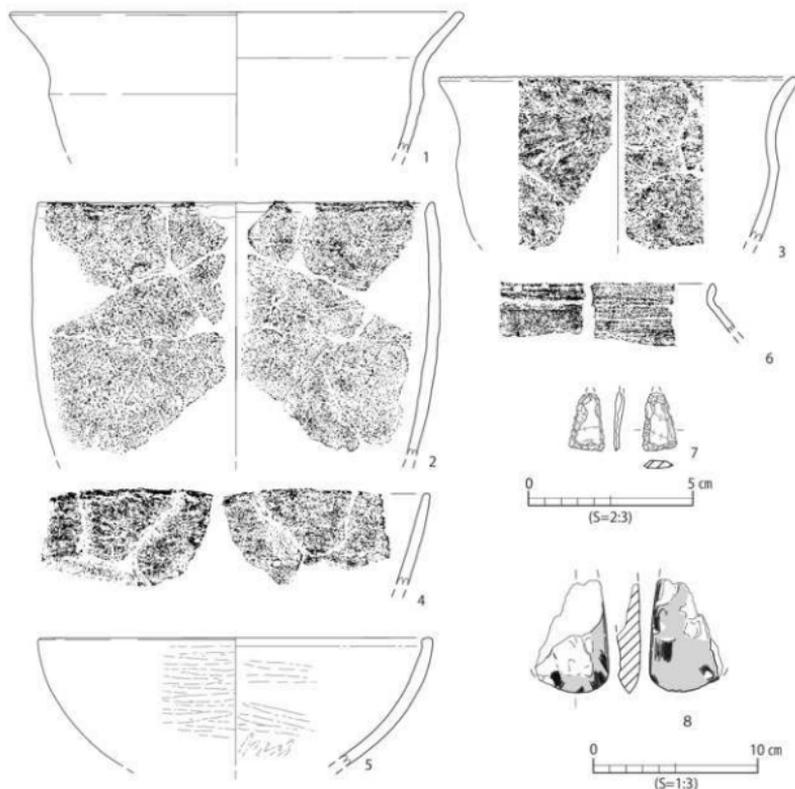
炭だまり02は、G4グリッドを中心に、南北幅約7m、東西幅約4mの範囲に広がる遺構である。ちょうど調査区本体部分と拡張区に分断されてしまったこともあり、全容がつかみ難しくなったが、木炭粒を多量に含む埋土が堆積している。明確な堀方は確認できず、自然に凹んだ土地に埋土が溜まったものと考えられる。炭だまり03は、当初土器だまりと認識して調査を進めていたが、基本的には南側に隣接する炭だまり02と同様の遺構と判断した。この遺構も明確な床面や堀方を持たず、遺物が散在している。



第96図 H・I区第3遺構面遺構配置図(1:300)



第97図 I区炭だまり 02・03(1:60)



第98図 I区炭だまり 02・03 出土遺物 (1:3・2:3)

I区炭だまり 02・03 出土遺物 (第98図)

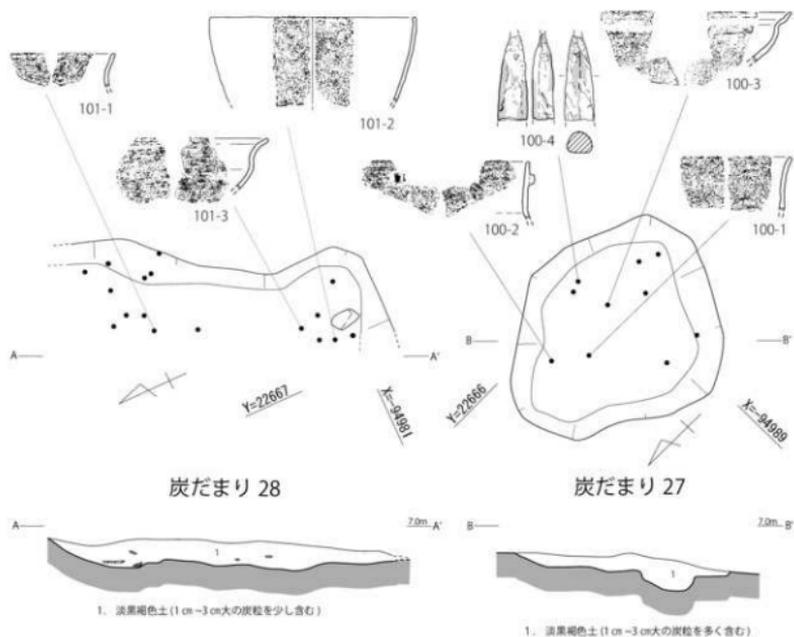
98-1～-3は粗製の深鉢で、貼付突帯も刻目も持たない一群である。口縁部が外反するものと、直線的に立ち上がるものがある。-4、-5は鉢類、-6は内傾する口縁を持つ精製浅鉢である。-8はよく研磨された磨製石斧の刃部で、部分的に使用痕が残り、刃部先端は一部が摩滅している。

I区炭だまり 27・28 (第99図)

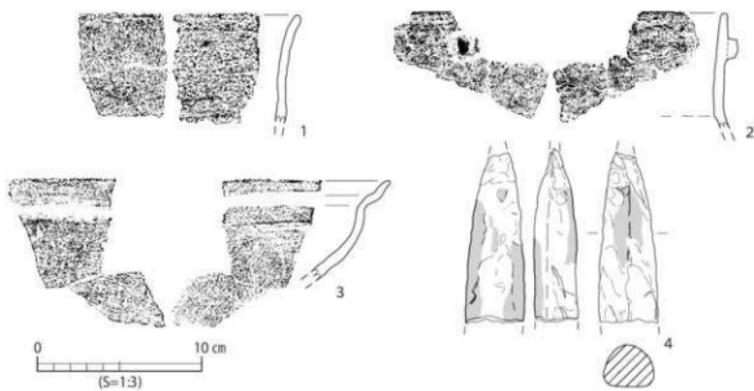
I区拡張区北側で検出した炭だまりで、炭粒を多く含む埋土が一層堆積しただけの遺構である。図上では下端のラインを入れているが、実際には他の炭だまりと同様に緩やかに底面に溶け込んでおり、人為的に掘り込んだものではないだろう。出土遺物も完形に復元できるものがない。

I区炭だまり 27・28 出土遺物 (第100、101図)

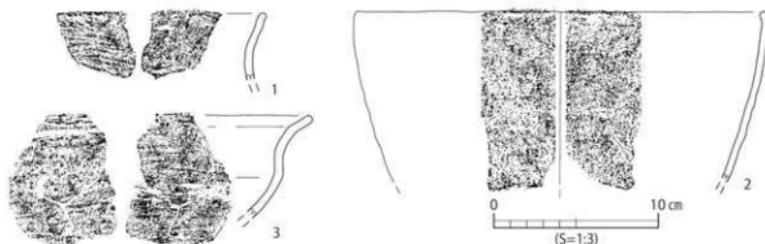
炭だまり 27の主な出土遺物には、粗製深鉢、精製浅鉢、石器類がある。100-1は貼付突帯を持た



第99図 I区炭だまり27・28(1:20・1:30)



第100図 I区炭だまり27出土遺物(1:3)



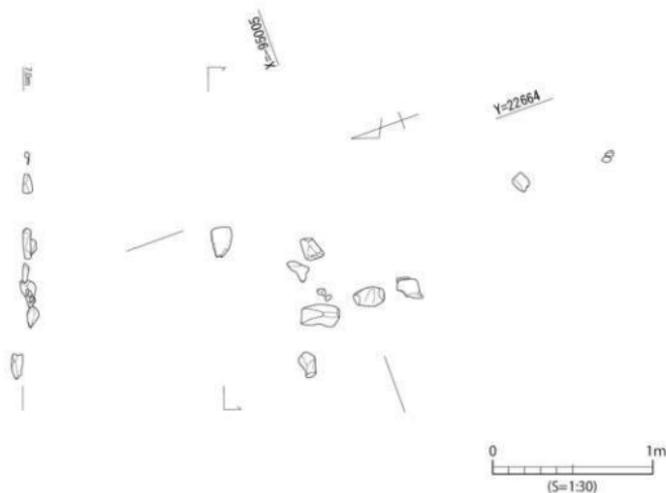
第101図 I区炭だまり28出土遺物 (1:3)

ない深鉢、-2は口縁端部から離れた貼付突帯を持つ深鉢で、突帯末期初頭頃に位置づけられる。-3は口縁下端に明確なくびれを持つ精製浅鉢で、口縁端部は水平に復元したが、わずかに波状をなす可能性がある。同様の浅鉢が隣接するF区第2遺構面で出土しているが、この一群は突帯末期直前の様相を示しており、近い時期を想定できそうである。

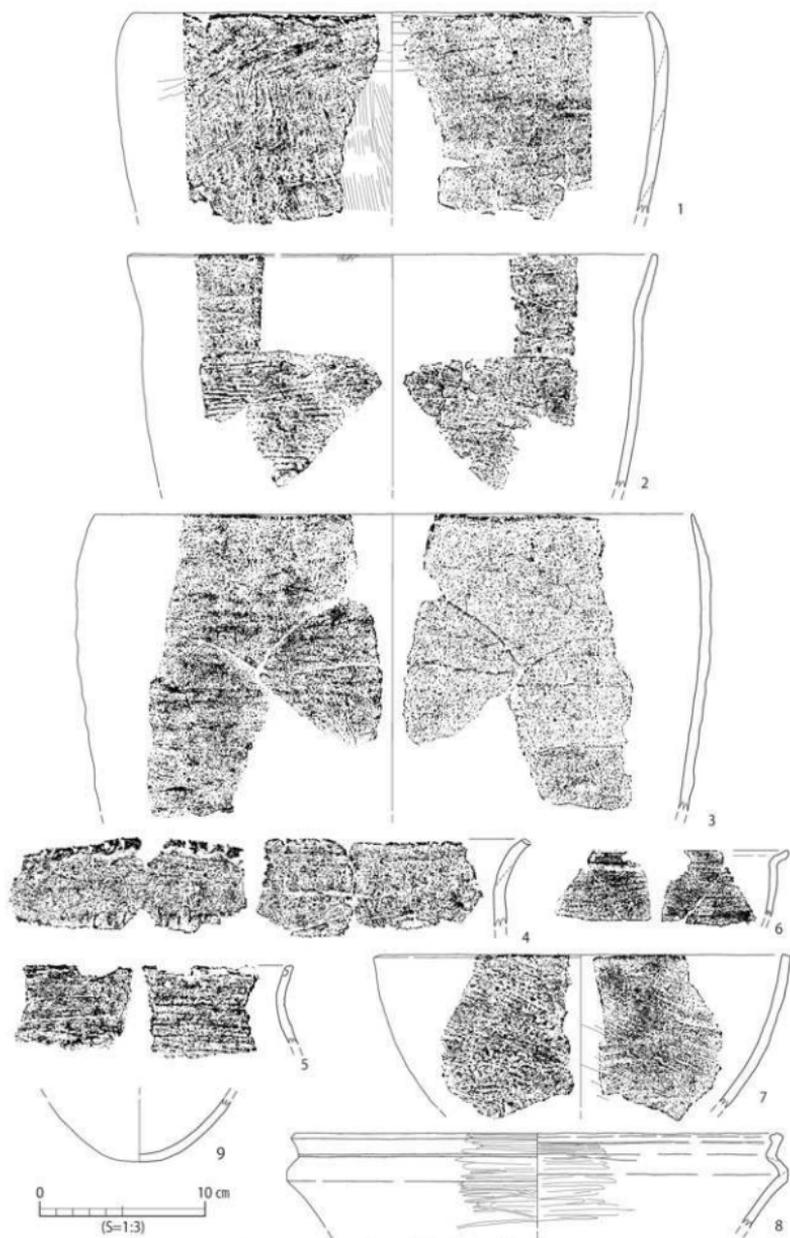
炭だまり28では深鉢と浅鉢が出土している。101-1は口縁部が外反する粗製深鉢で、-3も浅鉢としているが、同様に肩が張り、口縁部が外反する深鉢かもしれない。-2は口縁端部が若干内湾する砲弾型の深鉢である。

配石遺構 (第102図)

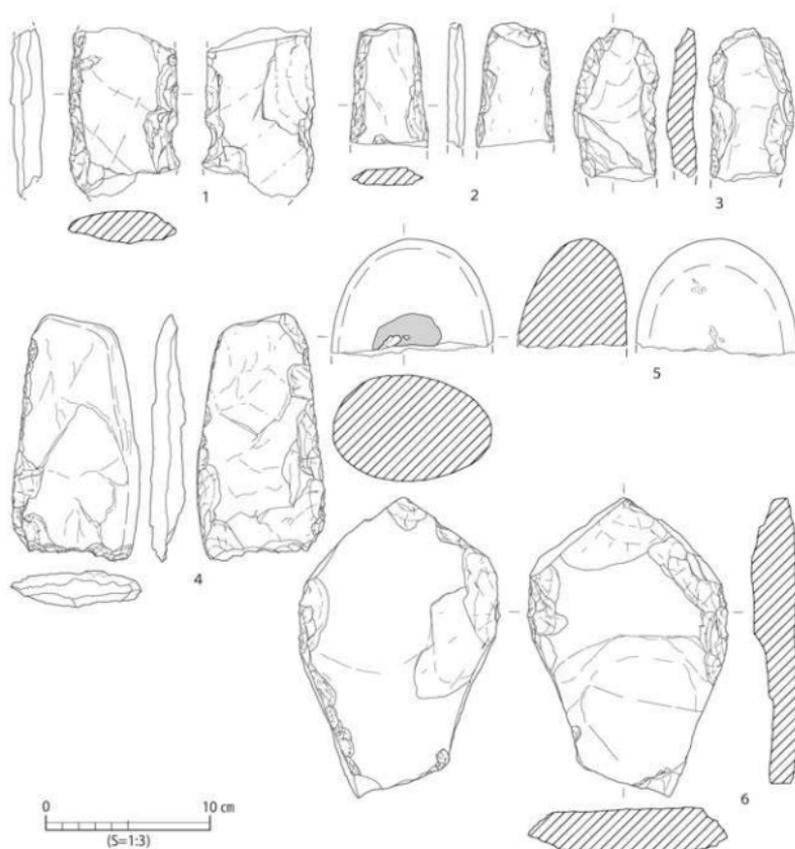
H4グリッドを中心に出土した角礫群で、約3×2mの範囲に計12個の礫で構成されるこじんまりとしたものである。ほぼ南北方向に並べられた4個の礫が一回り大きく、その北側に数個の礫がまとまって並んでいる。南側に少し離れて2個の礫がある。既に指摘してきたとおり、古屋敷遺跡の遺構面で出土する礫は人為的に持ち込まれたものと考えられ、これらの礫も何らかの意図を持って持ち込



第102図 I区配石遺構 (1:30)



第103図 H区第3遺構面出土遺物I(1:3)



第104図 H区第3遺構面出土遺物2 (1:3)

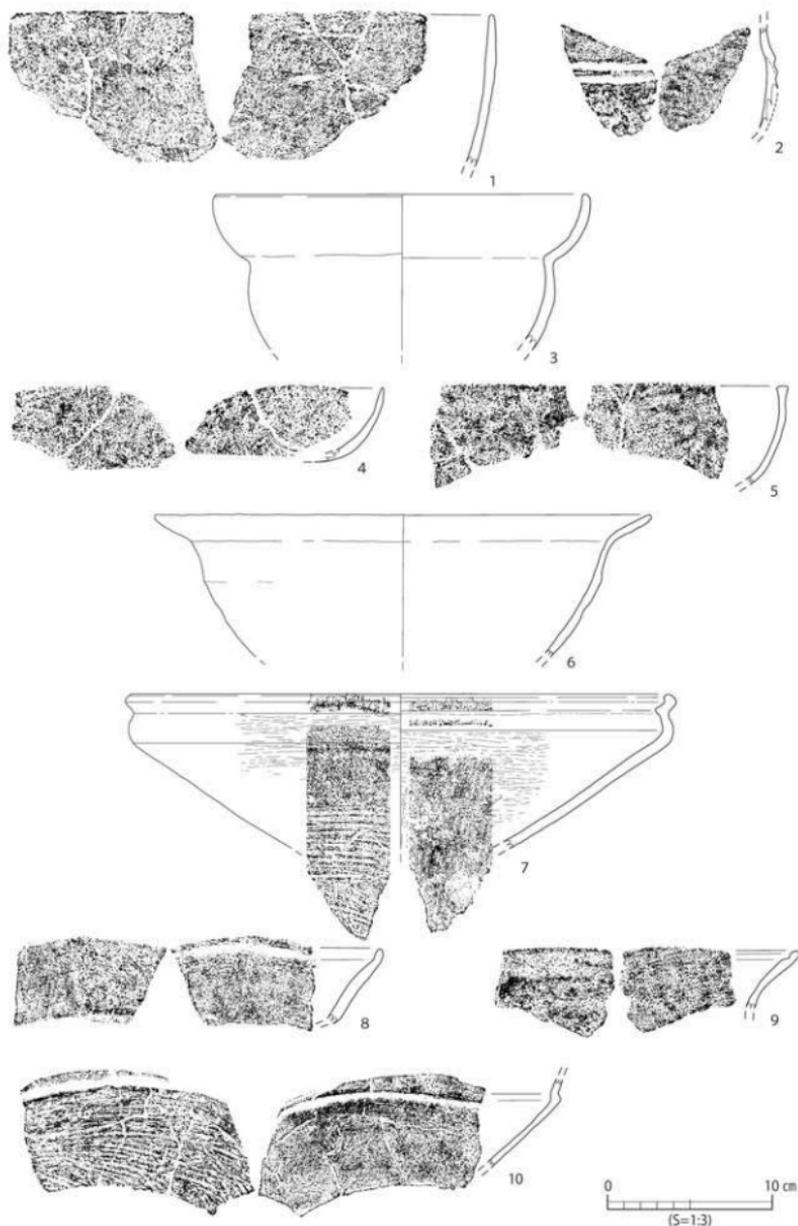
まれたと想定できる。出土面に明確な被熱痕跡はなく、直下に土坑などの造作も存在しない。また共伴する遺物もなかった。

第3遺構面出土遺物 (第103～108図)

第3遺構面直上の黒色粘土層出土の遺物群である。103-1～-5は、H区出土の粗製深鉢である。貼付突帯を持つものは見られなくなり、器形は肩が張り口縁部が外反するものと、口縁部がわずかに内湾するものがある。前者は外反する口縁部に横方向の条痕調整を用いるが、後者は個体差がある。また、前者は口縁端部をナデて平坦面を作ったり、これを刻む場合がある。-5は口縁端部内面に刺突を加えている。-6～-8は精製浅鉢である。-6は口縁端部にアクセントが付く個体で、比較的底の深いボール状のものと考えられる。-8は口縁部が二段に屈曲する個体で、端部は面取りを施して玉縁を作り出す。



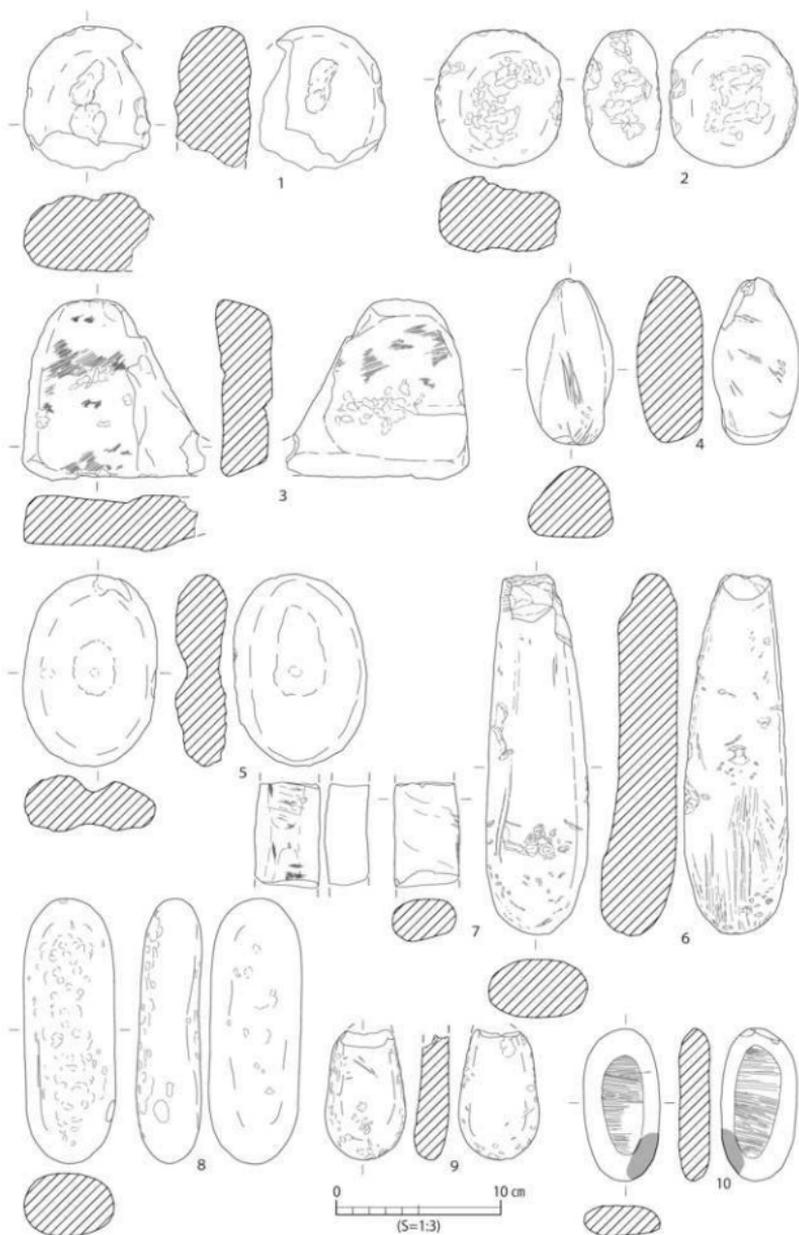
第105図 1区第3遺構面出土遺物1(1:3)



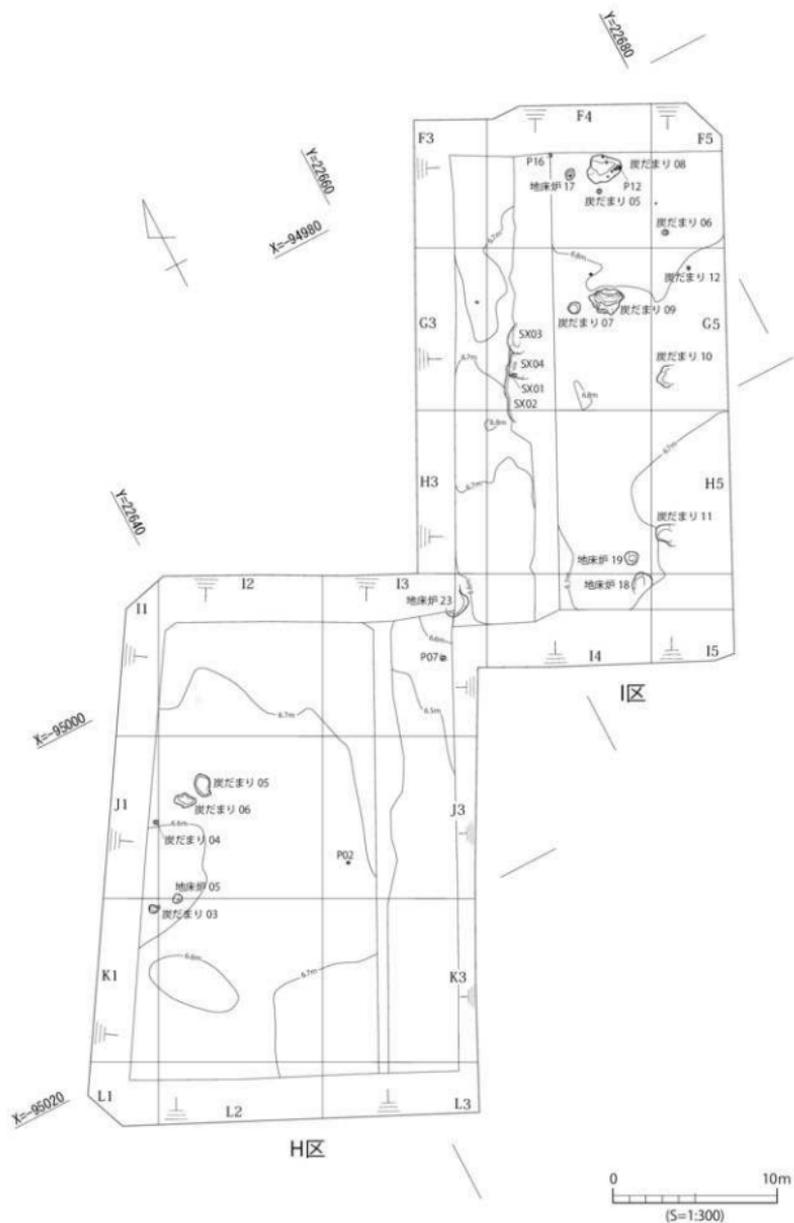
第106図 I区第3遺構面出土遺物2(1:3)



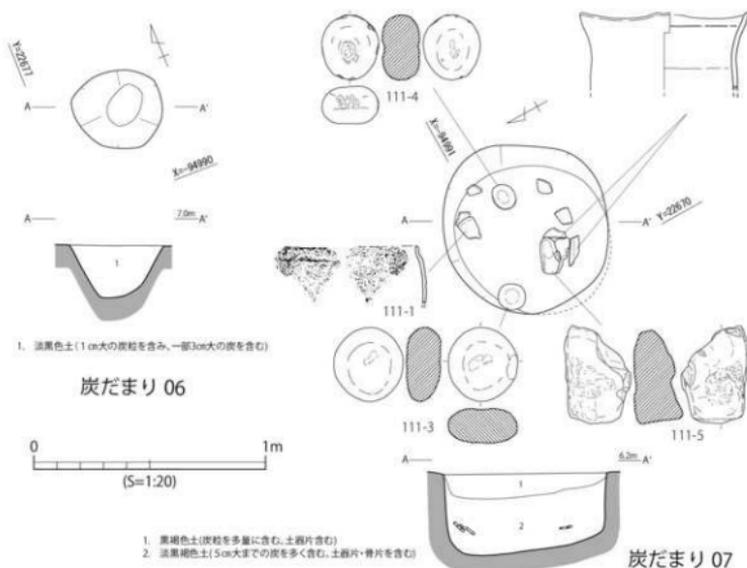
第107図 Ⅰ区第3遺構而出土遺物3(1:3)



第108図 I区第3遺構面出土遺物4(1:3)



第109図 H・I区 第4遺構面遺構配置図(1:300)



第110図 I区炭だまり(SK)06・07(1:20)

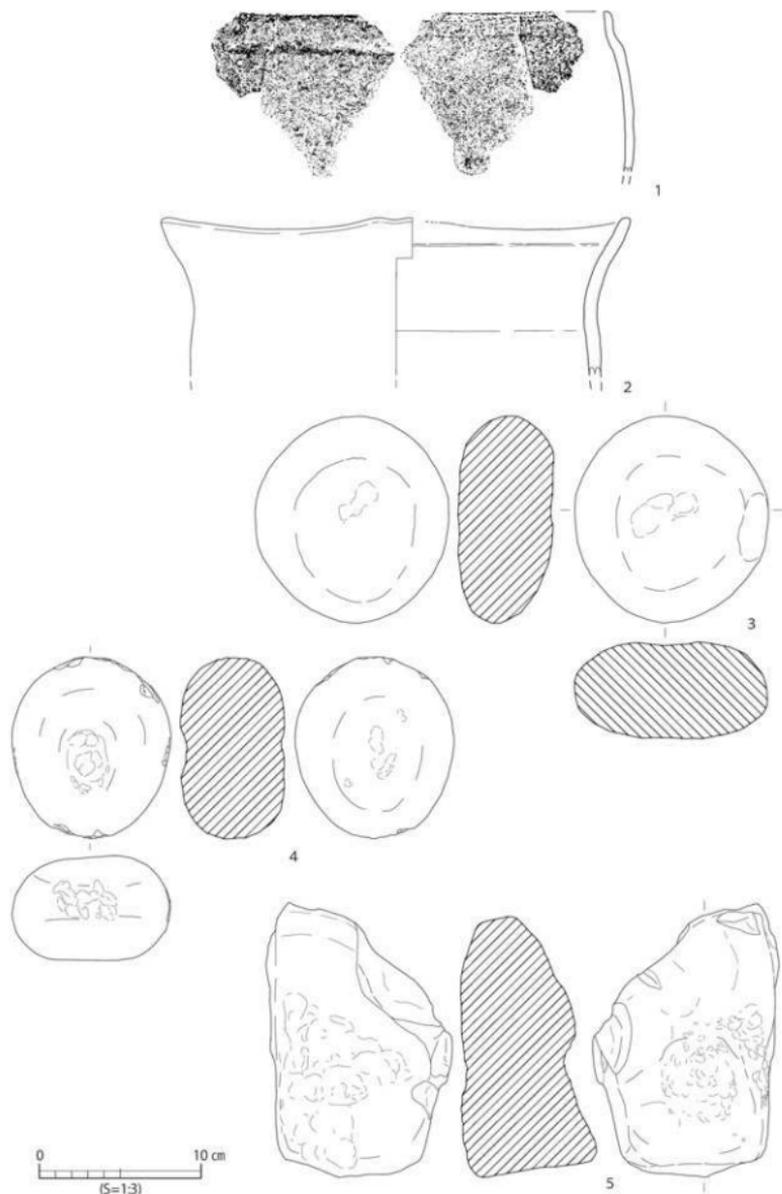
5. 第4遺構面の調査

第4遺構面は、青灰色粘質土を除去した面で、H区で標高約6.5～6.7m、I区で約6.6～6.8mである。他の遺構面と異なり微妙なニュアンスで凹凸があるようで、単純な西向き傾斜地ではない。

第4遺構面では、地床炉と炭だまり、若干数のピットを検出した。遺構の分布は西側と東側の二群に分かれているように見える。地床炉はH区で1ヶ所、I区で4ヶ所の計5ヶ所検出した。炭だまりはH区で4ヶ所、I区で7ヶ所確認したが、I区炭だまり06、07のように実際に掘削してみると、明確な堀形を持つものがあつた。これらはむしろ土坑とすべきであつたので、本書では炭だまり(SK)と呼称しておく。また、I区ではSX01～04が連続して検出されたが、東半部は拡区掘削前の排水溝として、先行して掘り下げてしまっており、全体像を把握できなかった。土層堆積状況や出土遺物の状況を見る限り、個々の独立した遺構ではなく一連の堆積と考えられ、南北約6m、東西約2mを超える規模の炭だまりと考えられる。

I区炭だまり(SK)06、07(第110図)

炭だまりとして検出した中でも、比較的はっきりした深さのある堀方を持つ遺構である。炭だまり(SK)06は断面V字形の遺構で、埋土は一見して黒色に近く、一部には3cm大までの炭を含む。炭だまり(SK)07はタライ状に掘り込まれた土坑で、西側が若干オーバーハングしているのが特徴である。埋土のうち下層は5cm大までの炭を非常に多く含み、粗製深鉢類と擦石・礫石類が3点含まれていた。うち111-5は敲打痕、擦痕の顕著な凝灰岩で、非実用品である可能性が高い。いずれの遺物も底面から15～20cm程度高い位置に集中していたが、これより下層を分層できなかった。出土状況から、



第111図 Ⅰ区炭だまり06・07出土遺物(1:3)

遺物にある程度の一括性は認められるところだが、2個体ある深鉢の破片が揃わないこと、111-1の個体は炭だまり(SK)06の小破片と接合することなど、気になる点もある。

I区炭だまり(SK)06・07出土遺物(第111図)

111-1の粗製深鉢は、炭だまり(SK)06・07出土の破片が接合する。口縁部は若干内湾し、端部外面を横方向に強く撫で付けて軽く段を付ける。-2は緩い波状口縁を持つ粗製深鉢である。

-3、-4は敲石・擦石類で、円礫の両面中央部と外周部に敲打痕が顕著に残る。はっきりと面的に擦られた部分は見当たらない。-5は敲打痕が目立つ白色系の凝灰岩である。部分的に擦痕が見え、やや厚みが薄くなっている一端が、切削されている可能性が高い。

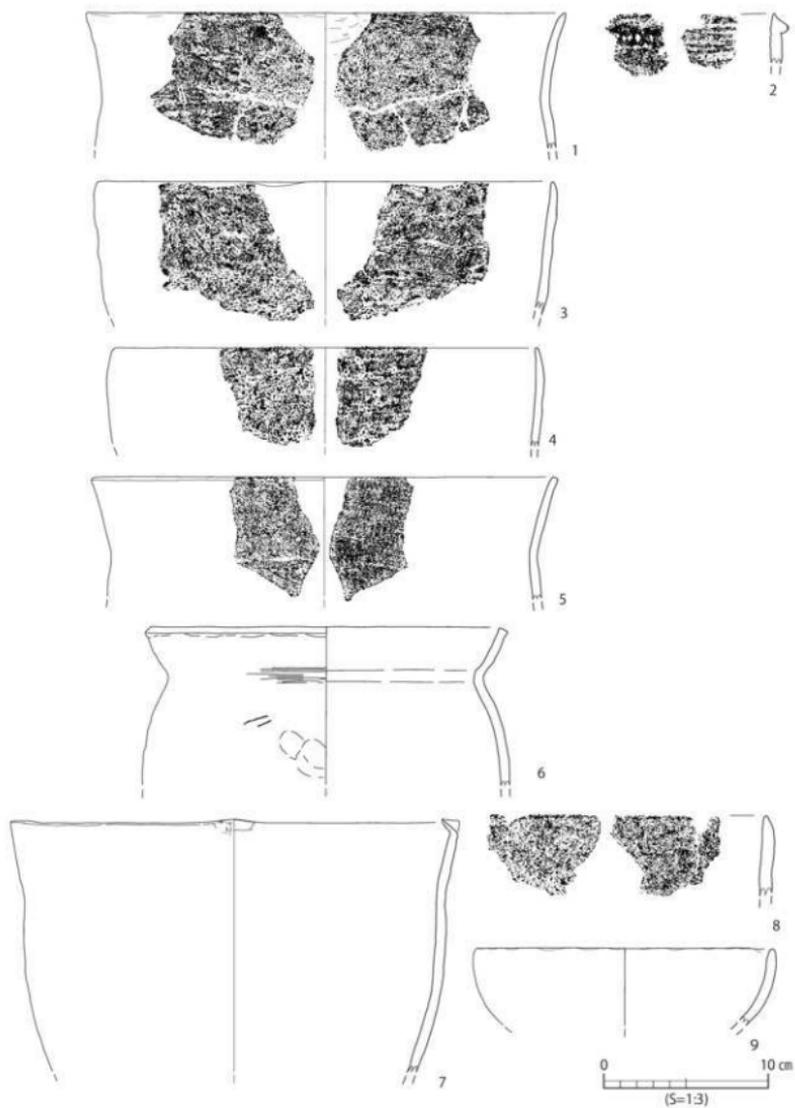
第4遺構面出土遺物(第112～114図)

第4遺構面直上の青灰色粘質土で出土した遺物を並べた。

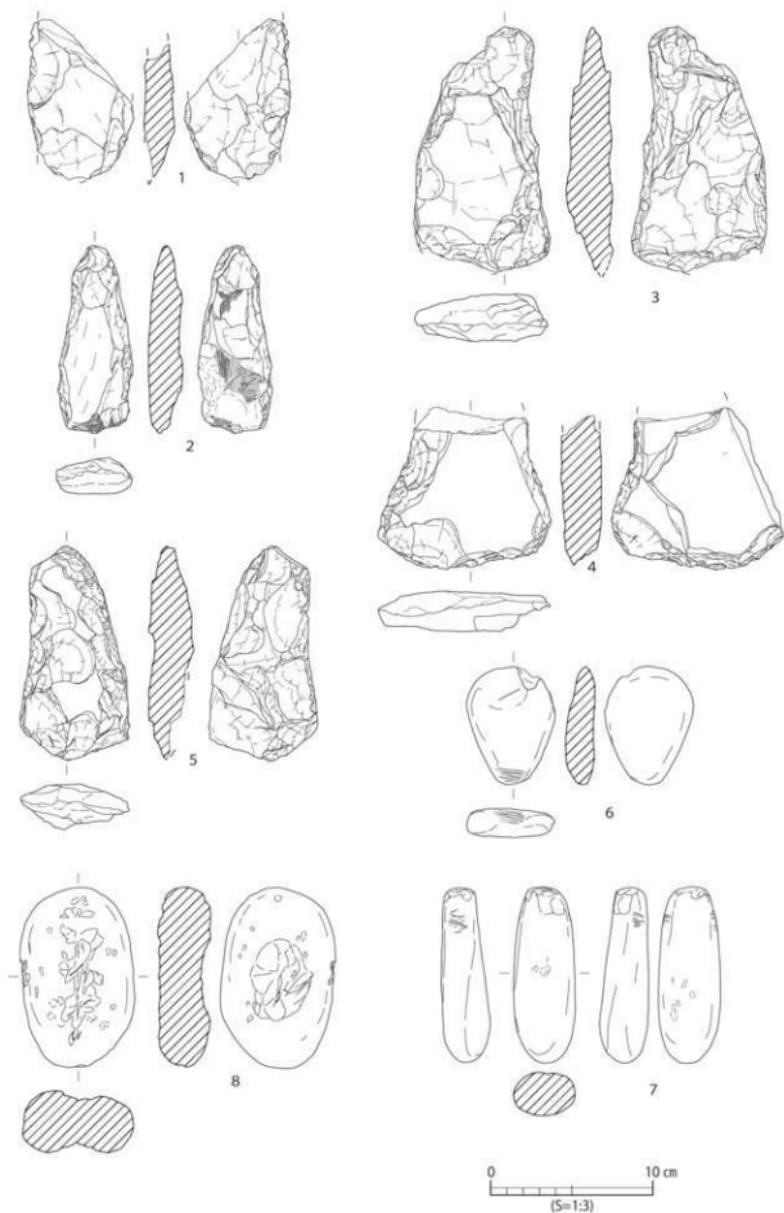
第112、113図はH区で出土した遺物群である。112-1～8は粗製の深鉢類である。-1、-5、-7は口縁部が外反するもので、この部分のみ横方向のナデ調整を施す。より後出の深鉢に見られる二枚貝条痕による調整は用いられておらず、口縁部の屈曲は緩い。-7は口縁端部を部分的に内側に折り返し、アクセントを付けている。-6は口縁部が直線的に外傾する深鉢で、口縁端部にはっきりと面を作る。-2は口縁端部外面に刻目突帯を持つ小片で、上層の遺物が紛れ込んだ可能性が高いが、掲載しておく。-3、-4、-8は口縁端部を細めてわずかに内湾させる粗製深鉢である。これらの深鉢もナデ調整を基本とする。-9はボール状の浅鉢で、口縁端部を細めているが、整形がやや雑である。

113-1～5は泥質片岩～塩基性片岩系の打製石斧類である。-1は石斧の柄部が破損した後、両側縁を再加工してスクレイパーとしたもの。石斧刃端部の欠損は使用時のものか、再加工時のものか分からない。一部に顕著な使用痕が残る。-2は部分的に擦痕が残る石斧で、刃端部には使用痕が残る。-3、-4は大型の石斧で、いわゆる石鎌であろうか。-5も刃端部を欠く石斧である。-6～8は白色の凝灰岩製石器類で、-6、-7は線刻礫の一種か。局所的に線条痕が入るが、方向がバラついており、単純な往復摩擦運動によって付いたものではない。-7は一端や中央部に敲打痕が残るのも注目される。-8は扁平な円礫の両面中心部と外側縁に敲打痕を残すものである。

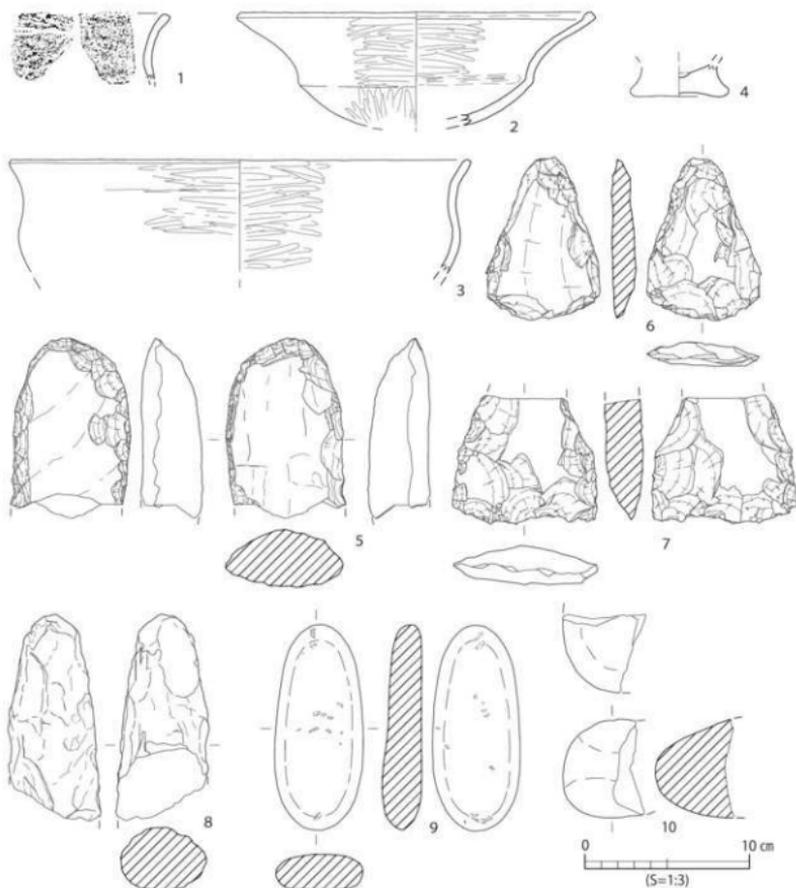
第114図にはI区で出土した遺物を並べた。-1は外反する深鉢の口縁部で、端部に面を作る。112-6のような形状かもしれない。-2、-3は口縁部が外反する精製浅鉢で、-2は口縁端部内面に段を作る。鉢本体は縦方向のミガキ、口縁部は横方向のミガキを使い分ける。-3は明確な屈曲部を持たず、横方向のミガキで整形する。-4は小型の土器に付属すると思われる低脚である。-5は石斧の未製品で、柄部が破損したものである。形態的には磨製石斧を目指したものか。-8も粗い敲打段階で刃部側を破損した未製品である。-6、-7は安山岩製の打製石斧である。-9は白色系の凝灰岩製石器で、一部に敲打痕が残る。-10は表面がツルツルに研磨された流紋岩の円礫で1/4程度まで破砕されている。明瞭な打点は確認できず、破砕方法は定かでない。



第112図 H区第4遺構而出土遺物1(1:3)



第113図 H区第4遺構而出土遺物2(1:3)

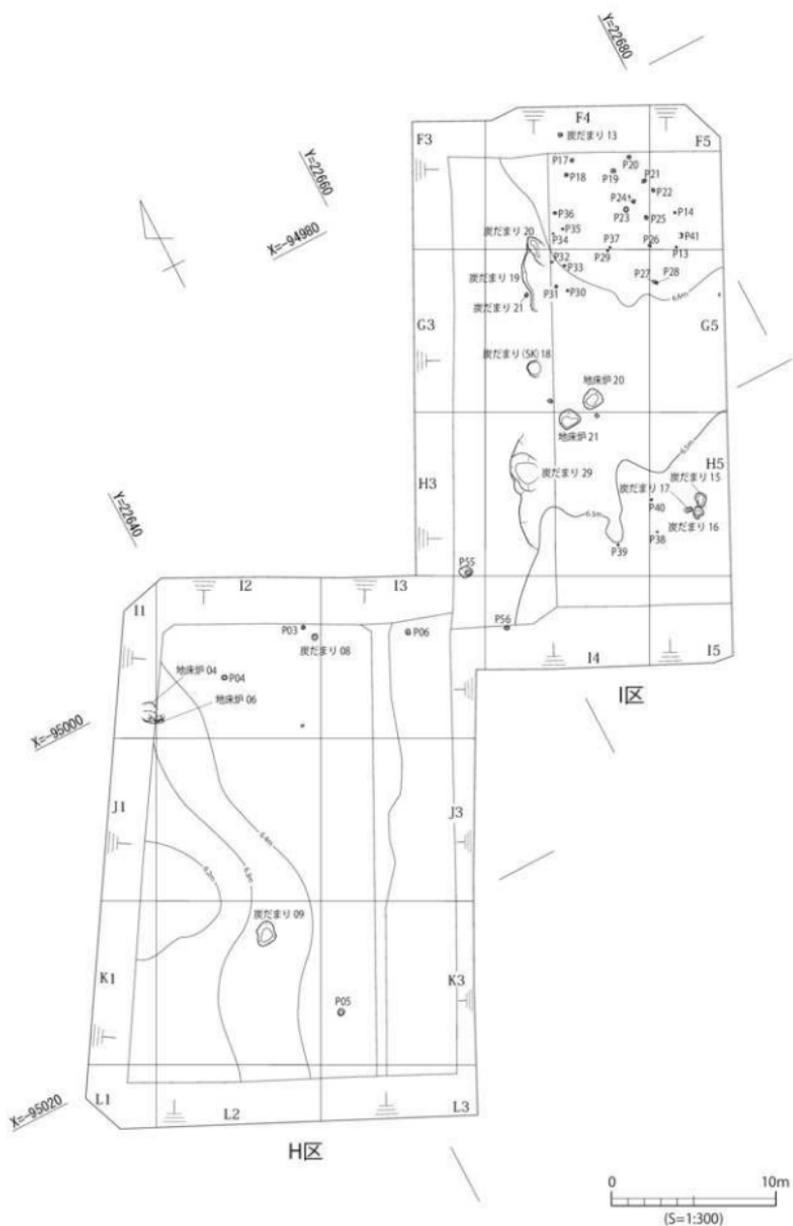


第114図 Ⅰ区第4遺構面出土遺物 (1:3)

6. 第5遺構面の調査

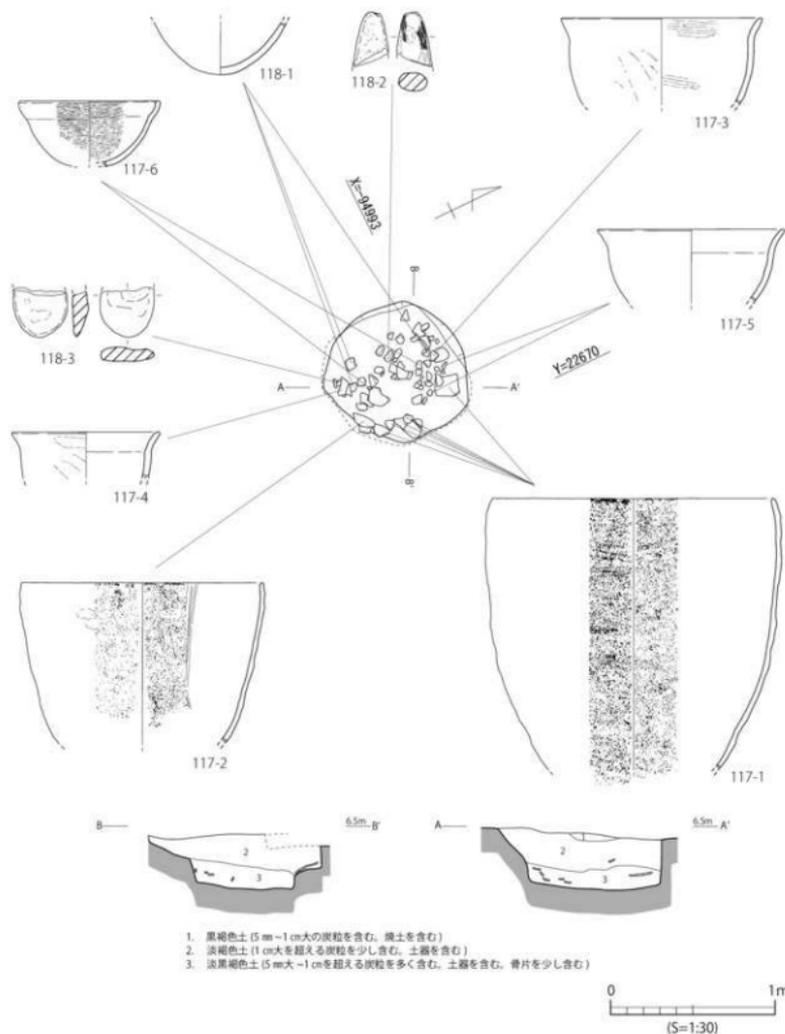
第5遺構面はH区の黒褐色粘質土2とI区の青褐色粘質土1直下にある遺構面である。標高はH区で6.2m～6.4m、I区で6.4～6.5mで、南西方向の緩斜面になっている。出土遺構は地床炉、炭だまり、ピット群が確認できた。

H区では、地床炉2ヶ所と炭だまり2ヶ所が確認できた。このうち炭だまり08は深さこそ浅いものの、平面円形の小規模なもので、むしろ土坑と考えるべきかもしれない。I区では地床炉2ヶ所と炭だまり9ヶ所を検出した。I区の炭だまりも、後述する炭だまり18は土坑とするのが自然であるし、平面不整形で小規模なもの(炭だまり17)や炭のまとまりが希薄なもの(炭だまり13、21)は本根

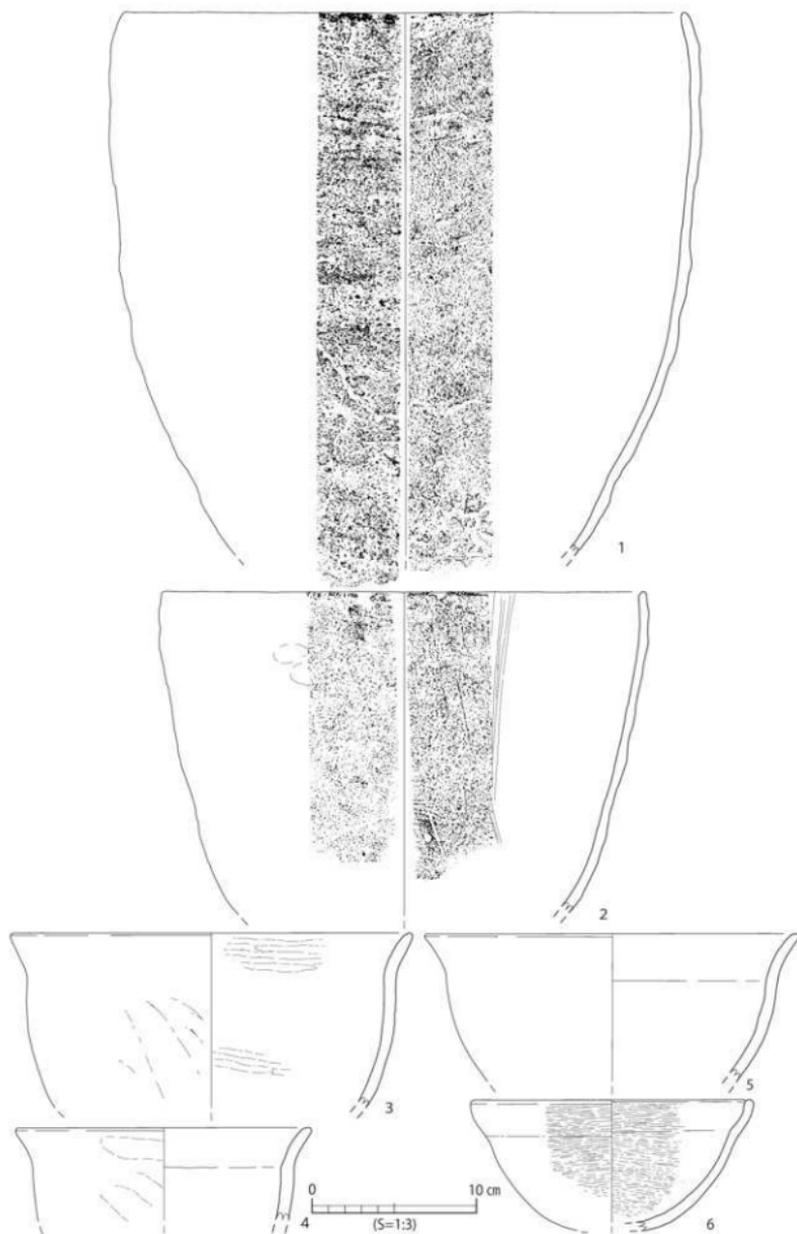


第115図 H・I区第5遺構面遺構配置図(1:300)

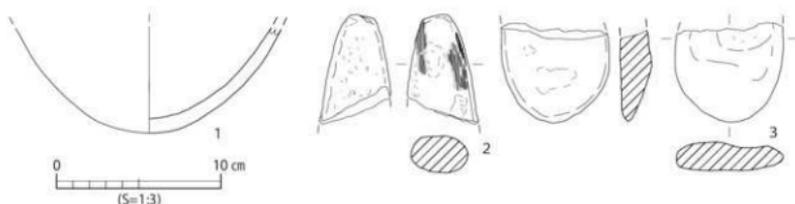
等が朽ちた痕跡の可能性がある。ビット群はI区北東側に集中して出土した。いずれも径20～30cm程度のごく小さなもので、一連の構造物が存在した可能性が高い。全体的に遺構の密度は低く、特にH区は散漫である。I区の場合は、調査区北東部にビット群が、中央に地床炉が、西側と南側に炭だまりが纏まっていることが分かる。



第116図 I区炭だまり (SK)18(1:30)



第 117 図 I区炭だまり (SK)18 出土遺物 1(1:3)



第118図 I区炭だまり (SK) 18 出土遺物 2(1:3)

I区炭だまり (SK) 18 (第116図)

炭だまりとして調査を進めたが、径約90cm、深さ約55cmのタライ状の土坑で、中程に段が付く。埋土を見ると、一段目を埋める最下層には5cm大近い炭粒を含む暗色系の粘質土が堆積しており、底面からやや離れた位置から鉢類と石器が出土した。2段目より上層からはほとんど遺物が出土していない。出土した鉢類は破片の検討から6点以上あるが、底部の破片が明らかに不足する。また出土した石器類はいずれも破損品である。こうした状況は、第4遺構面の炭だまり (SK) 07に類似する。

I区炭だまり (SK) 18 出土遺物 (第117、118図)

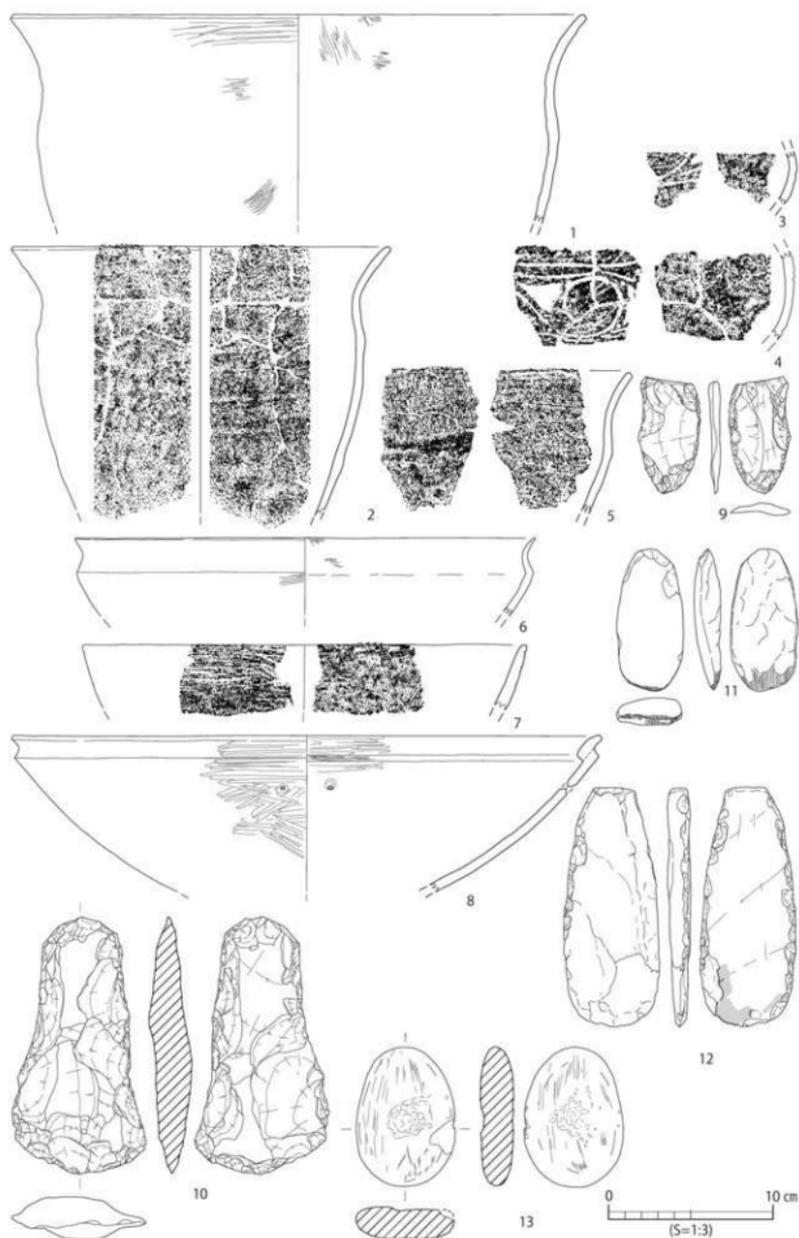
117-1～-6は、深鉢・浅鉢類である。-1、-2はわずかに内湾する口縁部を持つ粗製深鉢で、端部は細めている。-3～-6は浅鉢で、一見同一個体に見えるものもあるが、接合しない。口縁部にアクセントを付けて外反させるものが多いが、-6だけは内湾させている。118-1は丸底の鉢底部であるが、接合する個体になかった。表面の様子から浅鉢のものと考えられる。-2は緑色片岩製磨製石斧の破損品だが、片面に敲打痕がかなり残されており、完成前に破損したのかもしれない。-3は白色系凝灰岩の破片で、中央部が凹んでいる。

第5遺構面出土遺物 (第119、120図)

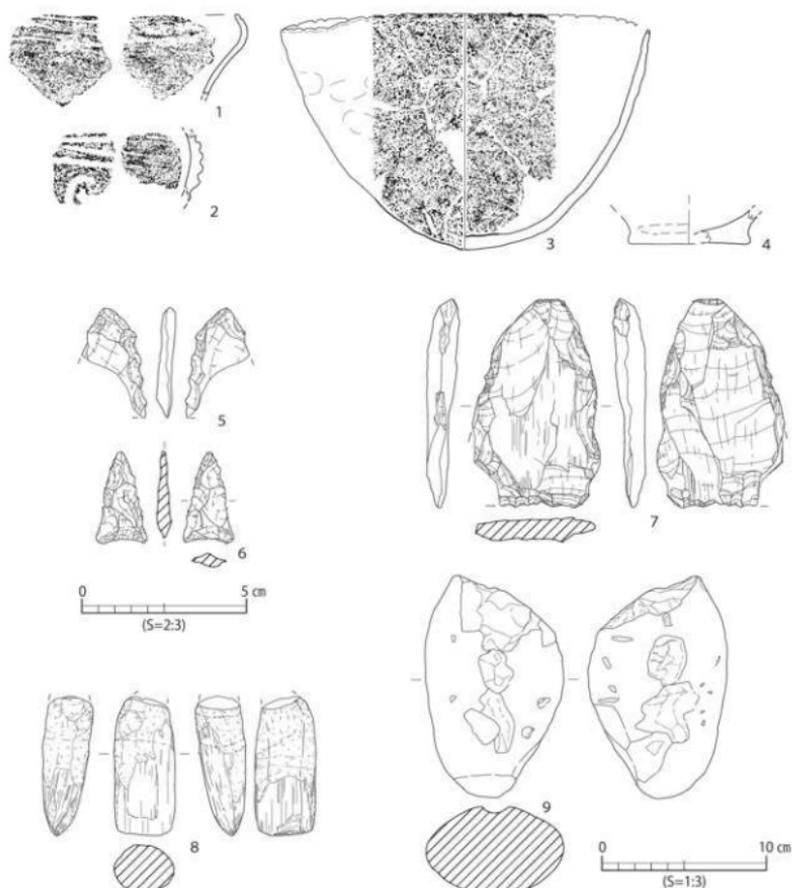
第119図はH区の第5遺構面出土遺物である。-1～-5は深鉢である。-1と-2は口縁部が外反する粗製深鉢で、-1の内外面には二枚貝条痕らしい調整痕が入る。厳密ではないが、口縁端部は平坦面を作る意識が見られる。-3、-4は山形と渦巻きを組み合わせた多条の沈線文を持つ破片で、接点はないが同一個体であろう。表面がひどく摩滅しているが、縄文か擬縄文を施すようである。山陰地方中部における沖丈式と並行するものだろう。-6～-8は精製浅鉢類で、-8は口縁部に明確な段を持つ。焼成後に鉢本体に穿孔されている。-7は口縁端部外面に多条の沈線が入る。縄文は入らないようだが、沖丈式並行の鉢と考える。

-9と-10は打製石器で、-9はいわゆるサヌカイト系の安山岩製スクレイパーである。-10は完形の打製石斧である。明確な使用痕は見えない。-11、-12は磨製石斧である。-11は古屋敷遺跡では比較的小型の磨製石斧で、刃端部の使用痕が顕著である。-12は両側縁に細かい調整を施す石器であるが、古屋敷遺跡出土の石器群の中では全体に薄手で違和感がある。磨製石斧が破損する際に薄い層状に剥離し、これを再加工したものでしょうか。刃部付近に部分的に光沢があるが、破損前の使用痕か。-13は凝灰岩製の凹石で、両面とも粗い擦痕が目立っている。

第120図はI区出土遺物を並べた。120-1は内湾する口縁端部に磨削縄文を廻らす口縁部である。全体に薄手で華奢な印象があり、小型の鉢かもしれない。-2は口縁端部に欠くが横帯と渦巻き状の文

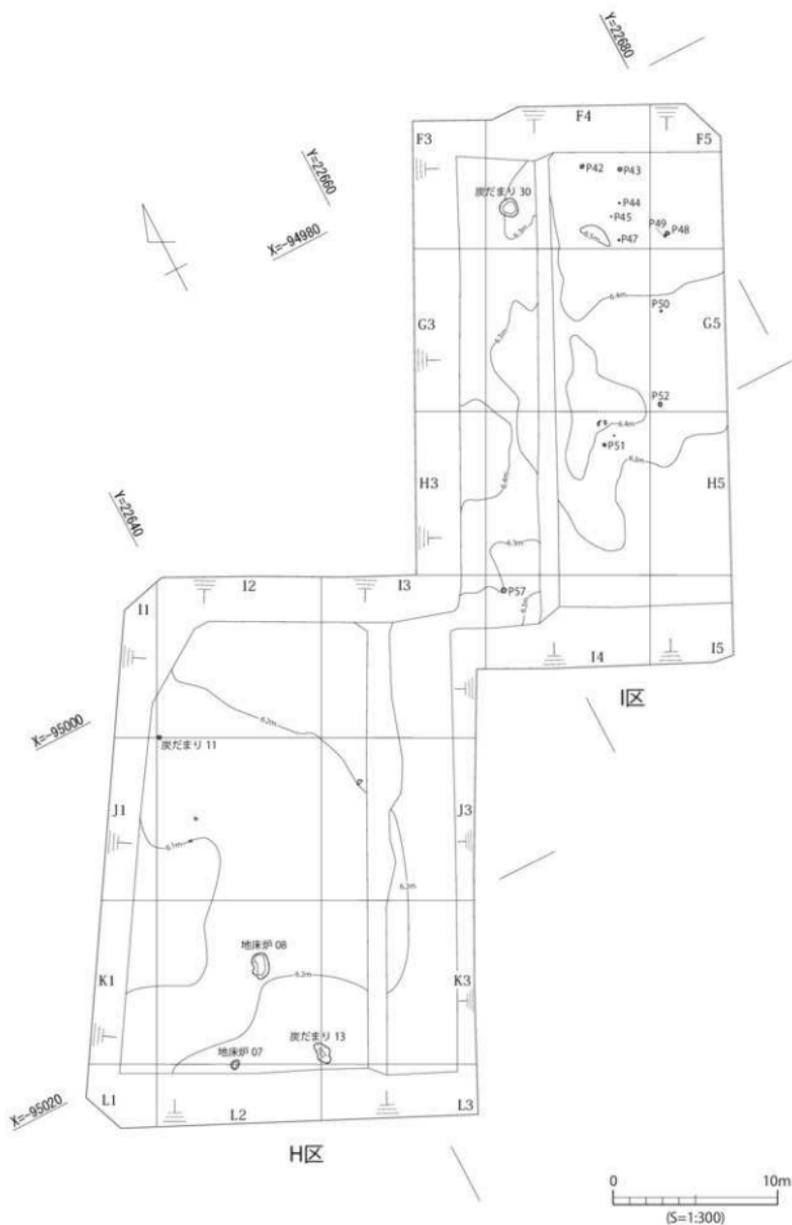


第119図 H区第5遺構而出土遺物(1:3)

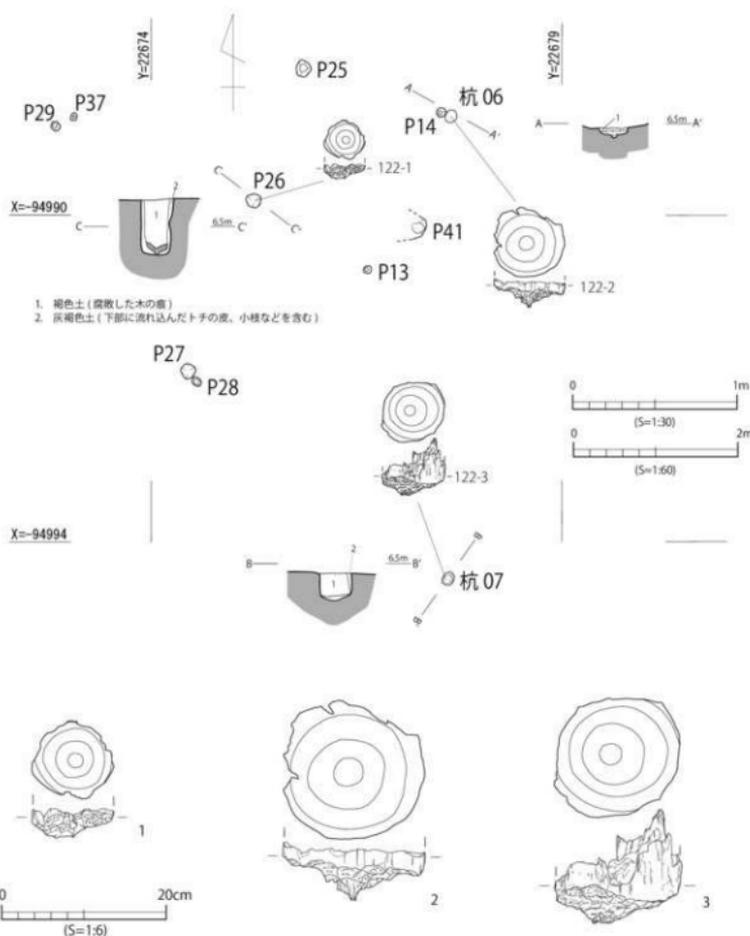


第120図 I区第5遺構面出土遺物(1:3・2:3)

様が見える。いずれも沖丈式から権現山式古段階あたりであろうか。-3はボール状の浅鉢である。口縁端部を細め、軽く刻目を入れているが、その間隔はかなりアバウトである。内面に指頭圧痕が残るなど作りは粗く、焼成時の問題が大きく歪んでいる。-5～-7は打製石器類で、サヌカイト系安山岩製の石鏃と、打製石斧である。-7の打製石斧は両側縁と刃部に細かい調整が並ぶが、刃器としては不完全である。また片側縁の一部に研磨痕が残っている。この個体も板状に割けた石斧破損品を再加工したものと考えられる。-8は厚さの割に小型の磨製石斧で、刃端部に破損があるほか、柄部の一部も欠損している。刃端部はよく磨かれており、破損部脇に使用痕も見られる。-9は大型の凝灰岩で、両面中央部に敲打痕が見られる他、一端が欠損している。



第121図 H・I区第6遺構面遺構配置図(1:300)

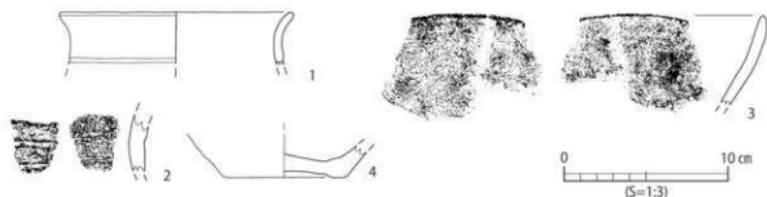


第122図 I区柱根 (1:6・1:30・1:60)

7. 第6遺構面の調査

第6遺構面はH区の黒褐色粘質土2層、I区の青褐色粘質土1層直下に検出した遺構面である。H区では標高約6.1～6.3m、I区では約6.3～6.5mで、緩やかに南西方向に傾斜している。

第6遺構面以下の遺構面は、遺構が希薄であり、出土遺物も少ない。H区では地床炉2ヶ所、炭だまり2ヶ所を確認した。I区では炭だまり1ヶ所と、ピット群を検出した。地床炉は焼土面があまり広がらず、規模も小さい。ピット群は第5遺構面と同様にI区北東側に集中しており、規模も径20～30cm程度と同様に小さい。第5遺構面と平面的に重複するものではなく、この2面に亘って同様の構造物が存在したようである。第6遺構面のピットでは、



第123図 H区第6遺構面出土遺物(1:3)

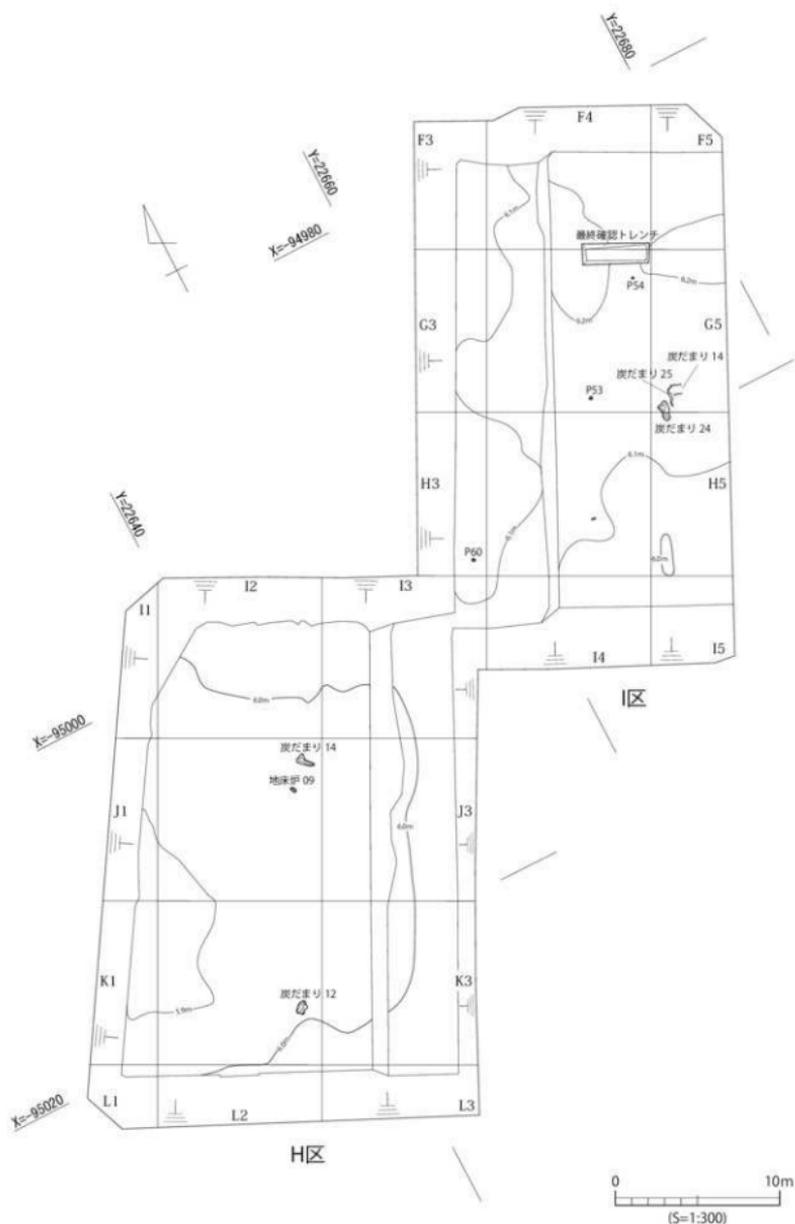


第124図 I区第6遺構面出土遺物(1:3)

3ヶ所の底部に柱根が残存していた点が特筆される。

I区柱根(第122図)

第6遺構面で検出したピットのう3ヶ所では底部に柱根が残存していた。いずれも残りは良くないが、土層断面の観察でも埋土の痕跡は全く見えず、丸太を直接打ち込んだものと考えられる。3点とも一部に樹皮を残す丸太材で、石斧による打撃による由来する切断面が生々しく残っている。樹種同定分析によれば、いずれもマキ属の丸太であり、検出面のレベルや底面のレベルが多少異なるが、基本的

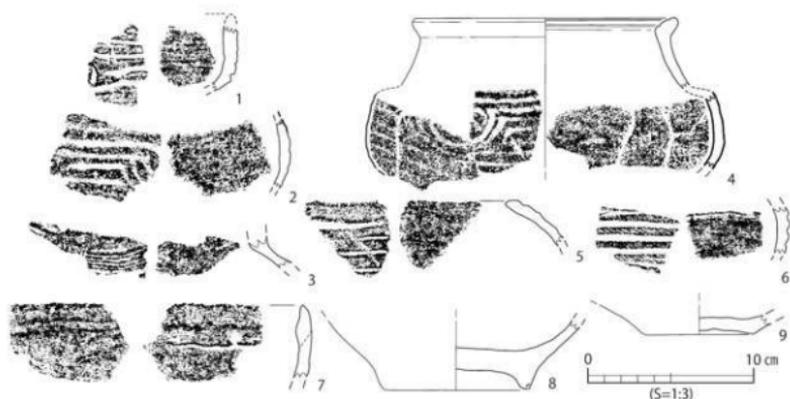


第125図 H・I区第7遺構面遺構配置図 (1:300)

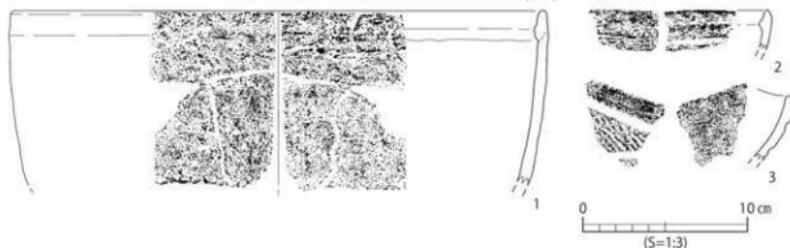
には同一遺構面に存在したものと考えると良いだろう。ただし本来の遺構面は削平され、残っていない可能性がある。平成26年度の発掘調査で、隣接するD区F5・G5グリッドで柱根が2点出土しており、埋め土痕跡を持たない点や丸太の太さ、出土レベルが近似している。同一の構造物かはともかく、これらを含め同時期に用いられた一連の構造物群の部材である可能性が高い。

第6遺構面出土遺物(第123、124図)

第6遺構面直上に位置する黒褐色粘質土2層および青褐色粘質土1層で出土した遺物群である。123-1は頸部に凹線が巡る口縁部で、弥生時代前期の壺を思わせるプロポーションだが、胎土は縄文時代晩期の浅鉢に見られるそれに類似する。あるいは口縁部が屈曲して外反する浅鉢かもしれない。-2は凹線文を施す鉢の頸部であろうか。-3はボール形の精製浅鉢である。124-1、-2は粗製深鉢類の口縁部である。-1は口縁端部内面に粘土帯を付加してを肥大化させ、断面三角状に指で押さえている。千葉豊氏が内面肥厚指頭圧痕土器と仮称する粗製深鉢²³で、緑帯文期に山陰地域で用いられた、比較的在地色の強い土器とされている。肩が張らずに緩い弧を描く砲弾形の深鉢のようである。この時期の深鉢は、必ずしも内面指頭圧痕土器に統一されているわけではないようで、-2のような抑揚のない口縁端部を持つ深鉢も併存している点が注目される。-3は口縁部が緩く外反する浅鉢で、口縁端部外面と肩部に二条凹線に挟まれた文様帯を持つ。口縁端部内面には竹管による刺突が並ぶ。外反する口



第126図 H区第7遺構面出土遺物(1:3)



第127図 I区第7遺構面出土遺物(1:3)

縁部には施文せず、布勢式並行期に位置づけられそうである。この他の浅鉢類には、-4のような外反する口縁部を持つ無文のもの、-5のように無文の皿形のものがある。-6、-7は内傾する口縁部を持つ鉢類で、-8は頸部であろうか。いずれも磨消縄文を持つ個体である。小片のため判断が難しいが、布勢式から崎ヶ鼻式並行か。

以上のように、出土遺物は限られるが、概ね布勢式から崎ヶ鼻式並行期の土器が含まれる。

8. 第7遺構面の調査(第125図)

第7遺構面はH区の黒褐色粘質土3層、I区では青褐色粘質土2層直下に位置する遺構面である。標高は、H区で約5.9～6.1m、I区で約6.1～6.2mで、南西向きのゆるい傾斜面である。

地床炉はH区で一カ所を確認したが、焼土面は非常に小さく、ちょっとしたたき火痕跡程度のものであった。炭だまりはH区で2カ所、I区で3カ所検出したが、いずれも炭化粒が散漫で、上層部の炭だまりのように明確でなく、あるいは自然木の風化痕などを誤認しているものも含まれるかもしれない。いずれにせよH区・I区における第7遺構面は遺構の数、密度、内容とも低調であり、この時期の古屋敷遺跡の中心部分からは外れてしまっていると考えられる。なお調査の際は、こうした状況を考慮し、本遺構面にサブトレンチを設定し、下層の状況を確認した。H区においては、遺物量は少ないものより古層の包含層が把握できたため調査を継続したが、I区については出土遺物が皆無であったので、本遺構面を持って発掘停止面とした。

第7遺構面出土物(第126、127図)

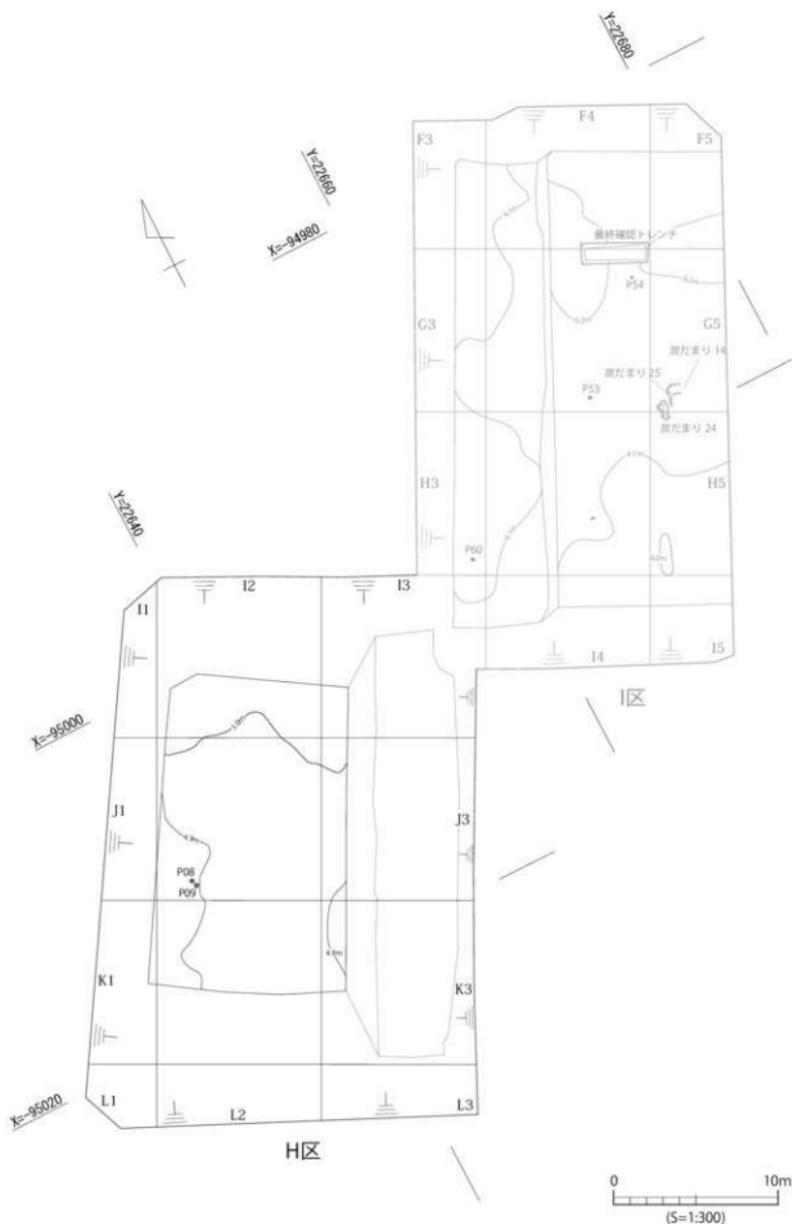
H区の黒褐色粘質土3層、I区青褐色粘質土2層から出土した遺物を並べた。出土遺構と同様、出土遺物も低調であるが、H区を中心に縁帯文期の土器が出土している。

126-1はほぼ垂直に立ち上がると考えられる口縁部で、破片の右側に同心円、あるいは円弧形の文様が並ぶようである。-2、-4は胴部に横方向の並行する凹線と渦巻き文を施す鉢である。口縁端部は外側に広く肥大させ、凹線を巡らしており、頸部は無文である。-4の口縁部はより外反するものである可能性がある。布勢式の範疇と考えて良いだろう。-3は細い並行沈線の入る小片で、鉢か壺であろうか。-5、-6は口縁部が内傾する浅鉢であろう。-7はいわゆる内面肥厚指頭圧痕土器である。口縁端部を整形してから、内側に折りたたみ、指先で押さえ込んで断面三角形に整形している。-8は鉢の底部で、はっきりした上げ底である。

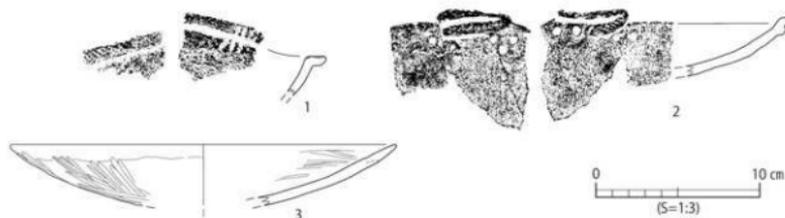
第127図にはI区出土遺物を並べた。-1、-2は内面肥厚指頭圧痕土器の口縁である。-1は口縁端部を折り返して断面三角形の口縁を作るが、-2は折り返しが明確でない。あるいは口縁端部を押さえ整形しただけかもしれない。-3は波状になる口縁部を持つ鉢で、凹線区画内にRL縄文が入る。

9. 第8遺構面の調査(第128図)

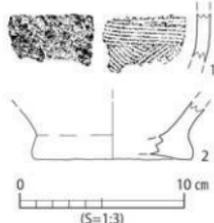
第8遺構面は淡灰色粘質土直上に位置する遺構面であり、H区においては標高約4.8～5.0mである。遺構面の上には、黒褐色粘質土4層、黒褐色レキ層、白灰色砂レキ層、白灰色粘質土層、濃褐色粘質土層が順に堆積しており、わずかな遺物を含む層位もあったが、明確な遺構は確認できなかった。したがって第7遺構面と第8遺構面の間には、深さ約1mもの堆積土がある。第7遺構面調査ののち、調査区の北側と南側に長大なサブトレンチを設定し、部分的に深堀をかけたが、淡灰色粘質土以下に



第128図 H区第8遺構面(発掘停止面)遺構配置図(1:300)



第129図 H区黒褐色粘質土4出土遺物(1:3)



第130図 H区黒褐色レキ層出土遺物(1:3)

遺物は皆無であったため、この面をもって発掘停止面とした。

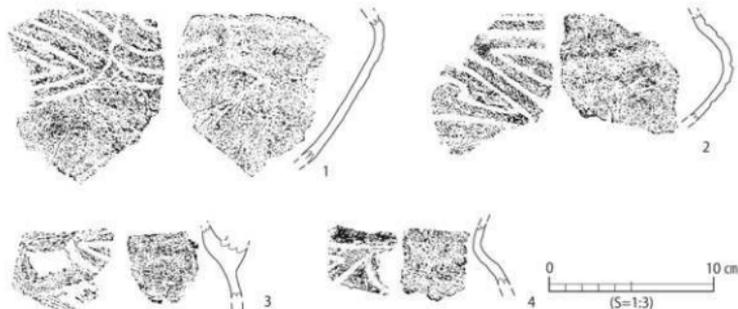
第8遺構面の遺構は、不鮮明なピット2ヶ所のみである。南側トレンチ北壁セクション(第70図)を見ると、第8遺構面を切るようにしてレンズ状の堆積がみられる。周囲の堆積土に比べ木炭粒も多く、北側に伸びる溝状遺構、もしくはいわゆる炭だまりではないかと考えた。実際に面的な掘削を行ったところ、北側に広がる堆積土が確認できたが、明確な掘方がなく、埋土中に全く遺物がなかった。人為的痕跡である積極的根拠が見いだせなかったため、遺構ではないものと判断した。なお、第8遺構面の等高線を見ると、調査区南端から北へ向かってこの堆積土部分が窪んで表現されている。

で表現されている。

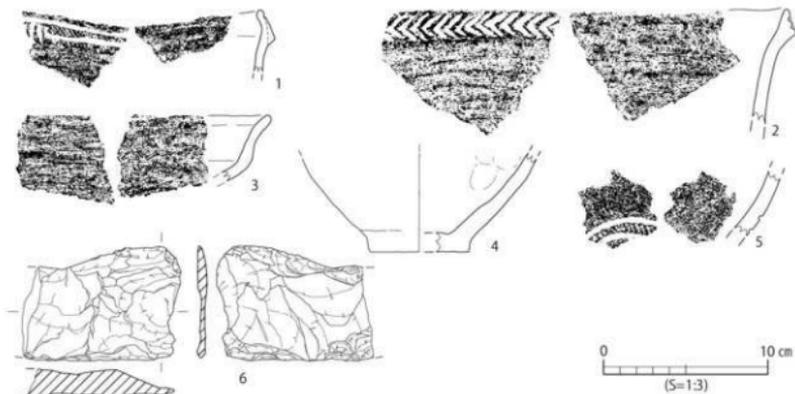
第8遺構面までの出土遺物(第129～133図)

前記の通り、第8遺構面上には約1mの深さの堆積土があり、遺物を含む複数の包含層に分層できた。各層位ごとの遺物が限られるが、おおむね層序の通り徐々に古相の土器へと変遷する様子が見られる。

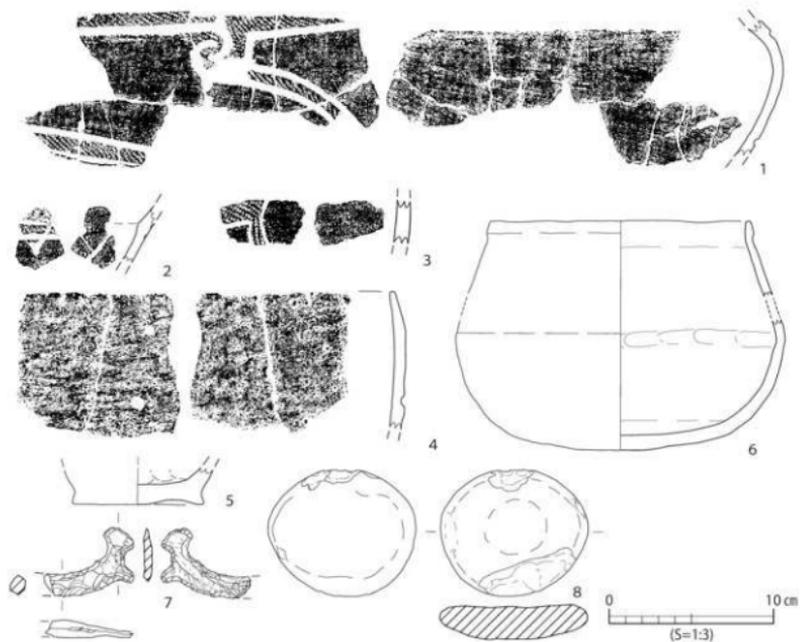
第129図は、黒褐色粘質土4出土の遺物である。-1は端部を外側に肥厚させる口縁部で、端部外面に縄文を施す。端部内面にも凹線が巡り、これを切って縦方向の凹線が3本入っている。布勢式並行の波状口縁を持つ深鉢のようである。-2、-3は皿形の浅鉢で、接点はないが同一個体の可能性がある。口縁端部に三日月形の粘土飾りを付加、表裏に円形の刺突が複数入るが、一番低い位置にある



第131図 I区黒褐色レキ層出土遺物(1:3)



第132図 H区白灰色粘質土出土遺物(1:3)



第133図 H区濃褐色粘質土出土遺物(1:3)

ものだけ抜けていない。類似する口縁部の飾りは三田谷I遺跡でも深鉢に付加されて出土しており、布勢式でも古相の土器とされている²⁴。判断が難しいが、さほど時期差はないのではなからうか。

第130図は一層下がった黒褐色レキ層出土遺物である。黒色レキ層自体が比較的薄く、直上の黒褐色粘質土4層と直下の白色レキ層の漸移層ともいえる包含層であるため、出土遺物もごく限られる。-1は小片故に全体像が把握できないが、内面は二枚貝条痕を用いて文様状に描き分けられているように見える。-2は指で押さえることによって若干の上げ底を呈する底部である。粗製深鉢であろうか。

第131図は接点がないが同一個体の破片らしい。-1、-2は胴の張った部分で、-3、-4はくびれた肩部付近であろう。おおよそ同じ位の高さの小片で、環状の突起が付くようだ。胴部の屈曲が大きいので注口土器の可能性もある。RL縄文地に扁平に間延びした鉤形文を連続して描き、一部を磨消している。ただし磨消しはあまり徹底でない。-4を見ると頸部側はミガキが入るが、文様が口縁部に連続するかどうか判断できない。

第132図は白灰色粘質土出土遺物である。-1は口縁端部を肥大させ、上に伸ばすもので、縄文地に凹線文を巡らす。波状口縁をなす深鉢と考えられ、布勢式でも古手のものであろうか。-2は口縁端部を断面三角形に肥厚させ、連続する羽状文を施すものである。古屋敷遺跡ではあまり見かけない文様だが、-1に近い時期のものだろうか。-3は口縁部下端で屈曲し、外反する精製浅鉢。-4は平底の底部である。-5は小片だが、J地文の磨消縄文を持つ胴部片である。-6は泥質片岩製のスクレイパーで、打製石斧が破損した後、側縁部を再加工したものである。

第133図は第8遺構面直上の、濃褐色粘質土出土遺物である。-1～3は丁寧な磨消し縄文を持つ個体で、-1と-2は胎土や焼成が似通っており、一見同一個体に見えるが、-2の下半部が直線的に延びる様子を重視し別個体と考えた。-1は胴の張る鉢か注口土器であろうか。胴部にはしっかりした凹線によりJ字文が描かれ、細い横帯で繋がれている。上層より古相の鳥式並行あたりであろうか。-2は皿形の浅鉢片で、内面に段が付き、口縁部側が厚くなっている。外面の意匠は-1と同様である。-3は胴部の小片で、磨消し縄文によりJ字文が描かれている。-4は口縁端部が薄くなる粗製深鉢、-5は粗製深鉢の底部である。-6は破片がわずかに足りないが、直線的な口縁部を持つ小型丸底の壺と考えられる。

-7は安山岩製の剥片石器で、一端にくびれた柄部を持つものである。刃端部は欠損しているが、柄側に反り返るような形状と考えられる。こうした石器類は斐伊川上流域や神門川上流域でも出土しており、時期的にも縄文時代後期前葉に位置づけられそうである。用途は定かでないが、一般的なスクレイパー類では満たし得ない用法があるのだろう。

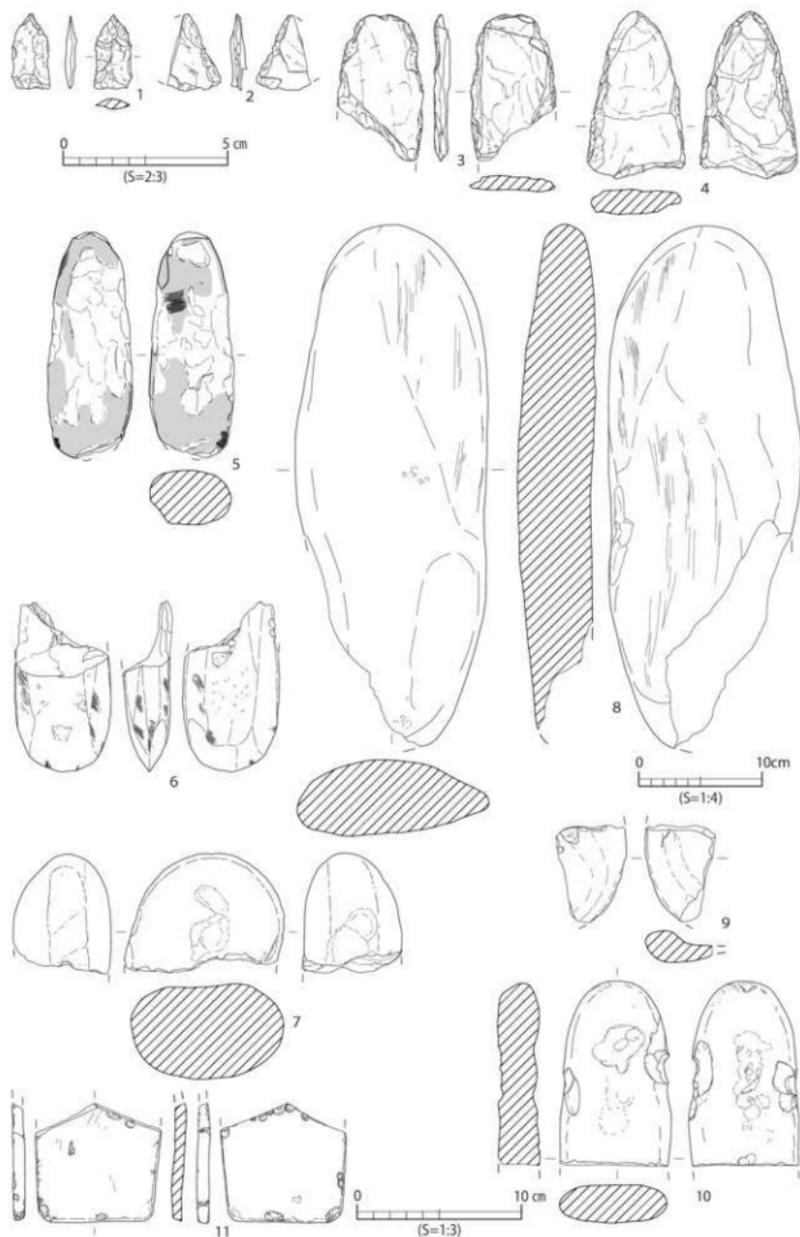
10. その他の出土遺物

第134～137図には、所属遺構面の判らない遺物を示している。H区・I区ともに湧水が多く、先行して排水溝を掘削する必要があったこと、調査途中から調査区を拡張したこと、法面崩壊を防ぐため重機を投入したこと等の影響で、出土位置や帰属層位の不明な遺物がかなりの量発生してしまった。

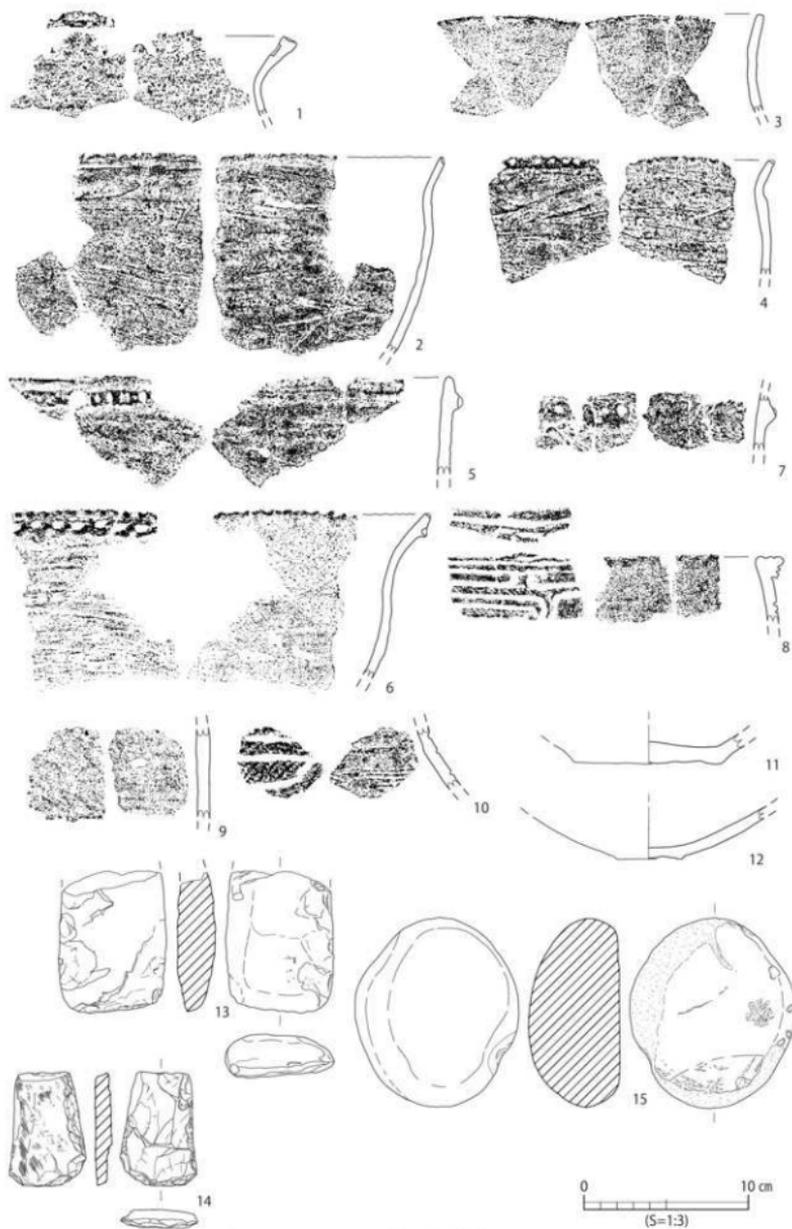
第134図には、H区出土の土器のうち比較的大型の破片や形状復元可能なものを並べた。基本的に調査区内で層位的に取り上げたものの範疇に含まれる土器類である。134-5は崩落を起こした調査区西側の法面復旧作業中に出土した粗製深鉢で、標高6.3m付近から一括して出土した破片を組み上げたものである。上げ底を持ち、口縁端部には部分的に刻み目の入った突起を付加している。胴部下方



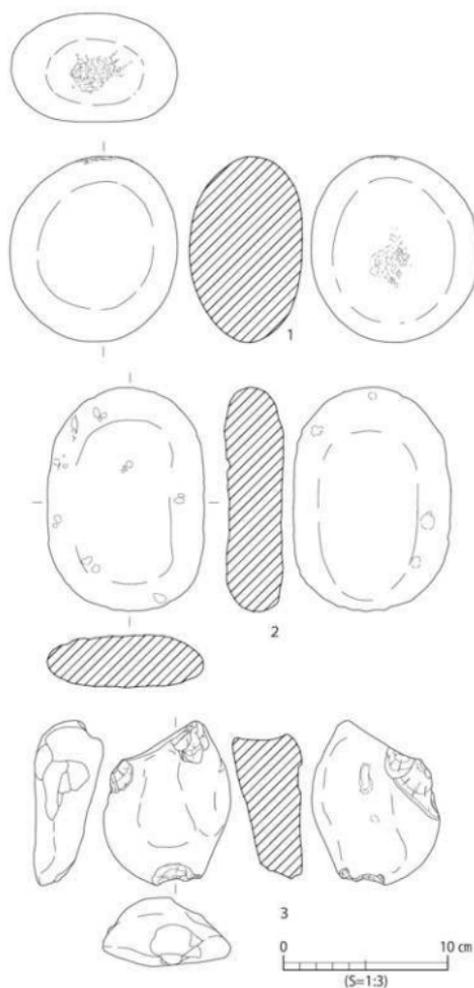
第134図 H区その他の出土遺物1(1:3)



第135図 H区その他の出土遺物 2(1:3・2:3・1:4)



第136図 I区その他の出土遺物1(1:40)



第137図 I区その他の出土遺物2(1:3)

かどうか不明である。ここでは不明石製品としておきたい。

第136図にはI区出土品を並べた。-1～-8は深鉢類である。貼付突帯を持つもの、口縁端部に刻むもの、口縁部が外反するもの等がある。-8は比較的まっすぐ立ち上がる口縁部を持ち、端部を肥大化し、凹線を廻らす鉢である。頸部は縄文地にJ字型の文様が入る。北部九州地域の鐘崎式に類似し、山陰中部地域における崎ヶ鼻1式～2式並行あたりであろうか。-9は種子圧痕の残る小片である。

-13は敲打痕がかなり残る緑色片岩製の石斧で、おそらく未製品段階で破損し放置されたものであ

に一カ所、焼成後穿孔されている。

第135図にはH区出土の石器類を挙げた。意図したわけではないが、古屋敷遺跡で出土する基本的な石器類がそろった。結晶質(あるいはガラス質)安山岩製の小型刃器、泥質片岩～塩基性片岩系の打製石斧類と磨製石斧、白色系凝灰岩製の祭祀用と考えられる一群からなる。石斧類は未製品か破損品、祭祀用と考えられる石器群は破砕状態である。

特殊な遺物としては、石皿もしくは砥石と考えられる大型のデイスaitがある。-8は全長42.6cm、幅15.4cm、と一抱えほどもある岩塊で、単独で出土した。この遺物も調査区西壁崩壊に伴う復旧作業中に、重機掘削中出土したため正確な出土位置が不明であるが、出土レベルは標高6.8m前後であったから、おおむね第4遺構面出土遺物に対応すると考えられる。-11はスレート質の薄い石板である。片面に擦痕が散見されるが、反対面は自然面のままである。一部に細かい剝離痕が残るが、端部に集中する押圧剝離痕はともかく、全てが意図されたものか疑問もある。古屋敷遺跡では見かけない石材であり、形態的に類似する石器も見られない。五角形の均整の取れた形状だが、それを意図したもの

る。-14は小型の石斧で、調整痕の切り合いを見ると柄部破損品と分かるが、研磨が不完全であることを考慮すると、これも未製品のようなものである。-15はツルツルに磨かれたデイサイトである。137-1は石英脈、-2はデイサイトの塊で、敲石・擦石の類いであろう。-3は白色系の凝灰岩で、全体に摩滅しているが、古い剥離痕がいくつか確認できる。

註1 林成多氏の鑑定による。ガムシは甲虫目ガムシ科の総称で、水田をはじめとする水辺に生息するものが多いという。発掘調査においては、水田跡、水路等の遺構から希に出土することがある。

註2 第7章「島根県古屋敷遺跡素材束の分析」のように、未精錬(未加工)であることが確認された。単子葉植物の束をまとめ、丸めたものである。

註3 千葉豊 2014「縄文後期土器研究と課題 ―山陰地方の前半期を中心に―」『山陰地方の縄文社会』古代文化センター研究論集第13集 島根県古代文化センター

註4 千葉豊編 2010『西日本の縄文土器』

第7章 自然科学分析等

古屋敷遺跡H区発掘調査に伴う花粉分析

渡辺正巳(文化財調査コンサルタント(株))

はじめに

遼摩平野では以前から継続して花粉分析が行われてきたが、縄文時代中期中葉以降、晩期頃までの間は、花粉化石含有量が少なく、十分な考察が成されてこなかった。古屋敷遺跡での最終調査に際し、不十分であったデータを補完し、遼摩平野周辺及び遺跡内の植生変遷を推定する目的で、鳥根県教育庁埋蔵文化財調査センターが、文化財調査コンサルタント株式会社に委託・実施した、花粉分析報告書の概報である。

古屋敷遺跡は、鳥根県中央部、大田市仁摩町に位置し、潮川の成す沖積平野上に立地する遺跡である。

分析試料について

分析試料採取は、鳥根県教育庁埋蔵文化財調査センターの担当者との協議の上、図1(鳥根県教育庁埋蔵文化財調査センター提供の原因をもとに作成。)に示すA～Cの3地点で、文化財調査コンサルタント株式会社が行った。

A、B地点はトレンチ壁面より試料を採取し、C地点はトレンチ底面よりハンドオーガーにより掘削を行い、採取した。各地点の模式断面図及び分析試料採取層準は、各地点の花粉ダイアグラム中に示している。



図1 調査区配置と試料採取地点

分析方法

(1) 微化石概査方法

花粉分析用プレパラート及び花粉分析処理残渣を用いて花粉(孢子)、植物片、炭片、珪藻、火山ガラス、植物珪酸体の含有状況を概観し、5段階で示した。

(2) 花粉分析方法

渡辺(2010)に従って実施した。花粉化石の観察・同定は、光学顕微鏡により通常400倍で、必要に応じ600倍あるいは1000倍を用いて実施した。原則的に木本花粉総数が200粒以上になるまで同定を行い、同時に検出される草本・孢子化石の同定も行った。また中村(1974)に従ってイネ科花粉を、イネを含む可能性が高い大型のイネ科(40ミクロン以上)と、イネを含む可能性が低い小型のイネ科(40ミクロン未満)に細分している。

分析結果

表1 微化石概査結果

(1) 微化石概査結果

表1に微化石概査結果を示す。全体に花粉、珪藻の検出量が少なかった、A、B地点の18試料では炭片、プラント・オパールは多く検出されたが、C地点では炭片の検出量も少なく、プラント・オパールのみが、やや多く検出された。

(2) 花粉分析結果

分析結果を図2の花粉ダイアグラムに示す。花粉ダイアグラムでは木本花粉総数を基数として分類群ごとに百分率を算出し、木本(針葉樹)花粉、木本(広葉樹)、草本・藤本花粉、胞子の区分で

試料No.	1916	花 粉	炭	植物片	珪 藻	プラント	オパール
A地点	1	△	△	△	X	△	△
	2	△	△	△	X	△	△
	3	○	○	○	X	○	○
	4	△	△	△	X	△	△
	5	△	△	△	X	△	△
	6	△	△	△	X	△	△
	7	△	△	△	X	△	△
	8	○	○	○	X	○	○
B地点	1	△	△	△	X	△	△
	2	△	△	△	X	△	△
	3	○	○	○	X	○	○
	4	△	△	△	X	△	△
	5	△	△	△	X	△	△
	6	△	△	△	X	△	△
	7	△	△	△	X	△	△
	8	△	△	△	X	△	△
C地点	1	△	△	△	X	△	△
	2	△	△	△	X	△	△
	3	△	△	△	X	△	△
	4	△	△	△	X	△	△
	5	△	△	△	X	△	△
	6	△	△	△	X	△	△
	7	△	△	△	X	△	△
	8	△	△	△	X	△	△

凡例：△：1分未満の検出量である ○：少ないが検出できる △：非常に少ない
△×：極めてまれに検出できる ×：検出できない

スペクトルの色を変えて示した。また右側に、区分ごとの累積百分率と、1g当たりの花粉と胞子の含有量を示した。以下に、検出された花粉化石群集の特徴を、地点ごとに記す。また、検出された花粉化石の量が少なかったことから、通常実施する花粉分帯を、今回は実施していない。

① A地点

花粉化石含有量が数～数十粒/gと、いずれの試料も少なかった。一方、胞子化石は上位の試料No1で1194粒/gの含有量を示すなど、全体の91～97%を占める。ただし、下位に向かい含有量は減少し、下位の試料No9では32粒/gまで減少する。

木本花粉の割合では、マツ属(複雑管束亜属)、スギ属、コナラ亜属、アカガシ亜属がその他の分類群に比べ高率を示し、試料によってニレ属-ケヤキ属やフウ属がこれらに加わった。

草本・藤本花粉では、上位でアカザ科-ヒユ科が高率を示す。胞子ではオシダ科-チャセンシダ科、イノモトソウ科が高率を示した。

② B地点

花粉化石含有量が十数粒/gと、いずれの試料も少なかった。一方、胞子化石は全体の92～96%を占め、数百～百数十粒/gの含有量を示した。

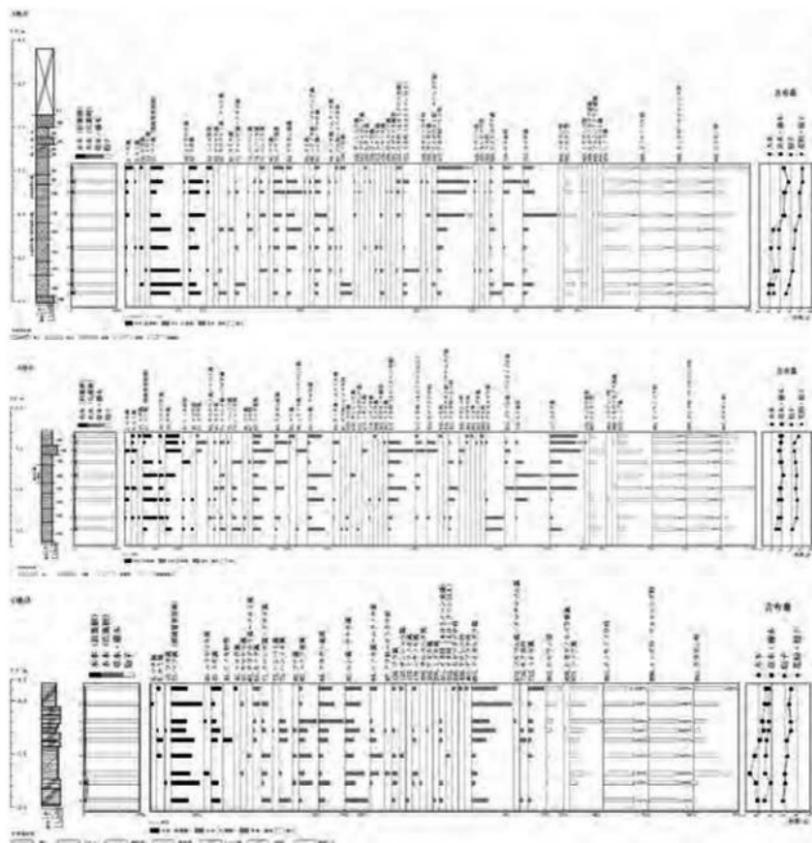
木本花粉の割合では、マツ属(複雑管束亜属)、スギ属、コナラ亜属、アカガシ亜属、ニレ属-ケヤキ属がその他の分類群に比べやや高い割合を示すが、試料間の差が激しい。

草本・藤本花粉ではヨモギ属、キク亜科が特に高率を示す試料がある。胞子ではオシダ科-チャセンシダ科、イノモトソウ科が高率を示した。

③ C地点

いずれの試料も花粉化石含有量が数粒/gと、少なかった。一方、胞子化石は全体の92～98%を占め、数百～数十粒/gの含有量を示した。

木本花粉の割合では、マツ属(複雑管束亜属)、コナラ亜属、アカガシ亜属、ニレ属-ケヤキ属がその他の分類群に比べ高率を示した。



上段：A地点 中段：B地点 下段：C地点

図2 花粉ダイアグラム

草本・藤本花粉では、藤本（つる性）のテイカカズラ属が高率を示す。孢子ではオシダ科・チャセンシダ科、イノモトソウ科が高率を示した。

花粉・孢子化石の含有量が少なかった原因について

通常は以下のようなことが考えられている。

1. 堆積速度が速いために、堆積物中に花粉化石が含まれない。
2. 花粉化石の平均的な粒径（数～100 μ ）と堆積物の粒度が著しく異なり、堆積物中に花粉化石が含まれない。

3. 土壤生成作用に伴う堆積物で、堆積速度が極めて遅く、堆積した花粉化石が紫外線により消滅した。
4. 花粉化石が本来含まれていたが、堆積後の化学変化により花粉化石が消滅した。
5. 有機物に極めて富む堆積物で花粉以外の有機物も多く、処理の過程で花粉化石が回収できなかった。

① A・B地点

炭（微粒炭）・プラント・オパールが多く含まれていることから、本来は有機物も多く含まれていた可能性がある。堆積物の粒径も細粒であることから、堆積速度はさほど遅くなかったと考えられる。一方、試料を採取した壁面は黄褐色を呈し、酸化鉄の検出が著しかった。また、酸化層を削り取ると青灰色を呈し、軽度の還元的环境にあったことが分かる。これらのことから、含まれていた有機物（植物質）や珪藻が、堆積後の化学変化によって分解したことが分かる。また、一般に花粉化石に比べて孢子化石の保存状態が良いことから、選択的に残存したものと考えられる。

② C地点

A、B地点に比べ、炭（微粒炭）の検出量が少なく、プラント・オパールも少ない傾向にある。採取直後の試料は青灰色を呈していたが、処理時には酸化して黄褐色になっていた。これらのことからA、B地点同様に、含まれていた有機物（植物質）や珪藻が、堆積後の化学変化によって分解した可能性が指摘できる。

一方、火山ガラスの検出量が多く、堆積時期が縄文時代後期前葉以前と考えられていることから、三瓶山の火山活動に伴う急速な堆積作用に起因すると考えことも可能である。

周辺地域の古植生の推定

遼平野では、今回の調査地点から100～200mほど離れた五丁遺跡、庵寺遺跡において花粉分析が実施・報告されている（渡辺・山田，2010）。また、古屋敷遺跡A区、B区でも花粉分析が行われている（島根県埋蔵文化財調査センター・文化財調査コンサルタント(株)，内部資料）。渡辺・山田（2010）では、縄文時代中期中葉以降、晩期頃までの堆積物からは、花粉化石がほとんど検出されていなかった。一方、古屋敷遺跡での分析では、今回同様花粉化石の検出量が少なかったが、A区No1地点3-②層：試料No4（縄文時代晩期）、B区凸地点14層：試料No5、12層：試料No4（弥生時代前期から中期ころ）、B区凹地点15層：試料No2（弥生時代中期から後期）で十分な花粉化石が検出されていた。

古屋敷遺跡A区No1地点3-②層：試料No4では、孢子の割合が高く、木本花粉ではマツ属（複雑管束亜属）、スギ属、アカガシ亜属、ニレ属-ケヤキ属が、他の分類群に比べ高率で検出された（図5-1）。この特徴は、今回の分析結果（A地点8、9、10層）とほぼ一致する。このことから、今回の分析で木本花粉の検出量が少ないものの、得られた花粉化石群集が、周辺地域の古植生復元に耐えうるものであると考えた。

(1) 縄文時代後期以前（恐らく縄文時代中期中葉以降）

：C地点試料No9～B地点試料No4（17層）

渡辺・山田（2010）は、花粉化石の含有量が少ない縄文時代中期中葉以降、晩期頃までの堆積物に

ついで、「洪水によって短期間に堆積した細粒堆積物」と、前述「C地点での花粉化石含有量が少ない原因」で指摘した堆積環境と同じ事柄を推定していた。また、同時期は三瓶火山の第Ⅶ期の活動期と重なっている。短期間に遼摩平野全体を厚さ2m以上の細粒堆積物で覆うためには、同時期に発生した三瓶火山の活動をその主因と考えることが、妥当であろう。

縄文時代中期頃まで高率を示したスギ属は、主に低地に繁茂していたと考えられていた(渡辺・山田, 2010)。この層準ではスギ属が低率であることから、低地を広く覆っていたスギを主体とする林が、三瓶火山から流れ込んだ火砕流(あるいはこれらの再堆積)によって埋め尽くされ、恐らく壊滅状態になったと考えられる。C地点下部ではマツ属(複雑管束亜属)、コナラ亜属、ニレ属-ケヤキ属などの先駆的な樹種由来の花粉が主で、それ以前に丘陵を覆っていたと考えられるアカガシ亜属の花粉は低率である。このことから、遼摩平野周囲の丘陵にも三瓶火山による被害が及び、低地のスギ林同様、丘陵上のカシ林も壊滅状態になったものと考えられる。C地点下部で高率を示すニヨウマツ類、コナラ類は、植生がほとんどなくなった低地から丘陵で、ケヤキ類は低地や谷筋で徐々に芽生え、林を成すようになる。一方、アカガシ亜属花粉はC地点上部で高率になる。カシ類は陰樹であり、林がある程度よみがえった時点で、林床でも芽生えることができるカシ類が拡大し始めたと考えられる。

草本花粉では、キク亜科やヨモギ属に加え、荒れ地に生育するテイイカズラ属が多く検出される。シダ類孢子では、イノモトソウ科、オシダ科-チャセンシダ科が特に多く検出される。これらが共通して生育できる場所は、明るい(日当たりの良い)所である。また、アカメガシワ属やサンショウ属などの先駆的で、花粉生産量の少ない(生育地近くで検出されることが多い)樹種由来の花粉も、断続的にはあるが検出されている。これらのことから、特に低地は、樹木がまばらな「疎林」状態で、比較的開放的な草場が広がっていたと考えられる。

(2) 縄文時代後期以降(縄文時代晩期-弥生時代早期以前)

: B地点試料No3(16層)~A地点試料No1(8層)

16~15層では、スギ属やヤナギ属、サワグルミ属-クルミ属などの湿地(川辺)を好む樹種が増加する。一方草本花粉でも、湿性草本であるミクリ属やセリ科、キカシグサ属、ゴキズル属-アマチャズル属が検出される。16層が礫層であることを踏まえると、一時的に潮川の水路が変わり、湿地環境が周辺に広がり、これらの樹木、草本が生育した可能性が指摘できる。

14層で一旦スギ属が低率になるものの、13層より上位ではA区で認められたように、マツ属(複雑管束亜属)、アカガシ亜属、ニレ属-ケヤキ属と共に、他の分類群に比べ高率を示して検出される。また、マキ属、モミ属、コウヤマキ属、ヒノキ科などの針葉樹由来の花粉も、連続的に検出されるようになる。検出された木本花粉の多くは周辺の丘陵からもたらされたと考えられ、モミやコウヤマキ、ヒノキといった温帯針葉樹種が丘陵上でカシ類と混生していたと考えられる。遺跡内では、縄文時代晩期の遺構が見つかっており、周辺の丘陵にも人手が加わっていた可能性が指摘される。丘陵上が「里山」化しており、マツ類やコナラ類もここに生育していた可能性がある。一方スギは、低地の水際、あるいは谷筋に散在していたと考えられるが、堆積環境が不安定なために、さほど大きな林を成すことがなかったと考えられる。

この時期でも、シダ類孢子では、イノモトソウ科、オシダ科-チャセンシダ科が特に多く検出され、比較的開放的な草場が広がっていたと考えられる。A地点上部(縄文時代晩期)では、一旦低率になっ

ていた草本花粉も増加し、キク亜科やヨモギ属に加え、畑地雑草や食用種(アカザ、ヒユ)を含むアカザ科-ヒユ科が多く検出される。また、A区では同時期のソバやアズキ栽培の可能性も指摘されている(渡辺, 2016)。これらのことから、低地では畑地が存在した可能性も指摘できる。

まとめ

古屋敷遺跡H区発掘調査において、実施した花粉分析の結果、以下の事柄が明らかになった。

- (1) 全ての試料で花粉化石の含有量が少なかった。この主因として、堆積後の化学変化によって植物質、珪酸質が劣化、消滅した可能性が指摘できた。また、三瓶山の火山活動に伴う急速な堆積作用による可能性も指摘できた。五丁遺跡での分析結果(渡辺・山田, 2010)を踏まえると、三瓶山の火山活動に伴う、急速な堆積作用の影響も大きいようである。
- (2) 遼摩平野周辺では、三瓶火山の第Ⅶ期の活動によって、縄文時代中期中葉に植生が壊滅的状况に陥ったと、推定できた。今回の分析結果は、それ以降、晩期頃までの植生変遷を示していると考えられる。
 - ① 縄文時代後期までの林相は、初期にマツ類、ナラ類を主要素とし、その後カシ類が加わった。低地ではケヤキ属を主要素とする林が認められるが、疎林であった。このため、低地のほとんどの場所には、開放的な草地が広がっていた。
 - ② 縄文時代後期以降、丘陵では温帯針葉樹が加わるなど、豊富な樹種が認められるようになる。縄文時代晩期に入ると人間活動の植生への影響が現れ、周囲の丘陵上にはアカマツやコナラ類からなる「里山」が広がった可能性が指摘できる。
- (3) 畑地雑草や食用種(アカザ、ヒユ)を含むアカザ科-ヒユ科が多く検出されたことから、A区での分析結果を補完して、縄文時代晩期に畑作が行われていた可能性が指摘できた。

引用文献

- 渡辺正巳(2017)古屋敷遺跡A区発掘調査に伴う自然科学分析. 古屋敷遺跡(A・E区)一般国道9号(静岡仁摩道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書, 1, P86-94, 国土交通省中国地方整備局・鳥根県教育委員会.
- 中村 純(1974)イネ科花粉について, 特にイネを中心として. 第四紀研究, 13, P187-197.
- 渡辺正巳(2010)花粉分析法. 必携 考古資料の自然科学調査法, P174-177. ニュー・サイエンス社.
- 渡辺正巳・山田和芳(2010)五丁遺跡・庵寺遺跡発掘調査に伴う自然科学分析. 梨ノ木坂遺跡 庵寺古墳群 庵寺遺跡Ⅱ, 一般国道9号仁摩温泉津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書, 3, P93-130, 国土交通省中国地方整備局・鳥根県教育委員会.

古屋敷遺跡H区における放射性炭素年代（AMS）測定

（株）加速器分析研究所

1 測定対象試料

古屋敷遺跡H区は、島根県大田市仁摩町大田に所在する。測定対象試料は、水路および水路に近接して打ち込まれた杭から採取された木片7点である（表1）。なお、これらの木片7点のうち6点については、同一試料の樹種同定が実施されている（別稿樹種同定報告参照）。

試料の時期は、東杭列E2、E15、E25、E32、西杭列W7、W16が弥生時代前期と推定される。杭5は弥生時代前期の水路に近接しており、弥生時代前期かそれ以降の可能性が考えられている。

2 測定の意義

杭が利用された年代を推定する。

3 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、付着物を取り除く。
- (2) 酸-アルカリ-酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA 処理における酸処理では、通常 1mol/ℓ（1M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001M から 1M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が 1M に達した時には「AAA」、1M 未満の場合は「AaA」と表1に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO₂）を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。
- (6) グラファイトを内径 1mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

4 測定方法

加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置（NEC社製）を使用し、¹⁴Cの計数、¹³C濃度（¹³C/¹²C）、¹⁴C濃度（¹⁴C/¹²C）の測定を行う。測定では、米回国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx II）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5 算出方法

- (1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (‰) で表した値である (表 1)。AMS 装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2) ^{14}C 年代 (Libby Age : yrBP) は、過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950 年を基準年 (0yrBP) として遡る年代である。年代値の算出には、Libby の半減期 (5568 年) を使用する (Stuiver and Polach 1977)。 ^{14}C 年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表 1 に、補正していない値を参考値として表 2 に示した。 ^{14}C 年代と誤差は、下 1 桁を丸めて 5 年単位で表示した。また、 ^{14}C 年代の誤差 (+1 σ) は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2% であることを意味する。
- (3) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMC が小さい (^{14}C が少ない) ほど古い年代を示し、pMC が 100 以上 (^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上) の場合 Modern とする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正するため、補正した値を表 1 に、補正していない値を参考値として表 2 に示した。
- (4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1 標準偏差 (1 σ = 68.2%) あるいは 2 標準偏差 (2 σ = 95.4%) で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行った ^{14}C 年代値で、ここでは分析仕様書に従い下 1 桁を 5 年単位で丸めた値を用いた。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13 データベース (Reimer et al. 2013) を用い、OxCal4.2 較正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表 2 に示した。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。

6 測定結果

測定結果を表 1、2 に示す。

試料 7 点の ^{14}C 年代は、2495 \pm 25yrBP (杭 5) から 2390 \pm 25yrBP (西杭列 16) の間にある。暦年較正年代 (1 σ) は、7 点全体で縄文時代晩期後葉から弥生時代前期頃に相当する。最も古い杭 5 の年代値が、縄文時代晩期後葉ないし弥生時代前期への移行期頃と見られることから、すべての試料が推定される時期におおむね整合すると考えられる (藤尾 2009、小林 2009、小林編 2008)。

試料の炭素含有率はすべて 50% を超え、化学処理、測定上の問題は認められない。

表1 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 補正值)

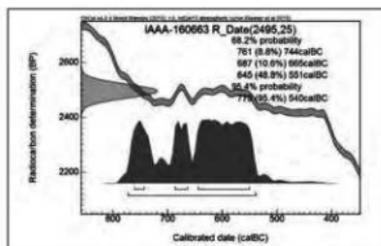
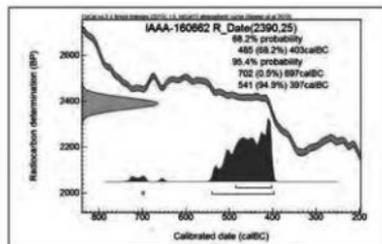
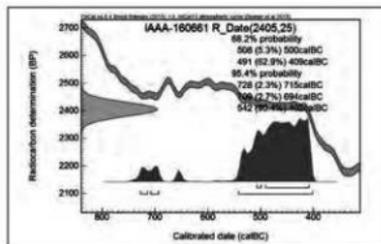
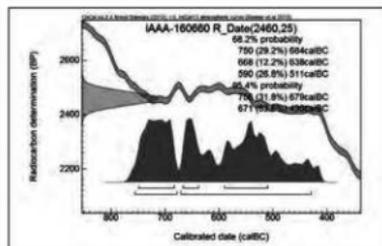
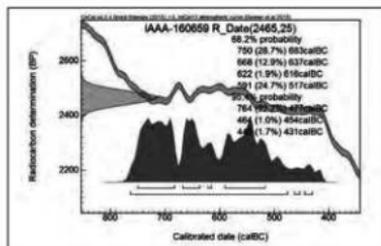
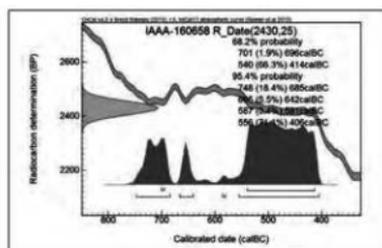
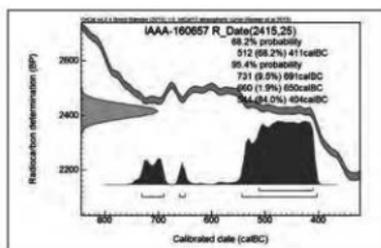
測定番号	試料名	採取場所	試料 形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
JAAA-160657	東杭列E2	H区 弥生SD01	丸木杭	木片	AAA	31.83 ± 0.29	$2,415 \pm 25$ 74.03 ± 0.23
JAAA-160658	東杭列E15	II区 弥生SD01	丸木杭	木片	AAA	-30.25 ± 0.56	$2,430 \pm 25$ 73.91 ± 0.24
JAAA-160659	東杭列E25	II区 弥生SD01	丸木杭	木片	AAA	-29.62 ± 0.50	$2,465 \pm 25$ 73.57 ± 0.24
JAAA-160660	東杭列E32	II区 弥生SD01	丸木杭	木片	AAA	-26.72 ± 0.45	$2,460 \pm 25$ 73.60 ± 0.23
JAAA-160661	西杭列W7	II区 弥生SD01	割板杭	木片	AAA	-28.77 ± 0.42	$2,405 \pm 25$ 74.13 ± 0.24
JAAA-160662	西杭列W16	H区 弥生SD01	割板杭	木片	AAA	-29.98 ± 0.67	$2,390 \pm 25$ 74.27 ± 0.25
JAAA-160663	杭5	H区 杭(水路に近接)		木片	AAA	-28.05 ± 0.51	$2,495 \pm 25$ 73.30 ± 0.25

[#81106~12]

表2 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用(yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
JAAA-160657	$2,530 \pm 25$	72.99 ± 0.22	$2,415 \pm 25$	512calBC - 411calBC (68.2%)	731calBC - 691calBC (9.5%) 660calBC - 650calBC (1.9%) 544calBC - 404calBC (84.0%)
JAAA-160658	$2,515 \pm 25$	73.11 ± 0.22	$2,430 \pm 25$	701calBC - 696calBC (1.9%) 540calBC - 414calBC (66.3%)	748calBC - 685calBC (18.4%) 666calBC - 642calBC (5.5%) 587calBC - 581calBC (0.4%) 556calBC - 406calBC (71.1%)
JAAA-160659	$2,540 \pm 25$	72.87 ± 0.22	$2,465 \pm 25$	750calBC - 683calBC (28.7%) 668calBC - 637calBC (12.9%) 622calBC - 616calBC (1.9%) 591calBC - 517calBC (24.7%)	764calBC - 477calBC (92.7%) 464calBC - 454calBC (1.0%) 445calBC - 431calBC (1.7%)
JAAA-160660	$2,490 \pm 25$	73.34 ± 0.22	$2,460 \pm 25$	750calBC - 684calBC (29.2%) 668calBC - 638calBC (12.2%) 590calBC - 511calBC (26.8%)	756calBC - 679calBC (31.8%) 671calBC - 430calBC (63.6%)
JAAA-160661	$2,465 \pm 25$	73.56 ± 0.23	$2,405 \pm 25$	508calBC - 500calBC (5.3%) 491calBC - 409calBC (62.9%)	728calBC - 715calBC (2.3%) 709calBC - 694calBC (2.7%) 542calBC - 402calBC (90.4%)
JAAA-160662	$2,470 \pm 25$	73.52 ± 0.22	$2,390 \pm 25$	485calBC - 403calBC (68.2%)	702calBC - 697calBC (0.5%) 541calBC - 397calBC (94.9%)
JAAA-160663	$2,545 \pm 25$	72.84 ± 0.23	$2,495 \pm 25$	761calBC - 744calBC (8.8%) 687calBC - 665calBC (10.6%) 645calBC - 551calBC (48.8%)	773calBC - 540calBC (95.4%)

[参考値]



図版 暦年較正年代グラフ (参考)

文献

- Bronk Ramsay, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1), 337-360
- 藤尾慎一郎 2009 弥生時代の実年代, 西本豊弘編, 新弥生時代のはじまり 第4巻 弥生農耕のはじまりとその年代, 雄山閣, 9-54
- 小林謙 2009 近畿地方以東の地域への拡散, 西本豊弘編, 新弥生時代のはじまり 第4巻 弥生農耕のはじまりとその年代, 雄山閣, 55-82
- 小林達雄編 2008 総覧縄文土器, 総覧縄文土器刊行委員会, アム・プロモーション
- Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 55(4), 1869-1887
- Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19(3), 355-363

古屋敷遺跡 H 区出土木材の樹種

(株) 加速器分析研究所

はじめに

古屋敷遺跡 H 区から出土した杭について、木材利用を確認するための樹種同定を実施したので、その結果について報告する。

1 試料

試料は、H 区 SD01 から出土した杭 5 点（東杭列 E 2、E 25、E 32、西杭列 W 7、W 16）と、水路に近接して打ち込まれた杭 1 点（杭 5）の計 6 点である。なお、これらの試料について放射性炭素年代測定が実施されている（別稿年代測定報告参照）。

2 分析方法

剃刀を用いて、木片から木口（横断面）・榫目（放射断面）・板目（接線断面）の 3 断面の徒手切片を作成する。切片をアルコールシリーズ（エタノール 50%-70%-80%-90%-95%-100%、エタノール・ブタノール 1:1、ブタノール 100%、ブタノール・キシレン 1:1、キシレン）で脱水し、ピオライトで封入してプレパラートとする。プレパラートは、生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東(1982)、Wheeler 他(1998)、Richter 他(2006)を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林(1991)や伊東(1995,1996,1997,1998,1999)を参考にする。

3 結果

樹種同定結果を表 1 に示す。杭は、針葉樹 1 分類群（マキ属）と広葉樹 2 分類群（スタジイ・サカキ）に同定された。各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・マキ属（*Podocarpus*） マキ科

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか。樹脂細胞は早材部および晩材部に散在する。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はヒノキ型で 1-2 個。放射組織は単列、1-10 細胞高。

・スタジイ（*Castanopsis cuspidata* var. *sieboldii* (Makino) Nakai） ブナ科シイ属

環孔性放射孔材で、道管は接線方向に 1-2 個幅で放射方向に配列する。孔圍部は 3-4 列、孔圍外

で急激に径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20 細胞高。

・サカキ (*Cleyera japonica* Thunberg pro parte emend. Sieb. et Zucc.) ツバキ科サカキ属

散孔材で、小径の道管が単独または 2-3 個複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管の分布密度は高い。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列～階段状に配列する。放射組織は異性、単列、1-20 細胞高。

4 考察

6 点の杭の樹種には、3 種類が認められた。スダジイは、暖温帯性常緑広葉樹林の主要な構成種のひとつとなる常緑高木であり、常緑高木のマキ属と常緑小高木のサカキも暖温帯性常緑広葉樹林内に生育する。木材の材質をみると、針葉樹のマキ属は重硬・緻密で強度と耐水性が高い。スダジイは、比較的軽硬で強度が高い。サカキは、重硬・緻密で強度が高い。これらの結果から、杭として比較的軽硬な種類が利用されたことが推定される。

杭列別にみると、東杭列はサカキ 2 点とマキ属 1 点が認められ、少なくとも 2 種類が利用される。一方、西杭列は 2 点ともスダジイであり、東杭列とは異なる樹種が利用されている。

いずれも暖温帯性常緑広葉樹林に生育する樹種であり、遺跡周辺にこれらの樹種の生育する常緑広葉樹林が見られた可能性がある。

表 1. II 区の樹種同定結果

試料名	採取場所	種類
東杭列E2	H 区 弥生 SD01 丸木杭	サカキ
東杭列E25	H 区 弥生 SD01 丸木杭	サカキ
東杭列E32	H 区 弥生 SD01 丸木杭	マキ属
西杭列W7	H 区 弥生 SD01 割板杭	スダジイ
西杭列W16	H 区 弥生 SD01 割板杭	スダジイ
杭 5	II 区 杭 (水路に近接)	マキ属

文献

- 林昭三,1991,日本産木材 顕微鏡写真集,京都大学木質科学研究所.
 伊東隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載 I.木材研究・資料,31,京都大学木質科学研究所,81-181.
 伊東隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載 II.木材研究・資料,32,京都大学木質科学研究所,66-176.
 伊東隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載 III.木材研究・資料,33,京都大学木質科学研究所,83-

201.

伊東隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ.木材研究・資料,34,京都市大学木質科学研究所,30-166.

伊東隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ.木材研究・資料,35,京都市大学木質科学研究所,47-216.

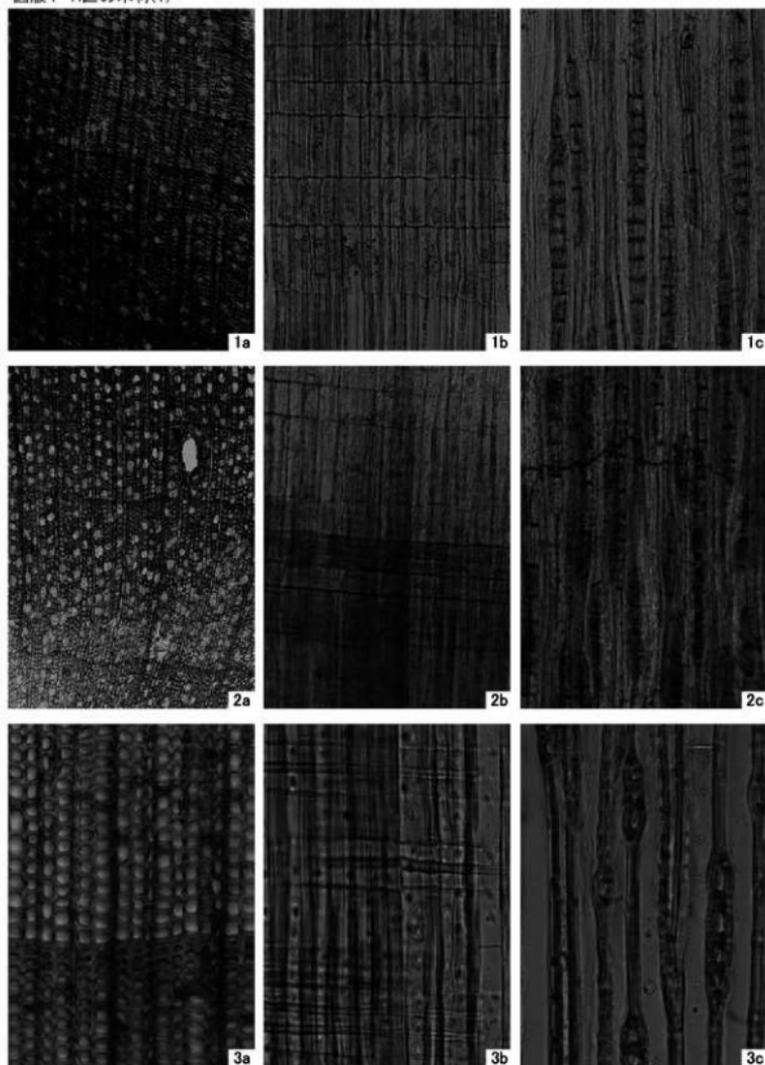
Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E. (編),2006,針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部久・内海泰弘(日本語版監修).海青社,70p. [Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.(2004)IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification] .

島地謙・伊東隆夫,1982,図説木材組織.地球社,176p.

Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (編),1998,広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐伯浩(日本語版監修).海青社,122p. [Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(1989)IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification] .

※) 本分析は、パリノ・サーヴェイ株式会社の協力を得て行った。

図版1 H区の木材(1)



1.サカキ(東杭列E2)

2.サカキ(東杭列E25)

3.マキ属(東杭列E32)

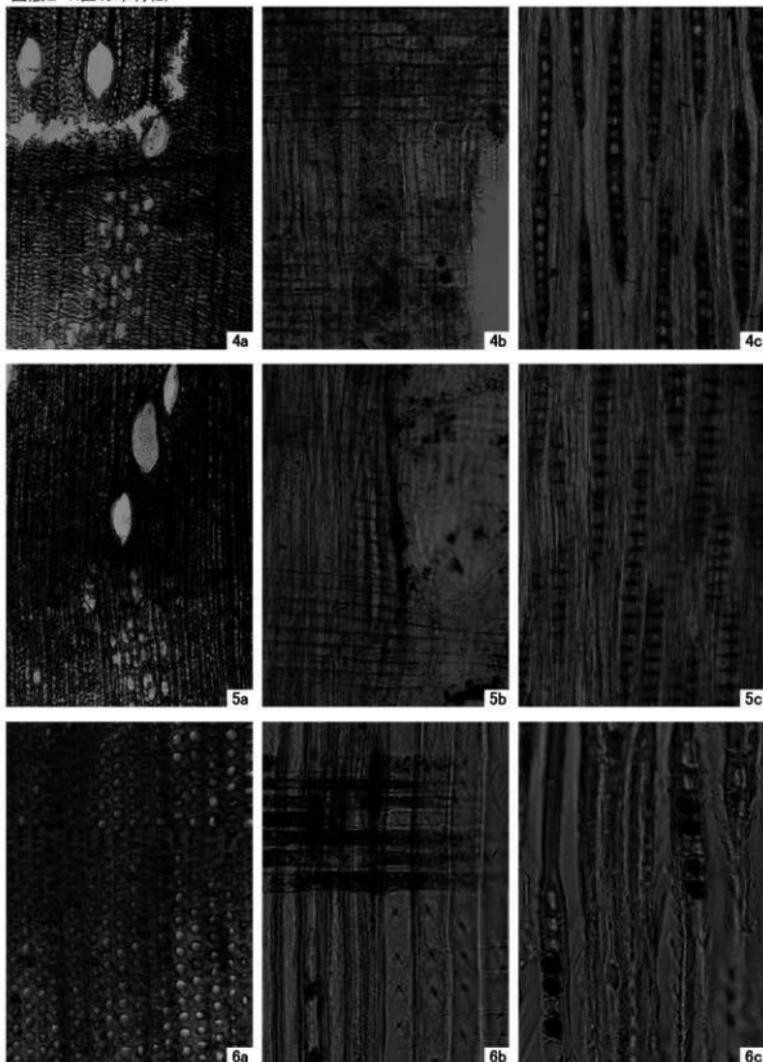
a:木口, b:柱目, c:板目

100 μ m:1-2a

100 μ m:3a,1-2b,c

100 μ m:3b,c

図版2 H区の木材(2)



4. スダジイ(西杭列W7)

5. スダジイ(西杭列W16)

6. マキ属(杭5)

a: 木口, b: 柾目, c: 板目

100 μ m: 4-5a
 100 μ m: 6a, 4-5b, c
 100 μ m: 6b, c

静岡仁摩道路発掘調査における樹種同定

一般財団法人 文化財科学研究センター

1. はじめに

本報告では、静岡仁摩道路発掘調査により出土した木製品に対して、木材組織の特徴から樹種同定を行う。木製品の材料となる木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、木材構造の特徴から概ね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であるが、木製品では樹種による利用状況や流通を探る手がかりにもなる。

2. 試料

試料は、静岡仁摩道路発掘調査（古屋敷遺跡区）により出土した番号9から番号11の柱根3点の木製品である。試料の詳細は結果表に記す。

3. 方法

方法は、試料からカミソリを用いて新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柾目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本三断面の切片を作製し、生物顕微鏡によって40～1000倍で観察した。同定は、木材構造の特徴および現生標本との対比によって行った。

4. 結果

表1に結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

1) マキ属 *Podocarpus* マキ科 番号9～11

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材部の幅が狭い。樹脂細胞は散在し多く見られ、水平木端壁は平滑である。腐朽によりやや不明瞭であるが、放射柔細胞の分野壁孔はヒノキ型で、1分野に1～2個存在する。放射組織は単列の同性放射組織型で、1～20細胞高である。

以上の特徴からマキ属に同定される。マキ属にはイヌマキ、ナギがあり、関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布し、暖地に分布する針葉樹である。常緑高木で、通常高さ20m、径0.5～0.8mである。材は耐朽性・耐水性が高く、建築、器具、桶、箱、水槽などに用いられる。

5. 所見

同定の結果、静岡仁摩道路発掘調査により出上した木製品はマキ属であった。材はやや重硬かつ強韌であり、耐朽性・保存性が高く、柱材などの建築部材によく利用される。西部日本海側では、鳥取県の不入岡遺跡（古墳時代中期）からマキ属の建築部材が出土している。マキ属は温帯や暖温帯に分布する針葉樹であり、暖地の山林内や緩傾斜の適潤な場所を好み、当時の遺跡周辺や周辺地域からもたらすことができる樹種であったと考えられる。

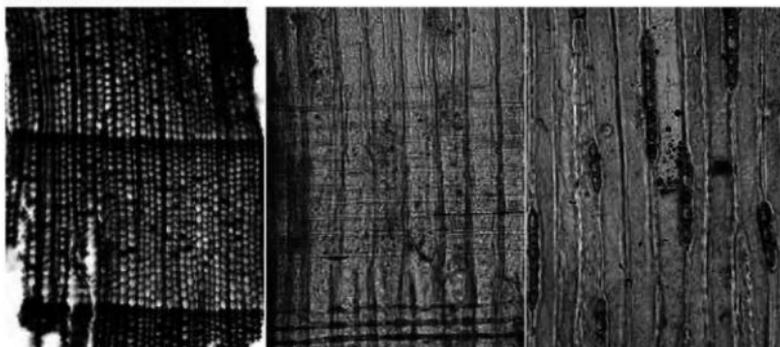
参考文献

- 伊東隆夫・山田昌久（2012）木の考古学，出土木製品用材データベース，海吉社，449p.
 佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹材の細胞，木材の構造，文永堂出版，p.20-48.
 佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞，木材の構造，文永堂出版，p.49-100.
 島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧，雄山閣，296p.
 バリノ・サーヴェイ（1996）不入岡遺跡から出土した炭化材の樹種，不入岡遺跡発掘調査報告書，倉吉市文化財調査報告書 85，倉吉市教育委員会，p.177.178.
 山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成－用材から見た人間・植物関係史，植生史研究特別第1号，植生史研究会，242p.
 吉田生物研究所（2005）木棺棺材樹種，堀部第1遺跡 鹿島町福祉ゾーン整備事業に伴う調査1，鹿島町教育委員会，p.169.

表1 静岡仁摩道路発掘調査における樹種同定結果

番号	遺物名	結果（学名／和名）		種別
9	杭6	<i>Podocarpus</i>	マキ属	柱根
10	杭7	<i>Podocarpus</i>	マキ属	柱根
11	杭4	<i>Podocarpus</i>	マキ属	柱根

静岡仁摩道路発掘調査の木材



横断面
マキ属 番号11 仮番号仮3 種別柱根

0.1mm放射断面

0.1mm接線断面

0.1mm

X線CT観察による内部構造からみた 古屋敷遺跡出土漆櫛の製作技術

片岡太郎（弘前大学北日本考古学研究中心）
村田泰輔（奈良文化財研究所）
星野安治（奈良文化財研究所）

1. はじめに

漆櫛は、縄文時代前期から出土例（例えば山形県高島町押出遺跡）がみられ、縄文時代後期から晩期にかけて特に北海道・東北地方に出土例が増加する（小林2008）。近畿以西では、縄文時代晩期の滋賀県彦根市松原内湖遺跡（岡田文男ら1993）、滋賀県守山市金森西遺跡（滋賀県教委2016）、岡山県岡山市鍛冶屋D遺跡（岡山県教委2009）などの出土例が知られている。これまで確認されている縄文時代の漆櫛は、製作技術的な視点で分類すると、櫛歯の固定方法の違いによって、結歯式と刻歯式の二種に大別される。結歯式は歯を紐や横材などで結束あるいは固定した後、その部分を塑形して頭とするのに対し、刻歯式は木や骨などの素地に直接歯を刻んで成形する。縄文時代の漆櫛の大部分は前者の結歯式であり、刻歯式は福井県烏浜貝塚の例など僅かである。結歯式は、透かしの有無によってさらに細分され、透かし模様入り漆櫛としては北海道恵庭市カリンバ遺跡（恵庭市教委 2003）などが知られ、透かし模様の無い漆櫛としては秋田県五城目町中山遺跡（五城目町教委1984・1991）や宮城県栗原市山王田遺跡（中里寿克ら1971）などが知られている。また、近年のX線CTを使った非破壊透視観察技術の発達により、透かし模様の無い結歯式の漆櫛では、櫛歯の結束に紐だけを使うタイプ（片岡ら2016）と、櫛歯の正面と背面から横材を添えて固定するタイプ（中里寿克ら1971、片岡ら2015）の詳細な技法が明らかとなりつつある。

本稿では、古屋敷遺跡出土漆櫛2点について、X線CTを使った非破壊内部構造観察を行い、漆櫛の製作技法について報告する。

2. 調査資料

漆櫛2点（C区No.01とC区No.2883）はいずれもポリエチレングリコール（平均分子量4000）により保存処理が行われている。

No.01は、結歯式の頭部である。残存径が幅54mm、高さ27mm、厚み5mmであり、片側2/3と櫛歯を欠く。外観の特徴として、平面形が逆台形状、端部が翼状であり、角状突起が付く。縦断面形も逆台形状である。

No.2883は、結歯式の頭部である。残存径が幅32mm、高さ18mm、厚み5mmであり、櫛歯を欠き、頭部下部の一面が欠損している。外観の特徴として、平面形態が方形または台形状である。用いられた赤色顔料は、蛍光X線分析の結果、水銀朱であることがわかっている。

3. 内部構造の調査方法

内部構造の観察にはX線CTを使った。撮影は、奈良文化財研究所設置のマイクロフォーカスX線撮影装置（島津製作所製SMX-100CT-D）を使って、同研究所の村田泰輔と星野安治が行った。撮影条件

は、X線管電圧が70kV、X線管電流が90 μ A、ビュー数が1800、スライス厚が0.35mmである。断層像の再構成は、同装置付属のソフトウェアCT-Solverを用いた。断層像の表示および解析は、弘前大学設置のマイクロフォーカスX線撮影装置（Bruker社製 Skyscan1174）付属ソフトウェアであるCT Analyzer、DataViewer、CTvox（Bruker社製 Skyscan1174）を使って、片岡太郎（弘前大学）が行った。

4. 結果と考察

4.1 漆櫛 C区 No.01（第30図4）

図1-1に断層像を示す。断層像の色調は、画像上の白色箇所がX線吸収度の高い部分であり、黒い部分がX線吸収度の低い部分に対応している。すなわち、白く撮像するほど、その部分は画像内において相対的に元素・密度・厚みが大きくなる。従って、本稿の断層像は、白黒のグラデュエーションで8ビット（256通り）表示とした。なお、実資料の形状と比べて各断層像の微小部分が欠けているが、これは再構成時にソフトウェアの都合上のもので、以下に述べる解釈には問題ない。

断層像の観察から、頭部内部において櫛歯の大部分が消失しており、空洞となっている（図1-1-A）。一方で、相対的に塑形材（図1-1B）が残存している。すなわち、塑形材が印象型となって、空洞部分が櫛歯の形状を模していることがわかる。

櫛歯が5本認められる。いずれも、断面径が約4.5mmの円である。塑形材は漆を主としているものと考えられるが、相対的に密度が低い不定形の粒子状の物質が全体に均一に混和されている。また、翼状突起（図1-1-B）と角状突起（図1-1-C）部分において、構造体のようなものは観察できず、塑形材だけで成形されている。特に、翼状突起内部では、不定形で細長い空洞が観察できる。これは、埋土中の劣化または製作時にともなう塑形材自体の収縮であると推測しているが、混和材の劣化と消失ともなう空洞である可能性もあり、混和材の研究を行う上で、今後の検討課題である。

櫛歯の正面と背面にそれぞれ2本の横材の痕跡が認められた。この合計4本の横材自体も櫛歯と同様に消失しているが、空洞が横材の形状を模していることが観察できる（図1-2-D）。横材は、櫛歯軸方向に対して直角方向に配置してある。4本の横材の断面形状は、いずれも方形であるが、上配置2本の一辺の長さが約2mm、下配置2本が約1.2mmであり、下配置の方が小さい。櫛歯部の縦断面形が逆台形状であることを鑑みれば、外観デザインと内部の上配置の横材幅を大とする構造に相関が認められる。

下配置の横材付近に、規格性のある細長く斜め方向に沿う空洞（図1-2-E）が認められた。また、櫛歯の周囲に巻きつけるような空洞が認められた（図1-2-F）。さらに、上と下配置の横材の間に、交差している空洞が認められた（図1-3-G）。これらの空洞は、形状と配置の関係から、結束に使った紐の痕跡であると考えられる。

次に、組み方の詳細を理解するために、断層像から紐と櫛歯、横材と考えられる空洞部分について抽出し、ボリュームレンダリング法によって三次元モデルを作成し、これを観察した。図1-5と図2-1が表面の三次元モデルであり、図1-6と図2-2が空洞部分の三次元モデルである。なお、空洞部分の三次元モデルでは、木組みをわかりやすくするために、紐と櫛歯、横材以外の空洞部分を画像処理によってある程度除去してあるが、完全に除去しきれておらず、画像上では泡状に見える部分がそれにあたる。

上配置の横材と櫛歯付近では、一部（図1-6-H、図2-2-A）を除いて紐がほとんど認められないが、これは劣化ともなう内部構造の収縮が三次元モデル作成に影響したためと考えられる。下配置の横材と櫛歯付近では、紐を使った組み方が顕著に観察できる。図2-2の面からみて、紐が横材の上から櫛歯2本進み、1本に巻きつけた後、また2本進むという規則性で組んでいる（図2-3-B）。なお、紐の燃りと

方向は、残存状況が悪いため、三次元モデルと断層像から判断できない。

以上、個別の断層像と内部構造の三次元モデルから漆櫛No.01の内部構造を観察した結果、製作方法が櫛歯を紐と横材によって組みながら、これを頭部の芯材とした後、塑形材を使って頭部の成形を行っていることがわかった。また、縦断面形が逆台形状であり、上と下配置の横材幅の構造と相関があるため、櫛歯を組む段階からデザイン構想があったものと考えられる。

4.2 漆櫛 C区 No.2883 (第48図9)

図2-4と5に断層像を示す。内部構造が著しく変形収縮している。しかし、No.01とは異なり、櫛歯の構造自体が存在している。櫛歯が8本認められる。いずれも、断面径が約2.2mmの円である。塑形材は、No.01と同様に、漆を主とし、相対密度が低い不定形の粒子状の物質が全体に均一に混和されている。次に、櫛歯の固定に使った紐であるが、断層像では観察できない。内部が著しく変形収縮しているとはいえ、全く観察されないとは考え難く、漆櫛の大きさや櫛歯の小ささから鑑みて、もともと紐を使わずに塑形材自体で櫛歯の固定と頭部を成形したと推定した。

5. まとめと今後の展望

古屋敷遺跡出土漆櫛の2点について、X線CTを使った内部構造の観察を行った。頭部形状が逆台形状であるNo.01については紐と横材を使った櫛歯の固定と頭部芯材の組み方を考察し、No.2883では紐を使わない製作方法を示唆した。また、いずれも外観の形状と内部構造に相関があり、櫛歯固定段階から頭部デザインの構想があることを指摘した。今後は、近畿地方以西の調査例の蓄積が希求され、北海道・東北地方との比較を通して、漆櫛の製作技術からみた縄文文化圏の社会背景や地域性研究に繋げたい。

引用・参考文献

- 恵庭市教育委員会 2003 『恵庭市カリンバ3遺跡』
- 岡田文男・成瀬正和・中川正人 1993 『松原内湖遺跡出土漆塗り木製品の材質と技法』 『松原内湖遺跡発掘調査報告書』 一木 製品一(本文編) 滋賀県教育委員会
- 岡山県教育委員会 2009 『鍛冶原D遺跡』 岡山県埋蔵文化財調査報告219
- 片岡太郎・上條信彦 2015 『亀ヶ岡文化の漆工芸』 北日本における先史資源利用の研究 弘前大学人文学部北日本考古学研究中心
- 片岡太郎・上條信彦・鹿納晴尚・佐々木理 2016 『X線CT観察による北東北地方の縄文時代晩期の漆櫛の製作技術』 『考古学』 自然科学 (受理済 印刷中)
- 五城目町教育委員会 1984 『中山遺跡』
- 五城目町教育委員会 1991 『1990 中山 -中山遺跡発掘調査報告書』
- 小林幸雄 2008 『縄文文化の透かし模様入り漆櫛とその技術』 『北海道開拓記念館研究紀要』 第36号 北海道開拓記念館 pp.1-36
- 滋賀県教育委員会 公益財団法人滋賀県文化財保護協会 2016 『金森西遺跡』 草津守山線補助道路整備事業(金森工区)に伴う発掘調査報告書
- 中里寿克・江本義理・石川陸郎 1971 『宮城県山王遺跡出土舟柄漆塗櫛の技法とその保存処置』 『保存科学』 No.7 東京文化財研究所 pp.47-60
- 福井県教育委員会 1979 『鳥浜貝塚—縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査I—』
- 山形県教育委員会 1990 『押出遺跡発掘調査報告書(本文編)』 山形県埋蔵文化財調査報告書第150集

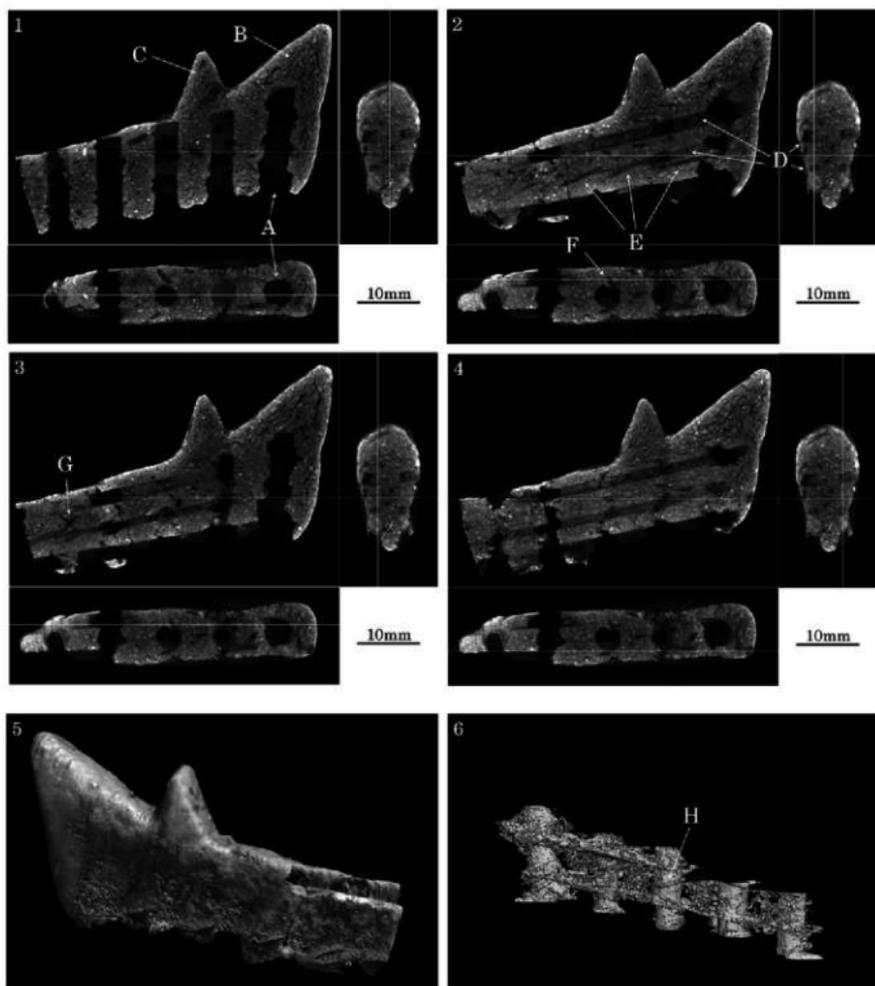


図1 漆櫛 No. 01 の内部構造

1~4: 断層像、5: ポリウムレンダリング法による表面の一点透視投影像
6: ポリウムレンダリング法による結菌構造の一点透視投影像

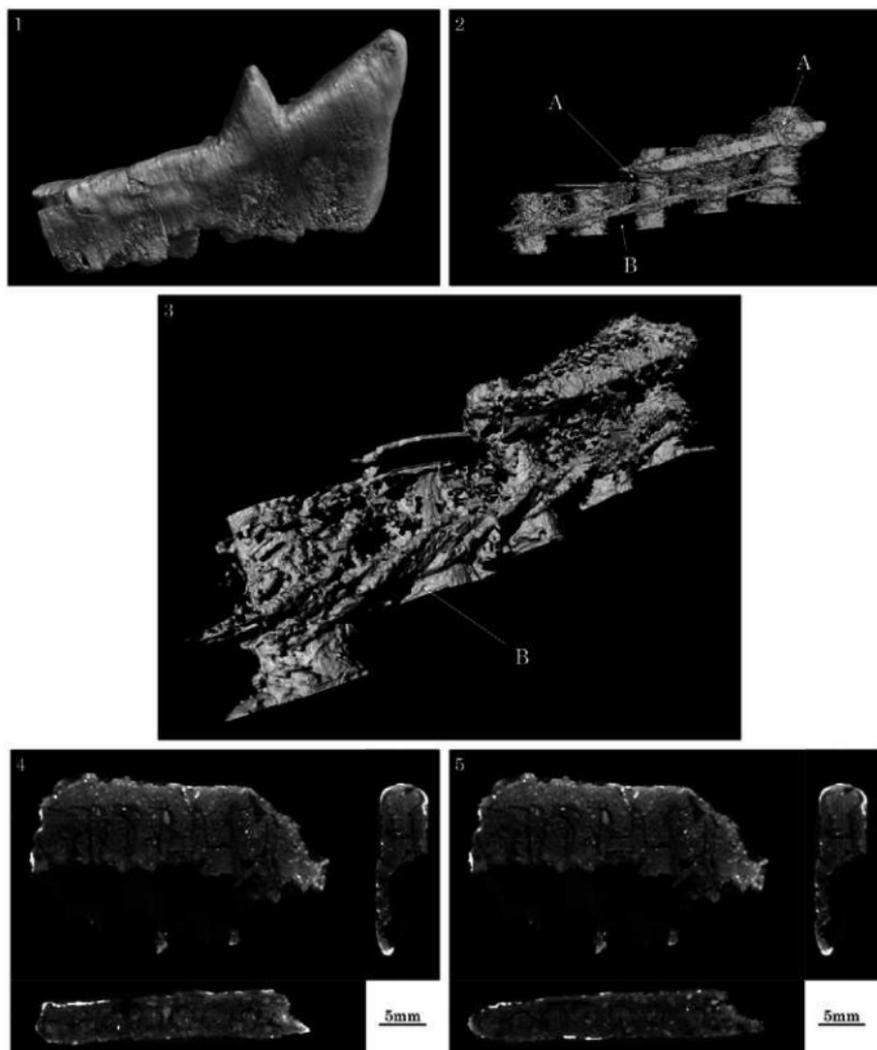


図2 漆櫛 No. 01 と No. 2883 の内部構造

- 1: 漆櫛 No. 01 のボリュームレンダリング法による表面の一点透視投影像
- 2・3: 漆櫛 No. 01 ボリュームレンダリング法による結歯構造の一点透視投影像
- 4・5: 漆櫛 No. 2883 の断層像

鳥根県古屋敷遺跡素材束の分析

奈良県立橿原考古学研究所 奥山誠義

古屋敷遺跡より出土した素材束（第77図2）の材質について分析を行った。材料調査に供された小片は、実体顕微鏡による観察の後、顕微FT-IR法による透過測定（以下、TR）をおこなった。TRは、試料を二枚のダイヤモンドセルに挟んで、圧縮・薄層化し、顕微鏡画像を確認しながら測定箇所を指定し、任意の箇所を選択的に測定する局所分析が可能である。TR測定に際して、光路上に偏光子を挿入し、偏光角 0° から 90° まで 15° ごとに測定し偏光特性の把握を試みた。TR測定はPerkinElmer Spotlight400を用い、測定波数領域 $4000\sim 750\text{cm}^{-1}$ 、波数分解能 16cm^{-1} 、積算回数64回の条件で測定した。さらに、一部の試料を採取し生物顕微鏡による観察を行った。

顕微FT-IR法によるTR測定の結果、供試試料は植物繊維のIRスペクトルを示した。偏光測定をおこなったが、偏光特性は確認されなかった。供試試料では、偏光特性を有すると考えられる大麻（Hemp）や苧麻（カラムシ・Ramie）とは異なる結果となったことから、大麻あるいは苧麻と異なる繊維である可能性が示唆された。引き続き、生物顕微鏡観察を行った結果、繊維は単繊維に分離されていない状態であることが確認された。繊維は未精練で単繊維を作り出す以前の状態であることが確認された。断面観察では繊維の特徴を視認することが困難であったため、繊維の種類を同定することができなかった。

調査の結果から、素材を特定することは困難であったが、素材束は大麻あるいは苧麻とは異なる素材である可能性が示唆された。

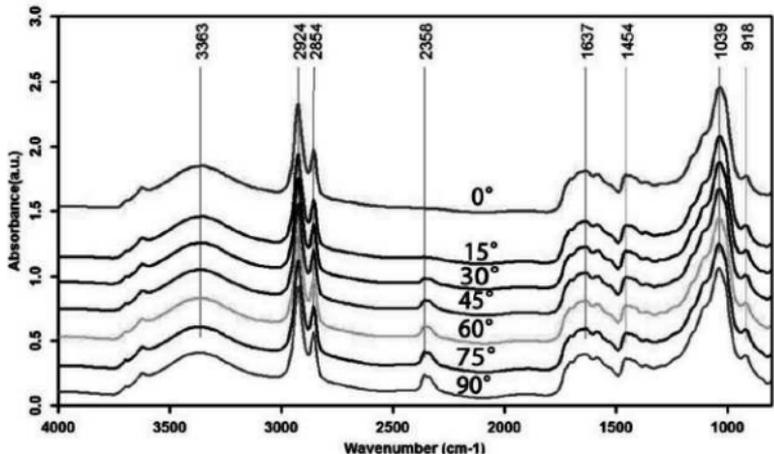


Fig.1 素材束の偏光IRスペクトル

古屋敷遺跡(C・F・H区)から出土した 赤色顔料付着遺物について

上山 晶子

大田市古屋敷遺跡からは赤色顔料の付着した縄文時代後期から晩期にかけての櫛や土器が出土した。古墳時代以前の赤色顔料は、硫化第二水銀(HgS)を主成分とする鉱物の辰砂に由来する水銀朱(朱)、酸化第二鉄(Fe₂O₃)を多く含むとされるベンガラが知られている(注1)。これらの遺物の性格を知る手がかりとして、蛍光X線分析による元素定性分析を行なった。

1. 分析の方法

分析方法は、蛍光X線分析による元素定性分析である。使用機器は鳥根県古代文化センター所有、鳥根県埋蔵文化財調査センター設置の「エスアイアイ・ナノテクノロジー(現:日立ハイテクサイエンス)社製SEA1200VX卓上型ケイ光X線分析計(エネルギー分散型)」である。測定条件は、測定時間200秒(うち測定可能な有効時間は125~138秒)、試料室雰囲気は大気/真空、測定範囲は直径8.0mm、管電圧50kV(測定室雰囲気真空時には15kV)、管電流230~824μA(管電圧による自動設定)、X線管球はRh(ロジウム)、検出器はSi半導体検出器(SSD)、一次フィルタとしてPbフィルタ(測定室雰囲気真空時にはClフィルタ)を設定し、装置の仕様上、マイラーカバーを使用している。測定は肉眼、あるいは10~40倍の実体顕微鏡観察にて赤色顔料の付着がみられた箇所のうち赤彩が顕著な部分と、比較対照資料として胎土部分(土器の破断面)で行なった。このうち、水銀(Hg)と硫黄(S)を高く検出したものを水銀朱、鉄(Fe)を高く検出し、水銀と硫黄を検出しなかったものは、胎土部分のスペクトルピークの比較と顕微鏡観察の結果から、ベンガラ(ここでは酸化鉄を多く含む「広義のベンガラ」(注2))であると判断した。

2. 結果

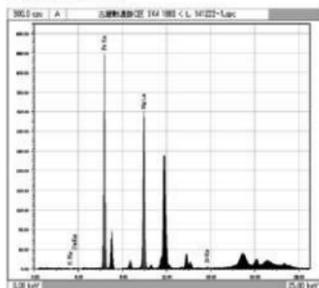
測定を行なった試料とその結果を表1と蛍光X線分析スペクトルピークに示す。測定NaC1・C2・C8はHgとSのスペクトルピーク(以下、ピーク)を示した。これらの試料では、Feの高いピークも検出しているが、胎土部分からもFeの高いピークが検出されており、胎土に由来、もしくは埋蔵環境下における鉄分の二次的な付着が考えられる。したがって、水銀朱による塗彩は確実に行なわれているとみられる。特に、測定NaC7は、土器より剥落した赤彩の塗膜片状のものを測定試料としているが、塗膜片が付着していたとみられる土器本体の部分(剥落塗膜片の形状に赤彩が薄く残る)も測定したところ、Hgのピークは検出されず、Feの高いピークを検出している。Feのピークが胎土や埋蔵環境に由来するものか赤彩に由来するものかは断言できないが、ひとつの可能性としてベンガラが下塗りを使用されていたことが考えられる。また、Feの高いピークを示した、測定NaC4・C5・C6・F1・H1については、胎土部分のピークとの比較と顕微鏡観察の結果から、ベンガラが塗布されていると推測される。

(注1・2) 市毛勲 1998 『新版 朱の考古学』 雄山閣

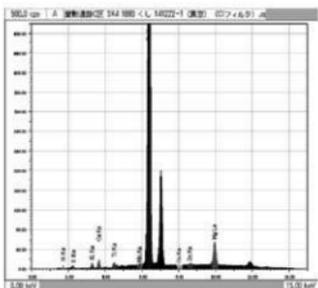
表1 古墳敷遺跡C区・F区・H区出土赤色顔料付着遺物蛍光X線分析結果

調査区	測点No	標記No	種別	器種	測定箇所	検出元素			推測される顔料	備考
						Fe	Hg	S		
C区	C1	48-9	木製品	赤彩桶	漆塗膜面	+	++	++	水銀欠	漆塗膜面の表面
						+	++	++	水銀欠	漆塗膜面の裏面 (膠本体に接している面)
C区	C2	21-11	縄文土器	甕	外面	X	X	X	-	赤彩なし
					内面	++	+	+	水銀欠	
					破断面	++	-	-	-	
C区	C3	51-6	縄文土器	甕?	外面	++	-	-	ベンガラ	赤彩なし
					内面	++	-	-	-	
					破断面	++	-	-	-	
C区	C4	21-10	縄文土器	浅鉢	外面	+	X	X	-	赤彩なし
					内面	X	X	X	-	
					破断面	++	-	-	-	
C区	C5	21-9	縄文土器	浅鉢	外面	++	-	-	ベンガラ	赤彩なし
					内面	X	X	X	-	
					破断面	++	-	-	-	
C区	C6	42-5	縄文土器	浅鉢	外面	++	-	-	ベンガラ	赤彩なし
					内面	X	X	X	-	
					破断面	++	-	-	-	
C区	C7	-	縄文土器	浅鉢	外面	++	++	+	水銀欠	初探した赤彩塗膜片を測定。赤彩の付着状況から、ベンガラも使われている可能性もある。
					内面	X	X	X	-	赤彩なし
					破断面	++	-	-	-	
C区	C8	-	縄文土器		外面	++	++	+	水銀欠	
					内面	++	++	+	水銀欠	
					破断面	++	-	-	-	
F区	F1	-	縄文土器		外面	++	-	-	ベンガラ	赤彩なし
					内面	++	-	-	-	
					破断面	++	-	-	-	
H区	H1	-	縄文土器		外面	++	-	-	ベンガラ	赤彩なし
					内面	++	-	-	-	
					破断面	++	-	-	-	

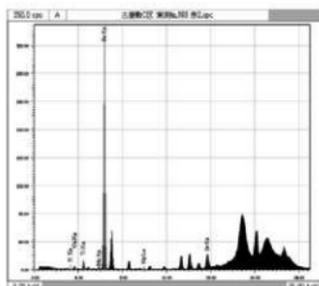
検出元素凡例：++→スペクトルピークを高く検出/+-→検出せず/X→測定せず（赤彩なし・器材形状により測定不可）



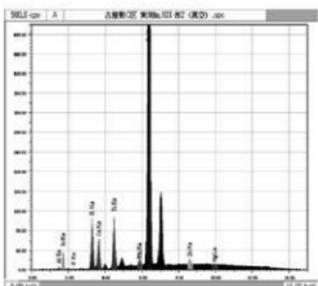
測定No.C1 (大気)



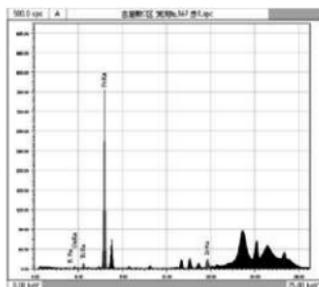
測定No.C1 (真空)



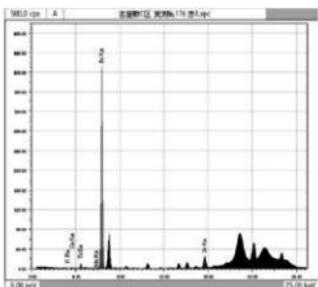
測定No.C2 (大気)



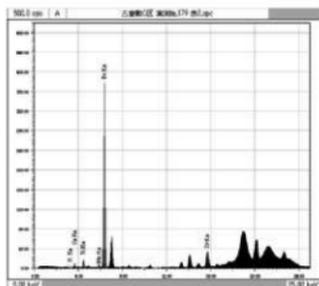
測定No.C2 (真空)



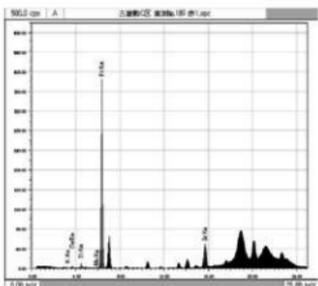
測定No.C3



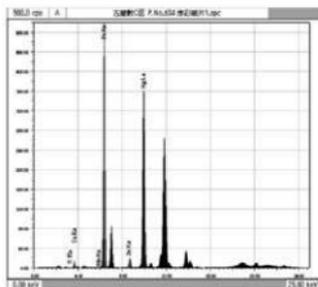
測定No.C4



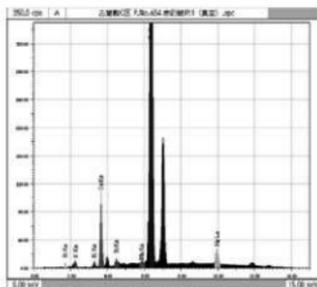
測定No.C5



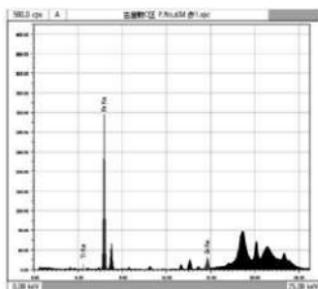
測定No.C6



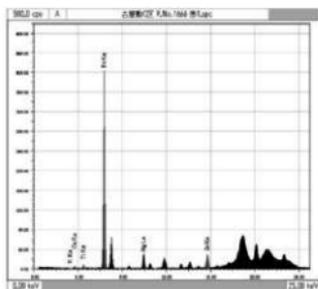
測定No.C7 赤彩塗膜片 (大気)



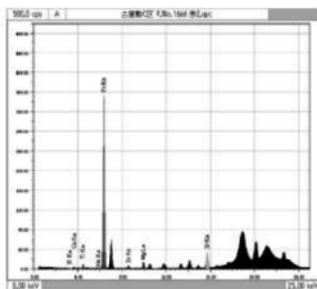
測定No.C7 赤彩塗膜片 (真空)



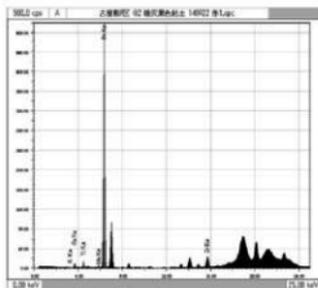
測定No.C7 赤彩塗膜片剥落部分 (土器側)



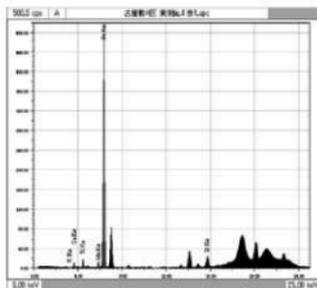
測定No.C8 外面



測定No.C8 内面



測定No.F1



測定No.H1

第8章 総括

1. 各調査区の関係について

古屋敷遺跡の調査は3カ年にわたって行われたため、調査区毎の層位や遺構の繋がりが複雑になっている。ここでは、本報告書で取り上げたC・F・H・I区について、出土遺物や遺構の傾向、各土層の特徴や出土遺物を一覧にまとめた。(表1) 出土遺物は、各遺構面及び、その直上に位置する包含層の遺物をまとめ、分類したものである。出土遺物のうち、突帯文期の区分は柳浦俊一による縄文土器の編年(2017)を用いた。

出土遺物の傾向を見ると、概ね下層に向かうにつれ古相の土器へと変化する様子が把握できる。弥生時代前期の土器は、多くの遺構面で突帯文土器と共存しており、両者の割合が徐々に逆転していく様子うかがえる。突帯文土器では、古屋敷遺跡(A区)の限られた土器を指標とした柳浦編年が、本調査区(C・F・H・I区)の出土遺物とも大きな矛盾がないことがわかる。今回は遺構面と包含層の遺物を網羅的に分類したが、遺構出土一括資料は、対応する包含層資料と比較してやや古手の傾向を示すこともあり、子細に検討することで、より細かい単位で土器の変遷を把握できる可能性がある。例えば、C区第5遺構面やH・I区第2遺構面のように、多数の遺構が僅かな高低差をもって存在する遺構面では、期待が持てるだろう。縄文時代晩期初頭以前については、出土遺物の絶対数も限られ、判断が難しい。他の調査区の報告を待って、再検証する必要がある。

では、各調査区間の併行関係はどうであろうか。弥生時代前期にあたるSD01は、C区第2遺構面からH区第1遺構面へと流れており、この時期の遺構面を判断する指標となる。また初期段階の突帯文土器を主体とする、C区第5遺構面とH・I区第2(黒灰色粘質土層)・3遺構面は、ある程度近似する時期と考えられる。C区第7遺構面とH・I区第4遺構面では、突帯文土器がほぼなくなるため、これらもほぼ並行する時期であろう。F区は出土遺物が限られるため判断が難しいが、第2遺構面では晩期初頭(滋賀Ⅲa並行期)の鉢が出土しており、H・I区の第4・5遺構面と時期的に重なる可能性が高いだろう。

2. 古屋敷遺跡の変遷

遺構面	層位	遺構				土器										
		地床炉	灰だまり	ピット	他遺構	弥生前期	突帯文4	突帯文3	突帯文1・2	晩前期半	後期末 ~晩期	縄文文後	縄文文前			
C区	1 縄灰1	▲		▲		◎										
	2 縄灰2	◎	○		SD01		○									
	3 縄灰3	○	○			○	◎									
	4 灰白	▲				○		◎	○							
	5 黒灰	◎		▲	黒石・配石 黒石			○	◎	○						
	6 黒砂	◎	○							◎						
	7 灰色砂	◎								◎						
	8 縄灰	▲		○						▲						
	9 縄オリブ灰			○						○						
H・I区	1 灰色粘土				SD01	◎	◎	○								
	2 縄灰	◎	○	▲			○	◎								
	3 黒色・暗オリブ	▲	○	○	配石				◎							
	4 青灰	○	○	▲						○						
	5 黒砂1	○	○	○						○						
	6 青緑1・黒褐2	▲	▲	○	柱礎					○						
	7 青緑2・黒褐3	▲	▲							○				○	○	
	8 黒砂レシ以下	▲												○	○	
F区	1 黒灰・淡褐色灰まで	▲						○								
	2 縄灰	▲									◎					
	3 縄オリブ			▲												

第1表 遺構面と出土遺構・遺物の関係

弥生時代中期以降

古屋敷遺跡(C・F・H・I区)では、圃場整備によって弥生時代中期以降の遺構面は残されていない。C区の調査において、圃場整備時の基盤層に近い位置から東西および南北方向に等間隔に並んだ杭群が検出されたが、圃場整備以前の比較的新しい水田区画の名残と考えられる。この杭群はA区でも確認されている。

弥生時代前期

弥生時代前期の遺構としては、調査区内を横断するSD01とそれに付帯する各施設が目される。SD01は、北東から南西へ向けて延びており、遺跡の緩傾斜を利用した人工の溝である可能性が高い。またH区で検出した2群の護岸用杭列、配石群と杭群を組み合わせた付帯施設とともに灌漑用施設として機能していたと考えられる。北側に隣接するB区では、小区画水田も確認されており、より詳細な検証が必要なものの、水田農耕に伴う取排水を意図した施設である可能性が高い。第7章で報告したように、AMS分析の結果によれば、杭列の¹⁴C年代は2465 ± 25yrBPから2390 ± 25yrBPとなっており、縄文時代晩期から弥生時代前期への移行期として矛盾はない。一方で、この時期はAMS分析による較正年代の幅が広がる傾向があり(2400年問題)、東杭列と西杭列、配石に伴う杭(杭5)が併存したのかどうかなど、詳細な検証は難しい。

灌漑施設の利用は水田農耕の開始に伴い、早期には北部九州地域の板付遺跡や菜畑遺跡などで始まっており、これらの遺跡では取排水用の堰や水路、水路や畔を補強するための杭列や矢板等が出土している。早期の水田跡は岡山県津島江道遺跡でも検出されており、前期前半になると瀬戸内地域から大阪湾にいたる各地で発見例が増加する。²¹ 山陰地域においては、確実に前期まで遡る水田跡や灌漑設備は知られておらず、水田農耕に伴う遺構としては初例である。

弥生時代前期の遺物は、明橙色の胎土が目立ち、縄文時代晩期の土器と明確に区別することができる。層位別、遺構面別に見ると、C区では第5遺構面、H区・I区では第2遺構面まで確認されており、ほとんどの層位で突帯文土器と共伴する。表1で示したとおり、SD01の存在するC区第2遺構面、H・I区第1遺構面を境に両者の割合は逆転し、縄文時代晩期から弥生時代前期への移行期において、より弥生色が強くなっていく様子をうかがうことができる。

縄文時代晩期

縄文時代晩期の遺構では、多くの地床炉、ピット群を確認した。地床炉はC区第5・6遺構面、H・I区第2遺構面などの突帯文期に集中して検出された。両地区の遺構面の並行関係を考慮すると、C区第5・6遺構面が若干先行すると考えられ、時期毎に集中域が移動している可能性がある。

ピット群は、C区第6・7・8遺構面で集中して検出した。ピットの配置のみから個々を把握することは困難だが、建物・杭列・柵列等の構造物が集中して構築されていた可能性が高い。注目されるのは、こうしたピットの集中域が、C区と隣接するD区(第6・7遺構面)にのみ見られる点である。土地利用に際し、何らかのゾーニング意識が働いていた可能性がある。また、ピットに伴いI区第7遺構面で検出された柱痕も注目される。これらの柱痕は、いずれもマキ属の丸木材を、未加工のまま用いている点、明確な掘方がなく、直接打ち込まれた可能性が高い点に特徴がある。

出土遺物は、縄文時代晩期初頭から晩期末までの縄文土器が出土している。表1のとおり、中心と

なるのは突帯文土器であるが、その出現直前に位置づけられる口縁端部にのみ刻目をもつ鉢類が一定量みられる。また、これらに伴って出土した石器も多く、刃器、敲石・擦石、石斧、呪術具と考えられる凝灰岩製石器など、多様な石器が出土した。

縄文時代後期

H-I区では、第7・8・9遺構面が縄文時代後期に遡る可能性があるが、これらの遺構面には数える程の遺構しか確認できておらず、遺物量も少ない。またC区においては、晩期の遺物に混じって出土した遺物が少量見られるだけであり、発掘停止面（第9遺構面）は晩期初頭以降の遺構面と考えられる。

出土遺物には、磨消縄文を持つものや口縁端部を肥大させる縁帯文系の土器が一定量あり、布勢式・崎ヶ鼻式並行期まで遡りそうである。また縁帯文段階の後半期に用いられたとされる、内面肥厚指頭圧痕土器がH-I区第7遺構面までまとまって出土しており、他遺跡の出土例との比較において指標になると考えられる。D区においては、G10土器だまりで同時期の遺物が出土している。

3. 石器と使用石材について

古屋敷遺跡(C・F・H・I区)出土の石器類を概観すると、種別と石材に密接な関係が認められる。

まず刃器については、石鏃、スクレイパー等が出土しているが、これらは基本的に安山岩製である。安山岩の中でも、一般にサヌカイトと呼称される結晶質あるいはガラス質の安山岩を用いている。今回は産地分析を行っていないが、縄文時代後期から晩期にかけて、金山産や五色台産のサヌカイトが中国地方各地で広く流通していたことが知られており、こうした石材流通の一端が古屋敷遺跡の石材利用にも現れている可能性があるだろう。一方で、山陰地域における石器用材として広く用いられている黒曜石は、本調査区においては数えるほどしか出土していない。この事を積極的に評価するならば、例外的なものを除き、古屋敷遺跡においては黒曜石が入手できなかったと考えべきであろう。¹¹² 当時の黒曜石流通圏を考える上でも興味深い事例である。

次にデイサイトや玄武岩を主体とする、敲石・擦石・凹石・石皿について取り上げる。これらの石材はある程度硬度もあり、堅果類の殻を砕いたり、実を磨り潰すために用いられたことが想定できる。注目されるのは、これらの石器の中に火を受けたと考えられるもの(55-7、107-9)や、破砕行為が行われているもの(29-7、93-4、93-5)が数多く含まれる点である。再使用できない状態で廃棄する意図的な破壊行為が行われていたのかもしれない。

石斧類に用いられる石材は、泥質片岩～塩基性片岩と呼ばれる片理の発達した緑色の石材である。比較的緻密なデイサイトや安山岩を用いる例(90-2)も少数存在するが、当時の人々にとっては他に選択の余地がなかったようである。これらの石材は遺跡周辺で採取できず、近隣では江の川中流域が産地とされる。¹¹³ 入手性は必ずしも良くなかったようで、使用中破損したものを再生加工したり(29-5)、製作途上で破損したものの再加工を試みたもの(32-13)が一定量出土している。ただし、石斧製作や再加工に伴う小剥片やチップ類がほとんど出土しておらず、少なくとも本調査区内においては石斧製作を恒常的に行っていた様子は認められない。

最後に、線刻礫などの呪術具と考えられる石器を取り上げる。線刻礫としては、最小クラスと考えられる稜形形の線刻を持つもの(88-4)や、円形の穿孔と線刻を組み合わせたもの(33-8)等が

挙げられる。また、円形の凹みを1～3個穿った礫(34-2、34-3、120-9)や、執拗な研磨によって面取りをした円礫(53-2、108-6、108-10)、棒状に研磨されたもの(10-1、53-1、108-7)なども、実用品ではないと考えられる。これらの石器類は白色で柔らかい凝灰岩で占められており、切削性の良さや色調を基準として選択された可能性が高い。またある程度研磨された後、意図的に破壊されたと考えられるもの(30-1、68-5、118-3)や、被熱痕跡のあるもの(55-7、94-15)も散見される。これらの石器は、具体的な使用方法こそ定かでないものの、縄文時代晩期を中心に多用されており、火にくべたり破碎を伴う行為も継続的に行われていた事が想定できる。

4. 漆塗り櫛について

古屋敷遺跡C区では、鳥根県内では初例となる縄文時代晩期の漆塗り櫛が2点出土した。棒状の櫛歯材の一端を紐で結束し、漆を主体とする塑形材で固めた、いわゆる結歯式堅櫛である。縄文時代の結歯式堅櫛は北海道をはじめ東日本を中心に出土している。西日本では、大阪府森の宮遺跡、同大淵遺跡、岡山県津島岡大遺跡、福岡県下徳力遺跡で出土例がある。山陰地域の出土例は、鳥取県井出跨遺跡出土品が知られるのみである。また、頭部端に角状の突起を持ち、透かし孔を持たないものは、管見に触れる限りでは滋賀県正楽寺遺跡出土例が西限である。弥生時代の漆塗り櫛としては、鳥根県西川津遺跡、同タテチョウ遺跡、坂長第7遺跡出土例がある。¹⁾

X線CT撮影によれば、30-4は櫛歯材の両側を4本の細い棒で挟み込み、紐を返し縫いのように櫛歯に絡めながら緊縛していたことが判明した。こうした結束手法は滋賀県松原内湖遺跡出土品と同様である。²⁾ 内部構造モデルを見ると、櫛の中心側(破損部側)に、添え木間を跨いで延びるような紐跡がある。4本の添え木の位置がずれないように互いを結んでいた紐かもしれない。この櫛は添え木と櫛歯が直交しないため、櫛頭が左右対称に造作されていたのであれば、中軸線付近で別の添え木を接ぎ、形状を整えなければならない。現状では本来の櫛幅が不明であるが、櫛の中軸線付近で破損しているのであれば、こうした添え木を継ぎ足すために結ばれた紐である可能性もある。この櫛の特徴的な角部は骨組みがなく、塑形材のみで整形されていた。48-3は櫛歯の直径がより細く、両側から挟み込む棒も紐も見られないため、塑形材のみで整形されていた可能性が指摘されている。

以上のように2点の櫛は彩色の有無だけでなく、異なる骨組みを持っていることが明らかになった。こうした内部構造の把握は、目視や単純なX線撮影では困難であり、最新の技術がもたらした成果といえる。

1. 岡山県文化財保護協会 1985『百間川沢田遺跡2 百間川長谷遺跡2』旭川放水路(百間川)改修工事に伴う発掘調査VI
中山誠二 1999『日本列島における稲作の受容』『現代の考古学3 食糧生産社会の考古学』朝倉書店
2. 内田隼雄他 2013『門遺跡 高原遺跡1区 中尾H遺跡』一般国道9号(朝山大田道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書1 国土交通省松江国道事務所・鳥根県教育委員会
稲田陽介 2009『山陰地方における石器石材利用の動向』『考古学ジャーナル』594 ニューサイエンス社
竹広文明 2014『石器製作・石材利用から見た山陰地域社会の展開 変伊川上流域を中心に』『山陰地方の縄文社会』
古代文化センター研究論集第13集
3. 中村唯史氏のご教示による。
4. 中川正人 1998『櫛の造形 縄文時代の堅櫛』『紀要』11 財団法人滋賀県文化財保護協会

- 木立雅朗 1993「木製櫛の変遷とその意義について 野本遺跡出土櫛の理解のために」『野本遺跡』県営圃場西部事業
御手洗・出城地区浜相川工区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 石川県埋蔵文化財センター
- 岡村道雄 2010『縄文の漆』ものが語る歴史シリーズ20 同成社
- 中川正人 1996「正業寺遺跡出土漆塗り壺櫛の材質構造調査」『能登川町埋蔵文化財調査報告書』第40集 能登川
教育委員会
- 永嶋正春 1993「井出袴遺跡出土の漆資料について」『井出袴遺跡』財団法人鳥取県教育文化財団
2009『坂長第7遺跡』財団法人鳥取県教育文化財団
5. 岡田文男・成瀬正和・中川正人 1993「松原内湖遺跡出土漆塗り木製品の材質と技法」『松原内湖遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会

遺物觀察表

第2表 古屋敷遺跡(C区) 出土土器観察表

Rg	図版 番号	出土 地点	出土層位	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	調整及び文様等	胎土 (磁粒)	色調
9-1	3.7	L7	S801	弥生土器	甕	(17.6)	25.6	(外) 沈殿文、ナデ、摩滅 (内) 指跡正屈、ナデ	2cm以下	(外) 橙 5YR7/6 (内) 浅黄粉 7.5YR8/4
9-2	3.7	不明	S801	弥生土器	甕			(外) 沈殿文、摩滅 (内) 摩滅	2cm以下	(外) にぶい黄粉 10YR7/4 (内) 黄灰 10YR7/3
9-3	3.7	Tr		弥生土器	甕	(20.4)		(外) 摩滅 (内) 摩滅	3cm以下	(外) 橙 5YR7/6 (内) 橙 7.5YR7/6
9-4	3.7	不明	S801	弥生土器	甕	(25.2)		(外) ナデ、摩滅 (内) 摩滅	1cm以下	(外) 浅黄粉 7.5YR8/3 (内) 灰白 7.5YR8/2
9-5	3.7	Tr		弥生土器	甕			(外) 沈殿文、羽状文 (内) ナデ?	2cm以下	(外) 浅黄粉 10YR8/3 (内) 灰白 2.5YR/2
9-6	3.7	不明	S801	弥生土器	甕			(外) 区画沈殿文、羽状文 黏付突帯、摩滅 (内) 摩滅	3cm以下	(外) にぶい黄 5YR7/4 (内) 黄灰 2.5YR/1
9-7	3.7	不明	S801	弥生土器	底部		(21.0)	(外) ナデ、摩滅 (内) ナデ、摩滅	3cm以下	(外) 黄灰 10YR4/1 (内) 灰白 10YR8/2
9-8	3.7	不明	S801	弥生土器	底部		0.0	(外) ナデ (内) ナデ	3cm 以上	(外) 橙 5YR6/8 (内) 浅黄粉 7.5YR8/3
10-1	3.8	J6	緑灰色粘質土	弥生土器	甕			(外) 刷毛目 (内) 刷毛目	1cm以下	(外) 灰白 2.5YR/2 (内) 灰白 2.5YR/2
10-2	3.8	J7	緑灰色粘質土	弥生土器	甕			(外) 摩滅 (内) 摩滅	2cm以下	(外) 浅黄粉 7.5YR8/4 (内) 浅黄粉 7.5YR8/3
10-3	3.8	J6	緑灰色粘質土	弥生土器	甕	(24.0)		(外) 黏付突帯、摩滅 (内) 摩滅	3cm以下	(外) 浅黄粉 10YR8/3 (内) 灰白 10YR8/1
10-4	3.8	J7	緑灰色粘質土	弥生土器	甕			(外) 黏付突帯刷目、ナデ (内) ナデ	3cm以下	(外) にぶい黄 7.5YR7/3 (内) 黄灰 7.5YR5/1
10-5	3.8	K6	緑灰色粘質土	縄文土器	深鉢	(22.8)		(外) 黏付突帯刷目、染灰 (内) 染灰	2cm以下	(外) にぶい黄粉 10YR7/4 (内) 灰黄粉 10YR5/2
10-6	3.8	J6	緑灰色粘質土	縄文土器	浅鉢			(外) 三田谷文様、ナデ (内) 摩滅	1cm以下	(外) 灰白 2.5YR/1 (内) オリーブ黒 5Y2/1
13-1	3.8	J6	SD01	弥生土器	甕			(外) 刷毛目、ナデ (内) 刷毛目、ナデ	3cm以下	(外) 浅黄粉 7.5YR8/4 (内) にぶい黄 7.5YR6/3
15-1	3.8	K6	SX06	縄文土器	底部		(9.6)	(外) 摩滅 (内) 摩滅	3cm以下	(外) 灰白 2.5YR/2 (内) 黒 2.5Y2/1
15-2	3.8	K6	SX06	縄文土器	深鉢			(外) 黏付突帯刷目、染灰 ナデ (内) ナデ	4cm以下	(外) 灰白 2.5Y7/1 (内) 地灰 7.5Y6/1
15-3	3.8	K6	SX06	縄文土器	深鉢			(外) 黏付突帯竹管刺突、ナデ ナデ (内) ナデ	2cm以下	(外) にぶい黄粉 10YR6/3 (内) 灰黄粉 10YR5/2
15-4	3.8	K6	SX06	縄文土器	深鉢			(外) 黏付突帯竹管刺突、ナデ (内) 摩滅	4cm以下	(外) 黄粉 7.5YR3/2 (内) 灰黄粉 7.5YR4/2
16-1	3.9	J5	緑灰色粘質土	縄文土器	深鉢			(外) 口縁部刷目(摩滅) 黏付突帯刷目、染灰 (内) 染灰	1cm以下	(外) 橙 2.5YR6/0 (内) 橙 5YR7/6
16-2	3.9	J8	緑灰色粘質土	弥生土器	甕	(43.0)		(外) 沈殿、刷毛目 (内) 摩滅	3cm以下	(外) にぶい黄粉 10YR7/4 (内) にぶい黄粉 10YR7/4
16-3	3.9	K5	緑灰色粘質土	縄文土器	浅鉢	(20.0)		(外) 三田谷文様 (内) 摩滅	1cm以下	(外) 浅黄 2.5Y7/3 (内) 浅黄 2.5Y7/3
16-4	3.9	J8	SX10	縄文土器	底部		(10.0)	(外) 摩滅 (内) ナデ	6cm以下	(外) 橙 7.5YR6/6 (内) 橙 5YR7/6
18-1	3.9	J8	緑灰色粘質土	弥生土器	甕			(外) 黏付突帯、羽状文 (内) 摩滅	1cm以下	(外) 浅黄粉 10YR8/4 (内) 灰白 10YR8/2
18-2	3.9	J8	緑灰色粘質土	弥生土器	甕			(外) 2条区画、羽状文 (内) 摩滅	2cm以下	(外) 浅黄粉 7.5YR/6 (内) 黄粉 10YR8/4
18-3	3.9	K5	緑灰色粘質土	縄文土器	深鉢			(外) 黏付突帯刷目、 区画沈殿文、染灰 (内) 染灰	1cm以下	(外) 灰黄粉 2.5Y7/2 (内) 灰黄粉 2.5Y7/2
18-4	3.9	J6	緑灰色粘質土	縄文土器	深鉢	(42.0)		(外) 黏付突帯刷目、染灰 (内) 染灰	3cm以下	(外) にぶい黄 7.5YR7/4 (内) にぶい黄粉 10YR7/4
18-5	3.9	K6	緑灰色粘質土	縄文土器	深鉢			(外) 黏付突帯刷目、染灰 (内) 染灰	1cm以下	(外) にぶい黄粉 10YR7/3 (内) 浅黄粉 10YR8/4
18-6	3.9	J5	緑灰色粘質土	縄文土器	深鉢			(外) 口縁部刷目、 黏付突帯刷目、染灰 (内) 染灰	1cm以下	(外) 灰白 10YR8/2 (内) 灰白 10YR7/1
18-7	3.9	J4	緑灰色粘質土	縄文土器	深鉢	(19.0)		(外) 口縁部刷目、ナデ 黏付突帯刷目、染灰 (内) 染灰、ナデ	2cm以下	(外) にぶい黄粉 10YR7/2 (内) 灰黄粉 10YR5/2
18-8	3.9	J5	緑灰色粘質土	縄文土器	深鉢	(19.8)		(外) 黏付突帯刷目、摩滅 (内) 摩滅	3cm以下	(外) 灰白 2.5Y7/1 (内) 黄灰 2.5YR6/3
18-9	4.0	J6	緑灰色粘質土	縄文土器	浅鉢			(外) 三田谷文様 (内) 摩滅	1cm以下	(外) 黄粉 2.5Y3/1 (内) 黒 2.5Y2/1

Fig	図取番号	出土地点	出土層位	種別	図種	口径 (mm)	底径 (mm)	調査及び文様等	胎土(砂粒)	色調
18-10	40	I5	緑灰色粘質土3	縄文土器	浅鉢			(外) 波状口縁、ミガキ、染ぬ (内) ミガキ	1mm以下	(外) にごい黄緑 10YR7/3 (内) にごい黄緑 10YR7/2
21-1	40	K6	灰白色砂質土	弥生土器	甕	33.6		(外) 沈彫、網毛目、ナデ (内) 網毛目	3mm以下	(外) 黒 5YR7/6 (内) にごい黄緑 10YR7/3
21-2	40	K5	灰白色砂質土	縄文土器	深鉢			(外) 口縁端部割目 胎付突帯割目、染ぬ (内) 染ぬ	1mm以下	(外) にごい黄緑 10YR7/2 (内) 灰黄緑 10YR6/2
21-3	40	J8	灰白色砂質土	縄文土器	深鉢			(外) 口縁端部割目 胎付突帯割目、染ぬ (内) 染ぬ	1mm以下	(外) にごい黄緑 7.5YR5/3 (内) 黒灰 10YR4/1
21-4	40	I8	灰白色砂質土	縄文土器	深鉢			(外) 口縁端部割目 胎付突帯割目、染ぬ (内) 染ぬ	1mm以下	(外) 灰黄 2.5YR7/3 (内) にごい黄緑 10YR7/2
21-5	40	J5	灰白色砂質土	縄文土器	深鉢			(外) 口縁端部割目 胎付突帯割目、染ぬ (内) 染ぬ	2mm以下	(外) 灰白 2.5YR/2 (内) 灰白 2.5Y7/1
21-6	40	J8	灰白色砂質土	縄文土器	深鉢			(外) 胎付突帯割目、染ぬ (内) 染ぬ	1mm以下	(外) 灰黄 2.5YR7/2 (内) 灰白 10YR8/2
21-7	40	K5	灰色砂質土	縄文土器	深鉢			(外) 口縁端部割目 胎付突帯割目、染ぬ (内) 染ぬ	1mm以下	(外) 灰黄 2.5Y6/2 (内) にごい黄緑 2.5Y6/3
21-8	40	K4	灰白色砂質土	縄文土器	深鉢			(外) 口縁端部割目 胎付突帯割目 2条、染ぬ (内) 染ぬ	1mm以下	(外) 黒 5Y2/1 (内) 黒 5Y2/1
21-9	40	I8	灰白色砂質土	縄文土器	浅鉢			(外) 波状口縁、ミガキ、ナデ 赤色顔料 (内) 沈彫文、	1mm以下	(外) 灰白 10YR8/2 (内) 灰白 10YR7/1
21-10	40	K5	灰白色砂質土	縄文土器	浅鉢			(外) ナデ、染ぬ、赤色顔料 (内) 染ぬ	1mm以下	(外) にごい黄緑 10YR7/2 (内) 灰黄緑 10YR5/2
21-11	40	K7	灰白色砂質土	縄文土器	甕?	114.0		(外) ナデ、赤色顔料 (内) 口縁内側に、ミガキ ケ文リ、赤色顔料	1.5mm以下	(外) 灰白 10YR7/1 (内) 灰白 10YR7/1
26-1	41	K5	土器だまり1	縄文土器	深鉢	33.0		(外) 口縁端部割目 胎付突帯割目、染ぬ (内) 染ぬ、ナデ	4mm以下	(外) 黒 5YR7/8 (内) 黒 5YR6/6
26-2	41	K5	土器だまり1	縄文土器	深鉢	33.0		(外) 胎付突帯割目、口縁端部割目 染ぬ、ナデ (内) 染ぬ、ナデ	4mm以下	(外) 黒 5YR7/6 (内) 黒 5YR7/6
26-3	41	K5	土器だまり1	縄文土器	深鉢			(外) 胎付突帯割目、口縁端部割目 染ぬ、ナデ (内) 染ぬ、ナデ	6mm以下	(外) 灰白 5YR/1 (内) 黒 2.5Y3/1
26-4	42	K5	土器だまり1	縄文土器	深鉢	33.8		(外) 胎付突帯割目、口縁端部割目 染ぬ、ナデ (内) 染ぬ、ナデ	3mm以下	(外) 明褐色 7.5YR7/1 (内) 明褐色 7.5YR7/2
27-1	41	K5	土器だまり1	縄文土器	深鉢			(外) 胎付突帯割目 (2条) 口縁端部割目、染ぬ、ナデ (内) 染ぬ	1.5mm以下	(外) にごい黄緑 10YR7/2 (内) 灰白 10YR8/2
27-2	42	K5	土器だまり1	縄文土器	深鉢	48.0		(外) 口縁端部割目、染ぬ (内) 染ぬ	2mm以下	(外) にごい黄緑 10YR7/2 (内) にごい黄緑 10YR7/2
27-3	42	K5	土器だまり1	縄文土器	深鉢			(外) 口縁端部割目、染ぬ (内) 染ぬ	2mm以下	(外) 灰白 10YR8/1 (内) 灰白 10YR8/2
27-4	43	J4	土器だまり1	縄文土器	深鉢	43.3		(外) 口縁端部割目、染ぬ (内) 染ぬ	2mm以下	(外) 明褐色 7.5YR7/1 (内) にごい黄緑 7.5YR7/3
27-5	42	K5	土器だまり1	縄文土器	深鉢			(外) 口縁端部割目、染ぬ (内) 染ぬ、ナデ	4mm以下	(外) 浅黄 2.5Y8/3 (内) 浅黄 10YR8/3
28-1	42	K5	土器だまり1	縄文土器	深鉢	26.4		(外) 口縁端部割目、染ぬ (内) 染ぬ	1mm以下	(外) 浅黄 2.5Y8/4 (内) 浅黄 2.5Y8/3
28-2	42	K5	土器だまり1	縄文土器	深鉢	26.6		(外) 口縁端部割目、染ぬ、ナデ (内) ナデ	4mm以下	(外) 灰白 2.5Y7/1 (内) 黒灰 7.5Y6/1
28-3	43	K5	土器だまり1	縄文土器	浅鉢	29.2		(外) 波状口縁、ミガキ 波状凹凸 (内) ミガキ	2mm以下	(外) 黒 10YR2/1 (内) 黒 10YR2/1
28-4	44	K5	土器だまり1	縄文土器	浅鉢			(外) 波状口縁、ミガキ、ナデ (内) ミガキ、ナデ	3mm以下	(外) 黒 10YR3/1 (内) 黒 10YR3/1
28-5	44	K4K5 J7	土器だまり1	縄文土器	浅鉢	41.0		(外) 胎付突帯、ミガキ、染ぬ (内) 口縁端部割目、ミガキ	1mm以下	(外) 灰白 10YR7/1 (内) 黒灰 10YR6/1
28-6	44	K5	土器だまり1	縄文土器	浅鉢	17.0		(外) ミガキ、染ぬ (内) ミガキ	6mm以下	(外) 黒 2.5Y3/2 (内) 黒 2.5Y3/1
28-7	44	K5	土器だまり1	縄文土器	深鉢			(外) ミガキ、ナデ (内) ミガキ	3mm以下	(外) 浅黄 2.5YR8/3 (内) にごい黄緑 10YR7/3
28-8	44	K5	土器だまり1	縄文土器	浅鉢	21.0		(外) 染ぬ、ナデ (内) ミガキ、ナデ	2mm以下	(外) 灰黄緑 10YR6/2 (内) にごい黄緑 10YR7/2
28-9	43	K5	土器だまり1	縄文土器	深鉢	18.0	8.0	(外) 染ぬ、ミガキ (内) 染ぬ、ミガキ	2mm以下	(外) 灰黄緑 10YR5/2 (内) 灰黄緑 10YR6/2

遺物観察表

Fig	90N 番号	出土 地点	出土層位	種類	部種	口径 (cm)	底径 (cm)	調整及び文様等	胎土 (砂粒)	色調
28-10	44	K5	土器だまり 1	縄文土器	深鉢か			(外) 紅 縄文、ナデ	1m以下	(外) 灰白 10YR8/1
								(内) ナデ		(内) 灰白 10YR8/1
28-11	44	K5	土器だまり 1	縄文土器	底部		5.4	(外) ナデ	7m以下	(外) 褐色 10YR4/1
								(内) ナデ		(内) にごい・黄褐色 10YR6/4
31-1	45	J5	黒灰色粘質土	縄文土器	深鉢			(外) ナデ、大型瘤状突起	1m以下	(外) にごい・黄褐色 10YR7/2
31-2	45	J6	黒灰色粘質土	縄文土器	深鉢			(内) ナデ	1m以下	(内) にごい・黄褐色 10YR7/2
								(外) 渦巻状突起		(外) 黄灰 2.5YR7/2
31-3	45	K6	黒灰色粘質土	縄文土器	深鉢	(20.6)		(外) 胎付突起部付、染灰	1m以下	(外) 褐色 2.5YR7/2
								(内) 染灰		(内) 黄灰 2.5Y4/1
31-4	45	J5	黒灰色粘質土	縄文土器	深鉢			(外) 口縁端部切付、胎付突起部付、沈線文	1m以下	(外) 灰白 10YR8/2
								(内) 染灰		(内) 灰白 10YR8/2
31-5	45	J6	黒灰色粘質土	縄文土器	深鉢	(29.2)		(外) 口縁端部切付、胎付突起部付、染灰	2m以下	(外) 淡黄褐色 10YR8/3
								(内) 染灰		(内) 淡黄褐色 10YR7/3
31-6	45	J5	黒灰色粘質土	縄文土器	深鉢	(20.4)		(外) 口縁端部切付、胎付突起部付、染灰	1m以下	(外) 灰黄 2.5Y7/2
								(内) ナデ		(内) 褐色 2.5Y5/2
31-7	45	K5	黒灰色粘質土	縄文土器	深鉢			(外) 口縁端部切付、染灰、ナデ	1m以下	(外) にごい・黄褐色 10YR7/2
								(内) 染灰、ナデ		(内) 灰黄褐色 10YR6/2
31-8	46	J5	黒灰色粘質土	縄文土器	深鉢	(26.6)		(外) 口縁端部切付、染灰	1m以下	(外) にごい・黄褐色 10YR7/3
								(内) 染灰		(内) にごい・黄褐色 10YR7/4
31-9	46	K5	黒褐色粘質土	縄文土器	深鉢	(27.0)		(外) 口縁端部切付、染灰	2m以下	(外) 褐色 10YR5/1
								(内) 染灰		(内) にごい・黄褐色 10YR7/2
31-10	46	K6	黒褐色粘質土	縄文土器	深鉢			(外) 口縁端部切付、染灰	3m以下	(外) にごい・黄褐色 10YR5/3
								(内) 染灰、ナデ		(内) にごい・黄褐色 10YR6/3
32-1	46	K4	黒灰色粘質土	縄文土器	浅鉢	(27.6)		(外) ミガキ、染灰	1m以下	(外) 黒 2.5Y2/1
								(内) ミガキ、筋状浅穿孔		(内) 黒褐色 2.5Y3/1
32-2	46	J5	黒灰色粘質土	縄文土器	浅鉢	(27.0)		(外) ミガキ、染灰	1m以下	(外) 灰黄 2.5Y6/2
								(内) ミガキ		(内) 黄灰 2.5Y4/1
32-3	46	K7	黒灰色粘質土	縄文土器	浅鉢	(19.6)		(外) 口縁端部切付、ナデ、胎付突起部付、染灰	1m以下	(外) にごい・黄褐色 10YR7/2
								(内) ナデ		(内) 黒 2.5Y2/1
32-4	46	K4	黒灰色粘質土	縄文土器	浅鉢	(32.6)		(外) 胎付突起部付、染灰	1m以下	(外) 褐色 10YR5/1
								(内) 口縁内側沈線、ミガキ		(内) 褐色 10YR6/1
32-5	46	J6	黒灰色粘質土	縄文土器	浅鉢	(29.2)		(外) 胎付突起部付、ミガキ	1m以下	(外) 黒色 2.5Y2/1
								(内) ミガキ		(内) 灰白 2.5YR8/2
32-6	46	K5	黒灰色粘質土	縄文土器	浅鉢	(23.8)		(外) ナデ	3m以下	(外) にごい・黄褐色 7.5YR6/4
								(内) ミガキ、ナデ		(内) 褐色 10YR4/1
32-7	46	K4	黒灰色粘質土	縄文土器	浅鉢	(21.8)		(外) 口縁部沈線、ミガキ	1m以下	(外) 黄灰 2.5Y5/1
								(内) 口縁部沈線、ミガキ		(内) 黄灰 2.5Y5/1
37-1	48	J4	土器だまり 2	縄文土器	深鉢	(31.0)		(外) 刺突文、染灰	1.5m以下	(外) 浅黄褐色 10YR8/3
								(内) 口縁内面刺突文、染灰		(内) 浅黄褐色 10YR8/3
37-2	48	J4	土器だまり 2	縄文土器	深鉢	(30.0)		(外) 染灰	1.5m以下	(外) にごい・黄褐色 5YR7/4
								(内) 摩滅		(内) にごい・黄褐色 10YR7/2
37-3	48	J4	土器だまり 2	縄文土器	深鉢			(外) 染灰	2m以下	(外) 灰白 10YR8/2
								(内) 染灰、ナデ		(内) 灰黄褐色 10YR8/3
38-1	48	J4	土器だまり 2	縄文土器	浅鉢			(外) 波状口縁、ミガキ、染灰	2m以下	(外) 黒 10YR2/1
								(内) ミガキ		(内) 褐色 10YR4/1
38-2	48	J4	土器だまり 2	縄文土器	深鉢?			(外) 口縁端部切付、胎付突起部付、ナデ	2m以下	(外) 黄灰 2.5Y5/1
								(内) 口縁内面に沈線、ミガキ		(内) 黄灰 2.5Y4/1
38-3	48	J4	土器だまり 2	縄文土器	浅鉢	(25.0)		(外) 口縁部沈線、ミガキ	4m以下	(外) 黄灰 2.5Y4/1
								(内) ミガキ		(内) 黒 2.5Y2/1
38-4	48	J4	土器だまり 2	縄文土器	鉢			(外) 摩滅	3m以下	(外) にごい・黄褐色 10YR7/3
								(内) 口縁内側に沈線、摩滅		(内) 灰白 2.5YR8/2
39-1	48	J5	土器だまり 3	縄文土器	深鉢	(30.6)		(外) 口縁端部切付、胎付突起部付、染灰	2m以下	(外) にごい・黄褐色 5YR6/4
								(内) ナデ、染灰		(内) にごい・黄褐色 7.5YR7/3
39-2	48	J5	土器だまり 3	縄文土器	深鉢			(外) 口縁端部切付、突起部付、ナデ	3m以下	(外) 褐色 10YR4/1
								(内) ナデ		(内) 褐色 10YR4/1
39-3	48	J5	土器だまり 3	縄文土器	深鉢			(外) 口縁端部切付、胎付突起部付、ナデ	3m以下	(外) 褐色 5YR7/6
								(内) ナデ		(内) 黄灰 2.5Y4/1
39-4	49	J5	土器だまり 3	縄文土器	深鉢	(27.6)		(外) 口縁端部切付、染灰	1.5m以下	(外) にごい・黄褐色 10YR7/2
								(内) 染灰、ナデ		(内) にごい・黄褐色 10YR7/2

Fig	採取番号	出土地点	出土層位	種類	部種	口径 (cm)	底径 (cm)	調査及び文様等	粘土 (砂割)	色調
39-5	49	J5	土路だまり3	縄文土器	浅鉢			(外) 波状口縁、ミガキ、条痕 (内) ミガキ	1m以下	(外) 灰黄緑 10YR6/2 (内) 灰黄緑 10YR6/2
39-6	49	J5	土路だまり3	縄文土器	浅鉢	(32.6)		(外) ミガキ、ナデ (内) ミガキ	1.5m以下	(外) 浅黄緑 10YR8/3 (内) 灰白 10YR8/2
39-7	49	J5	土路だまり3	縄文土器	浅鉢	(28.4)		(外) ミガキ (内) ミガキ	2m以下	(外) 黒 10YR2/1 (内) 黒 10YR2/1
39-8	49	J5	土路だまり3	縄文土器	底部		(9.0)	(外) ナデ (内) ナデ	2m以下	(外) 黒 10YR5/1 (内) 黒 10YR5/1
41-1	49	J7	SD02	縄文土器	深鉢			(外) リボン状突起、ナデ (内) 口縁内面曲突文、ナデ	4m以下	(外) 灰 5Y4/1 (内) 灰 5Y6/1
41-2	49	J6	SD02	縄文土器	深鉢	(29.6)		(外) 口縁端部斜目、条痕 (内) 条痕	1.5m以下	(外) にぶい黄緑 10YR7/3 (内) にぶい黄緑 10YR7/2
41-3	49	J7	SD02	縄文土器	深鉢	(27.0)		(外) 口縁端部斜目、条痕 (内) 条痕	2m以下	(外) にぶい黄緑 10YR7/2 (内) 灰黄 2.5Y7/2
41-4	49	不明	SD02	縄文土器	深鉢			(外) 口縁端部斜目 ナデ (内) 口縁内面曲突文、ナデ (内) ナデ	3m以下	(外) 灰白 10YR8/2 (内) にぶい黄緑 10YR7/2
41-5	49	J6	SD02	縄文土器	深鉢			(外) 口縁端部斜目、条痕 (内) ナデ	5m以下	(外) 黄灰 2.5Y5/1 (内) 黄灰 2.5Y5/1
41-6	49	J7	SD02	縄文土器	深鉢			(外) 口縁端部斜目、条痕 (内) 条痕	5m以下	(外) にぶい黄緑 10YR7/3 (内) 灰 5Y5/1
41-7	49	J7	SD02	縄文土器	浅鉢			(外) リボン状突起、ミガキ (内) ミガキ	1m以下	(外) にぶい黄 7.5YR7/3 (内) にぶい黄 7.5YR7/3
41-8	50	J7	SD02	縄文土器	浅鉢	(34.8)		(外) 波状口縁、口縁端部斜目 ミガキ、条痕 (内) 条痕、ナデ	1m以下	(外) 灰黄緑 10YR6/2 (内) 黒 10YR5/1
41-9	50	J6	SD02	縄文土器	浅鉢	(29.6)		(外) ミガキ、条痕(かきり摩滅) (内) ミガキ	1m以下	(外) 灰白 10YR8/1 (内) にぶい黄緑 10YR7/2
42-1	50	J6	SD02	縄文土器	浅鉢			(外) 波状口縁、ミガキ、条痕 (内) ミガキ	1m以下	(外) 黒 2.5Y2/1 (内) 黄 2.5Y4/1
42-2	50	J6	SD02	縄文土器	浅鉢	(44.0)		(外) ミガキ、条痕、楕円状口 乳 (内) ミガキ	1m以下	(外) 灰黄 2.5Y7/2 (内) 灰黄 2.5Y7/2
42-3	50	J6	SD02	縄文土器	浅鉢	(16.6)		(外) ミガキ、条痕 (内) 口縁内面沈線、ミガキ	1m以下	(外) にぶい黄 7.5YR7/3 (内) にぶい黄緑 7.5YR7/2
42-4	50	不明	SD02	縄文土器	浅鉢			(外) 波状口縁、ミガキ (内) ミガキ	2m以下	(外) 黒 10YR4/1 (内) 黒 10YR3/1
42-5	50	J7	SD02	縄文土器	甕	(15.2)		(外) 波状口縁、凹線文 ミガキ、赤色顔料 刺突文、条痕 (内) ナデ	1m以下	(外) にぶい黄 7.5YR7/3 (内) にぶい黄緑 7.5YR7/3
42-6	50	J6	SD02	縄文土器	円筒			(外) 条痕 (内) ナデ	2m以下	(外) 黒 10YR2/1 (内) 黒 10YR5/1
44-1	51	K6	集石2	縄文土器	深鉢			(外) 口縁端部斜目 貼付黄帯斜目、条痕、ナデ (内) 条痕	1m以下	(外) 灰黄 2.5YR7/2 (内) 灰黄 10YR8/2
46-1	51	K6	SD03	縄文土器	深鉢	(29.0)		(外) 口縁端部斜目、条痕 (内) 条痕後ナデ	1.5m以下	(外) 浅黄緑 10YR8/3 (内) にぶい黄緑 10YR7/3
46-2	51	K6	SD03	縄文土器	深鉢			(外) 条痕 (内) 条痕後ナデ	1m以下	(外) にぶい黄緑 10YR7/3 (内) 灰白 10YR7/1
46-3	51	K5	SD03	縄文土器	浅鉢	(22.6)		(外) 条痕 (内) 条痕後ナデ	1m以下	(外) にぶい黄緑 10YR7/3 (内) にぶい黄緑 10YR7/3
48-1	52	J5	SX72	縄文土器	深鉢			(外) 条痕、ナデ (内) 口縁部内側刺突文	1m以下	(外) 灰白 10YR8/2 (内) 黒 10YR2/1
48-2	52	L5	SX83	縄文土器	深鉢			(外) 摩滅 (内) 条痕	2m以下	(外) 灰白 2.5Y8/1 (内) 灰黄 2.5Y7/2
48-3	52	L5	SX83	縄文土器	深鉢			(外) 口縁端部斜目、条痕 (内) 条痕	5m以下	(外) 黒 10YR4/1 (内) 黒 10YR3/1
48-4	52	L5	SX83	縄文土器	浅鉢			(外) 波状口縁、ミガキ、条痕 (内) 沈線、ミガキ	2m以下	(外) 灰黄 2.5Y4/1 (内) 黄灰 2.5Y4/1
48-5	52	L6	SK04	縄文土器	深鉢			(外) 口縁端部斜目 条痕 (内) 条痕	0.5m程度	(外) にぶい黄 10YR7/2 (内) 灰白 2.5YR8/2
48-6	52	L7	pit94	縄文土器	浅鉢			(外) 条痕 (内) 条痕	1m以下	(外) にぶい黄緑 10YR7/3 (内) 灰白 10YR7/1
48-7	52	L7	pit94	縄文土器	深鉢			(外) 貼付黄帯斜目、口縁端部斜目 摩滅 (内) 摩滅	3m以下	(外) にぶい黄緑 10YR7/2 (内) にぶい黄緑 10YR7/2

遺物観察表

Fig.	99N 番号	出土 地点	出土層位	種類	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	調整及び文様等	出土(碎粒)	色調
49-1	52	15		黒色粘質土	縄文土器	深鉢	(17.8)	(外) 口縁端部割目、 耳ホコ状突起、条痕	1m以下	(外) 灰青陶 10YR5/2
								(内) ミガキ		(内) 灰青陶 10YR4/2
49-2	52	17		黒色粘質土	縄文土器	深鉢		(外) 口縁端部割目、黏付突帯割目 口縁外面彫形刺突文、条痕	2m以下	(外) 黄赤 2.5YR/3
								(内) 条痕		(内) 灰黄 2.5Y7/2
49-3	52	16		黒色粘質土	縄文土器	深鉢		(外) 黏付突帯割目、口縁端部割目 彫形刺突文、条痕	2m以下	(外) 灰白 10YR8/2
								(内) 条痕		(内) 灰白 10YR8/2
49-4	52	17		黒色粘質土	縄文土器	深鉢		(外) 黏付突帯割目、口縁端部割目 条痕	1m程度	(外) にぶい黄緑 7.5YR7/4
								(内) 条痕		(内) にぶい黄緑 10YR7/4
49-5	52	14		灰色粘土	縄文土器	深鉢	(28.6)	(外) ナデ、条痕 黏付突帯割目、口縁端部割目	2m以下	(外) にぶい黄緑 10YR7/2
								(内) ナデ、条痕		(内) にぶい黄緑 10YR7/2
49-6	52	14		黒色粘質土	縄文土器	深鉢	(22.0)	(外) 黏付突帯割目、口縁端部割目 彫形刺突文、条痕	1m以下	(外) にぶい黄緑 10YR7/2
								(内) ナデ		(内) 灰青陶色 10YR5/2
49-7	52	16		黒色粘質土	縄文土器	深鉢		(外) 黏付突帯割目、口縁端部割目 条痕	2m以下	(外) 灰白 10YR8/2
								(内) 条痕		(内) 灰白 10YR8/1
49-8	52	17		黒色粘質土	縄文土器	深鉢		(外) 口縁端部割目、条痕	2m以下	(外) 黄緑 10YR6/4
								(内) 条痕		(内) 黄緑 10YR6/4
50-1	53	17		黒色粘質土	縄文土器	深鉢	(36.0)	(外) 口縁端部割目、条痕	2m以下	(外) にぶい黄緑 10YR7/3
								(内) 条痕		(内) 灰青陶 10YR6/2
50-2	53	K5		黒色粘質土	縄文土器	深鉢		(外) 口縁端部割目、条痕	2m以下	(外) 灰黄 2.5Y7/2
								(内) 条痕		(内) 灰白 2.5Y7/1
50-3	53	K5/7		黒色粘質土	縄文土器	深鉢		(外) 口縁端部割目、条痕	2m以下	(外) にぶい黄緑 10YR7/3
								(内) 条痕後ナデ		(内) にぶい黄緑 10YR7/3
50-4	53	14		黒色粘質土	縄文土器	深鉢		(外) 条痕	1m以下	(外) にぶい黄緑 10YR7/3
								(内) 条痕		(内) にぶい黄緑 10YR7/3
50-5	54	K4		黒色粘質土	縄文土器	浅鉢	(43.2)	(外) 波状口縁、ミガキ中、条痕	1m以下	(外) にぶい黄緑 10YR6/2
								(内) ミガキ		(内) 灰青陶 10YR6/2
50-6	54	K6		黒色粘質土	縄文土器	浅鉢	(22.3)	(外) ミガキ中、条痕、焼成後穿孔	1m以下	(外) 黄緑 10YR4/1
								(内) ミガキ		(内) 黄緑 7.5YR4/1
50-7	54	K7		黒色粘質土	縄文土器	浅鉢	26.6	(外) 波状口縁、ミガキ中、条痕	1m以下	(外) 灰白 10YR7/1
								(内) ミガキ		(内) にぶい黄緑 10YR7/2
50-8	53	K7		黒色粘質土	縄文土器	浅鉢		(外) 波状口縁、ミガキ中、条痕	6m以下	(外) 黄緑 10YR4/1
								(内) ミガキ		(内) 黄緑 10YR4/1
51-1	55	K7		黒色粘質土	縄文土器	浅鉢	(27.6)	(外) ミガキ中、条痕	2m以下	(外) 黒 10YR2/1
								(内) ミガキ		(内) 黄緑 10YR4/1
51-2	53	K4		黒色粘質土	縄文土器	浅鉢	17.3	(外) ミガキ中、条痕	1m以下	(外) にぶい黄緑 10YR7/3
								(内) ミガキ		(内) にぶい黄緑 10YR7/3
51-3	55	16		黒色粘質土	縄文土器	浅鉢	(30.8)	(外) ミガキ	1m以下	(外) 黄緑 2.5Y3/1
								(内) ミガキ		(内) 黄緑 2.5Y5/1
51-4	55	K6		黒色粘質土	縄文土器	浅鉢	(27.2)	(外) ミガキ中、条痕	1m以下	(外) 黄緑 2.5Y4/1
								(内) ミガキ		(内) 黄緑 2.5Y5/1
51-5	55	K6		黒色粘質土	縄文土器	浅鉢		(外) 黏付突帯割目(2条)、ナデ	1m以下	(外) 灰 5Y4/1
								(内) ミガキ		(内) 黒色 N2/
51-6	55	16		黒色粘質土	縄文土器	盃		(外) 条痕、ミガキ中、1条沈殿か 赤い顔料	1m以下	(外) 黒陶 10YR3/1
								(内) 条痕		(内) 黄赤 2.5Y7/3
55-1	56	17		灰色粘土	縄文土器	深鉢		(外) 口縁端部割目、1条沈殿か 赤い顔料	2m以下	(外) 灰白 10YR8/2
								(内) 条痕		(内) 灰白 10YR8/2
55-2	56	不明		黒色粘質土	縄文土器	深鉢		(外) 条痕	2m以下	(外) 黄緑 10YR6/1
								(内) 条痕、彫形連続刺突文		(内) 黄緑 10YR6/1
55-3	56	14	pH 5.06		縄文土器	深鉢	(21.2)	(外) 条痕	1m以下	(外) にぶい黄緑 10YR7/2
								(内) 条痕、ナデ		(内) 黄緑 2.5Y3/1
57-1	57	H5/6		暗灰色粘質土	縄文土器	深鉢	(19.0)	(外) 口縁端部割目 黏付突帯割目、条痕	1m以下	(外) にぶい黄緑 10YR7/3
								(内) 条痕		(内) にぶい黄緑 10YR7/3
57-2	57	16		暗灰色粘質土	縄文土器	深鉢		(外) 口縁端部割目、条痕	1m以下	(外) 黄緑 10YR8/3
								(内) 条痕		(内) 灰 5Y6/1
57-3	57	18		暗灰色粘質土	縄文土器	浅鉢		(外) 波状口縁、ミガキ	1m以下	(外) にぶい黄緑 10YR6/4
								(内) 条痕、ナデ		(内) にぶい黄緑 10YR6/4
57-4	57	18		暗灰色粘質土	縄文土器	深鉢		(外) 口縁端部割目、条痕	1.5m以下	(外) にぶい黄緑 10YR6/3
								(内) 条痕		(内) 灰白 10YR7/1

Fig	図取番号	出土地点	出土層位	時期	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	調整及び文様等	出土 (砂粒)	色調
59	1	57	36	埴ケリ一ア土	縄文土器	深鉢		(外) 口縁部部刻目、条痕 (内) 条痕	1m以下	(外) 灰黄 2.5Y7/2 (内) 灰白 2.5Y8/2
60	1	57	36	層位不明	縄文土器	深鉢		(外) 口縁部部刻目 胎文委部刻目、ナデ	2m以下	(外) 灰白 10YR 7/1 (内) 灰白・黄緑 10YR 7/2
60	2	57	37	層位不明	縄文土器	高円形土器		(外) ナデ (内) ナデ	1m以下	(外) 灰白 N3/ (内) 灰白 N3/

第3表 古屋敷遺跡(C区) 出土石器観察表

Fig	図取番号	出土地点	出土遺構	器種	石材	計測値				備考		
						長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
9	-	9	37	不明	S801	石核	デイスイト	17.2	14.9	10.1	2940	方丈貫
10	-	7	38	14	緑灰色粘質土 1	石鏃	火山岩	2.0	1.6	0.3	0.9	無条痕、摩滅
10	-	8	38	17	緑灰色粘質土 1	不明石製品	燧灰岩	5.9	4.8	1.3	28.0	
10	-	9	38	17	緑灰色粘質土 1	鹿石/磨石	燧灰岩	12.7	11.3	8.4	1712.6	
10	-	10	38	14	緑灰色粘質土 1	燧石/磨石	燧灰岩	5.4	2.4	1.8	32.8	用途不明
13	-	2	38	不明	S801	石鏃	黒曜石	1.5	0.9	0.2	0.1	
15	-	5	38	15	SX06	打製石片	流紋岩	現存 8.9	5.9	2.9	208.9	刃部破損
16	-	5	39	18	緑灰色粘質土 2	石鏃	火山岩	1.6	1.1	0.2	0.28	無条痕
16	-	6	39	17	緑灰色粘質土 2	不明石製品	燧灰岩	11.0	9.1	5.9	626.5	
19	-	1	40	15	SX23	石鏃	閃緑岩	1.5	1.4	0.2	0.25	
19	-	2	40	17	緑灰色粘質土 3	打製石片	灰質片岩	24.3	8.4	2.3	634.2	2つに折損
19	-	3	40	15	緑灰色粘質土 3	石鏃	砂岩	現存 8.4	現存 8.6	3.7	236.0	半貫
19	-	4	40	15	緑灰色粘質土 3	燧石/磨石	溶結燧灰岩	7.7	7.1	4.0	332.0	
21	-	12	41	16	灰白色砂質土	打製石片	燧灰岩	現存 12.3	6.7	1.3	149.5	刃部破損
21	-	13	41	16	灰白色砂質土	打製石片	緑色片岩	現存 11.9	6.1	1.7	167.0	
21	-	14	41	15	灰白色砂質土	磨削物	燧灰岩	8.1	6.2	1.8	74.0	
21	-	15	41	17	灰白色砂質土	磨石	燧灰岩	10.7	9.2	2.1	190.7	
29	-	1	44	15	土器だまり 1	石鏃	火山岩	1.9	1.3	0.25	0.4	無条痕
29	-	2	44	15	土器だまり 1	打製石片	緑色片岩	9.4	5.1	1.3	116.9	未加工か
29	-	3	44	15	土器だまり 1	打製石片	緑色片岩	14.2	5.7	2.2	322.0	
29	-	4	44	17	土器だまり 1	磨製石片	塩基性片岩	現存 13.4	4.3	2.6	120.0	刃部破損
29	-	5	44	15	土器だまり 1	磨製石片	緑色片岩	12.9	4.3	1.7	103.2	破損品を再加工
29	-	6	44	16	土器だまり 1	燧石/磨石	火山岩	14.5	11.1	6.2	1449.5	
29	-	7	44	15	土器だまり 1	燧石/磨石	デイスイト	現存 8.6	9.8	5.7	720.3	半貫
29	-	8	44	15	土器だまり 1	石鏃	火山岩	現存 12.9	現存 12.5	1.9	377.0	石面破損品
29	-	9	45	14	黒灰色粘質土	磨削物	燧灰岩	6.8	6.0	1.0	55.0	
29	-	10	45	14	土器だまり 1	不明石製品	燧灰岩	現存 7.9	7.4	2.4	110.0	
29	-	11	45	15	土器だまり 1	不明石製品	燧灰岩	8.1	5.0	2.3	82.2	
30	-	1	45	15	土器だまり 1	不明石製品	燧灰岩	現存 8.4	6.1	3.3	176.1	
30	-	2	45	14	土器だまり 1	不明石製品	燧灰岩	13.5	5.0	3.8	342.1	
30	-	3	45	14	土器だまり 1	石鏃か	燧灰岩	9.4	12.6	2.0	240.0	石面破損品
32	-	8	47	17	黒灰色粘質土	スチレンブルー	ヤマガイト系	7.4	4.5	0.6	22.6	
32	-	9	47	15	黒灰色粘質土	スチレンブルー	緑色片岩	現存 10.0	5.0	1.3	85.8	
32	-	10	47	18	黒灰色粘質土	打製石片	燧灰岩	9.1	5.0	1.6	95.9	
32	-	11	47	17	黒灰色粘質土	打製石片	緑色片岩	現存 11.1	5.2	1.3	101.8	刃部破損
32	-	12	47	14	黒灰色粘質土	磨製石片	塩基性片岩	8.4	4.4	1.3	67.4	刃部一部破損
32	-	13	47	17	黒灰色粘質土	磨製石片	緑色片岩	現存 10.0	5.6	1.8	136.5	石片再加工品
32	-	14	47	16	黒灰色粘質土	磨製石片	塩基性片岩	11.0	5.0	2.0	170.8	刃部破損
33	-	1	47	15	黒灰色粘質土	磨製石片	塩基性片岩	現存 12.0	4.4	2.6	214.5	未成、破損品
33	-	2	47	17	黒灰色粘質土	磨製石片	燧灰岩	現存 12.2	5.6	3.6	378.1	刃部破損
33	-	3	47	14	黒灰色粘質土	磨製石片	燧灰岩	13.3	5.3	1.7	138.9	未加工品
33	-	4	47	17	黒灰色粘質土	石筴?	閃緑岩	現存 6.2	9.2	7.8	835.0	
33	-	5	47	15	黒灰色粘質土	磨石	石鏃	現存 9.4	10.8	5.6	805.0	半貫
33	-	6	47	17	黒灰色粘質土	燧石/磨石	流紋岩	現存 7.8	10.8	5.0	632.7	半貫
33	-	7	47	17	黒灰色粘質土	磨削物	燧灰岩	現存 6.6	4.7	1.5	49.1	薄刃?
33	-	8	47	15	黒灰色粘質土	磨削物	燧灰岩	6.1	4.5	1.6	43.0	刃取?
33	-	9	47	14	黒灰色粘質土	磨削物	燧灰岩	現存 11.7	6.5	1.8	195.3	
33	-	10	47	16	黒灰色粘質土	磨石	デイスイト	5.7	1.4	0.6	11.2	
34	-	1	47	15	黒灰色粘質土	不明石製品	燧灰岩	8.3	2.5	2.7	52.0	一部欠損
34	-	2	47	16	黒灰色粘質土	不明石製品	燧灰岩	14.8	8.8	5.0	424.0	
34	-	3	47	14	黒灰色粘質土	不明石製品	燧灰岩	9.0	6.9	5.9	298.0	
42	-	7	51	17	S802	二次加工物	火山岩	現存 2.5	2.0	0.4	3.9	
42	-	8	51	17	S802	スチレンブルー	火山岩	現存 5.6	4.1	0.9	14.6	
42	-	9	51	16	S802	磨製石片	緑色片岩	現存 9.4	4.6	3.1	224.5	刃部破損
42	-	10	51	17	S802	磨石	玄武岩	4.5	4.3	0.6	16.4	
42	-	11	51	17	S802	磨削物	燧灰岩	10.7	5.2	3.3	157.8	
42	-	12	51	17	S802	不明石製品	燧灰岩	現存 10.5	8.7	5.6	429.7	
48	-	8	52	15	SX83	打製石片	緑色片岩	現存 9.5	5.8	2.0	164.8	刃部破損
51	-	7	55	15	黒色粘質土	石鏃	火山岩	2.1	1.5	0.3	0.9	無条痕
51	-	8	55	17	黒色粘質土	スチレンブルー	黒曜石	2.8	3.0	1.2	8.9	
51	-	9	55	15	黒色粘質土	スチレンブルー	方丈貫火山岩	6.1	4.9	0.7	31.2	使用痕見えず
51	-	10	55	14	土器だまり 2	二次加工物	緑色片岩	現存 8.5	5.8	1.1	85.0	再加工品

51-11	51	J7	黒色粘質土	打製石片	緑色片岩	11.8	5.6	1.8	144.1	使用済み
51-12	51	J6	黒色粘質土	打製石片	緑色片岩	13.5	5.3	1.7	168.5	未製品か
51-13	51	J6/J8	黒色粘質土	打製石片	流紋岩	残存 11.5	8.5	1.5	186.0	柄部破損
51-14	51	不明	黒色粘質土	打製石片	デイスサイト	残存 7.4	6.0	2.3	74.2	柄部破損
52-1	51	pit24	黒色粘質土	磨製石片	塩基性片岩	14.1	4.5	4.2	382.8	未製品か
52-2	51	K7	黒色粘質土	磨製石片	塩基性片岩	残存 13.2	5.3	3.8	438.8	
52-3	51	J8	黒色粘質土	磨製石片	塩基性片岩	12.2	4.3	2.8	259.1	
52-4	56	J4	黒色粘質土	石鏝	凝灰岩	11.8	10.7	2.4	330.4	故意の破損か
52-5	56	J4	土器たまり2	鍛石/礫石	石英脈	11.3	9.4	4.5	695.0	
52-6	56	J5	土器たまり3	石臼	デイスサイト	残存 7.3	9.7	6.3	897.8	平截後磨き
52-7	56	J6	黒色粘質土	石鏝/磨製	塩基性片岩	5.2	4.9	1.2	44.4	刃部破損
52-8	56	J7	黒色粘質土	不明石製品	凝灰岩	14.2	6.0	2.5	316.0	
52-9	56	K7	黒色粘質土	石鏝	デイスサイト	9.6	5.9	2.9	250.0	
52-10	56	J5	黒色粘質土	不明石製品	凝灰岩	7.7	4.5	2.4	100.2	
53-1	56	J5	黒色粘質土	不明石製品	凝灰岩	12.9	2.7	2.6	97.0	
53-2	56	J8	黒色粘質土	不明石製品	凝灰岩	11.3	5.6	2.6	186.4	
53-3	56	J8	黒色粘質土	不明石製品	凝灰岩	10.1	4.4	2.2	165.3	
55-4	56	J6	灰白色粘質土	スライパー	緑色片岩	残存 14.2	6.3	1.7	164.1	刃部片割
55-5	56	J7	灰白色粘質土	磨製石片	塩基性片岩	残存 14.8	4.9	3.2	422.6	刃部破損
55-6	56	K4	灰白色粘質土	礫石	凝灰岩	残存 2.9	残存 5.7	1.2	22.6	
55-7	56	K4	灰白色粘質土	礫石	玄武岩	10.9	8.1	2.0	171.3	念無き磨削
57-2	57	K7	暗灰色粘質土	スライパー	サマサイト系	5.0	残存 6.7	0.6	25.0	破損あり
57-6	57	K6	暗灰色粘質土	石鏝	玄武岩	4.8	3.9	1.4	39.8	
57-7	57	J8	暗灰色粘質土	不明石製品	珪岩	残存 9.2	2.5	2.3	95.7	柄・磨削あり
59-2	57	K4	暗灰色粘質土	礫石	塩基性片岩	残存 8.8	5.3	3.4	236.2	柄部破損
59-3	57	J6	暗灰色粘質土	石臼?	デイスサイト	残存 6.2	10.2	7.4	601.4	平截?
60-3	57	不明	灰白色粘質土	打製石片(石鏝)	緑色片岩	19.7	6.9	2.7	434.0	
60-4	57	J5	不明	打製石片(石鏝)	流紋岩	残存 16.2	残存 6.9	1.4	204.1	柄部破損

第4表 古屋敷遺跡 (F区) 出土土器観察表

Fig	図版番号	出土地点	出土層位	種類	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	調整及び文様等	胎土 (砂粒)	色調
63-1	58	G3	黒灰色粘質土 2	縄文土器	深鉢	(24.4)		(外) 口縁部刻目 粘土突起部付, 磨滅 (内) 磨滅	1m以下	(外) 灰白色 2.5Y7/1 (内) 灰白色 10Y8/2
66-1	58	G3	暗灰色粘質土	縄文土器	深鉢	(33.4)		(外) 茶色, 磨滅 (内) 茶色	1m以下	(外) 灰白 10Y8/1 (内) 灰白 10Y8/2
66-2	58	G3	暗灰色粘質土	縄文土器	深鉢	(26.4)		(外) 茶色, 磨滅 (内) 茶色	1m以下	(外) 浅黄緑 10Y8/3 (内) 浅黄緑 10Y8/3
66-3	58	F3	暗灰色粘質土	縄文土器	鉢	(18.0)		(外) 磨滅, ミガキ (内) ミガキ	1m以下	(外) 灰白 10Y8/2 (内) 灰白 10Y8/2
66-4	59	G3	暗灰色粘質土	縄文土器	鉢	(16.6)		(外) 磨滅, ミガキ (内) ミガキ	1m以下	(外) にごい・黄緑 7.5YR/4 (内) にごい・黄緑 7.5YR/4
66-5	59	G3	暗灰色粘質土	縄文土器	鉢			(外) 磨滅, ミガキ (内) ミガキ	1m以下	(外) 黄緑 2.5Y5/1 (内) 黄緑 2.5Y5/1
66-6	59	F3	暗灰色粘質土	縄文土器	製部			(外) 磨滅 (内) 磨滅	1m以下	(外) 灰黄 2.5Y7/2 (内) 灰黄 2.5Y7/2
66-7	59	G3	暗灰色粘質土	縄文土器	製部			(外) 磨滅 (内) ナデ	1m以下	(外) にごい・黄緑 10YR/2 (内) 暗灰 10YR/1
66-8	59	G3	暗灰色粘質土	縄文土器	浅鉢			(外) ミガキ, 赤色面付 (内) ミガキ	1m以下	(外) 黒色 10YR/4/1 (内) 黒色 2.5Y2/1
66-9	59	G3	暗灰色粘質土	縄文土器	浅鉢	(26.4)		(外) 茶色, ナデ, 波取口縁 (内) ミガキ	1m以下	(外) にごい・黄緑 10YR/2 (内) にごい・黄緑 10YR/2
69-1	59	H2	暗オリーブ 灰色粘質土	縄文土器	深鉢			(外) 茶色 (内) 茶色, ナデ	粗粒子を 含む	(外) 黄緑 2.5Y5/1 (内) 灰黄 2.5Y6/2
69-2	59	不明	解位不明	縄文土器	深鉢			(外) 波線文, ナデ (内) 茶色, ナデ	1m以下	(外) にごい・黄緑 10YR/2 (内) にごい・黄緑 10YR/2

第5表 古屋敷遺跡 (F区) 出土石器観察表

Fig	図版番号	出土地点	出土遺構	器種	石材	計測値			備考	
						長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)		重量 (g)
63-2	58	H2	淡明灰色粘質土	磨製石片	塩基性片岩	残存 12.5	4.2	3.2	231.2	刃部破損
63-3	58	H2	淡明灰色粘質土	磨製石片	緑色片岩	残存 10.7	4.7	2.5	151.0	刃部破損
66-10	59	G3	暗灰色粘質土	打製石片	方丈霞安山岩	残存 7.0	8.9	1.9	191.4	柄部破損
66-11	59	H3	暗灰色粘質土	打製石片	緑色片岩	残存 10.3	5.9	1.6	143.0	刃部破損
67-1	59	G3	暗灰色粘質土	磨製石片	塩基性片岩	残存 11.1	5.2	2.8	253.4	刃部破損
67-2	59	H2	暗灰色粘質土	磨製石片	緑色片岩	11.2	3.1	2.9	136.4	
67-3	59	F3	暗灰色粘質土	不明石製品	凝灰岩	残存 9.7	5.2	3.5	164.7	
67-4	59	H2	暗灰色粘質土	不明石製品	凝灰岩	11.7	4.8	2.9	160.2	
67-5	59	G3	暗灰色粘質土	不明石製品	凝灰岩	残存 7.9	7.6	3.0	164.7	
67-6	59	H2	暗灰色粘質土	礫石	玄武岩	残存 5.4	残存 4.1	残存 5.1	144.0	破損
69-3	59	不明	不明	磨製石片	緑色片岩	残存 7.6	5.2	2.5	144.8	未製品か

第6表 古屋敷遺跡(H-I区) 出土土器観察表

Fig	図版番号	出土地点	出土部位	説明	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	調整及び文様等	出土 (砂粒)	色調
77-3	60	J3	SD01	縄文土器	深鉢			(外) 胎付突帯刻目, ナデ (内) 滑滅, 土縁あり	3cm以下	(外) 灰白 10YR8/2 (内) 灰白 2.5YR/1
78-1	60	K2	SR01	弥生土器	甕	(29.6)		(外) ナデ, 土縁あり (内) ナデ, 土縁あり	3cm以下	(外) 黄 2.5Y 2/1 (内) 浅黄 2.5Y7/3
78-2	60	K2	SR01	弥生土器	甕	(8.5)		(外) ナデ, ミガキ (内) ナデ, 土縁あり, 指跡圧痕	3cm以下	(外) 黄 5YR 7/8 (内) 黄 7.5YR 7/8
78-3	60	K3	SR01	縄文土器	深鉢			(外) 胎付突帯刻目, ナデ (内) ナデ	2cm以下	(外) 土赤-黄緑 10YR7/2 (内) 土赤-黄緑 10YR5/4
78-4	60	K1	SR01	縄文土器	深鉢			(外) 条痕, 口縁部研突 (内) ナデ	4cm以下	(外) 黒 10YR 3/2 (内) 灰黄 10YR6/2
78-5	60	L2	SR01	縄文土器	深鉢			(外) ナデ, 条痕, 口縁部研突 (内) 滑滅	3cm以下	(外) 黄 2.5YR6/1 (内) 黄 2.5Y4/1
78-6	60	L2	SR01	縄文土器	深鉢	(28.0)		(外) 胎付突帯刻目, ナデ (内) ナデ	2cm以下	(外) 灰白 10YR8/2 (内) 灰白 2.5YR7/1
78-7	60	K1	SR01	縄文土器	深鉢			(外) ナデ, 条痕 (内) ミガキ	3cm以下	(外) 灰黄 10YR5/2 (内) 黒 7.5YR2/1
78-8	61	K2	SR01	縄文土器	深鉢	(30.6)		(外) 胎付突帯刻目, ナデ (内) ナデ, 指跡圧痕	2cm以下	(外) 黄 5YR7/8 (内) 黄 5YR7/6
78-9	61	K2	SR01	縄文土器	深鉢			(外) 胎付突帯, ナデ (内) 胎付ナデ	3cm以下	(外) 灰白 2.5Y 8/2 (内) 灰白 2.5Y 7/4
78-10	61	K2	SR01	縄文土器	深鉢	(22.8)		(外) 胎付突帯, 胎付ナデ (内) 胎付ナデ	5cm以下	(外) 灰白 2.5YR 2 (内) 灰白 2.5YR 1
78-11	61	L2	SR01	縄文土器	深鉢	(32.2)		(外) 胎付突帯刻目, 胎付ナデ (内) 胎付ナデ	3cm以下	(外) 浅黄 10YR 8/3 (内) 土赤-黄緑 10YR7/4
80-1	61	K3	灰色粘土	縄文土器	深鉢			(外) 胎付突帯, ナデ (内) ナデ	2cm以下	(外) 土赤-黄緑 5YR6/4 (内) 黄 5YR6/6
80-2	61	K2	灰色粘土	縄文土器	深鉢			(外) 胎付突帯刻目, ナデ (内) ナデ	2cm以下	(外) 灰白 10YR7/1 (内) 灰白 10YR8/2
80-3	61	K2	灰色粘土	縄文土器	深鉢			(外) 胎付突帯刻目, ナデ (内) ナデ	2cm以下	(外) 胎付 5YR4/1 (内) 明黄 5YR7/1
80-4	61	K2	灰色粘土	縄文土器	深鉢			(外) 胎付突帯刻目, ナデ (内) ナデ	3cm以下	(外) 浅黄 10YR8/3 (内) 浅黄 7.5YR 8/3
80-5	61	K2	灰色粘土	縄文土器	深鉢			(外) 口縁部刻目, ナデ (内) ナデ	2cm以下	(外) 黄 2.5Y4/1 (内) 黒 2.5YR3/1
80-6	61	J2	灰色粘土	弥生土器	底皿	(0.2)		(外) ナデ (内) ナデ	3cm以下	(外) 土赤-黄緑 10YR5/4 (内) 黄 5YR7/6
84-1	62	K3	灰だまり 17	縄文土器	深鉢			(外) ナデ (内) 口縁部研突文, ナデ	3cm以下	(外) 土赤-黄緑 10YR7/2 (内) 黒 10YR3/1
84-2	62	K3	灰だまり 17	縄文土器	深鉢	(24.6)		(外) ナデ (内) 口縁部研突文, ナデ	4cm以下	(外) 明黄 2.5Y5/2 (内) 黒 10YR3/1
84-3	62	K3	黒灰色粘質土	縄文土器	深鉢	(39.6)		(外) 口縁部刻目, 条痕 (内) ナデ	4cm以下	(外) 黒 10YR 3/1 (内) 灰黄 2.5Y7/1
84-4	62	K3	灰だまり 17	縄文土器	浅鉢	30.4		(外) ミガキ, 条痕 (内) ミガキ	3cm以下	(外) 明黄 10YR 4/1 (内) 灰黄 10YR 5/2
84-5	63	K3	灰だまり 17	縄文土器	浅鉢	30.2		(外) ミガキ, 条痕, ナデ (内) ナデ, ミガキ	1cm以下	(外) 明黄 10YR8/1 (内) 明黄 10YR4/1
84-6	63	K3	灰だまり 17	縄文土器	浅鉢	25.8		(外) 口縁部刻目, ミガキ, 条痕 (内) ナデ, ミガキ	2cm以下	(外) 土赤-黄緑 10YR7/3 (内) 黒 10YR3/1
85-1	63	K3	灰だまり 17	縄文土器	浅鉢	(23.2)		(外) ミガキ, ナデ (内) 口縁部内面研突 (竹管文), ミガキ	3cm以下	(外) 灰黄 2.5Y7/2 (内) 土赤-黄 2.5Y6/3
85-2	63	K3	灰だまり 17	縄文土器	浅鉢	(14.4)		(外) ミガキ, 条痕, 指跡圧痕 (内) ナデ	3cm以下	(外) オリーブ黒 2.5Y2/1 (内) 灰黄 10Y5/2
87-1	64	K2	暗青灰色粘質土	縄文土器	深鉢			(外) ナデ (内) ナデ	2cm以下	(外) 土赤-黄緑 10YR7/4 (内) 浅黄 2.5YR4/8
87-2	64	K2	暗青灰色粘質土	縄文土器	深鉢			(外) 胎付突帯刻目 (内) ナデ	5cm以下	(外) 明赤 2.5YR4/8 (内) 土赤-赤 2.5YR4/4
87-3	64	K2	暗青灰色粘質土	縄文土器	深鉢	(29.4)		(外) 2条胎付突帯刻目, ナデ (内) ナデ	1cm以下	(外) 灰白 10YR7/1 (内) 黒 2.5YR 3/1
87-4	64	J2	暗青灰色粘質土	縄文土器	深鉢			(外) 胎付突帯刻目, 口縁部刻目, ナデ (内) 口縁部平截竹管文, ナデ	3cm以下	(外) 土赤-黄緑 10YR7/4 (内) 黄 2.5Y4/1
87-5	64	J2	暗青灰色粘質土	縄文土器	深鉢			(外) 口縁部研突文, ナデ (内) ナデ	6cm以下	(外) 土赤-黄緑 10YR 8/3 (内) 土赤-黄緑 10YR6/3
87-6	64	J2	暗青灰色粘質土	弥生土器	甕	(23.7)		(外) ナデ (内) ナデ	3cm以下	(外) 黄 5YR 6/6 (内) 土赤-黄 5YR 7/4

遺物観察表

Fig	図例番号	出土地点	出土層位	種類	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	調整及び文様等	出土 (砂粒)	色調
87-7	64	K3	暗青色粘質土	縄文土器	浅鉢			(外) ナデ, 指跡上面, 条痕 (内) ナデ	2m以下	(外) 黒灰 10YR4/1 (内) 黒灰 10YR5/1
87-8	64	K2	暗青色粘質土	縄文土器	浅鉢			(外) ナデ, 条痕 (内) ナデ, ミガキ	1m以下	(外) 黒灰 2.5Y3/1 (内) 黒灰 2.5Y3/1
87-9	64	J2	暗青色粘質土	縄文土器	浅鉢	31.0		(外) ミガキ, 条痕 (内) ミガキ, ナデ	1m以下	(外) 黒灰 10YR3/1 (内) 黒灰 10YR4/1
91-1	66	J3	黒灰色粘質土	縄文土器	深鉢			(外) 貼付突帯部1, ナデ (内) ナデ	2m以下	(外) 灰白 2.5Y7/1 (内) 浅黄 2.5Y7/3
91-2	66	J3	黒灰色粘質土	縄文土器	深鉢			(外) 貼付突帯部1, 口縁部割, 突文, ナデ (内) ナデ	4m以下	(外) 灰黄黒 10YR5/2 (内) 灰 5Y5/1
91-3	66	K3	黒灰色粘質土	縄文土器	深鉢			(外) 貼付突帯, ナデ, 口縁部割 (内) ナデ	4m以下	(外) 暗灰黄 2.5Y5/2 (内) 灰黄 2.5Y6/1
91-4	66	J3	黒灰色粘質土	縄文土器	深鉢	21.0		(外) 条痕, ナデ (内) ナデ	6m以下	(外) 粉 7.5Y 6/6 (内) に近い黄 7.5Y 6/4
91-5	66	K3	黒灰色粘質土	縄文土器	浅鉢	36.5		(外) ミガキ, 条痕 (内) ミガキ	1m以下	(外) 黒灰 5YR4/1 (内) 黒灰 10YR3/1
91-6	66	K3	黒灰色粘質土	縄文土器	浅鉢	26.1		(外) ミガキ, 条痕 (内) ナデ, ミガキ	5m以下	(外) に近い粉 7.5YR6/4 (内) 黒灰 7.5YR5/1
91-7	67	J3	黒灰色粘質土	縄文土器	浅鉢	29.0		(外) ミガキ, 条痕, ナデ (内) ナデ, ミガキ	2m以下	(外) 黒灰 2.5Y3/1 (内) 黒灰 2.5Y3/1
91-8	67	J3	黒灰色粘質土	縄文土器	浅鉢	40.6		(外) ミガキ, 条痕 (内) ミガキ	1m以下	(外) 黒 10YR2/1 (内) 黒灰 10YR3/3
91-9	67	J2	黒灰色粘質土	縄文土器	浅鉢	45.8		(外) ミガキ, 条痕, ナデ (内) 口縁部割1, ミガキ	1m以下	(外) 黒灰 7.5YR3/1 (内) 黒灰 10YR 4/1
92-1	67	J3	黒灰色粘質土	縄文土器	浅鉢	21.0		(外) ナデ (内) 条痕, ナデ	4m以下	(外) 黒灰 10YR 6/3 (内) に近い黄黒 10YR6/3
92-2	67	J3	黒灰色粘質土	縄文土器	浅鉢			(外) ミガキ (内) 口縁部改修, ミガキ	2m以下	(外) 黒灰 5YR3/1 (内) 黒灰 7.5YR 5/1
103-1	71	K3	粘オリブ胎質土	縄文土器	深鉢	31.4		(外) 条痕, ナデ (内) ナデ	2m以下	(外) 浅黄緑 10YR8/3 (内) 浅黄 2.5YR6/3
103-2	71	I2	粘オリブ胎質土	縄文土器	深鉢	32.0		(外) 条痕, ナデ (内) ナデ	3m以下	(外) 灰黄 2.5YR7/2 (内) 灰黄 2.5YR6/2
103-3	71	I2	粘オリブ胎質土	縄文土器	深鉢	36.0		(外) ナデ (内) ナデ	3m以下	(外) 浅黄緑 7.5YR6/6 (内) に近い黄 7.5YR7/3
103-4	71	K2	粘オリブ胎質土	縄文土器	深鉢			(外) 口縁部割1, ナデ (内) ナデ	7m以下	(外) に近い黄緑 10YR7/2 (内) オリブ黒 5Y3/1
103-5	72	K3	粘オリブ胎質土	縄文土器	鉢			(外) ナデ, 条痕 (内) 口縁内面割突, ナデ, ミガキ	4m以下	(外) 灰白 2.5YR/2 (内) 黒灰 2.5Y7/2
103-6	72	不明	粘オリブ胎質土	縄文土器	鉢			(外) ナデ, ミガキ (内) ミガキ	2m以下	(外) 黒灰 7.5YR3/1 (内) 黒 5YR2/1
103-7	72	K3	粘オリブ胎質土	縄文土器	浅鉢	25.2		(外) ナデ, 条痕 (内) ミガキ, 工具痕	2m以下	(外) 黒灰 10YR3/1 (内) 黒灰 10YR3/2
103-8	72	I2	粘オリブ胎質土	縄文土器	浅鉢	29.6		(外) ミガキ (内) ミガキ	2m以下	(外) 黒 2.5Y/2 (内) 黒灰 2.5Y3/1
103-9	72	I3	粘オリブ胎質土	縄文土器	底部			(外) ナデ (内) ナデ	3m以下	(外) に近い粉 5YR7/4 (内) 灰黄 7.5YR4/2
112-1	76	I2	青灰色粘質土	縄文土器	深鉢	29.0		(外) ナデ (内) ナデ	2m以下	(外) に近い黄緑 10YR 7/3 (内) 灰白 2.5YR/2
112-2	76	K2	青灰色粘質土	縄文土器	深鉢			(外) 貼付突帯部1, ナデ (内) ナデ	3m以下	(外) 明黄緑 10YR6/6 (内) 黄緑 10YR8/6
112-3	76	I2	青灰色粘質土	縄文土器	深鉢	27.6		(外) ナデ (内) ナデ	4m以下	(外) 粉 5YR6/6 (内) に近い粉 5YR7/4
112-4	76	I3	青灰色粘質土	縄文土器	深鉢	25.6		(外) 摩滅 (内) ナデ	6m以下	(外) 灰 5Y6/1 (内) 灰 5Y5/1
112-5	76	J2	青灰色粘質土	縄文土器	深鉢	27.6		(外) ナデ (内) ナデ	2m以下	(外) 黒 10YR2/1 (内) に近い黄緑 10YR 7/2
112-6	76	J3	青灰色粘質土	縄文土器	深鉢	22.0		(外) ナデ (内) ナデ	2m以下	(外) に近い黄緑 10YR7/4 (内) に近い黄緑 10YR 7/3
112-7	76	J2	青灰色粘質土	縄文土器	深鉢	27.6		(外) ナデ (内) ナデ	5m以下	(外) 灰白 2.5YR/2 (内) 灰黄 2.5Y6/2
112-8	76	I2	青灰色粘質土	縄文土器	深鉢			(外) ナデ (内) ナデ	5m以下	(外) 浅黄緑 7.5YR8/4 (内) 黒灰 7.5YR3/2
112-9	76	K2	青灰色粘質土	縄文土器	浅鉢	18.4		(外) ナデ (内) ナデ, 口縁部指跡上面	3m以下	(外) 黒灰 10YR6/1 (内) 灰白 2.5YR/2
119-1	79	J2	黒褐色粘質土	縄文土器	深鉢	34.6		(外) 条痕, ナデ (内) ナデ	4m以下	(外) 浅黄 2.5Y7/3 (内) 浅黄 5YR/4
119-2	79	J2	黒褐色粘質土	縄文土器	深鉢	23.0		(外) ナデ (内) ナデ	3m以下	(外) 粉 5YR 6/6 (内) 粉 5YR7/8

Fig	図取番号	出土地点	出土層位	種類	形種	口径 (cm)	底径 (cm)	調検及び文様等	胎土 (砂粒)	色調
119-3 119-4	79	J2	黒褐色粘質土	縄文土器	深鉢			(外) 凹線文、ナデ	3m以下	(外) 浅黄緑 10YR8/4
								(内) ナデ		(内) 灰白 2.5Y 7/1
119-5	79	I3	黒褐色粘質土	縄文土器	深鉢			(外) ナデ	3m以下	(外) 黒 2.5Y 2/1
								(内) 黒線、ナデ		(内) 黒黒 2.5Y 3/1
119-6	79	K2	黒褐色粘質土	縄文土器	浅鉢	(27.9)		(外) 薄線	3m以下	(外) 橙 7.5YR6/6
								(内) 薄線 (ナデ?)		(外) 灰黒 2.5Y7/2
119-7	79	J2	黒褐色粘質土	縄文土器	浅鉢	(27.0)		(外) 凹線文、ナデ	3m以下	(外) にごい黄 10YR7/2
								(内) ナデ		(内) 灰白 2.5YR8/2
119-8	79	K3/ L3	黒褐色粘質土	縄文土器	浅鉢	(35.4)		(外) ミガキ	2m以下	(外) 黒黒 7.5YR3/1
								(内) ミガキ、ナデ		(内) 黒 7.5YR2/1
123-1	81	J3	黒褐色粘質土 2	縄文土器	鉢	(14.8)		(外) 凹線文、ナデ	3m以下	(外) にごい黄 7.5YR6/3
								(内) ナデ		(内) 灰黒 7.5YR5/2
123-2	81	J3	黒褐色粘質土 2	縄文土器	鉢			(外) 凹線文、ナデ	5m以下	(外) にごい黄緑 10YR7/2
								(内) ナデ		(内) にごい黄緑 10YR7/2
123-3	81	J2	黒褐色粘質土 2	縄文土器	鉢			(外) ナデ	2m以下	(外) 灰黒緑 10YR 5/2
								(内) ナデ		(内) 黒黒 10YR 3/1
123-4	81	K2	黒褐色粘質土 2	縄文土器	鉢 (底部)		7.2	(外) ナデ	3m以下	(外) 灰黒緑 10YR6/2
								(内) ナデ		(内) にごい黄緑 10YR7/4
126-1	83	J3	黒褐色粘質土 3	縄文土器	深鉢			(外) 凹線文	1m以下	(外) にごい黄緑 10YR7/4
								(内) ミガキ		(外) 灰黒 10YR 4/1
126-2	83	J2	黒褐色粘質土 3	縄文土器	鉢			(外) 凹線文、ナデ	1m以下	(外) 灰黒 10YR6/1
								(内) ナデ		(内) 浅黄緑 10YR 8/3
126-3	83	J2	黒褐色粘質土 3	縄文土器	鉢?			(外) 凹線文、ナデ	6m以下	(外) にごい黄緑 10YR7/4
								(内) 薄線		(内) 灰白 2.5YR2/2
126-4	83	J2	黒褐色粘質土 3	縄文土器	布織式鉢			(外) 凹線文、ナデ	3m以下	(外) にごい黄緑 10YR7/3
								(内) ナデ		(内) 橙 5YR 6/6
126-5	83	K3	黒褐色粘質土 3	縄文土器	鉢			(外) 凹線文、ナデ	1m以下	(外) にごい黄緑 10YR 6/3
								(内) ナデ		(外) 明黄緑 10YR 6/2
126-6	83	J3	黒褐色粘質土 3	縄文土器	浅鉢			(外) 丸、縄文、凹線文	1m以下	(外) 灰白 10YR8/2
								(内) ミガキ		(内) 灰黒緑 10YR 6/2
126-7	83	I3	黒褐色粘質土 3	縄文土器	深鉢			(外) ナデ	5m以下	(外) にごい黄緑 10YR7/2
								(内) ナデ		(内) にごい黄緑 10YR7/2
126-8	83	I3	黒褐色粘質土 3	縄文土器	鉢 (底部)		8.5	(外) ナデ	3m以下	(外) 浅黄 2.5Y7/4
								(内) ナデ、曲線江蓋		(内) 浅黄 2.5YR4/4
126-9	83	J2	黒褐色粘質土 3	縄文土器	鉢 (底部)		6.3	(外) ナデ	4m以下	(外) 灰黒 10YR4/1
								(内) ナデ		(内) 灰黒緑 10YR 6/2
129-1	84	J3	黒褐色粘質土 4	縄文土器	鉢			(外) ナデ、丸、縄文	5m以下	(外) 灰黒 7.5YR6/1
								(内) ナデ		(内) 橙 7.5YR6/8
129-2	84	J2	黒褐色粘質土 4	縄文土器	鉢			(外) ナデ、丸、縄文、凹線文	3m以下	(外) 灰黒 2.5YR4/1
								(内) ミガキ、ナデ		(内) 黒黒 2.5YR 3/1
129-3	84	J2	黒褐色粘質土 4	縄文土器	浅鉢	(23.6)		(外) ミガキ、ナデ	2m以下	(外) 灰黒 7.5YR4/1
								(内) ミガキ		(内) 黒 7.5YR 2/1
130-1	84	J3	黒褐色硬質	縄文土器	深鉢			(外) ナデ	4m以下	(外) にごい黄緑 5YR7/4
								(内) 黒線		(内) 灰黒 5YR3/1
130-2	84	I3	黒褐色硬質	縄文土器	深鉢	(9.8)		(外) ナデ	1m以下	(外) 明黄緑 10YR3/1
								(内) ナデ、曲線江蓋		(内) 明黄緑 2.5YR3/8
132-1	85	J2	白灰色粘質土	縄文土器	深鉢			(外) ナデ、丸、縄文、凹線文	2m以下	(外) にごい黄緑 10YR7/3
								(内) ナデ		(内) 黒黒 2.5Y3/2
132-2	85	J2	白灰色粘質土	縄文土器	深鉢 (底部)			(外) (線部)の凹文、ナデ	4m以下	(外) 黒 10YR2/1
								(内) ナデ		(内) 黒 10YR2/1
132-3	85	K3	白灰色粘質土	縄文土器	浅鉢			(外) ナデ	2m以下	(外) にごい黄緑 10YR6/4
								(内) ナデ		(内) にごい黄緑 10YR6/4
132-4	85	J2	白灰色粘質土	縄文土器	深鉢 (底部)		(6.0)	(外) ナデ	5m以下	(外) 灰黒緑 10YR6/2
								(内) ナデ、曲線江蓋		(内) 橙 7.5Y7/6
132-5	85	J2	白灰色粘質土	縄文土器	浅鉢か			(外) ナデ、丸、縄文、凹線文	2m以下	(外) 明黄緑 2.5YR5/8
								(内) ナデ		(内) 明黄緑 2.5YR5/8
133-1	85	K3	濃褐色粘質土	縄文土器	深鉢			(外) 丸、縄文、凹線文、ナデ	1m以下	(外) 灰黄緑 10YR5/2
								(内) ミガキ、ナデ		(内) 黒 10YR2/1
133-2	85	J2	濃褐色粘質土	縄文土器	深鉢か			(外) 丸、縄文、凹線文、ミガキ	1m以下	(外) 灰黒 10YR5/1
								(内) ナデ、ミガキ		(内) 黒 10YR2/1
133-3	85	J2	濃褐色粘質土	縄文土器	深鉢			(外) 丸、縄文、凹線文、ミガキ	1m以下	(外) 橙 2.5YR6/6
								(内) ナデ		(内) 明黄緑 2.5YR3/8
133-4	85	K2	濃褐色粘質土	縄文土器	深鉢			(外) ナデ	3m以下	(外) 灰黒 2.5YR2/2
								(内) ナデ		(内) 灰 5YR1/1

遺物観察表

Fig	調査 番号	出土 地点	出土層位	性別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	調整及び文様等	出土 (砂粒)	色調
133-5	85	K2	藤原朝麻呂土	縄文土層	深鉢 (底平)		8.0	(外) ナデ (内) ナデ、指通し線	4m以下	(外) 紺 2.5YR6/6 (内) 紺 7.5YR4/1
133-6	85	K3	藤原朝麻呂土	縄文土層	鉢?	(15.8)		(外) ナデ (内) ナデ	4m以下	(外) 紺 2.5YR6/8 (内) 紺 5YR6/0
134-1	86	I3	東瀬掛水溝 (層位不明)	縄文土層	深鉢			(外) ナデ、染織、炭化物付着 (内) ナデ	3m以下	(外) 灰白 2.5Y 8/1 (内) 淡黄 2.5Y8/3
134-2	86	K3	東瀬掛水溝 (層位不明)	縄文土層	深鉢			(内) 一枚貝糸織、ミガキ	5m以下	(外) オリーブ黒 5Y 2/2 (内) 紺 2.5Y 4/1
134-3	86	K3	東瀬掛水溝 (層位不明)	縄文土層	鉢	(24.5)		(外) 二枚貝糸織、ミガキ (内) 平織竹管による刺突 ミガキ、ナデ	4m以下	(外) 紺 2.5YR7/3 (内) 紺 2.5Y3/2
134-4	86	J1	西瀬掛水溝 (層位不明)	縄文土層	深鉢			(外) ナデ、ミガキ (内) ナデ	1m以下	(外) 紺 10YR 4/1 (内) 紺 10YR 4/1
134-5	86	J1	西瀬掛水溝 (層位不明)	縄文土層	深鉢	(36.0)	9.6	(外) 1層端部肥大、凹線文、 染織 (内) 染織	3m以下	(外) に近い黄緑 10YR7/3 (内) 浅黄褐色 2.5YR7/4
134-6	86	K3	東瀬掛水溝 (層位不明)	縄文土層	浅鉢			(外) ナデ、ミガキ (内) 1層端部割目、ミガキ	2m以下	(外) 紺 10YR1/1 (内) 紺 10YR4/1
134-7	86	不明	層位不明	縄文土層	深鉢 (底平)		(11.1)	(外) ナデ (内) ナデ	4m以下	(外) 紺 2.5Y6/1 (内) 紺 5YR7/8
134-8	86	I2	層位不明	縄文土層	深鉢 (底平)		(10.2)	(外) ナデ (内) ナデ	6m以下	(外) 灰 5Y6/1 (内) に近い紺 5YR7/4
Ⅱ区										
81-1	62	H4	灰色粘土	弥生土層	甕			(外) ナデ (内) ナデ、ミガキ	2m以下	(外) に近い黄緑 10YR6/3 (内) に近い黄緑 10YR 5/3
81-2	62	H4	灰色粘土	縄文土層	深鉢			(外) 黏付突帯割目、凹線文 ナデ、染織 (内) ナデ、染織	3m以下	(外) に近い黄緑 10YR4/3 (内) 紺 10YR3/1
81-3	62	H4	灰色粘土	縄文土層	深鉢	(29.0)		(外) 黏付突帯割目、染織、穿孔 (内) 染織	1m以下	(外) 灰黄褐色 2.5Y7/2 (内) オリーブ黒 5Y3/1
81-4	62	H4	灰色粘土	縄文土層	深鉢			(外) 黏付突帯割目、ナデ (内) ナデ	4m以下	(外) 灰白 10YR8/1 (内) 灰白 10YR 8/2
81-5	62	H4	灰色粘土	縄文土層	深鉢	(28.6)		(外) ナデ、染織 (内) ナデ、染織	2m以下	(外) に近い黄緑 10YR7/2 (内) に近い黄緑 10YR7/2
81-6	62	H4	灰色粘土	縄文土層	浅鉢	(14.0)		(外) ナデ、ミガキ、沈線 (内) ミガキ	2m以下	(外) 浅黄 2.5Y7/3 (内) 浅黄 2.5Y7/3
89-1	65	H4	暗青灰色粘質土	縄文土層	深鉢			(外) 黏付突帯割目、ナデ、染織 (内) ナデ、染織	3m以下	(外) 灰白 2.5Y7/1 (内) 紺 2.5Y2/1
89-2	65	H3	暗青灰色粘質土	縄文土層	深鉢			(外) 黏付突帯割目、ナデ (内) ナデ	2m以下	(外) 灰黄褐色 10YR6/2 (内) に近い黄緑 10YR 7/3
89-3	65	H4	暗青灰色粘質土	縄文土層	深鉢			(外) 1層端部割目、 黏付突帯割目、ナデ (内) ナデ、染織	4m以下	(外) 灰白 10YR8/2 (内) に近い黄緑 10YR7/3
89-4	65	H4	暗青灰色粘質土	縄文土層	深鉢			(外) 1層端部割目、 黏付突帯割目、ナデ (内) ナデ	3m以下	(外) に近い紺 7.5YR 7/3 (内) 紺 7.6Y5/1
89-5	65	H4	暗青灰色粘質土	縄文土層	深鉢			(外) 黏付突帯割目、ナデ (内) 染織	4m以下	(外) 灰黄 2.5YR6/2 (内) 紺 2.5Y 2/1
89-6	65	H4	暗青灰色粘質土	縄文土層	深鉢			(外) 黏付突帯割目、染織 (内) 染織	3m以下	(外) 浅黄 2.5Y7/3 (内) 灰白 2.5YR8/2
89-7	65	G4	暗青灰色粘質土	縄文土層	深鉢			(外) 1層端部割目 黏付突帯割目、染織 (内) 染織	3m以下	(外) 灰黄褐色 10YR 5/2 (内) 紺 10YR1 7/1
89-8	65	G5	暗青灰色粘質土	縄文土層	深鉢			(外) 黏付突帯割目 1層端部割目、染織 (内) 染織	2m以下	(外) 紺 10YR 4/1 (内) 紺 10YR4/1
89-9	65	G4	暗青灰色粘質土	縄文土層	深鉢			(外) 1層端部割目、 黏付突帯割目、染織 (内) 染織	1.5m以下	(外) 浅黄褐色 10YR8/3 (内) 浅黄褐色 10YR8/3
89-10	65	H4	暗青灰色粘質土	縄文土層	深鉢			(外) 1層端部割目、染織 (内) 染織	2m以下	(外) 浅黄褐色 10YR8/3 (内) 浅黄褐色 10YR8/3
89-11	65	G4	暗青灰色粘質土	縄文土層	深鉢			(外) 1層端部割目、ナデ (内) ナデ	3m以下	(外) に近い紺 7.5YR 6/4 (内) 紺 7.5YR4/1
89-12	65	H4	暗青灰色粘質土	縄文土層	深鉢			(外) 1層端部割目、染織 (内) 染織、ナデ	3m以下	(外) 紺 7.5YR4/1 (内) 浅黄褐色 7.5YR8/4
89-13	65	H4	暗青灰色粘質土	縄文土層	深鉢			(外) 1層端部割目、染織 (内) 染織	3m以下	(外) 灰白 10YR7/1 (内) に近い黄緑 10YR7/2

Fig	図取番号	出土地点	出土層位	種類	原種	口径 (mm)	底径 (mm)	調整及び文様等	出土(世紀)	色調
80-14	65	14	暗青灰色粘質土	縄文土器	深鉢			(外) 口縁部割目、条痕 (内) 条痕	3m以下	(外) 灰黒 7.5Y 5/2 (内) におい黄褐色 7.5YR6/3
80-15	65	14	暗青灰色粘質土	縄文土器	深鉢			(外) 口縁部割目、ナデ (内) ナデ	3m以下	(外) におい黄褐色 10YR7/3 (内) におい黄褐色 10YR7/2
80-16	65	F5	暗青灰色粘質土	縄文土器	鉢			(外) ナデ (内) ナデ	3m以下	(外) 灰白 10YR8/2 (内) 黒黒 2.5Y3/1
80-17	65	F4	暗青灰色粘質土	縄文土器	鉢	(230)		(外) ナデ、沈線 (内) ナデ	4m以下	(外) 灰黒 2.5Y7/2 (内) 灰 5Y4/1
80-18	65	F4	暗青灰色粘質土	縄文土器	浅鉢			(外) ミガキ (内) ミガキ	1m以下	(外) 黒黒 10YR3/2 (内) 黒黒 10YR2/2
94-1	69	G5	黒灰色粘質土	縄文土器	深鉢			(外) 貼付変形割目、ナデ (内) 条痕	2m以下	(外) 黒黒 10YR3/1 (内) 黒黒 10YR3/2
94-2	69	14	黒灰色粘質土	縄文土器	深鉢			(外) 貼付変形割目、ナデ (内) 口縁部割目	4m以下	(外) におい黄褐色 10YR6/3 (内) におい黄褐色 10YR7/2
94-3	69	15	黒灰色粘質土	縄文土器	深鉢			(外) 貼付変形割目、口縁部割目、条痕 (内) ナデ	3m以下	(外) におい黄褐色 10YR5/3 (内) 暗灰 10YR4/1
94-4	69	F4	黒灰色粘質土	縄文土器	深鉢			(外) 口縁部割目、ナデ (内) ナデ	4m以下	(外) 黒黒 10YR3/2 (内) 黒黒 10YR 3/1
94-5	69	14	黒灰色粘質土	縄文土器	深鉢			(外) 口縁部割目、ナデ、条痕 (内) 条痕	2m以下	(外) 暗灰 10YR6/3 (内) におい黄褐色 10YR7/3
94-6	69	H4	黒灰色粘質土	縄文土器	深鉢	(46.0)		(外) ナデ、条痕 (内) 口縁部内面刺突文、条痕	3m以下	(外) におい黄褐色 10YR7/2 (内) におい黄褐色 10YR7/2
94-7	69	H4	黒灰色粘質土	縄文土器	鉢			(外) ナデ、条痕 (内) 条痕	4m以下	(外) におい黄褐色 10YR7/2 (内) 灰白 2.5Y7/1
94-8	69	H54	黒灰色粘質土	縄文土器	浅鉢			(外) ミガキ (内) ミガキ	1m以下	(外) 灰黄黒 10YR4/2 (内) 黒黒 10YR3/1
94-9	69	F4	黒灰色粘質土	縄文土器	浅鉢	(38.0)		(外) ミガキ (内) ミガキ	3m以下	(外) 黒 7.5YR2/1 (内) 黒黒 10YR3/2
98-1	70	G4	灰だまり03 黒色粘質土	縄文土器	深鉢	(27.6)		(外) 摩滅 (内) 摩滅	2m以下	(外) 明暗灰 7.5YR7/4 (内) 明暗灰 7.5YR7/4
98-2	70	G4	灰だまり03	縄文土器	深鉢	(24.0)		(外) ナデ (内) ナデ	2m以下	(外) 淡黄 2.5Y7/3 (内) 灰黄 2.5Y7/2
98-3	70	G4	黒色粘質土 土層たまり03	縄文土器	深鉢	(21.8)		(外) 口縁部割目、ナデ (内) ナデ	1.5m以下	(外) 明暗灰 7.5YR7/2 (内) におい黄褐色 7.5YR7/4
98-4	70	G4	灰だまり03	縄文土器	浅鉢			(外) ミガキ (内) ミガキ	1m以下	(外) 灰白 2.5Y7/1 (内) 灰白 2.5Y7/1
98-5	70	G4	灰だまり03 黒色粘質土	縄文土器	深鉢	(23.8)		(外) ナデ、ミガキ (内) ミガキ	2m以下	(外) 灰黄 2.5 Y7/2 (内) におい黄褐色 10YR27/2
98-6	70	G4	灰だまり02	縄文土器	浅鉢			(外) ミガキ (内) ミガキ	2m以下	(外) 黒 10YR2/1 (内) 黒 10YR2/1
100-1	71	G3 G4	灰だまり27	縄文土器	深鉢			(外) ナデ (内) 条痕、ナデ	3m以下	(外) 黒黒 10YR3/1 (内) 灰黄黒 10YR4/2
100-2	71	G3 G4	灰だまり27	縄文土器	深鉢			(外) 条痕、ナデ、貼付突起 (内) 条痕、ナデ	1m以下	(外) 暗灰 2.5Y4/1 (内) 暗灰黄 2.5Y5/2
100-3	71	G3/G4	黒色粘質土 灰だまりナデ	縄文土器	浅鉢			(外) ミガキ (内) ミガキ	2m以下	(外) におい黄褐色 10YR7/3 (内) 黒 10YR2/1
101-1	71	F3	灰だまり28	縄文土器	深鉢			(外) 条痕 (内) ナデ	4m以下	(外) 黒黒 10YR3/1 (内) 黒黒 10YR3/2
101-2	71	F3	黒色粘質土 灰だまり28	縄文土器	深鉢	(24.0)		(外) 条痕、ナデ (内) ナデ	3m以下	(外) 黒 7.5YR2/1 (内) 黒黒 10YR3/1
101-3	71	F3	灰だまり28	縄文土器	浅鉢			(外) 条痕 (内) 条痕、ミガキ	2m以下	(外) 暗灰 10YR6/1 (内) 暗灰 10YR6/1
105-1	73	G5	黒色粘質土	縄文土器	深鉢			(外) 口縁部割目、刺突文、貼付変形割目、ナデ、条痕 (内) ナデ	3m以下	(外) 暗灰 10YR5/1 (内) におい黄褐色 10YR7/2
105-2	73	G5	黒色粘質土	縄文土器	深鉢	(290)		(外) ナデ、条痕 (内) ナデ	1m以下	(外) におい黄褐色 10YR7/2 (内) 灰白 10YR7/1
105-3	73	不明	黒色粘質土 (条痕跡不明)	縄文土器	深鉢	(27.0)		(外) 摩滅 (内) 摩滅	4m以下	(外) 灰白 10YR8/2 (内) 暗灰 10YR4/1
105-4	73	F3	黒色粘質土	縄文土器	深鉢	(300)		(外) 摩滅 (内) 摩滅	3m以下	(外) におい黄褐色 10YR7/2 (内) 淡黄 5YR8/3
106-1	73	H4	黒色粘質土	縄文土器	深鉢			(外) 条痕、ナデ (内) ナデ	4m以下	(外) 灰黄 2.5Y6/2 (内) 灰黄 2.5Y7/2
106-2	73	I3	黒色粘質土	縄文土器	深鉢			(外) 沈線文、ナデ (内) ナデ	1m以下	(外) におい黄褐色 10YR7/3 (内) 灰白 10YR8/2

遺物観察表

Fig	図版番号	出土地点	出土層位	種類	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	調剤及び文様等	取土 (砂粒)	色調
106-3	73	G4	黒色粘質土	縄文土器	深鉢	(22.6)		(外) 摩滅 (内) 摩滅	3cm以下	(外) 紅い黄緑 10YR7/2 (内) 紅い黄緑 10YR7/3
106-4	73	G4	黒色粘質土	縄文土器	浅鉢			(外) 摩滅 (内) 摩滅	4cm以下	(外) 灰白 10YR8/2 (内) 浅黄緑 7.5YR8/3
106-5	73	G4	黒色粘質土	縄文土器	鉢			(外) 摩滅 (内) 摩滅	3cm以下	(外) 灰白 10YR8/1 (内) 灰黄緑 10YR5/2
106-6	73	G5	黒色粘質土	縄文土器	浅鉢	(30.0)		(外) 摩滅 (内) 摩滅	3cm以下	(外) 黄緑 2.5Y6/2 (内) 灰 5Y6/1
106-7	74	H4	黒色粘質土	縄文土器	浅鉢	(33.4)		(外) 茶色, ミガキ, ナデ (内) ミガキ, ナデ	2cm以下	(外) 紅い黄緑 10YR7/2 (内) 紅い黄緑 10YR7/3
106-8	74	G3	黒色粘質土	縄文土器	浅鉢			(外) ミガキ (内) ミガキ	2cm以下	(外) 紅い黄緑 7.5YR5/4 (内) 紅い黄緑 7.5YR6/4
106-9	74	G4	黒色粘質土	縄文土器	浅鉢			(外) ミガキ (内) 口縁内面凹線文, ミガキ	2cm以下	(外) 灰黄緑 10YR6/2 (内) 灰白 10YR7/1
106-10	74	G4	黒色粘質土	縄文土器	浅鉢			(外) 茶色, ミガキ (内) ミガキ	2cm以下	(外) 灰白 10YR7/4 (内) 黒 10YR2/1
107-1	74	G4	黒色粘質土	縄文土器	浅鉢	(34.0)		(外) 茶色, ミガキ, ナデ (内) ミガキ, ナデ	1cm以下	(外) 灰黄 2.5Y7/2 (内) 灰白 2.5Y7/1
107-2	74	G4	黒色粘質土	縄文土器	皿	(13.8)		(外) ナデ (内) ナデ	3cm以下	(外) 紅い黄緑 10YR7/2 (内) 紅い黄緑 10YR7/2
111-1	76	G4	灰だまり 0607	縄文土器	深鉢			(外) ナデ, 茶色 (内) 摩滅	2cm以下	(外) 灰緑 7.5YR6/2 (内) 黒 2.5Y 2/1
111-2	76	G4	灰だまり 07	縄文土器	深鉢	(29.0)		(外) 茶色, ナデ (内) 口縁部内側浅線 摩滅	3cm以下	(外) 紅い黄緑 10YR7/2 (内) 灰白 10YR7/1
114-1	77	F3	青灰色粘質土	縄文土器	深鉢			(外) 茶色 (内) 茶色	4cm以下	(外) 灰白 10YR5/1 (内) 灰白 10YR5/1
114-2	77	H4	青灰色粘質土	縄文土器	浅鉢	(21.2)		(外) ナデ, ミガキ (内) ナデ, ミガキ	2cm以下	(外) 灰黄緑 10YR 5/2 (内) 灰黄緑 10YR5/2
114-3	77	F3	青灰色粘質土	縄文土器	浅鉢	(28.0)		(外) ミガキ, 茶色 (内) ミガキ	3cm以下	(外) 黒 2.5Y2/1 (内) 暗黄緑 2.5Y 5/2
114-4	77	H4	青灰色粘質土	縄文土器	底部		6.0	(外) ナデ (内) ナデ	6cm以下	(外) 黒 2.5Y 6/8 (内) 紅い黄緑 10YR7/2
117-1	78	G4	灰だまり 18	縄文土器	深鉢	(34.0)		(外) ナデ, 茶色 (内) ナデ	3cm以下	(外) 黒 10YR3/1 (内) 灰白 2.5YR/2
117-2	78	G4	灰だまり 18	縄文土器	深鉢	(29.2)		(外) 茶色, ナデ (内) 茶色	3cm以下	(外) 灰白 2.5YR/2 (内) 黒 2.5Y3/1
117-3	78	G4	灰だまり 18	縄文土器	浅鉢	(24.4)		(外) 摩滅 (ナデ) (内) 摩滅 (ミガキ)	1cm以下	(外) 紅い黄緑 10YR7/3 (内) 紅い黄緑 10YR7/3
117-4	213	G4	灰だまり 18	縄文土器	浅鉢	(18.0)		(外) 摩滅 (ナデ) (内) 摩滅 (ナデ)	0.5cm以下	(外) 紅い黄緑 10YR7/3 (内) 紅い黄緑 10YR7/3
117-5	78	G4	灰だまり 18	縄文土器	浅鉢	(22.8)		(外) 摩滅 (ナデ) (内) 摩滅 (ミガキ)	0.5cm以下	(外) 灰黄緑 10YR6/2 (内) 紅い黄緑 7.5YR7/3
117-6	78	G4	灰だまり 18	縄文土器	浅鉢	(17.2)		(外) ミガキ (内) ミガキ	1cm以下	(外) 紅い黄緑 10YR 7/3 (内) 紅い黄緑 7.5YR 7/4
118-1	78	G4	灰だまり 18	縄文土器	底部			(外) 摩滅 (ナデ) (内) 摩滅 (ナデ)	0.5cm以下	(外) 黄緑 7.5YR7/2 (内) 灰 2.5Y6/1
120-1	80	G4	黒褐色粘質土	縄文土器	鉢			(外) 黒 縄文, 浅線, ナデ (内) ナデ	2cm以下	(外) 灰黄緑 10YR5/2 (内) 灰黄緑 10YR4/2
120-2	80	G4	黒褐色粘質土	縄文土器	鉢			(外) 黒 縄文 (浅線) (内) ナデ	2cm以下	(外) 灰 10YR4/1 (内) 黒 N1.5
120-3	80	F4	黒褐色粘質土	縄文土器	浅鉢	22.3 ~ 16.5		(外) ナデ? (内) ナデ?, ケズリ, 縦線	3cm以下	(外) 灰黄 7.5Y 6/2 (内) 灰 7.5Y 4/1
120-4	80	G3	黒褐色粘質土	縄文土器	底部		(7.2)	(外) ナデ (内) ナデ	5cm以下	(外) 灰白 2.5YR/2 (内) 紅い黄緑 10YR7/2
124-1	82	G3	青褐色粘質土	縄文土器	深鉢			(外) ナデ (内) ナデ	2cm以下	(外) 紅い黄緑 10YR7/2 (内) 灰白 10YR7/1
124-2	82	G4	青褐色粘質土	縄文土器	深鉢			(外) ナデ, 茶色 (内) ナデ, 茶色	2cm以下	(外) 灰黄緑 10YR6/2 (内) 灰 10YR5/1
124-3	82	J4	青褐色粘質土	縄文土器	浅鉢	(26.4)		(外) 黒 縄文, 浅線文, ナデ, ミガキ (内) 口縁内面凹線文, ミガキ	1cm以下	(外) 灰黄 2.5Y7/1 (内) 浅黄 2.5Y7/3
124-4	82	G4	青褐色粘質土	縄文土器	浅鉢	(20.6)		(外) 摩滅 (内) ミガキ	1cm以下	(外) 紅い黄緑 10YR7/2 (内) 黒 2.5Y2/1

Fig	図版 番号	出土 地点	出土層位	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	調整及び文様等	粘土 (砂粒)	色調
124-5	82	F4	青褐色粘質土1	縄文土器	浅鉢			(外) 摩滅 (内) 摩滅	2cm以下	(外) にごい・黄緑 10YR6/4 (内) 灰白 2.5Y7/1
124-6	82	H4	青褐色粘質土1	縄文土器	鉢			(外) RL 縄文、沈殿、ミガキ (内) 口縁内側に沈殿、ミガキ	2cm以下	(外) にごい・黄 5YR7/3 (内) 甲原段 7.5YR7/2
124-7	82	H5	青褐色粘質土1	縄文土器	鉢			(外) RL 縄文、沈殿 (内) ナデ	1cm以下	(外) にごい・黄緑 10YR7/4 (内) にごい・黄緑 10YR7/4
124-8	82	G3	青褐色粘質土1	縄文土器	鉢?			(外) RL 縄文、沈殿、ミガキ (内) ナデ	3cm以下	(外) 灰黄緑 10YR 6/2 (内) にごい・黄緑 10YR7/2
124-9	82	G4	青褐色粘質土1	縄文土器	底部		0.4	(外) ナデ (内) ナデ	2cm以下	(外) 灰白 10YR5/1 (内) にごい・黄緑 10YR7/2
124-10	82	H3 /H4	青褐色粘質土1	縄文土器	底部		6.6	(外) ナデ (内) ナデ	2cm以下	(外) 浅黄 2.5Y7/3 (内) にごい・黄緑
127-1	83	F4	青褐色粘質土2	縄文土器	深鉢	(32.6)		(外) 摩滅 (内) 摩滅(ナデ?)	1cm以下	(外) にごい・黄緑 10YR7/2 (内) にごい・黄緑 10YR7/2
127-2	83	G4	青褐色粘質土2	縄文土器	深鉢			(外) ナデ、染灰 (内) ナデ	3cm以下	(外) にごい・黄緑 10YR6/3 (内) にごい・黄緑 10YR6/3
127-3	83	G4	青褐色粘質土2	縄文土器	浅鉢			(外) RL 縄文、沈殿、ナデ (内) ナデ	2cm以下	(外) 浅黄緑 10YR 8/3 (内) 浅黄緑 10YR8/4
131-1	84	H4	黒褐色レキ層	縄文土器	鉢			(外) RL 縄文、沈殿、ナデ (内) ナデ	4cm以下	(外) にごい・黄 10YR7/3 (内) 灰白 5YR8/1
131-2	84	H4	黒褐色レキ層	縄文土器	鉢			(外) RL 縄文、沈殿、ナデ (内) ナデ	4cm以下	(外) にごい・黄 5YR 6/3 (内) 灰白 5YR8/1
131-3	84	H4	黒褐色レキ層	縄文土器	鉢?			(外) RL 縄文、沈殿、ナデ (内) ナデ	1cm以下	(外) にごい・黄緑 10YR7/3 (内) にごい・黄緑 10YR7/2
131-4	84	H4	黒褐色レキ層	縄文土器	鉢?			(外) RL 縄文、沈殿、ナデ (内) ナデ	4cm以下	(外) 灰黄緑 10YR6/2 (内) 灰白 10YR7/1
136-1	88	H4	不明 内側排水溝	縄文土器	深鉢			(外) 口縁端部突起、ナデ (内) 染灰、ナデ	3cm以下	(外) 灰黄緑 10YR6/2 (内) 灰白 10YR4/1
136-2	88	H4	不明 内側排水溝	縄文土器	深鉢			(外) 口縁端部刻目、染灰、ナデ (内) 染灰、ナデ	4cm以下	(外) 灰白 2.5YR8/2 (内) 灰白 10YR4/1
136-3	88	不明	不明 東側排水溝	縄文土器	深鉢			(外) 染灰、ナデ (内) ナデ	1cm以下	(外) 灰白 10YR5/1 (内) にごい・黄緑 10YR7/2
136-4	88	H4	不明 内側排水溝	縄文土器	深鉢			(外) 口縁端部刻目、染灰、ナデ (内) 染灰	4cm以下	(外) 灰白 10YR4/1 (内) 灰白 10YR4/1
136-5	88	不明	不明 南側排水溝	縄文土器	深鉢			(外) 胎付突帯刻目、ナデ (内) 染灰、ナデ	3cm以下	(外) にごい・黄緑 10YR6/4 (内) にごい・黄緑 10YR2/1
136-6	88	G4	不明 内側排水溝	縄文土器	深鉢			(外) 胎付突帯刻目 染灰、ナデ (内) ナデ、染灰	4cm以下	(外) 灰白 10YR 8/2 (内) にごい・黄 7.5YR5/3
136-7	88	不明	不明 南側排水溝	縄文土器	深鉢			(外) 胎付突帯刻目、染灰 (内) ナデ	2cm以下	(外) 灰黄緑 10YR4/2 (内) 黒色 2.5YR3/1
136-8	88	不明	不明 東側排水溝	縄文土器	深鉢			(外) RL 縄文、凹線文 (内) ナデ	3cm以下	(外) にごい・黄緑 10YR7/2 (内) 灰白 2.5YR8/2
136-9	88	F4	不明 内側排水溝	縄文土器	鉢			(外) ナデ (内) ナデ、種子凹痕	3cm以下	(外) にごい・黄 10YR 7/4 (内) 浅黄緑 10YR8/4
136-10	88	H4	内側排水溝	縄文土器	鉢			(外) LR 縄文、凹線文 (内) 染灰、ナデ	5cm以下	(外) 浅黄 2.5Y7/4 (内) にごい・黄 2.5Y6/3
136-11	88	G5	東側排水溝	縄文土器	底部		9.2	(外) 摩滅 (内) 摩滅	3cm以下	(外) 浅黄 5Y7/3 (内) オリーブ黒 5Y3/1
136-12	88	F4	北側排水溝	縄文土器	底部		4.2	(外) 摩滅(ナデ) (内) 摩滅(ナデ)	2cm以下	(外) にごい・黄 7.5YR 6/3 (内) にごい・黄緑 10YR6/3

第7表 古屋敷遺跡(H-1区)出土石器観察表

Fig	図版番号	出土地点	出土遺構	器種	石材	計測値				備考	
						長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
79-1	61	L3	SR01	網子	頁岩	2.7	1.3	1.4	4.0		
79-2	61	K2	SR01	石鏟か	凝灰岩	残存 3.7	4.8	1.0	17.0	平直	
79-3	61	K2	SR01	磨石	デイスサイト	残存 8.0	残存 6.0	残存 4.5	176.0	平直	
79-4	61	K2	SR01	石鏟	砂岩	残存 28.9	残存 12.5	4.9	1790.0		
80-7	61	I2	灰黄色粘土	磨石	石巻凝灰岩	残存 5.1	残存 3.0	3.6	44.0	破損	
85-3	63	K3	黒灰色粘質土	二重加工の網子	結晶質安山岩	残存 4.0	2.1	0.6	4.0	表面破損部か	
85-4	63	K3	黒灰色粘質土	磨製石斧	塩基性片岩	5.7	2.6	0.9	24.0		
85-5	63	K3	黒灰色粘質土	網子	凝灰岩	残存 6.0	4.4	1.4	55.0	破損	
85-6	63	K3	暗青灰色粘質土	不明石製品	凝灰岩	8.4	5.9	3.5	176.0		
85-7	63	K2, K3	黒灰色粘質土	石鏟	デイスサイト	残存 37.3	24.5	5.0	5018.0		
86-1	64	I3	埋戻し	石鏟	結晶質安山岩	2.75	1.5	0.5	1.0	無原石	
86-1	64	I2	暗青灰色粘質土	打製石斧	緑色片岩	17.9	7.9	2.7	550.0	石製品	
88-2	64	K3	暗青灰色粘質土	磨製石斧	緑色片岩	残存 10.1	5.2	3.9	386.0	石製品	
88-3	64	K2	暗青灰色粘質土	磨製石斧	緑色片岩	12.7	4.4	3.8	286.0	柄部破損	
88-4	64	I2	暗青灰色粘質土	網子	凝灰岩	2.1	1.5	0.5	1.16	網子状の破片	
92-3	68	I2	暗青灰色粘質土	網子	頁岩	7.4	7.5	1.8	112.0		
92-4	68	K3	黒灰色粘質土	石斧	塩基性片岩	残存 13.8	7.2	1.7	188.0	刃部破損 一部使用痕あり	
92-5	68	K3	黒灰色粘質土	打製石斧	緑色片岩	10.2	5.0	1.3	90.0		
92-6	68	I3	黒灰色粘質土	石斧	緑色片岩	12.9	4.6	1.7	156.0	製作途上か	
92-7	68	I3	黒灰色粘質土	石斧	塩基性片岩	残存 10.0	残存 5.2	1.4	85.0	製作途上破損か	
92-8	68	I3	黒灰色粘質土	磨製石斧	緑色片岩	10.0	4.6	1.4	113.0	使用痕あり	
92-9	68	I2	黒灰色粘質土	磨製石斧	塩基性片岩	残存 9.7	7.1	2.5	219.0	製作途上破損か	
92-10	68	I3	黒灰色粘質土	磨製石斧	塩基性片岩	12.4	3.7	3.2	248.0	石製品	
92-11	68	K2	暗青灰色粘質土	磨製石斧	緑色片岩	残存 13.6	3.4	2.8	248.0	石棒?	
92-12	68	K3	黒灰色粘質土	磨製石斧	緑色片岩	残存 6.6	3.0	0.9	28.0	製作途上か	
92-13	68	K2	黒灰色粘質土	石鏟か	塩基性片岩	残存 8.3	0.9	1.2	13.0	先端破損	
92-14	68	K2	黒灰色粘質土	石鏟	デイスサイト	9.7	8.0	3.7	328.5		
93-1	68	K2	黒灰色粘質土	網石/樺石	玄武岩	11.4	8.7	4.9	683.0		
93-2	68	I3	黒灰色粘質土	網石/樺石	玄武岩	13.4	残存 4.8	5.7	503.0	平直	
93-3	68	I3	黒灰色粘質土	磨石	デイスサイト	残存 6.8	11.2	6.8	662.0	平直	
93-4	68	K3	黒灰色粘質土	石鏟	デイスサイト	残存 13.8	残存 5.7	残存 5.0	403.0		
93-5	68	K2	黒灰色粘質土	石鏟	デイスサイト	残存 13.7	残存 10.7	3.5	865.0		
93-6	68	K2	暗青灰色粘質土	不明石製品	凝灰岩	12.8	7.4	2.5	216.0	接合	
93-7	68	K3	暗青灰色粘質土	不明石製品	凝灰岩	17.1	4.9	3.6			
104-1	72	K2	黒灰色粘質土	スクレイパー	塩基性片岩	残存 10.3	6.7	2.0	208.0	両面破損	
104-2	72	I2	相オリーブ凝灰岩	打製石斧	花崗片岩	残存 9.5	4.8	1.1	68.7	石製品	
104-3	72	I2	相オリーブ凝灰岩	打製石斧	塩基性片岩	残存 7.4	5.4	1.5	111.0	石製品	
104-4	72	I2	相オリーブ凝灰岩	打製石斧	塩基性片岩	15.1	7.8	2.0	317.0	石製品	
104-5	72	I2	相オリーブ凝灰岩	網石/樺石	デイスサイト	残存 7.1	9.3	6.6	640.0	平直	
104-6	72	I2	相オリーブ凝灰岩	不明石製品	凝灰岩	18.3	12.0	2.6	637.0	石製品か	
113-1	77	I3	青灰色粘質土	スクレイパー	花崗片岩	残存 9.8	6.6	1.9	106.0	石製品の可能性	
113-2	77	I2	青灰色粘質土	打製石斧	塩基性片岩	11.6	4.5	2.2	164.0	部分的に磨損	
113-3	77	K2	青灰色粘質土	打製石斧	緑色片岩	15.1	8.2	2.9	442.0	破損欠損	
113-4	77	I2	青灰色粘質土	打製石斧	緑色片岩	残存 10.0	10.7	2.5	380.0	柄部破損	
113-5	77	I1	青灰色粘質土	打製石斧	緑色片岩	残存 13.3	6.6	2.7	238.0	刃部破損	
113-6	77	I2	青灰色粘質土	網子	凝灰岩	7.3	5.4	1.7	58.0		
113-7	77	I3	青灰色粘質土	網子	凝灰岩	10.9	3.8	2.7	115.0		
113-8	77	K2	青灰色粘質土	凹石	凝灰岩	11.1	6.9	3.7	32.6		
119-9	79	I2	黒褐色粘質土	スクレイパー	結晶質安山岩	7.1	3.5	0.5	23.0		
119-10	79	I3	黒褐色粘質土	打製石斧	花崗片岩	15.7	8.2	2.6	276.0		
119-11	79	K2	黒褐色粘質土	石斧	緑色片岩	8.7	4.0	1.6	76.0	磨石等の湾利部か	
119-12	79	I2	黒褐色粘質土	石斧	緑色片岩	14.6	5.7	1.4	188.0	使用痕あり	
119-13	79	I2	黒褐色粘質土	凹石	凝灰岩	8.5	6.0	1.9	101.0	両面使用	
132-6	85	K1	白灰色粘質土	スクレイパー	花崗片岩	残存 9.0	7.0	6.0	126.0	破損あり	
133-7	85	I2	濃褐色粘質土	凹石	安山岩	残存 5.8	1.5	0.8	10.24	先端破損	
133-8	85	I2	濃褐色粘質土	不明石製品	流紋岩	7.5	7.0	1.8	186.0		
135-1	87	不明	不明	石鏟	結晶質安山岩	2.3	1.2	0.3	1.0	無原石	
135-2	87	I1	不明	二重加工の網子	結晶質安山岩	2.3	1.7	0.4	1.0		
135-3	87	I3	不明	スクレイパー	安山岩	残存 8.6	5.2	0.8	46.0	破損あり	
135-4	87	K3	不明	打製石斧	花崗片岩	10.2	5.9	1.6	124.0	刃部破損	
135-5	87	K3	不明	磨製石斧	塩基性片岩	13.8	4.9	3.2	345.0	使用痕あり	
135-6	87	I1	不明	磨製石斧	緑色片岩	8.2	5.9	2.8	128.0	柄部破損	
135-7	87	不明	不明	網石/樺石	デイスサイト	7.4	9.7	6.0	528.9	平直	
135-8	87	I1	不明	凹石	石鏟	流紋岩	42.6	15.4	6.2	5980.0	
135-9	87	I1	不明	凹石	凝灰岩	5.6	4.2	1.9	31.0	破損	
135-10	87	K3	不明	凹石	凝灰岩	残存 11.2	6.7	2.3	226.4	平直	
135-11	87	I1	不明	不明石製品	スレート	7.3	7.2	0.7	63.0		
I区											
90-1	66	F5	暗青灰色粘質土	石鏟	結晶質安山岩	1.9	1.3	0.2	0.66		
90-2	66	F5	暗青灰色粘質土	打製石斧	安山岩	残存 6.5	9.6	3.5	188.0	柄部破損	
90-3	66	F4	暗青灰色粘質土	石斧	塩基性片岩	残存 10.1	5.4	2.5	196.0	未成破損品	
90-4	66	F5	暗青灰色粘質土	石斧	塩基性片岩	残存 9.0	5.2	3.2	240.0	未成破損品	
90-5	66	G4	暗青灰色粘質土	網石/樺石	デイスサイト	15.2	10.7	5.5	1351.0		
90-6	66	G4	暗青灰色粘質土	石鏟	凝灰岩	残存 12.9	残存 9.4	3.7	642.0	破片, 焼熱	
90-7	66	H5	暗青灰色粘質土	石鏟	凝灰岩	残存 11.8	11.0	3.6	735.0	破片, 焼熱	

Fig	図版番号	出土地点	出土遺構	器種	石材	計測値				備考
						長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	
94 - 10	69	G3	黒灰色粘質土	二次加工品	緑色片岩	残存 5.9	2.5	0.7	14.0	加工中の副産物
94 - 11	69	F4	黒灰色粘質土	石造	結晶質安山岩	残存 5.0	3.2	0.7	15.3	
94 - 12	69	G4	黒灰色粘質土	スライバー	安山岩	6.9	6.7	0.9	51.0	
94 - 13	69	F4	黒灰色粘質土	石造	塩基性片岩	16.4	6.5	5.0	743.0	敲打途中
94 - 14	69	G4	黒灰色粘質土	磨石	凝灰岩	13.2	9.6	7.1	1166.0	
94 - 15	69	G4	黒灰色粘質土	不明石製品	凝灰岩	残存 4.2	3.7	2.6	30.0	平丸、被熱
95 - 1	70	F3	黒灰色粘質土	風石	デイスait	33.2	24.8	17.4	9500.0	磨拭面あり
98 - 7	70	G4	炭だまり 03 黒色粘質土	石造	結晶質安山岩	残存 1.8	1.0	0.2	0.8	先端部欠損
98 - 8	70	G4	黒色粘質土	磨製石片	塩基性片岩	残存 6.8	4.5	1.3	57.0	柄部破損
100 - 4	71	C3	黒色粘質土	不明石製品	塩基性片岩	残存 10.6	3.5	2.6	142.0	石粉か
107 - 3	74	G3	黒色粘質土	打製石片	緑色片岩	12.0	6.5	1.4	156.0	
107 - 4	74	H5	黒色粘質土	打製石片	塩基性片岩	残存 13.6	6.3	3.1	341.0	柄部破損
107 - 5	74	G4	黒色粘質土	磨製石片	塩基性片岩	残存 8.6	3.8	2.4	139.0	柄部破損
107 - 6	74	G5	黒色粘質土	磨製石片	塩基性片岩	残存 11.1	4.5	3.2	263.0	石粉/用か
107 - 7	74	G4	黒色粘質土	不明石製品	塩基性片岩	残存 10.1	3.9	4.7	309.0	石粉か
107 - 8	75	F4	黒色粘質土	礫石 / 磨石	デイスait	残存 9.5	10.0	4.6	637.0	平丸
107 - 9	75	F3	黒色粘質土	礫石 / 磨石	玄武岩	11.9	8.9	4.8	750.0	平干の被熱
107 - 10	75	F4	黒色粘質土	礫石 / 磨石	デイスait	残存 6.4	8.1	4.8	384.0	平丸
108 - 1	75	F3	黒色粘質土	礫石 / 磨石	デイスait	残存 8.8	残存 7.6	4.5	444.0	約 1/4 残
108 - 2	75	G5	黒色粘質土	礫石 / 磨石	デイスait	8.4	7.7	4.7	390.0	
108 - 3	75	不明	黒色粘質土	石造	デイスait	残存 10.8	残存 11.0	3.4	511.0	
108 - 4	75	F4	黒色粘質土	脚筒造	凝灰岩	10.2	5.3	4.4	177.9	
108 - 5	75	H5	黒色粘質土	凹石	凝灰岩	11.6	7.9	3.3	288.0	
108 - 6	75	G5	黒色粘質土	不明石製品	凝灰岩	22.0	6.0	3.6	521.6	石粉か
108 - 7	75	H3	黒色粘質土	不明石製品	凝灰岩	残存 6.4	3.9	2.6	62.0	被熱
108 - 8	75	G4	黒色粘質土	不明石製品	凝灰岩	16.2	5.5	4.0	416.0	敲打痕が残る
108 - 9	75	G4	黒色粘質土	不明石製品	凝灰岩	残存 8.0	4.8	2.0	67.0	敲打痕が残る
108 - 10	75	H4	黒色粘質土	不明石製品	凝灰岩	9.3	4.6	1.7	94.0	両面研磨
111 - 3	76	G4	炭だまり 07 黒色粘質土	礫石 / 磨石	デイスait	12.7	11.9	5.8	1450.0	
111 - 4	76	G4	炭だまり 07	礫石 / 磨石	玄武岩	11.2	9.7	6.4	982.0	
111 - 5	76	G4	炭だまり 07	礫石 / 磨石	凝灰岩系	17.0	11.2	8.0	1392.0	
114 - 5	77	F4	青灰色粘質土	打製石片	塩基性片岩	残存 11.0	7.1	3.6	400.0	柄部破損
114 - 6	77	J5	青灰色粘質土	打製石片	安山岩	9.9	6.7	1.3	106.0	製作途中か
114 - 7	77	F3	青灰色粘質土	打製石片	安山岩	残存 7.7	8.2	2.2	186.0	柄部破損
114 - 8	77	H5	青灰色粘質土	石片	緑色片岩	残存 12.6	5.3	3.9	349.0	製作途中破損か
114 - 9	77	H3	青灰色粘質土	不明石製品	凝灰岩	12.6	5.4	2.0	154.4	石粉か
114 - 10	77	F4	炭だまり 08 緑色粘質土	磨石	高板岩	残存 6.0	残存 4.0	4.7	150.0	破損品
118 - 2	78	G4	炭だまり 18	磨製石片	緑色片岩	残存 6.4	3.9	2.2	102.0	製作途中破損か
118 - 3	78	G4	炭だまり 18	凹石	凝灰岩	残存 5.6	6.6	1.8	66.0	平丸
120 - 5	80	G5	黒褐色粘質土	石造	結晶質安山岩	残存 3.3	1.8	0.4	2.0	
120 - 6	80	G4	黒褐色粘質土	石造	結晶質安山岩	2.8	1.6	0.5	1.0	
120 - 7	80	H4	黒褐色粘質土	打製石片	緑色片岩	12.7	残存 7.0	1.8	192.0	柄部/両面加工か
120 - 8	80	F4	黒褐色粘質土	磨製石片	凝灰岩	残存 8.5	3.6	2.7	150.0	刃部欠けあり
120 - 9	80	F4	黒褐色粘質土	凹石	凝灰岩	残存 13.6	8.4	5.2	438.2	破損
136 - 13	88	G4	不明	石片	緑色片岩	残存 8.4	6.4	2.6	226.0	未成破損品
136 - 14	88	不明	不明	石片	高板岩片岩	残存 7.0	4.6	1.1	47.0	柄部破損品
136 - 15	88	F4	不明	磨石	デイスait	11.6	10.0	5.5	895.3	
137 - 1	88	不明	不明	礫石 / 磨石	石英脈	11.3	10.2	6.9	1128.8	
137 - 2	88	H5	不明	礫石 / 磨石	デイスait	13.6	9.5	3.3	664.0	
137 - 3	88	不明	濃褐色粘質土	不明石製品	凝灰岩	9.8	7.5	4.0	190.0	

第8表 古屋敷遺跡 (C区) 出土陶磁器一覧表

	碗	坏	瓮	甗	鉢鉢	器種不明	備考
中国製白磁	4					2	碗Ⅳ型 2
瓷器系			6				
龍泉窯系青磁		1					坏Ⅳ型
中国製青磁	2					3	袋物 2
朝鮮系				1	3		
唐津系	1						
瀬戸・美濃系	1						鉄軸

第9表 古屋敷遺跡 (H・I区) 出土杭観察表

Fig.	図版番号	杭番号	種類	形態	先端形状	計測値			備考
						全長 (cm)	最大幅 / 径 (cm)	備考	
		E 1	東航判	丸本	全周削り出し	74.2	8.4		
		E 2	東航判	丸本	全周削り出し	68.0	6.4	樹種特定 (サカキ)	
		E 3	東航判	丸本	欠損	16.4	欠損		
		E 4	東航判	丸本	全周削り出し	35.7	4.4		
		E 5	東航判	丸本	全周削り出し	73.4	4.3		
		E 6	東航判	丸本	全周削り出し	62.6	5.4		
		E 7	東航判	丸本	全周削り出し	63.3	5.7		
75 - 1		E 8	東航判	丸本	2方向削り出し	64.7	5.3		
75 - 2		E 9	東航判	丸本	全周削り出し	80.3	7.5		
		E10	東航判	丸本	2方向削り出し	74.8	7.0		
		E11	東航判	丸本	2方向削り出し	38.8	6.3		
		E12	東航判	丸本	全周削り出し	47.0	6.5		
		E13	東航判	丸本	全周削り出し	53.5	6.0		
		E14	東航判	丸本	2方向削り出し	66.8	5.7		
		E15	東航判	丸本	全周削り出し	55.0	5.2		
75 - 3		E16	東航判	丸本	2方向削り出し	65.2	5.7		
75 - 4		E17	東航判	丸本	全周削り出し	64.0	5.0		
		E18	東航判	丸本	2方向削り出し	56.4	5.3		
		E20	東航判	丸本	全周削り出し	74.4	6.8		
75 - 5		E21	東航判	丸本	全方向削り出し	64.2	6.8		
		E22	東航判	丸本	全周削り出し	81.3	一部欠損 6.5		
		E23	東航判	丸本	2方向削り出し	77.0	一部欠損 5.8		
		E24	東航判	丸本	2方向削り出し	61.0	5.5		
		E25	東航判	丸本	全周削り出し	40.9	5.2	樹種特定 (サカキ)	
		E26	東航判	丸本	全周削り出し	58.0	4.4		
		E27	東航判	丸本	全周削り出し	93.4	7.7		
		E28	東航判	丸本	2方向削り出し	44.5	3.5		
		E29	東航判	丸本	欠損	60.0	6.0		
75 - 6		E30	東航判	丸本	2方向削り出し	49.5	5.5		
		E31	東航判	丸本	欠損	28.0	4.0	両端欠損	
	89	E32	東航判	丸本	全周削り出し	145.0	7.0	樹種特定 (マキ属)	
		E33	東航判	丸本	全周削り出し	92.5	7.5		
		E34	東航判	丸本	一部のみ削り出し	47.0	3.0		
		E35	東航判	丸本	一部のみ削り出し	45.0	5.0		
		E36	東航判	丸本	全方向削り出し	70.5	6.0		
		E37	東航判	丸本	全周削り出し	61.7	6.5		
		E38	東航判	丸本	全周削り出し	72.5	7.0		
		E39	東航判	丸本	全周削り出し	92.5	6.0		
75 - 7		W1	西航判	ミカン割り材		64.0	7.3		
		W2	西航判	ミカン割り材		55.0	5.5		
		W3	西航判	ミカン割り材		61.5	6.3		
75 - 8		W4	西航判	ミカン割り材		52.0	6.0		
		W5	西航判	ミカン割り材		59.5	6.0		
		W6	西航判	ミカン割り材		64.0	6.5		
75 - 9		W7	西航判	ミカン割り材		71.5	8.5	樹種特定 (スタジイ)	
		W8	西航判	ミカン割り材		64.0	7.5		
75 - 10		W9	西航判	ミカン割り材		55.5	10.0		
		W10	西航判	ミカン割り材		58.0	7.0		
75 - 11		W11	西航判	ミカン割り材		68.0	11.0		
		W12	西航判	ミカン割り材		58.0	8.5		
		W13	西航判	ミカン割り材		58.0	6.0		
		W14	西航判	ミカン割り材		51.0	6.0		
		W15	西航判	ミカン割り材		53.0	4.0		
75 - 12		W16	西航判	ミカン割り材		48.0	7.0	樹種特定 (スタジイ)	
75 - 13		W17	西航判	ミカン割り材	一部のみ削り出し	45.0	5.0		
		W18	西航判	ミカン割り材		48.0	8.0		
76		H1	配石付造	丸本	全周削り出し	95.0	7.5	樹種特定 (マキ属)	
76		H1	配石付造	丸本	全周削り出し	79.0	8.0		
76		H2	配石付造	丸本	全周削り出し	78.0	9.5		

第10表 古屋敷遺跡 (C・H・I区) 出土木製品観察表

Fig.	図版番号	出土地点	出土遺構・層位	種類	材質	計測値			備考
						長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	
30 - 4	89	C区 K5	土器だまり 1	漆塗り籠	樹形材のみ残存	残存 2.7	残存 4.2	1.3	底面式別箱の継ぎ目部
48 - 9	89	C区 K6	SK04	漆塗り籠	樹形材のみ残存	残存 1.9	残存 3.2	0.9	底面式別箱。樹形材は本製材によるもの
77 - 1		H区 J2	SD01	不明本製品	未分析	残存 41.7	3.5	1.4	断面木炭形、穿孔あり
77 - 2	60	H区 J2	SD01	漆塗り籠	単子葉植物	21.7	24.5		滑潤不揃
122 - 1		I区 G5	第6遺構面	和彫	マキ属	9.5	10.0	残存 3.5	
122 - 2		I区 F5	第6遺構面	和彫	マキ属	17.3	17.0	残存 7.0	
122 - 3	81	I区 G5	第6遺構面	和彫	マキ属	14.5	14.2	残存 13.9	

写真図版



古屋敷遺跡全景 (平成26年12月 北から)



古屋敷遺跡全景 (平成27年1月 東から)

図版2 古屋敷遺跡（C区）



C区表土掘削前風景（北から）



C区北壁セクション上層部（東から）



C区北壁セクション (南から)



C区西壁セクション (東から)

図版4 古屋敷遺跡 (C区)



C区SR01 全景 (上空から)



C区東壁セクション (南から)



C区 SR01 出土土器 (北から)



C区 SR01 出土石核

図版6 古屋敷遺跡 (C区)



C区 SD01 完掘状況 (北西から)



C区 SD01 完掘状況 (西から)



C区 SD01 セクション(東から)



C区 SX (炭だまり) 06 出土状況(北から)

図版8 古屋敷遺跡 (C区)



C区配石遺構(北から)



C区集石1(西から)



C区土器だまり1 南半部 (西から)



C区土器だまり1 調査状況 (南から)

図版10 古屋敷遺跡 (C区)



C区土器だまり1 西半部 (北から)



C区土器だまり1 出土浅鉢 (西から)



C区土器だまり 2(東から)



C区土器だまり 3(西から)

図版 12 古屋敷遺跡 (C区)



C区第6遺構面全景(上空から)



C区SD02全景(南東から)



C区SD02(西から)



C区集石2(南東から)

図版14 古屋敷遺跡 (C区)



C区SD03(東から)



C区SX (SK) 72 半裁状況 (東から)



C区 SX (SK) 83 半截状況 (西から)

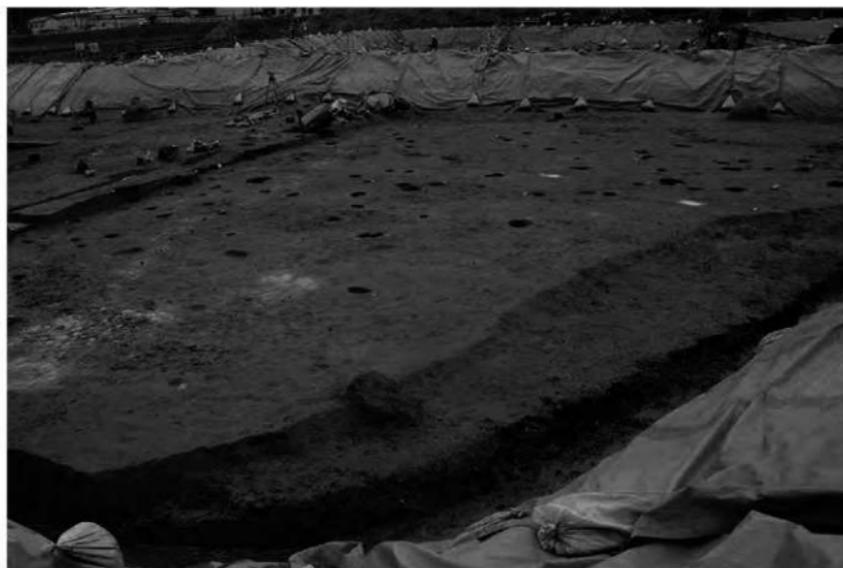


C区 SK04 半截状況 (東から)

図版16 古屋敷遺跡 (C区)



C区出土土嚢 (東から)



C区第7遺構面 (東から)



C区調査区完掘状況 (南東から)



C区調査区完掘状況 (南西から)



F区調査前風景(南から)



F区SX(地床^跡)02半蔵状況(東から)



F区南壁西側セクション (西から)



F区南壁東側セクション (東から)



F区調査区完掘状況 (南から)



F区調査区完掘状況 (北から)



古屋敷遺跡 H・I区全景 (平成 27 年 12 月 北から)



古屋敷遺跡 H・I区全景 (平成 27 年 12 月 南から)

図版22 古屋敷遺跡(H・I区)



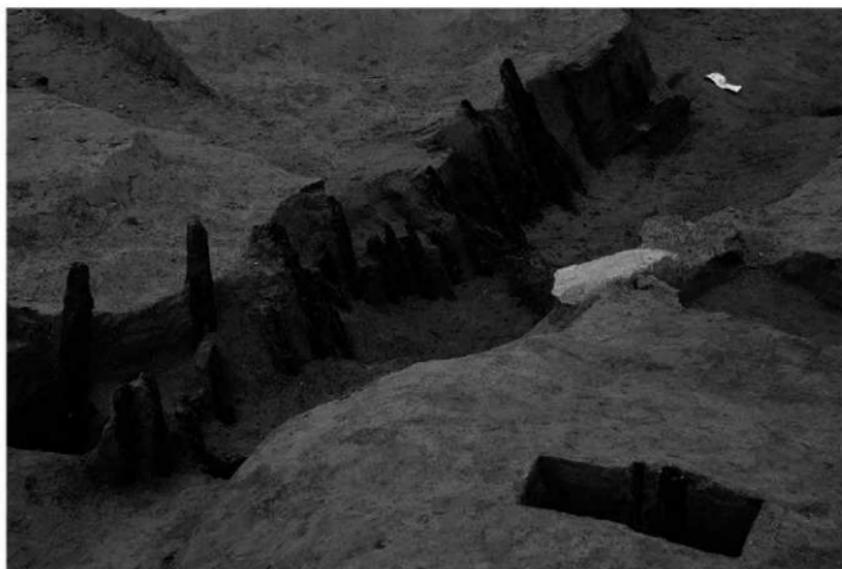
H区 SD01 完掘状況(西から)



H区 SD01 東側樹皮検出状況(南から)



H区 SD01 東杭列検出状況 (南西から)



H区 SD01 東杭列完掘状況 (南西から)

図版24 古屋敷遺跡(H・I区)



H区 SDO1 東杭列完掘状況(西から)



H区 SDO1 東杭列堀上げ時(南から)



H区 SD01 西杭列完掘状況 (北西から)



H区 SD01 西杭列完掘状況 (北から)



H区SD01 西杭列堀上げ時(北東から)



H区SD01 西杭列堀上げ時(北西から)



H区 SD01 配石と杭群 (北から)



H区配石 (西から)



H区配石(南西から)



H区配石、素材束(南から)



H区 SD02・03(東から)



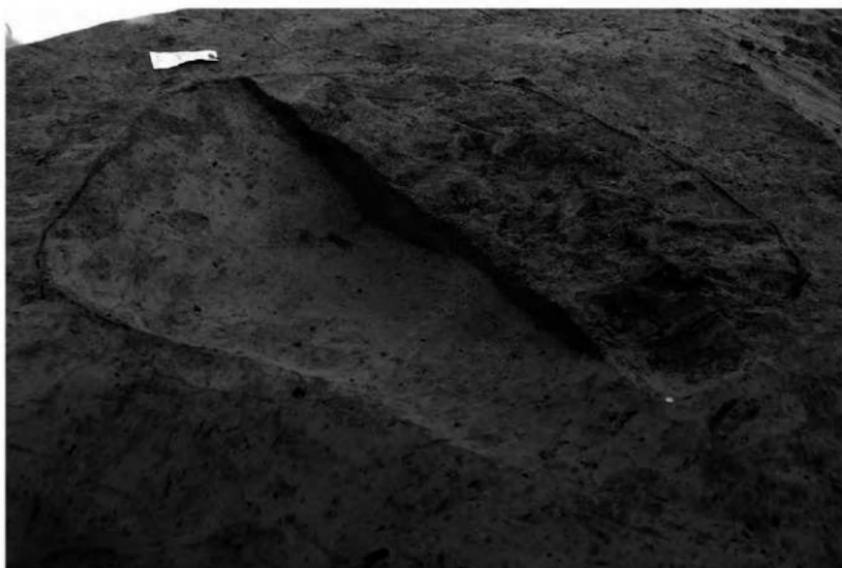
H区炭だまり 17(南から)



I区炭だまり02(西から)



I区炭だまり03(北から)



I区炭だまり 27 半截状況 (西から)



I区炭だまり 28 半截状況 (北から)



1区配石(南から)



1区炭だまり07完掘状況(南から)

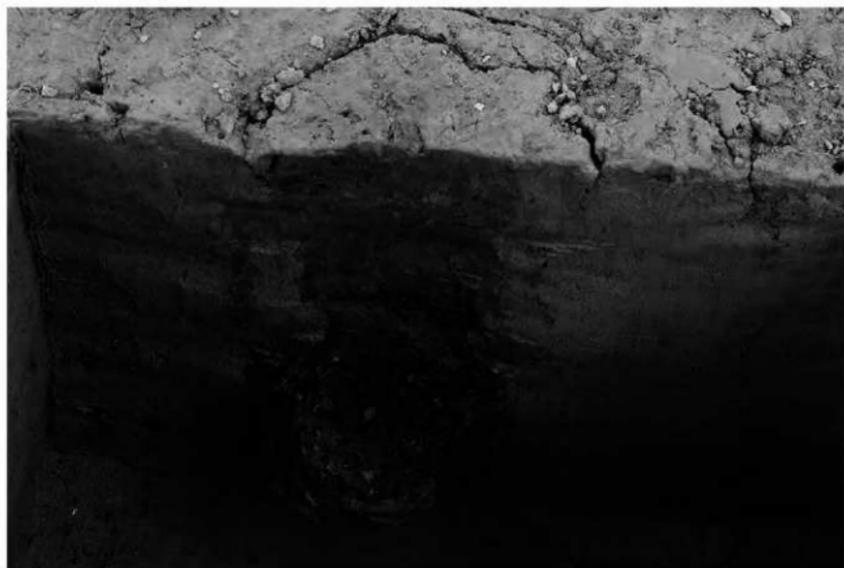


I区炭だまり (SK) 18 完掘状況 (南から)



I区杭06 半截状況 (北西から)

図版34 古屋敷遺跡(H・I区)



I区 P26 半截状況 (南西から)



I区 杭 07 半截状況 (北西から)



H区完掘状況 (東から)



H区完掘状況 (西から)



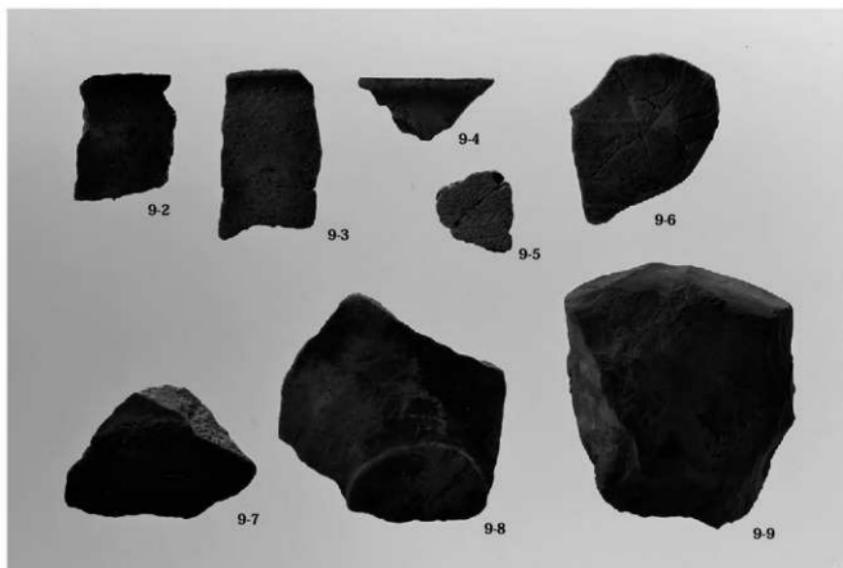
I区完掘状況(南から)



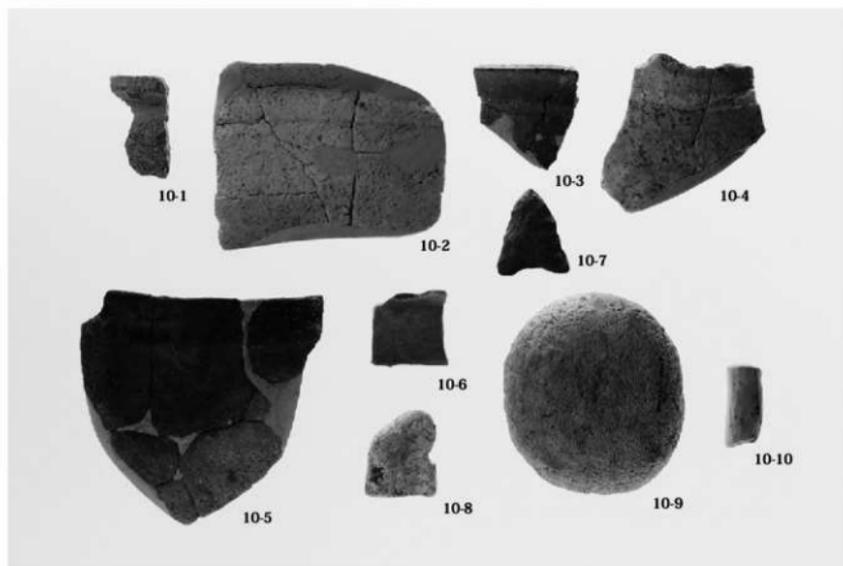
I区拡張部完掘状況(北から)



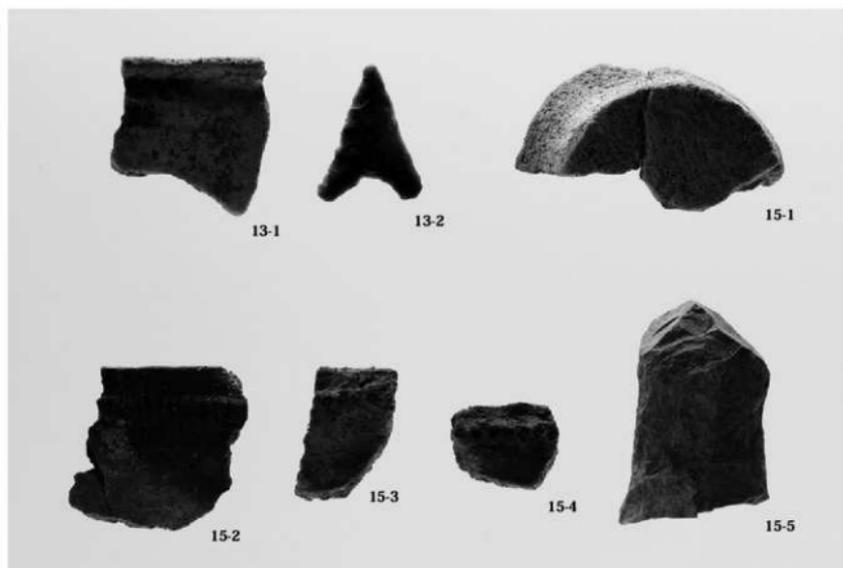
C区 SR01 出土遺物 (1)



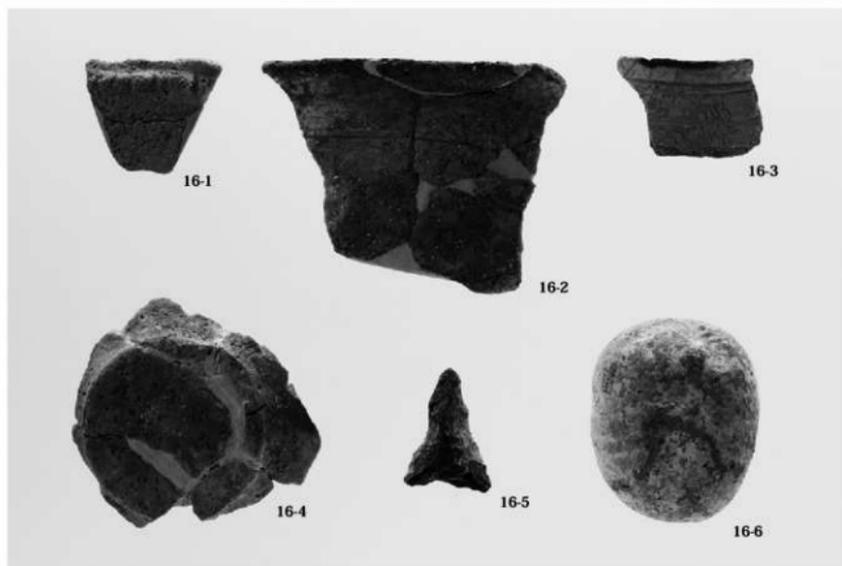
C区 SR01 出土遺物 (2)



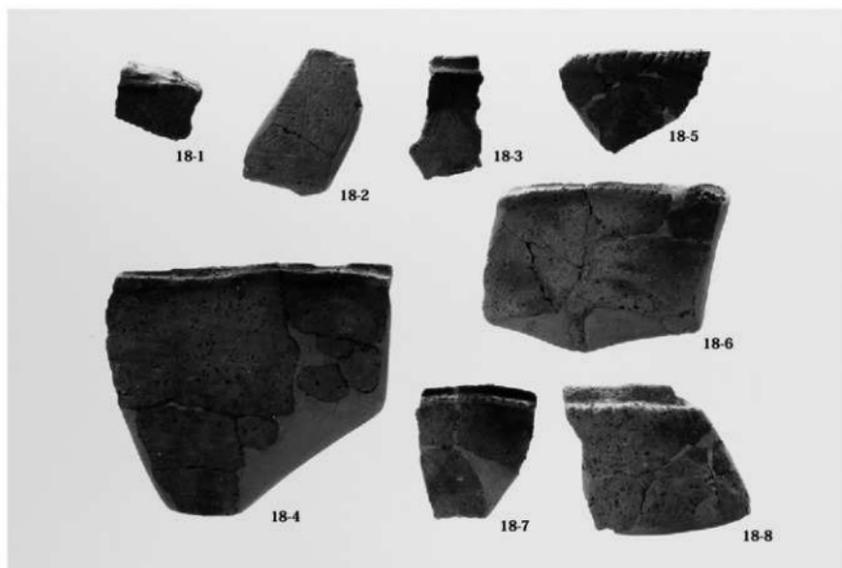
C区第1遺構面出土遺物



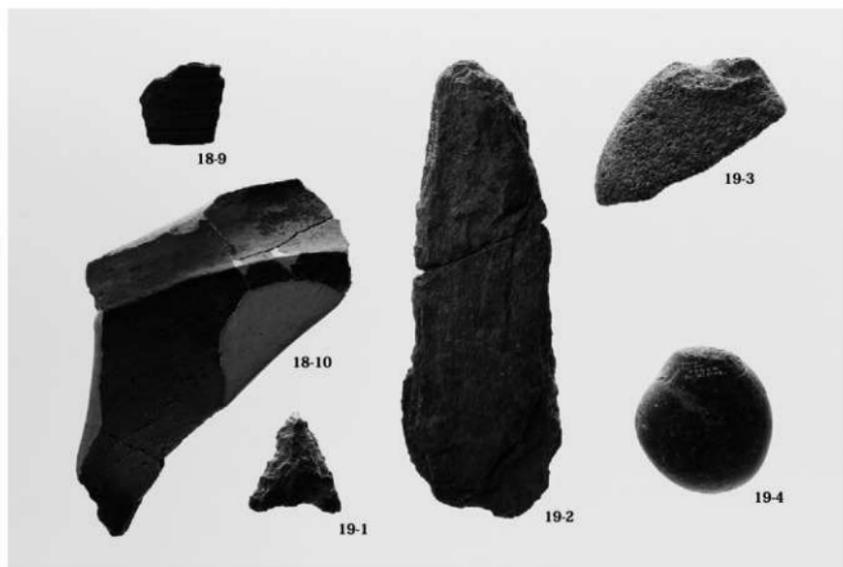
C区SD01、SX(炭だまり)06出土遺物



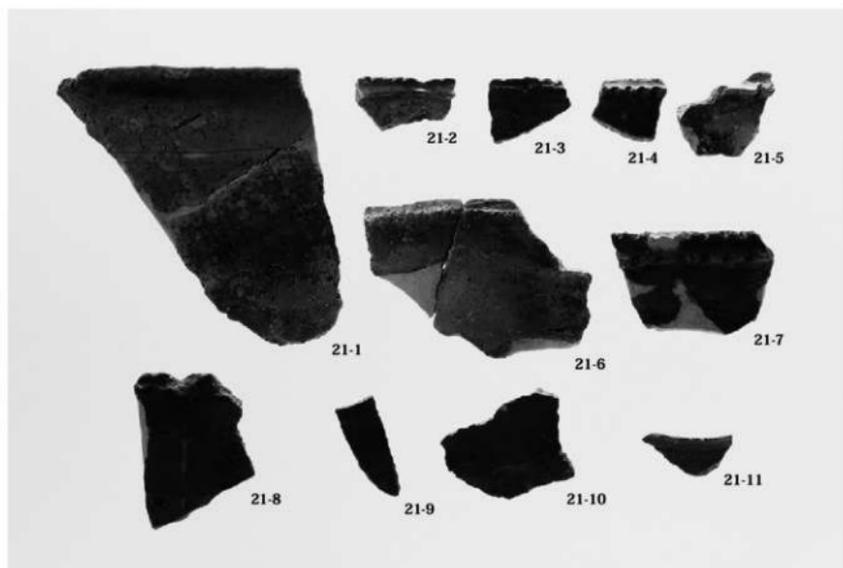
C区第2遺構面出土遺物



C区第3遺構面出土遺物(1)



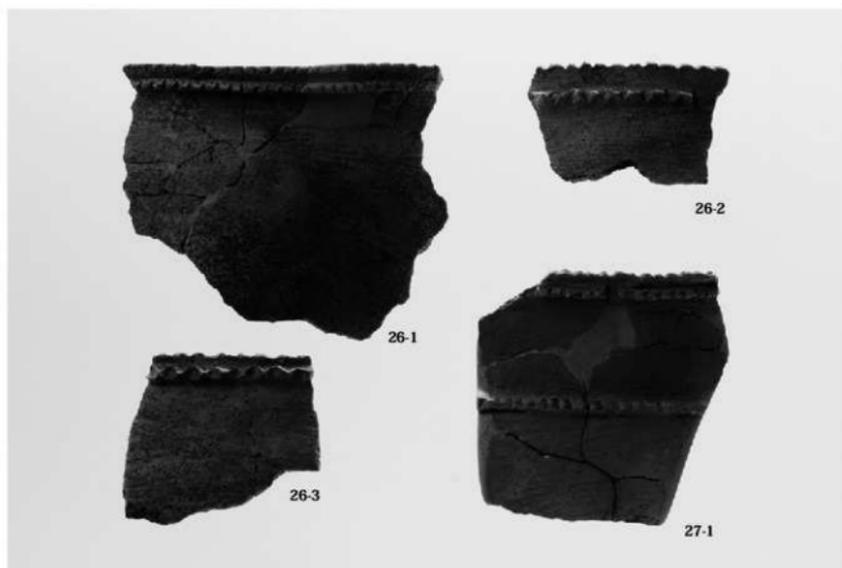
C区第3遺構面出土遺物(2)



C区第4遺構面出土遺物(1)



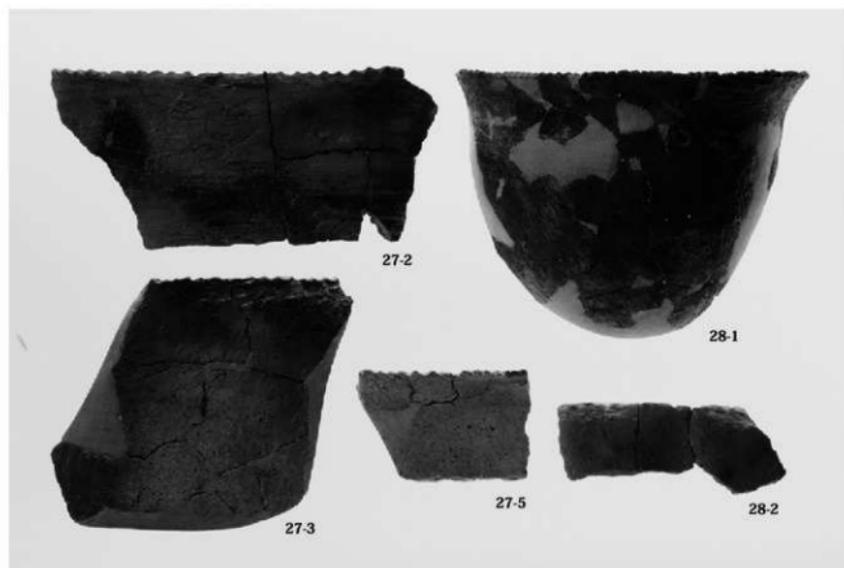
C区第4遺構面出土遺物(2)



C区土器だまり1出土遺物(1)



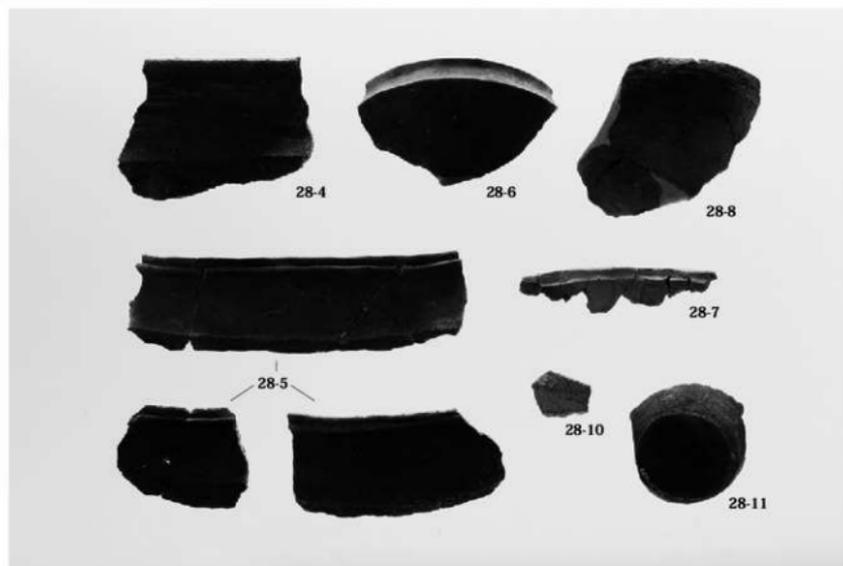
C区土器だまり1出土遺物(2)



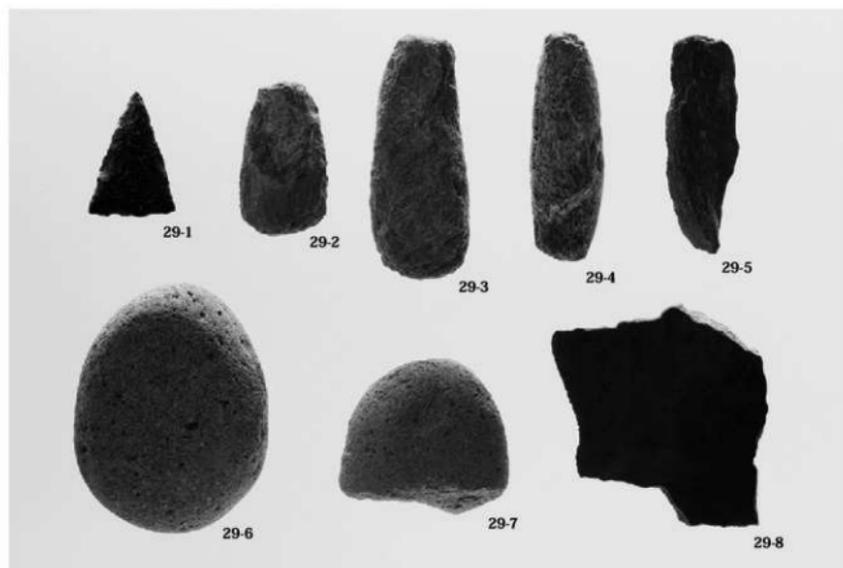
C区土器だまり1出土遺物(3)



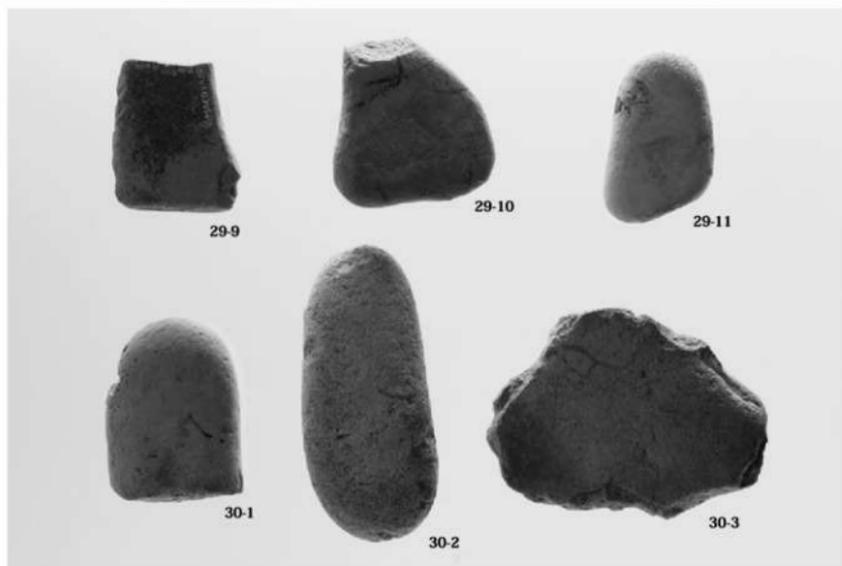
C区土器だまり1出土遺物(4)



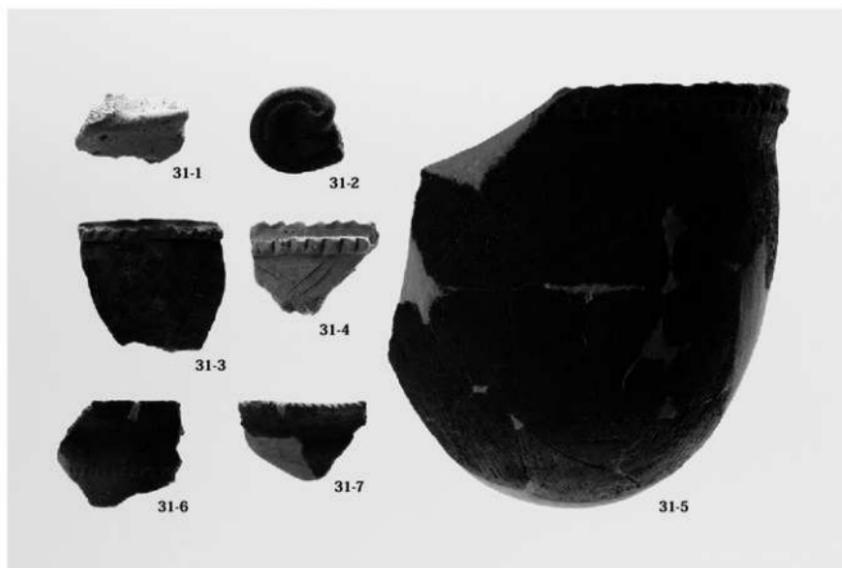
C区土器だまり1出土遺物(5)



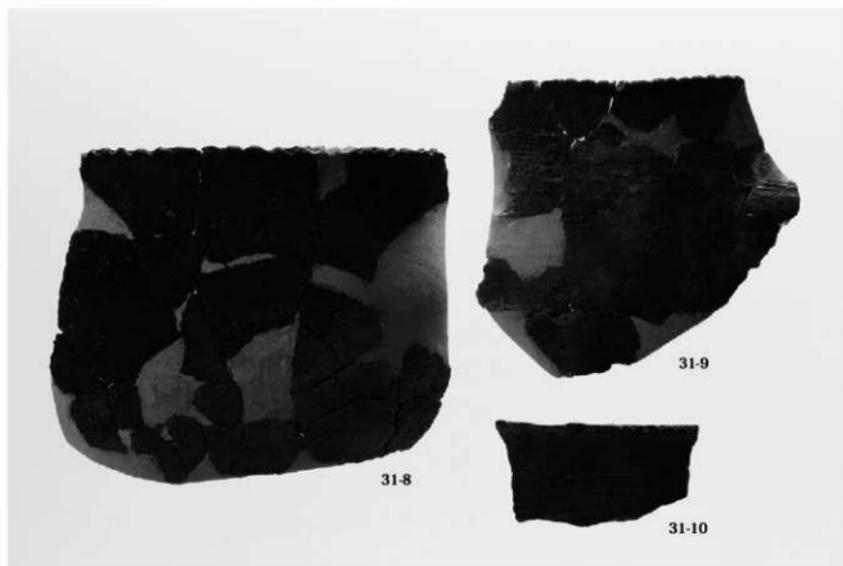
C区土器だまり1出土遺物(6)



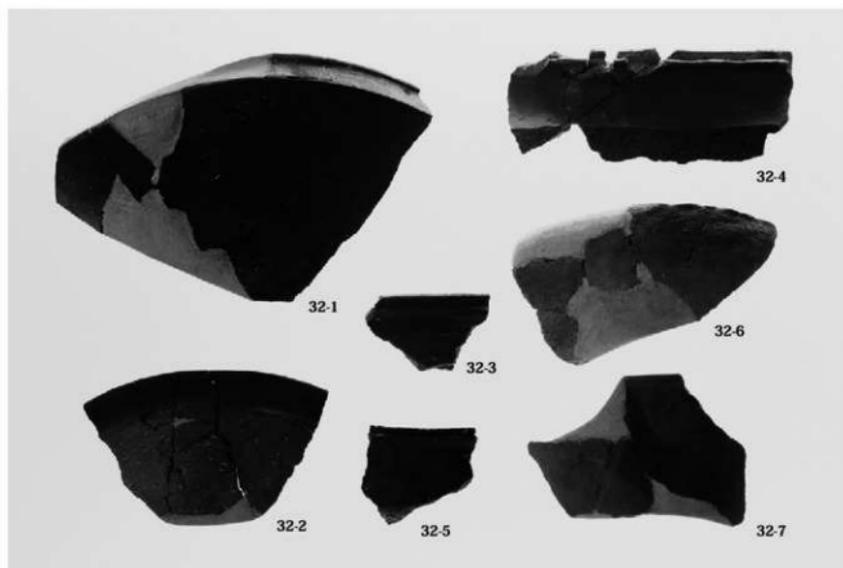
C区土器だまり1出土遺物(7)



C区第5遺構面出土遺物(1)



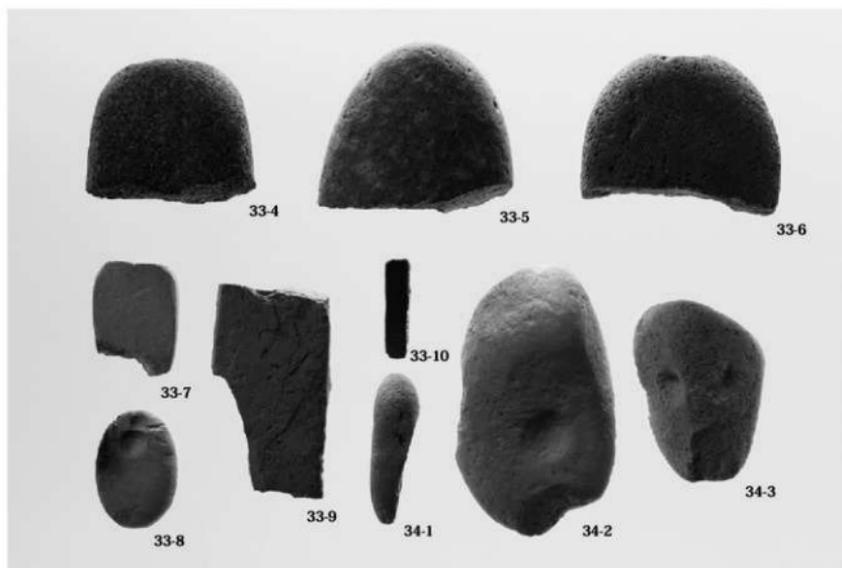
C区第5遺構面出土遺物(2)



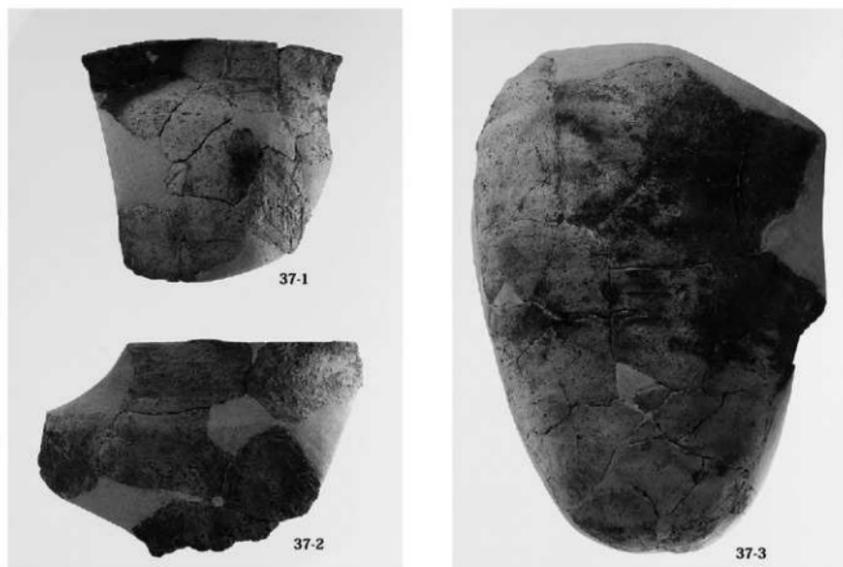
C区第5遺構面出土遺物(3)



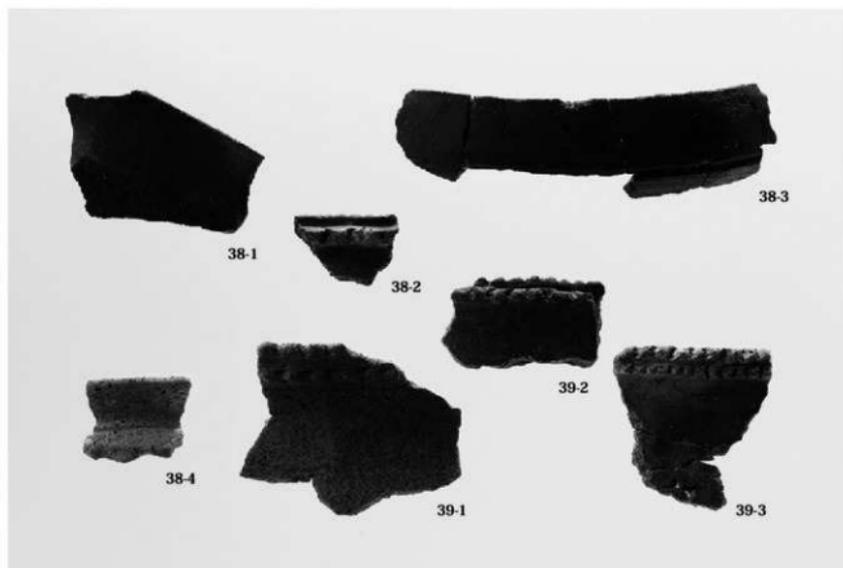
C区第5遺構面出土遺物(4)



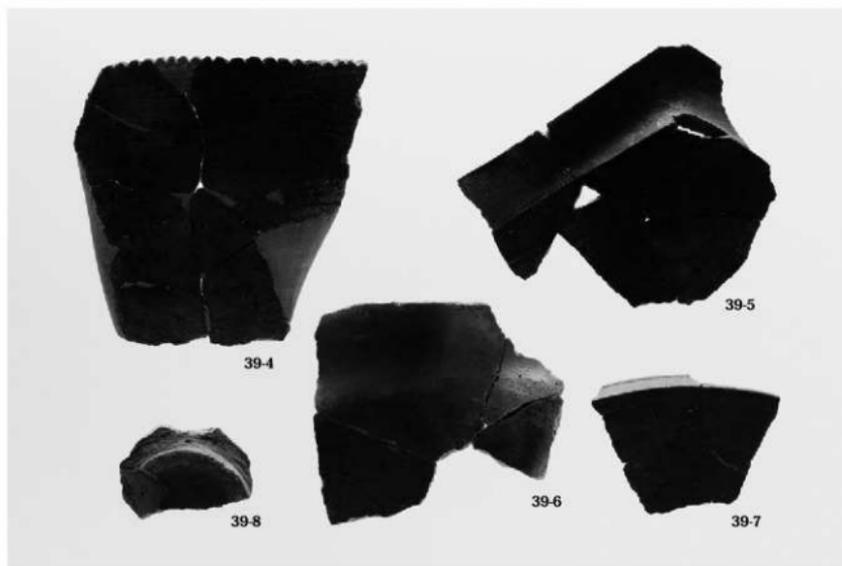
C区第5遺構面出土遺物(5)



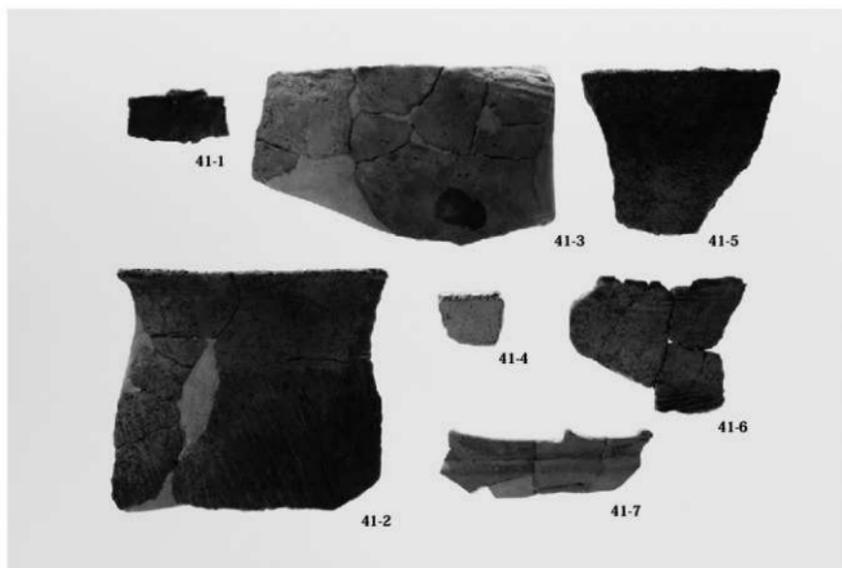
C区土器だまり 2 出土遺物 (1)



C区土器だまり 2, 3 出土遺物



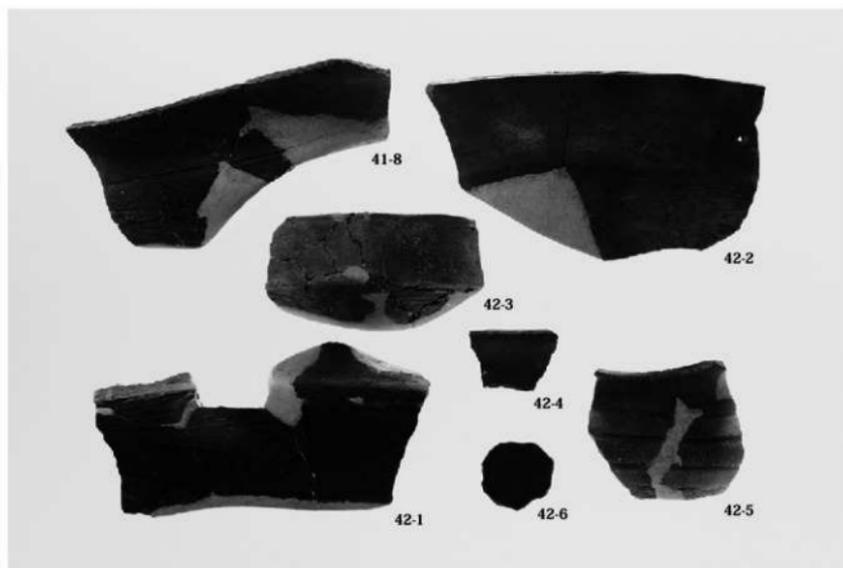
C区土器だまり3出土遺物(2)



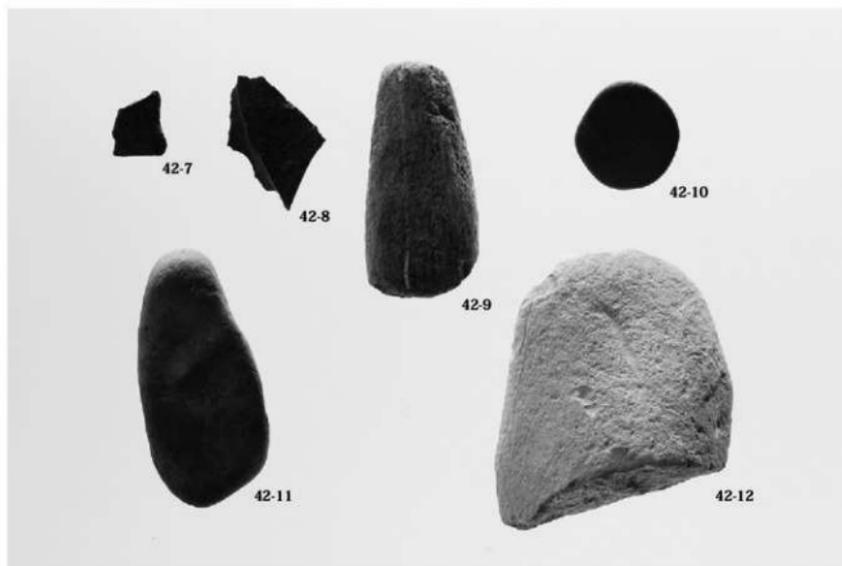
C区SD02出土遺物(1)



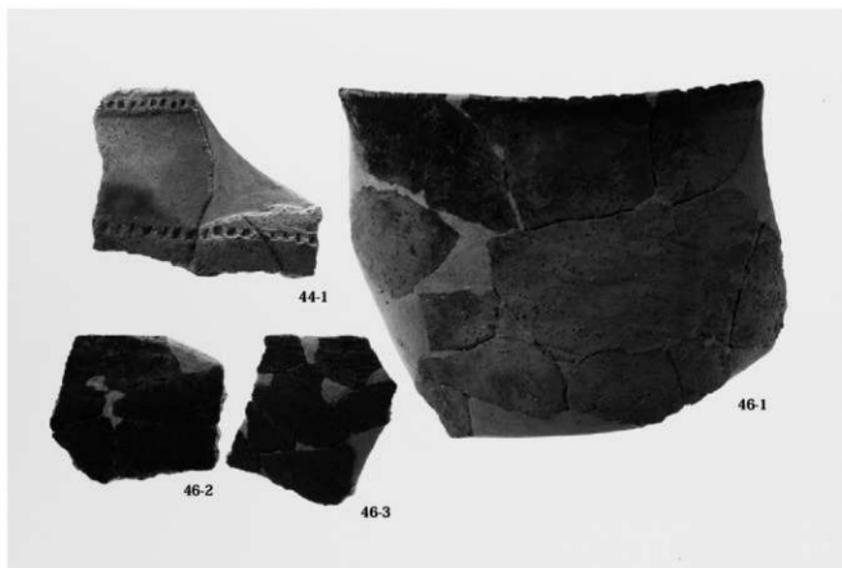
C区SD02出土遺物(2)



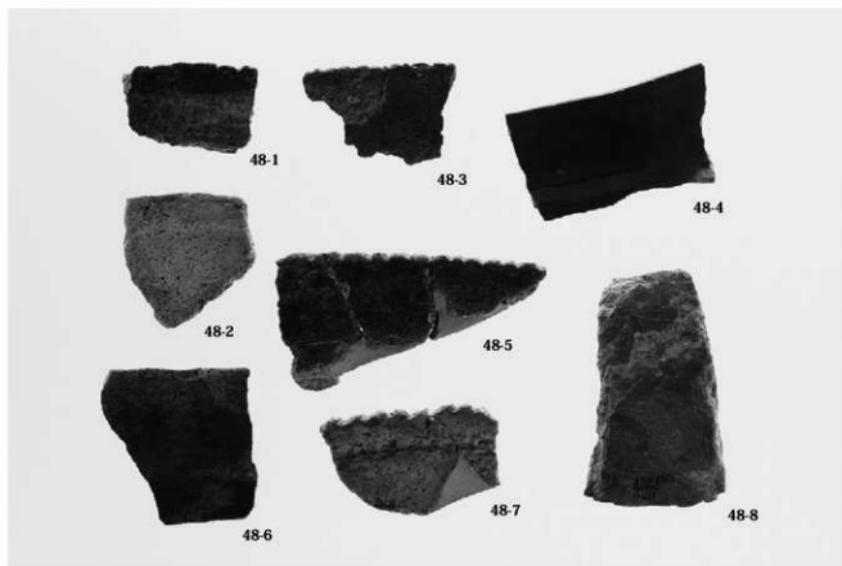
C区SD02出土遺物(3)



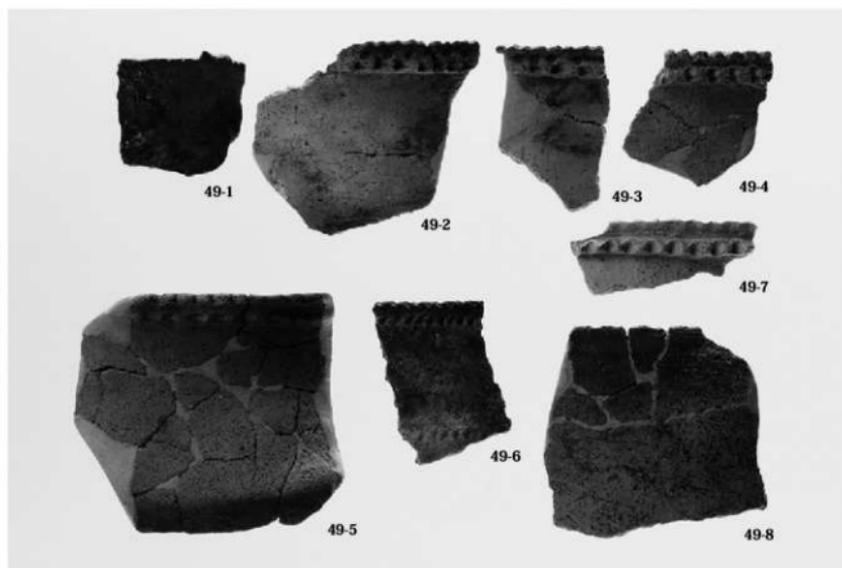
C区SD02出土遺物(4)



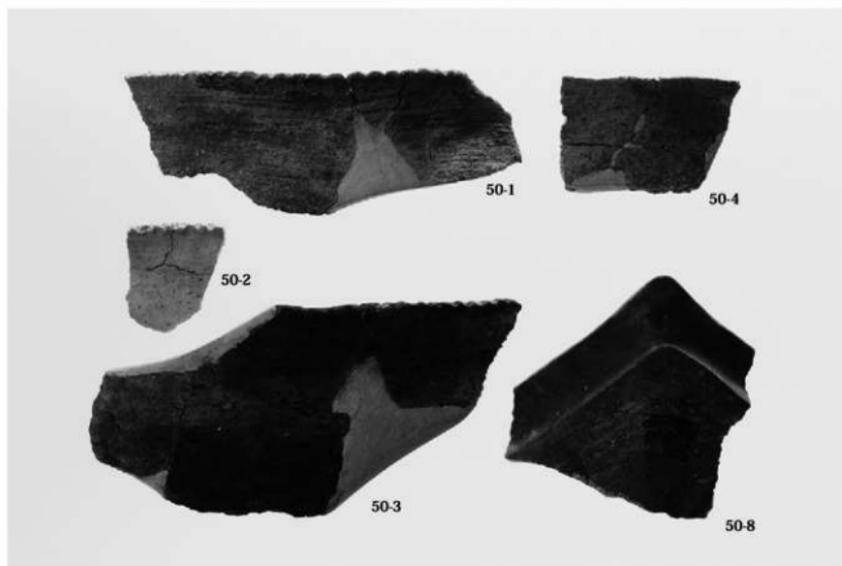
C区集石2、SD03出土遺物



C区第6遺構面、その他の遺構出土遺物



C区第6遺構面出土遺物(1)



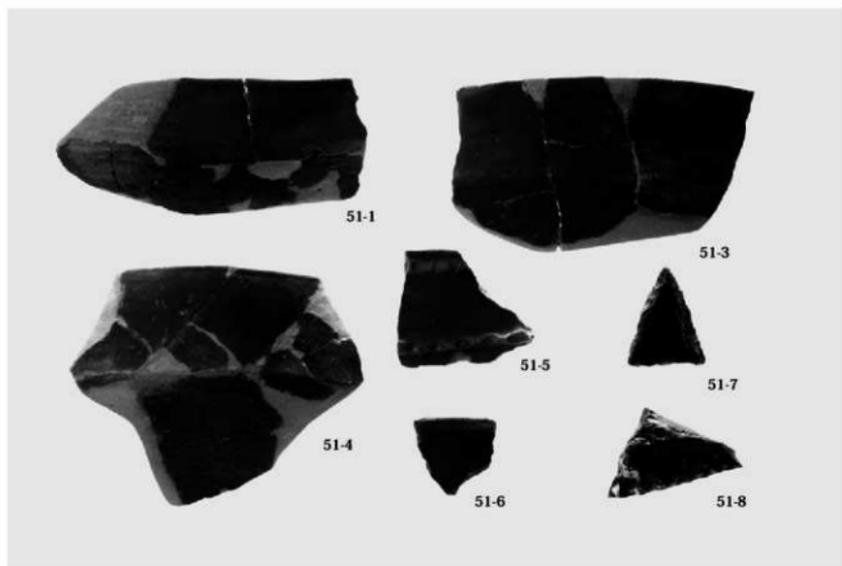
C区第6遺構面出土遺物(2)



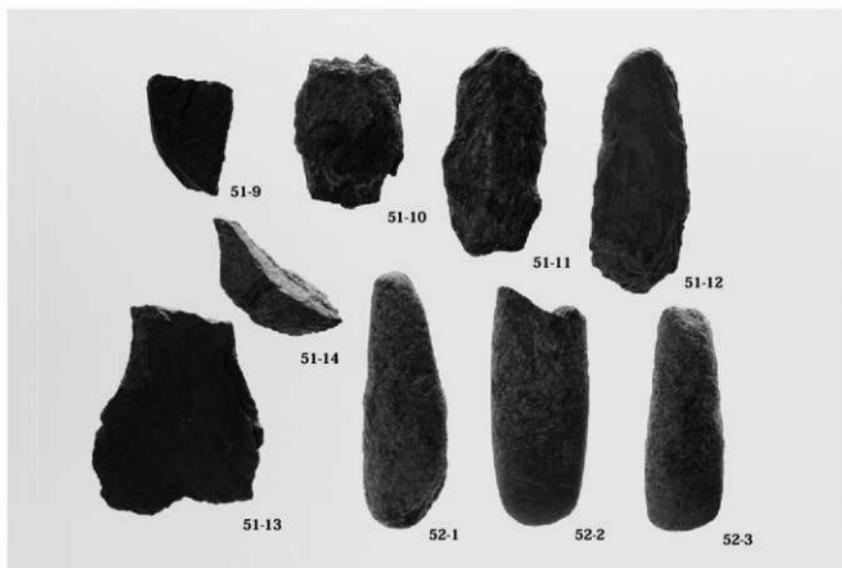
C区第6遺構面出土遺物(3)



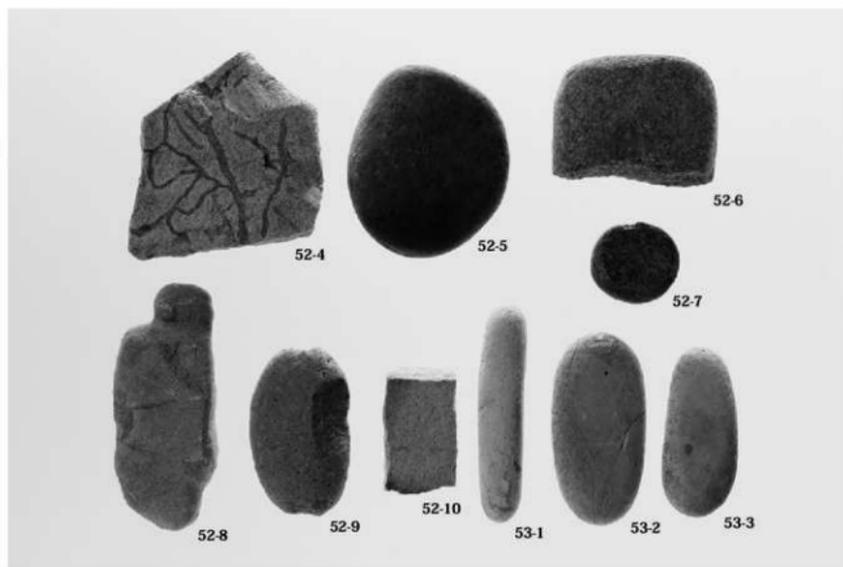
C区第6遺構而出土遺物(4)



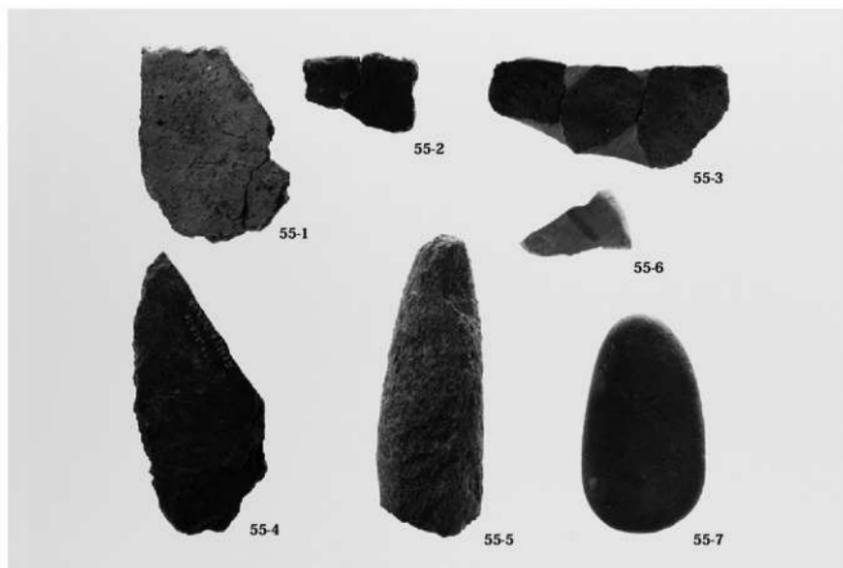
C区第6遺構面出土遺物(5)



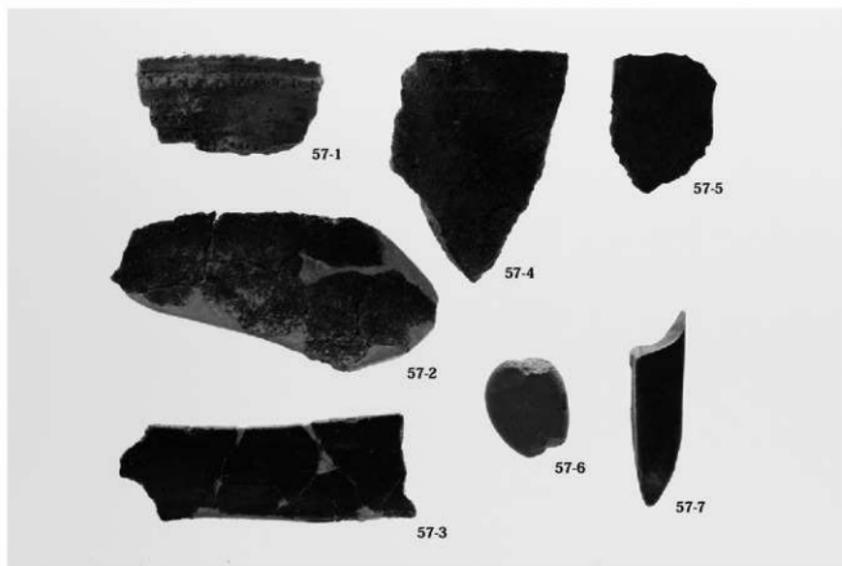
C区第6遺構面出土遺物(6)



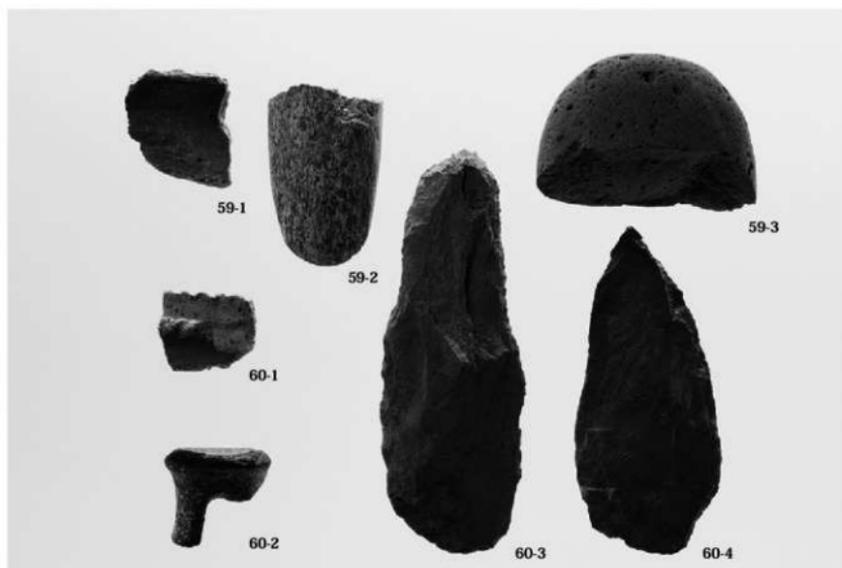
C区第6遺構面出土遺物(7)



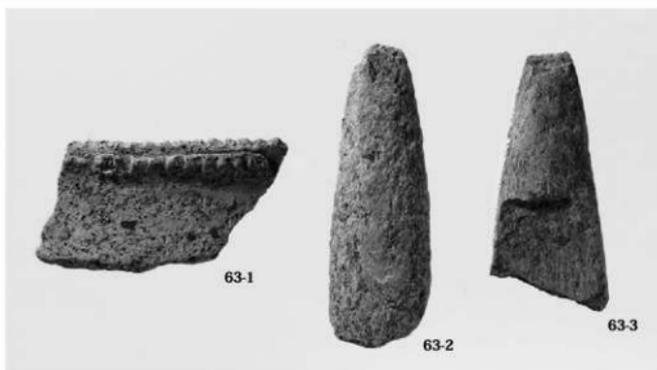
C区第7遺構面出土遺物



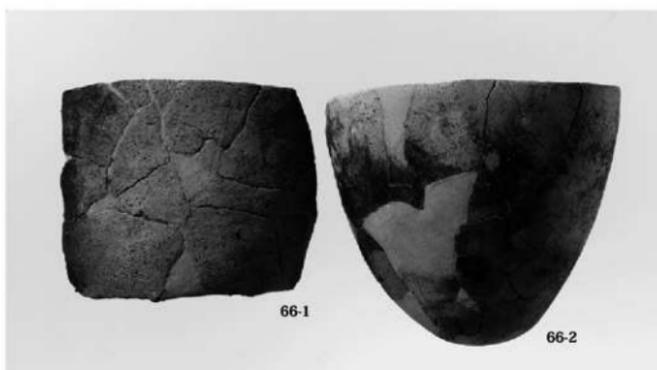
C区第8遺構面出土遺物



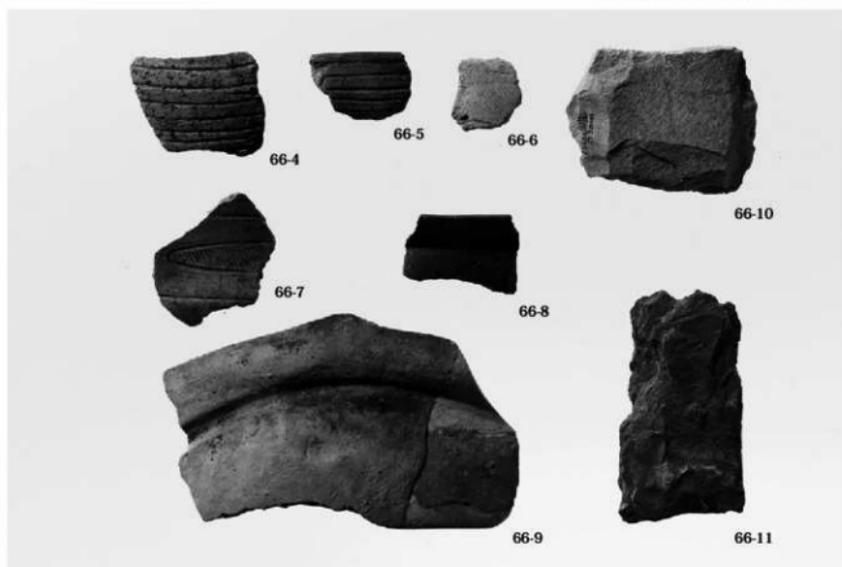
C区第9遺構面、その他の遺構出土遺物



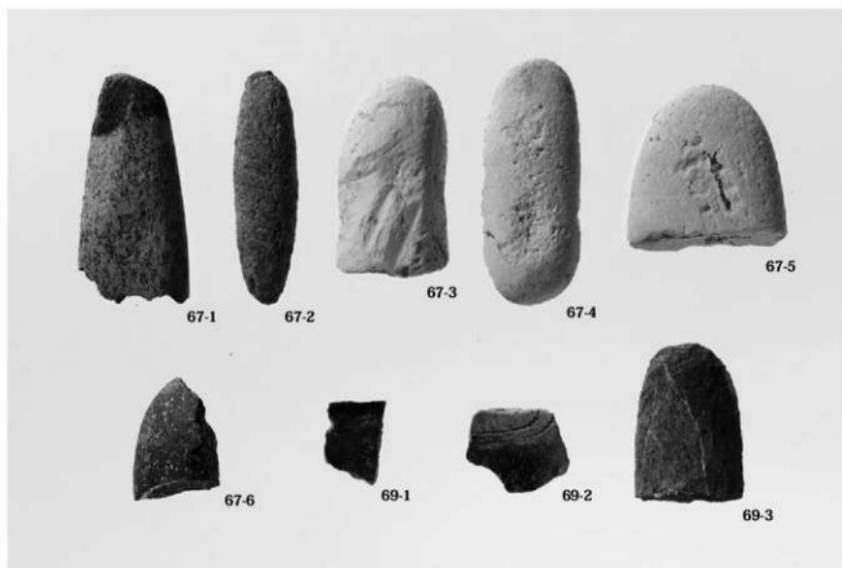
F区黑灰色粘質土、淡暗灰色粘質土出土遺物



F区第2遺構面出土遺物(1)



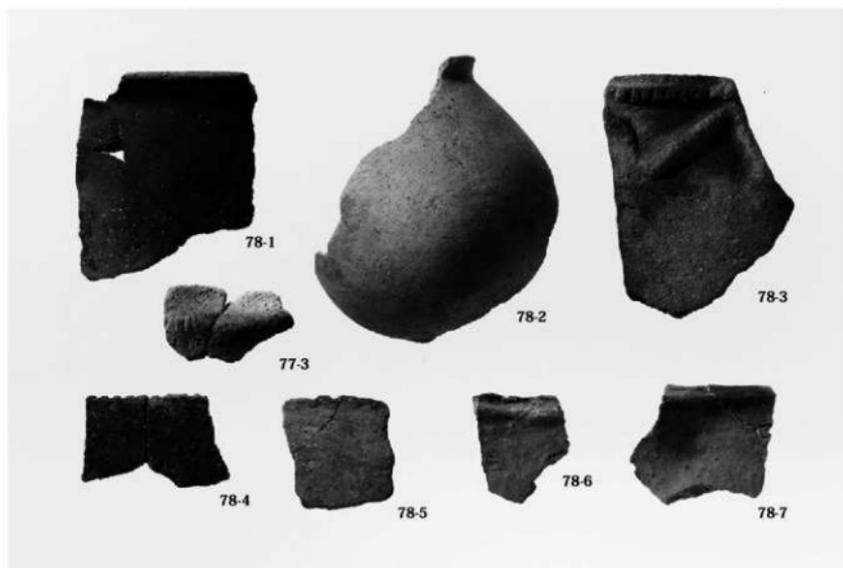
F区第2遺構面出土遺物(2)



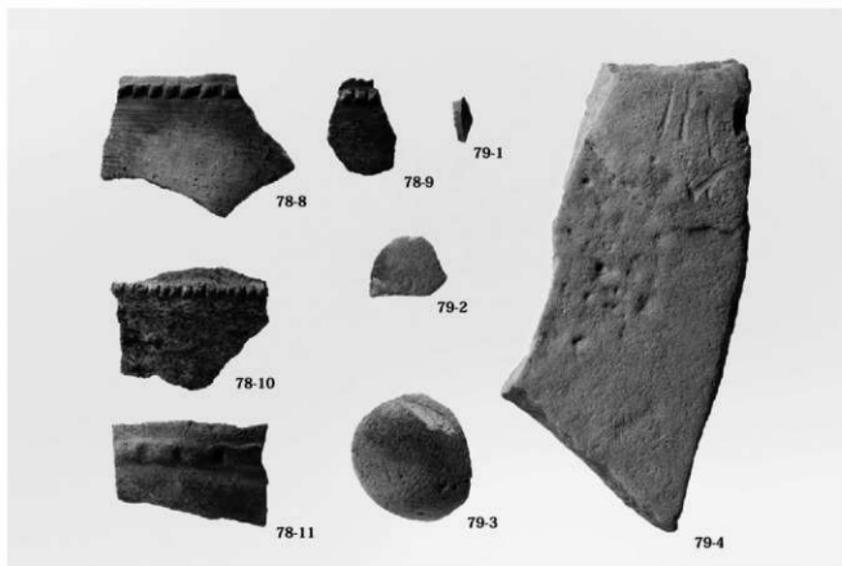
F区第2遺構面、第3遺構面出土遺物



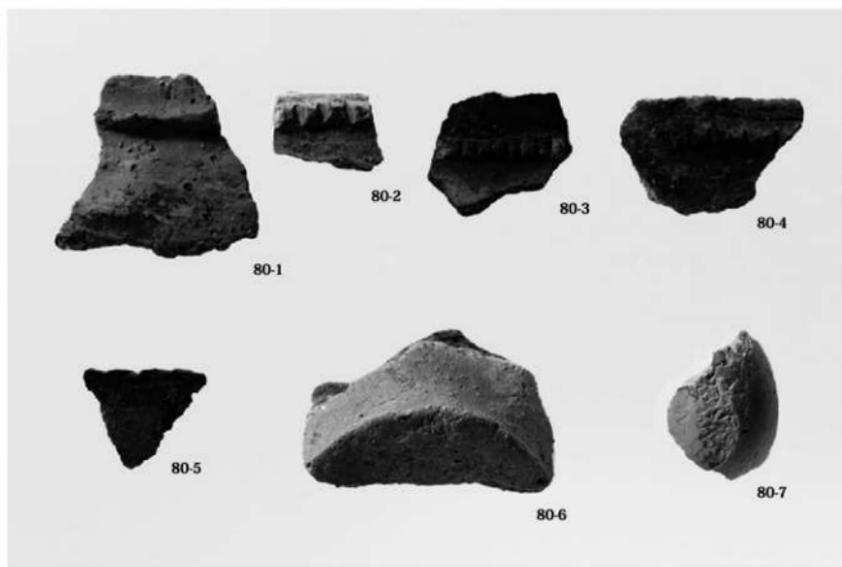
H区SD01 素材束



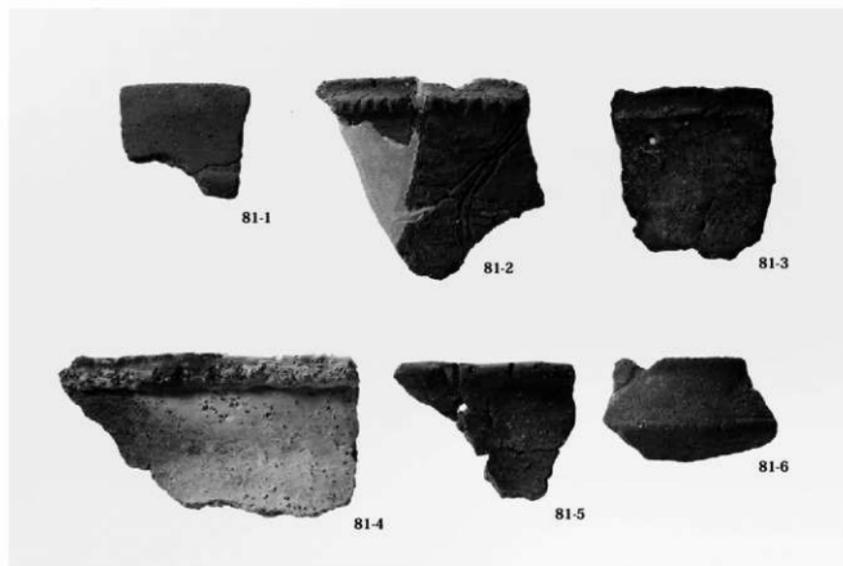
H区SD01、SR01 出土遺物(1)



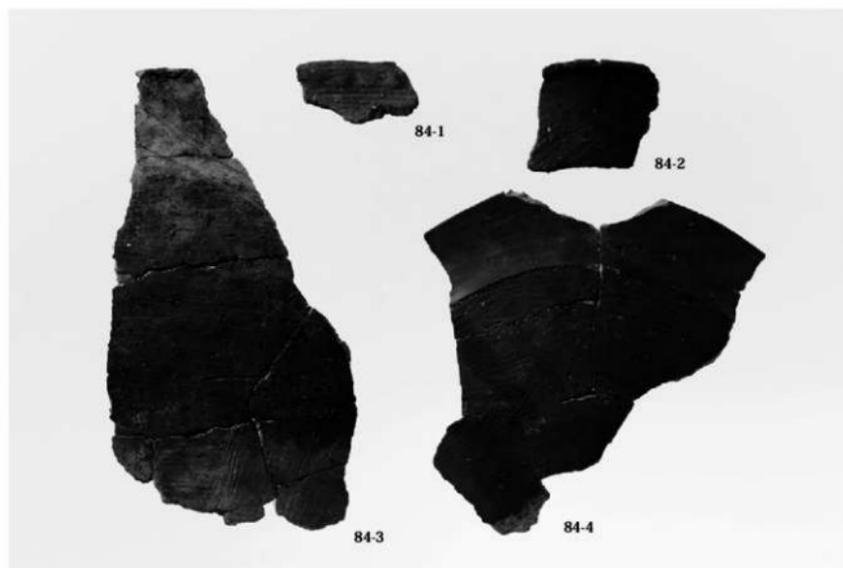
H区 SRO1 出土遺物 (2)



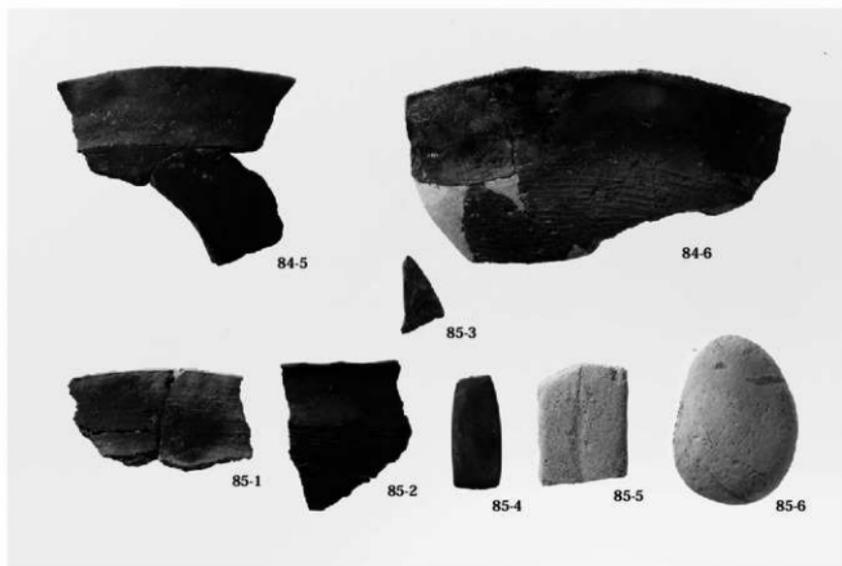
H区第1遺構面出土遺物



I区第1遺構面出土遺物



H区炭だまり 17 出土遺物 (I)

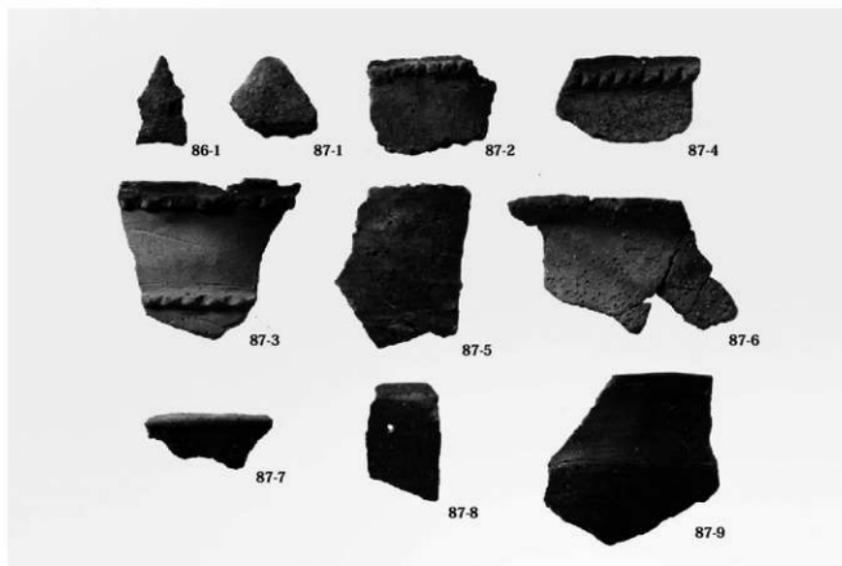


H区炭だまり 17 出土遺物 (2)



H区炭だまり 17 出土遺物 (3)

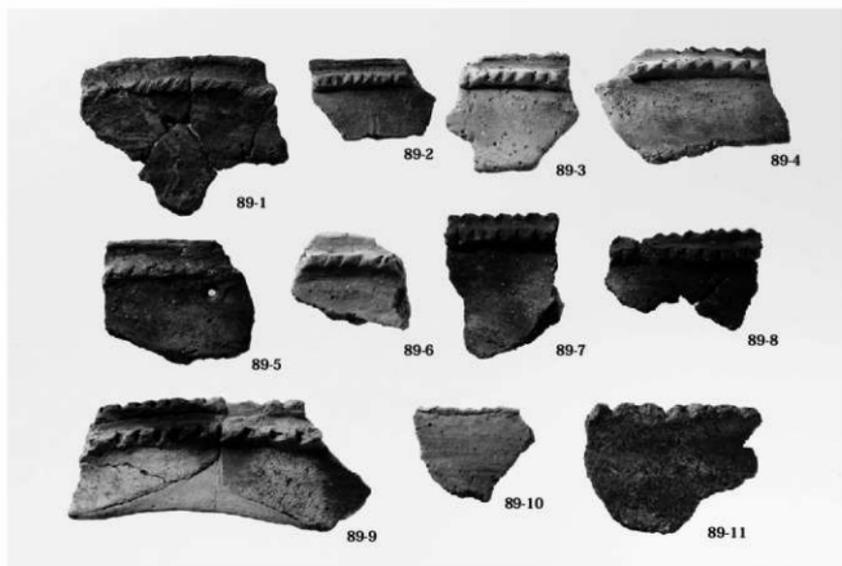
图版 64 古屋敷遺跡出土遺物



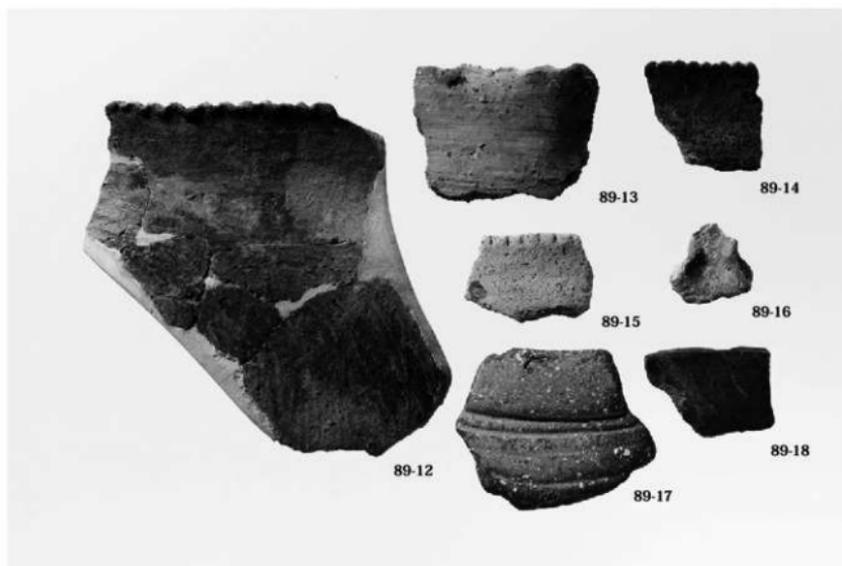
H区地床跡 02、暗青灰色粘質土出土遺物(1)



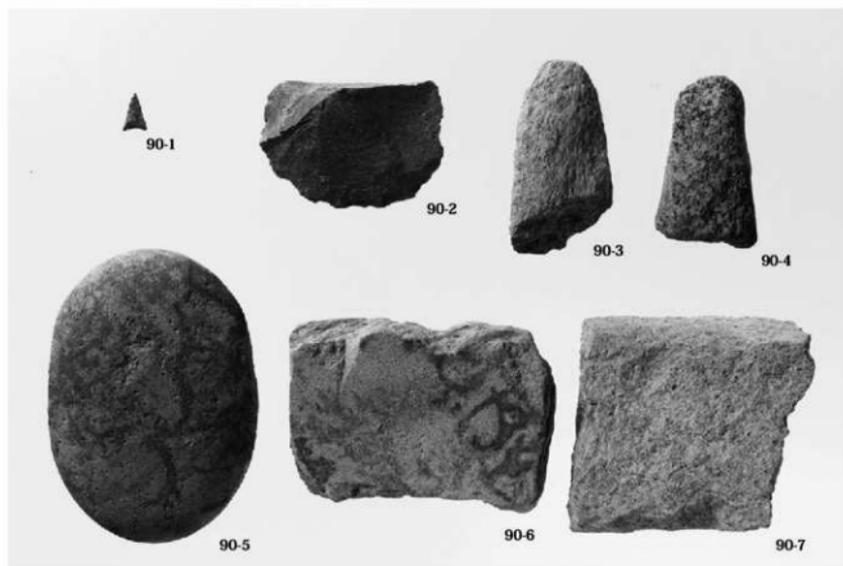
H区暗青灰色粘質土出土遺物(2)



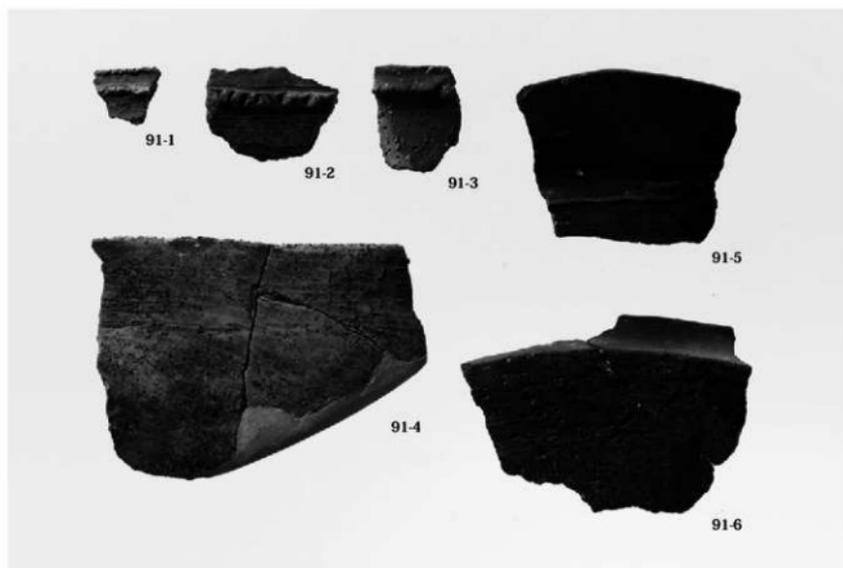
1区暗青灰色粘質土出土遺物 (1)



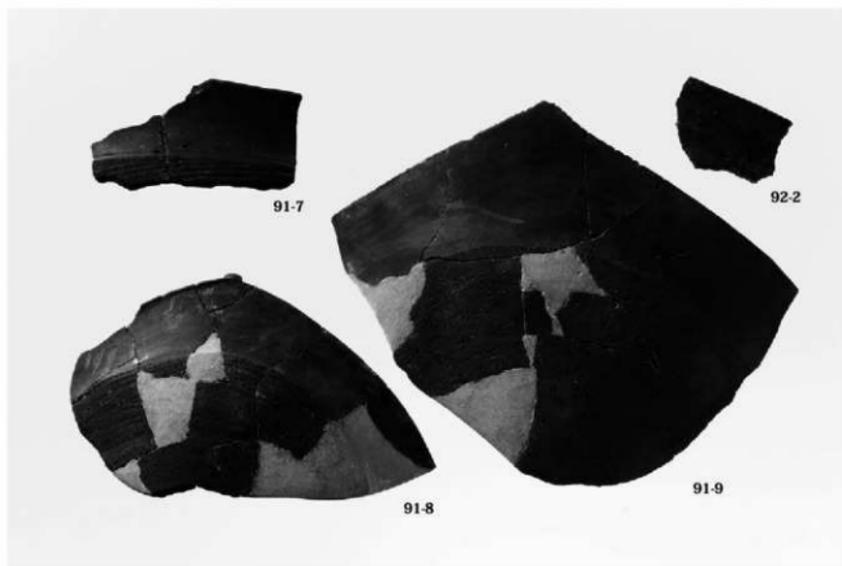
1区暗青灰色粘質土出土遺物 (2)



I区暗青灰色粘質土出土遺物(3)



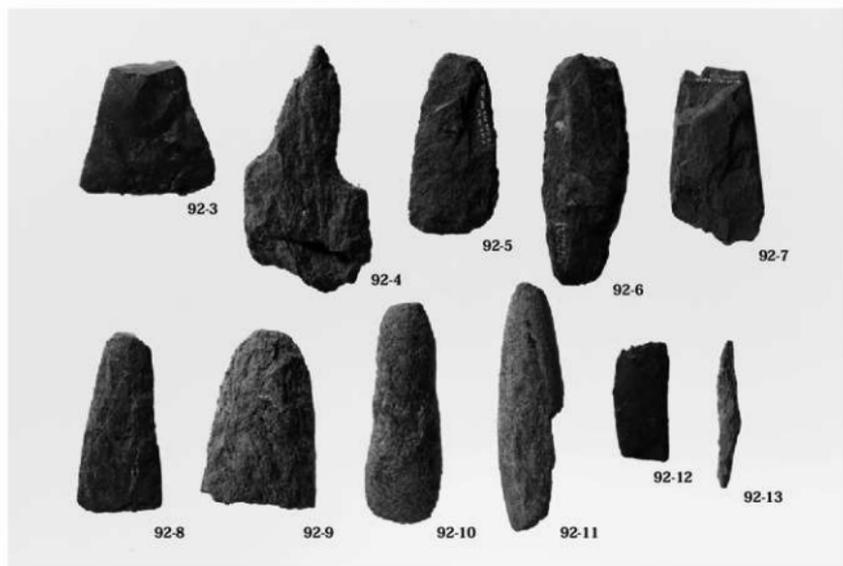
H区黒灰色粘質土出土遺物(1)



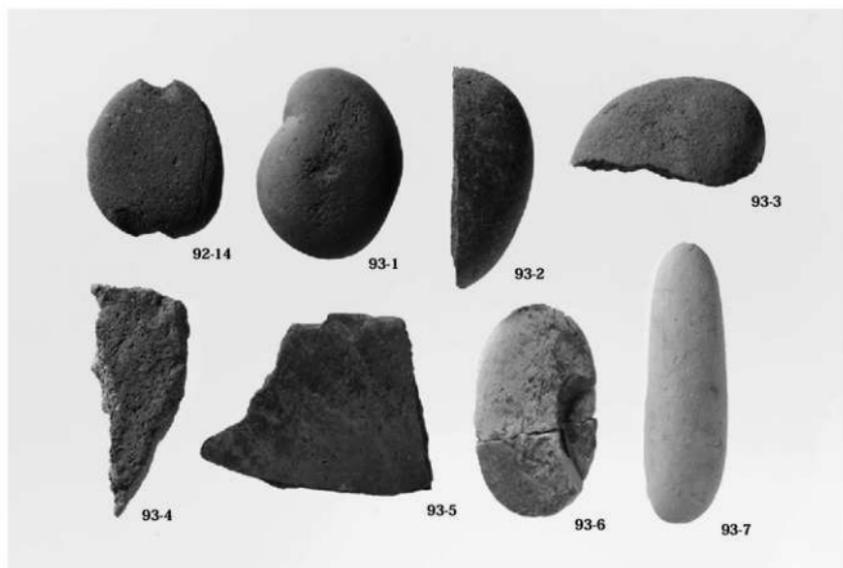
H区黒灰色粘質土出土遺物(2)



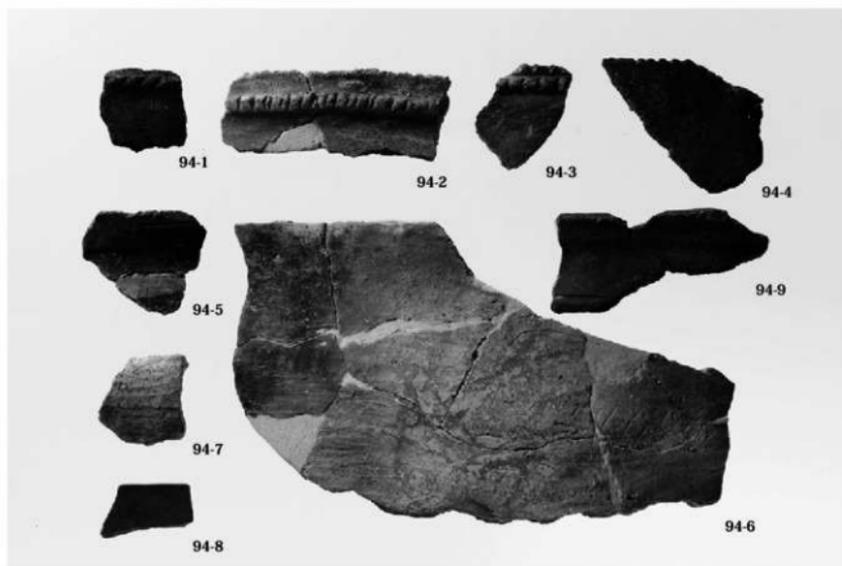
H区黒灰色粘質土出土遺物(3)



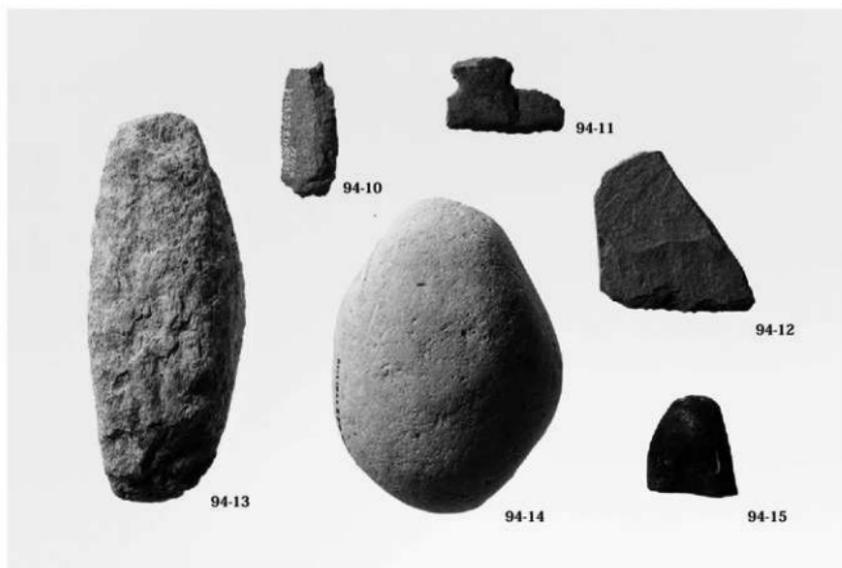
H区黑灰色粘質土出土遺物(4)



H区黑灰色粘質土出土遺物(5)



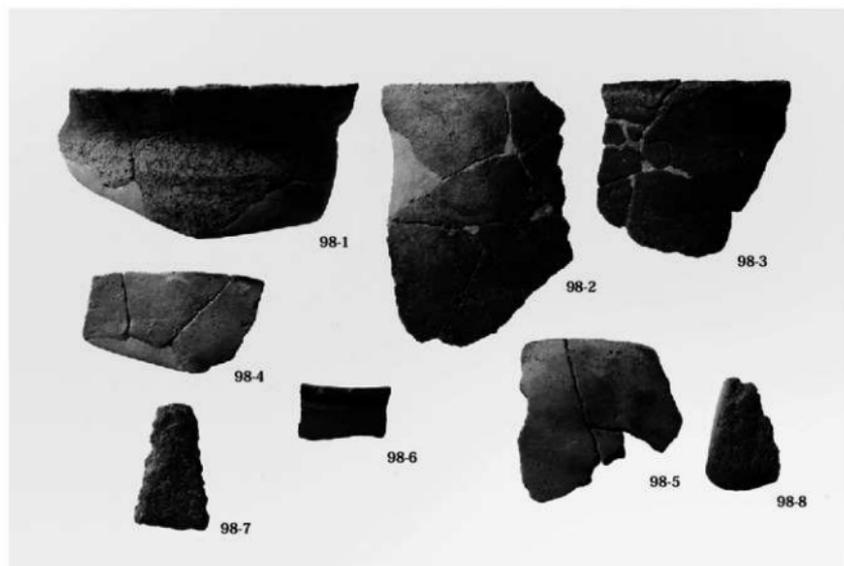
I区黒灰色粘質土出土遺物(1)



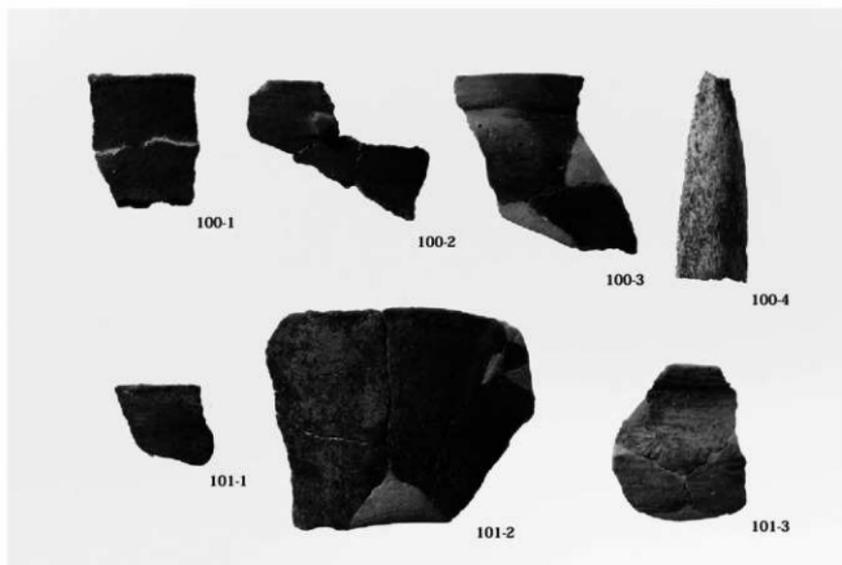
I区黒灰色粘質土出土遺物(2)



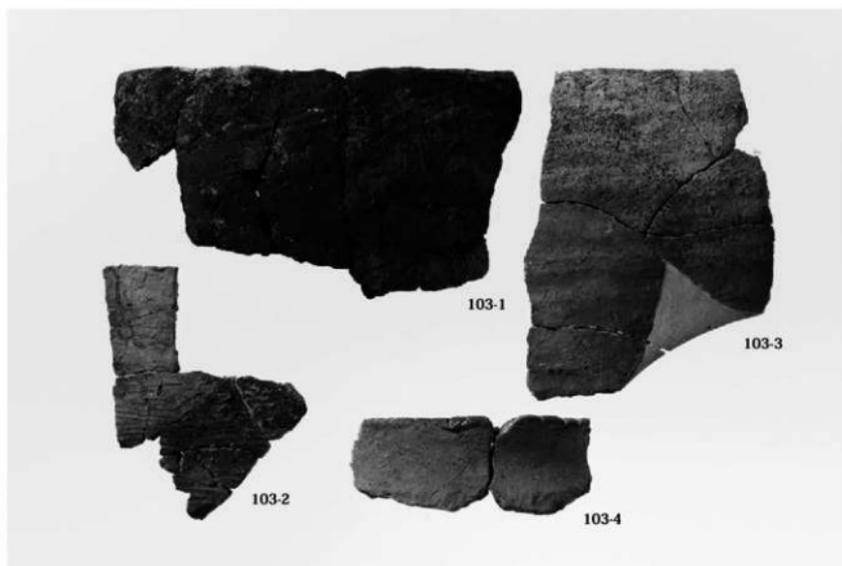
I区黒灰色粘質土出土遺物 (3)



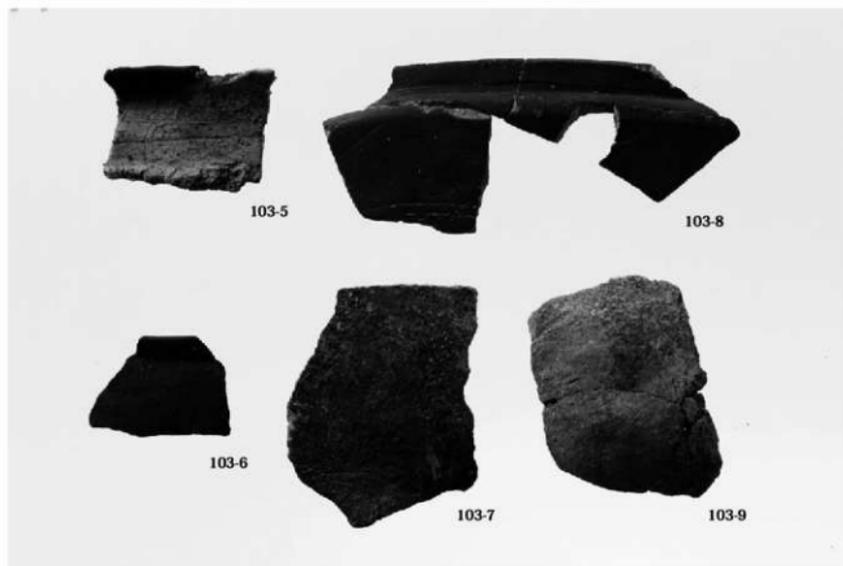
I区炭だまり 02、03 出土遺物



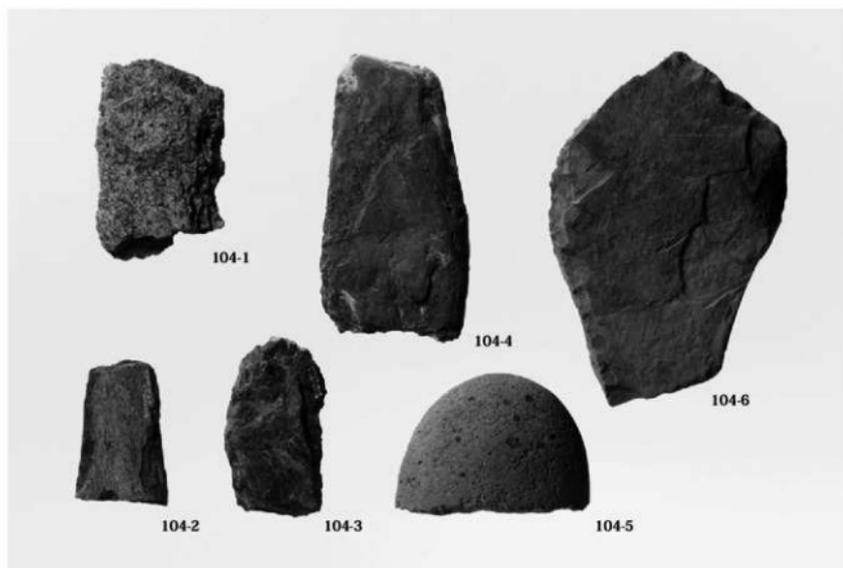
I区炭だまり 27、28 出土遺物



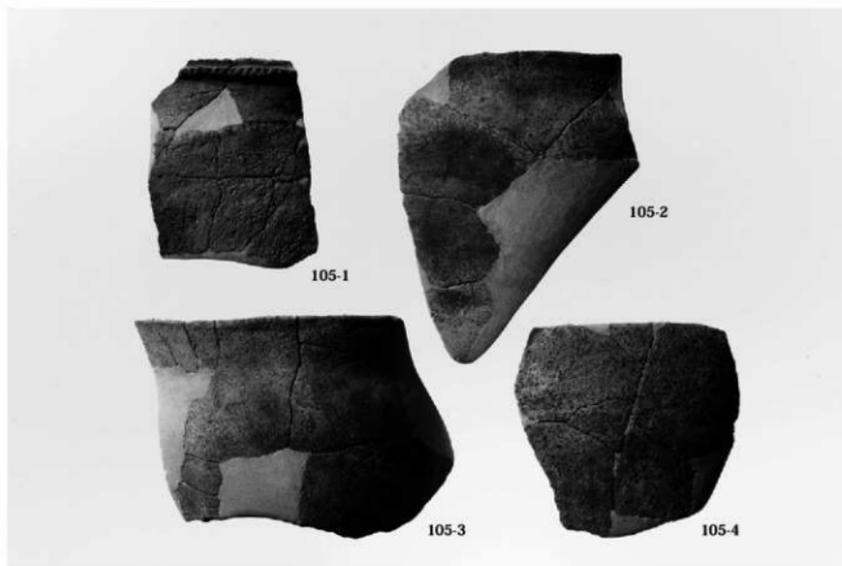
H区第3遺構面出土遺物 (I)



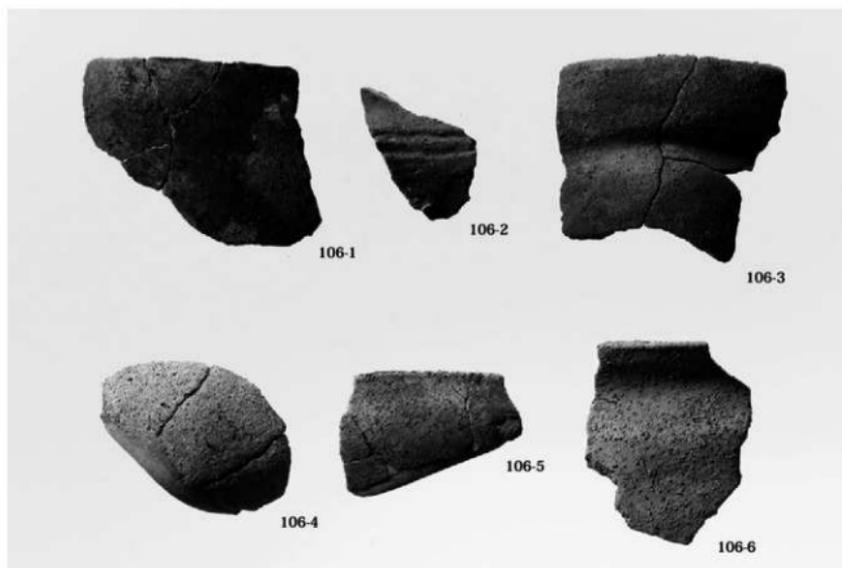
H区第3遺構面出土遺物(2)



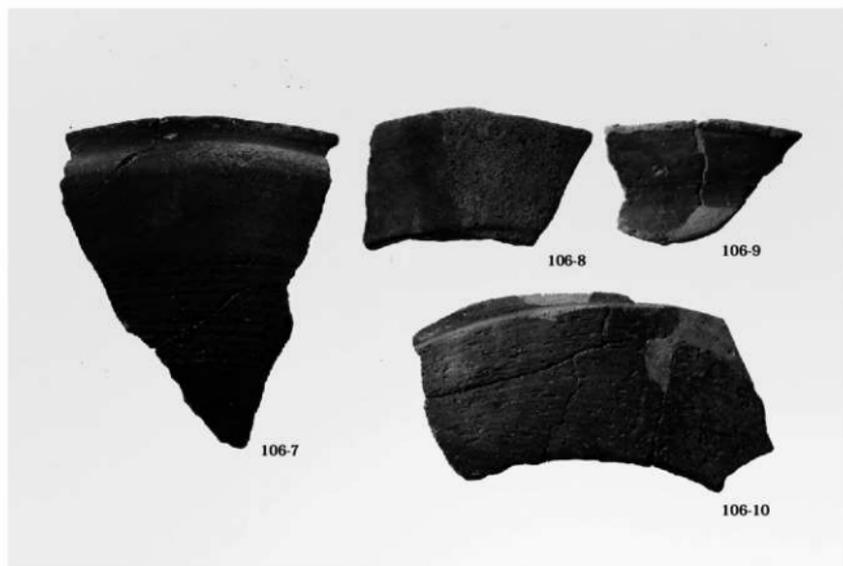
H区第3遺構面出土遺物(3)



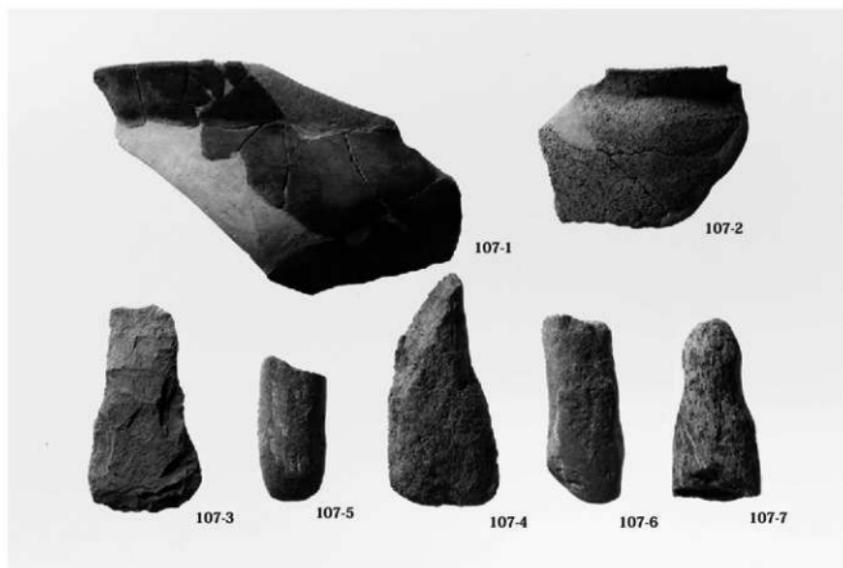
I区第3遺構面出土遺物(1)



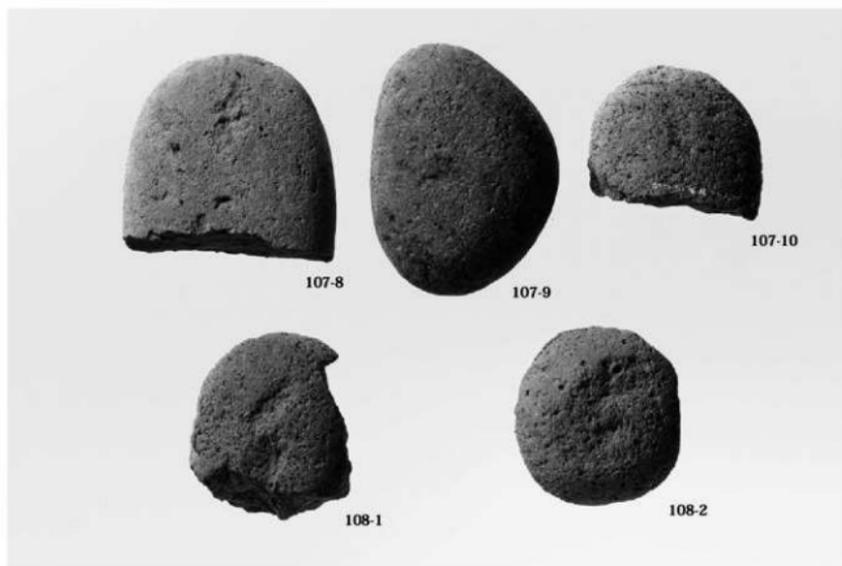
I区第3遺構面出土遺物(2)



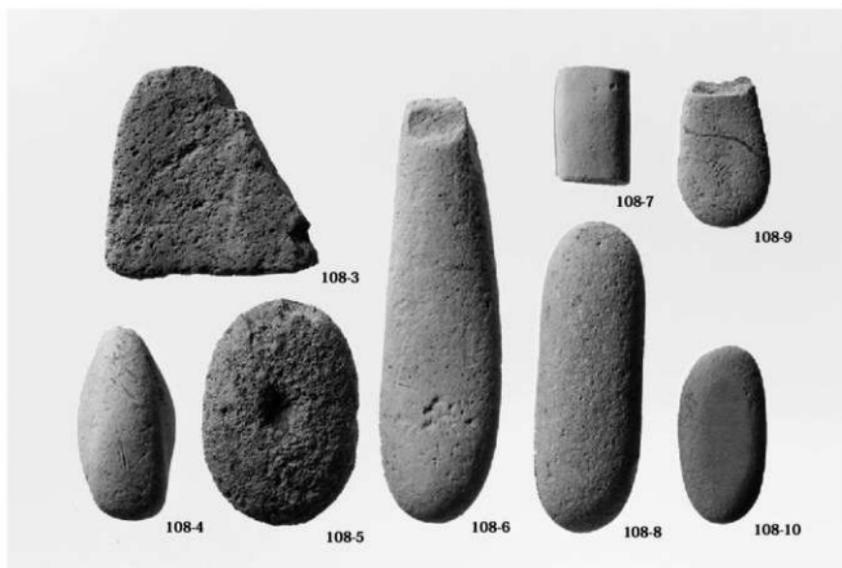
I区第3遺構面出土遺物(3)



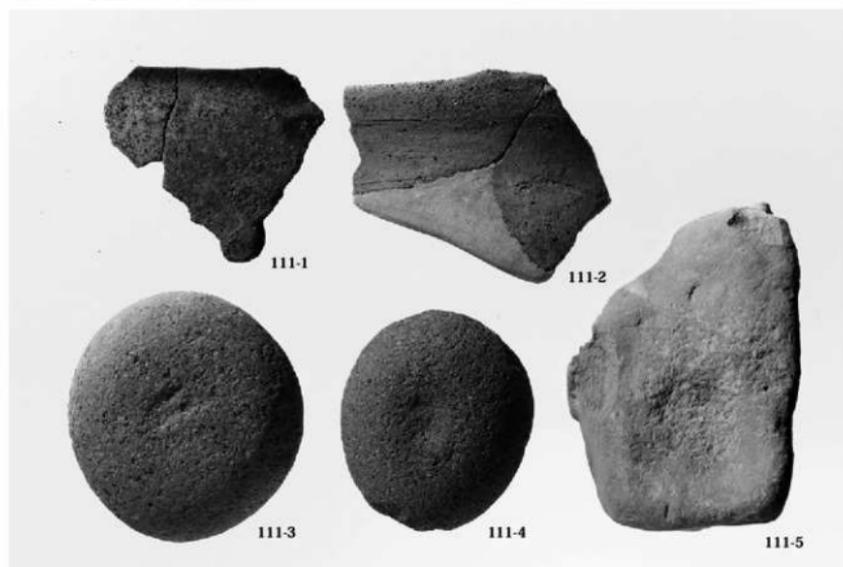
I区第3遺構面出土遺物(4)



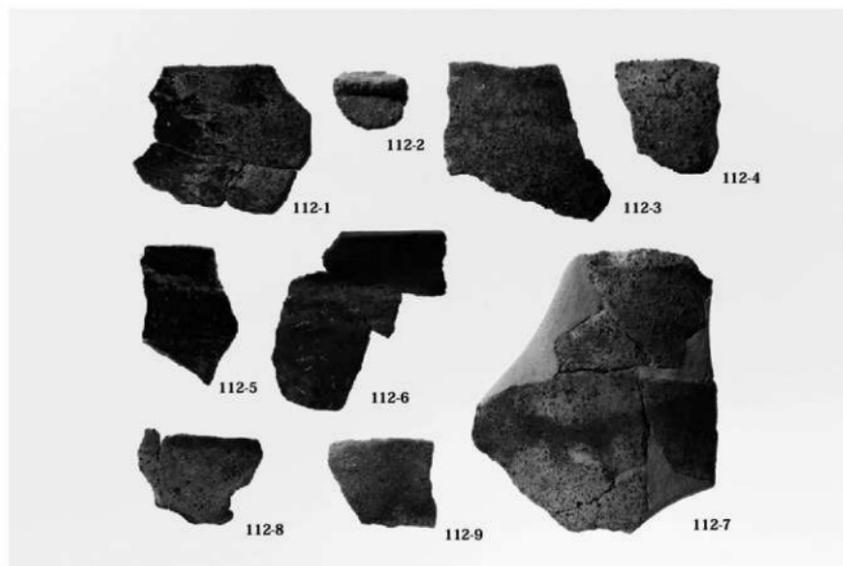
I区第3遺構面出土遺物(5)



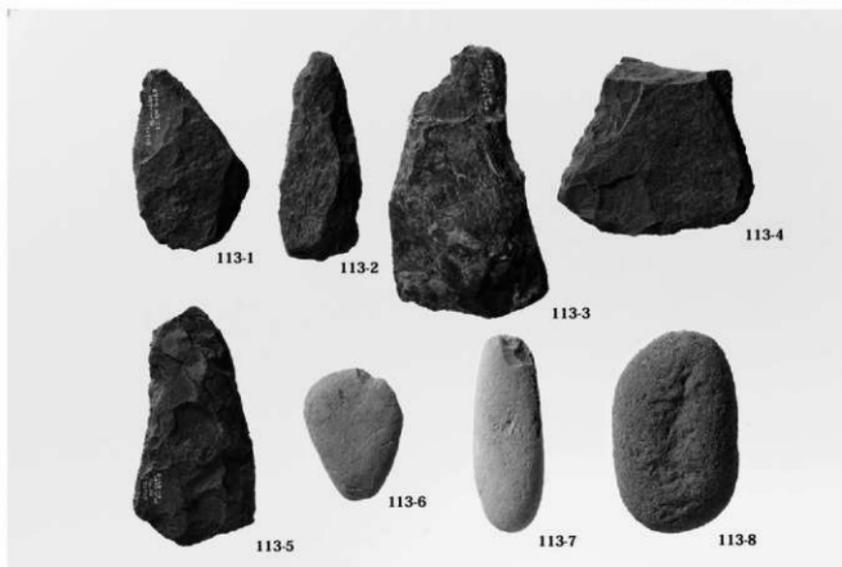
I区第3遺構面出土遺物(6)



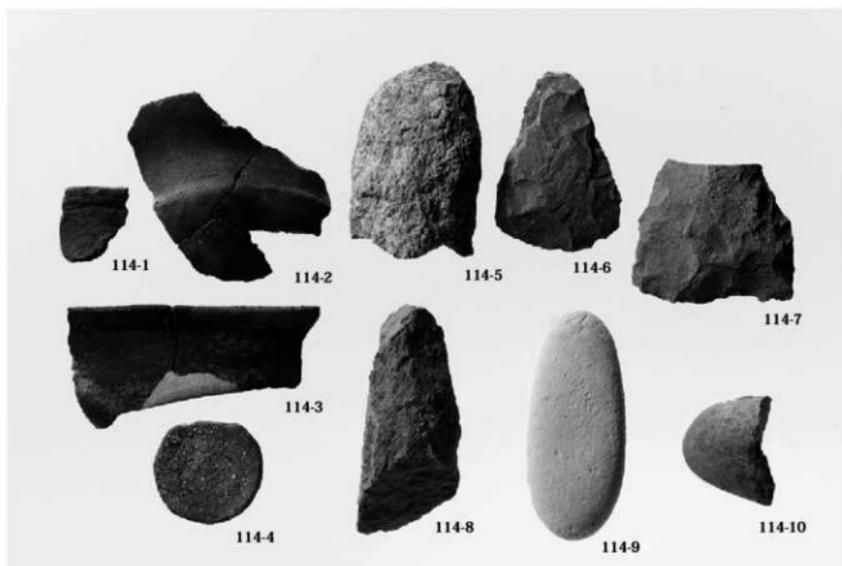
I区炭だまり (SK) 06、07 出土遺物



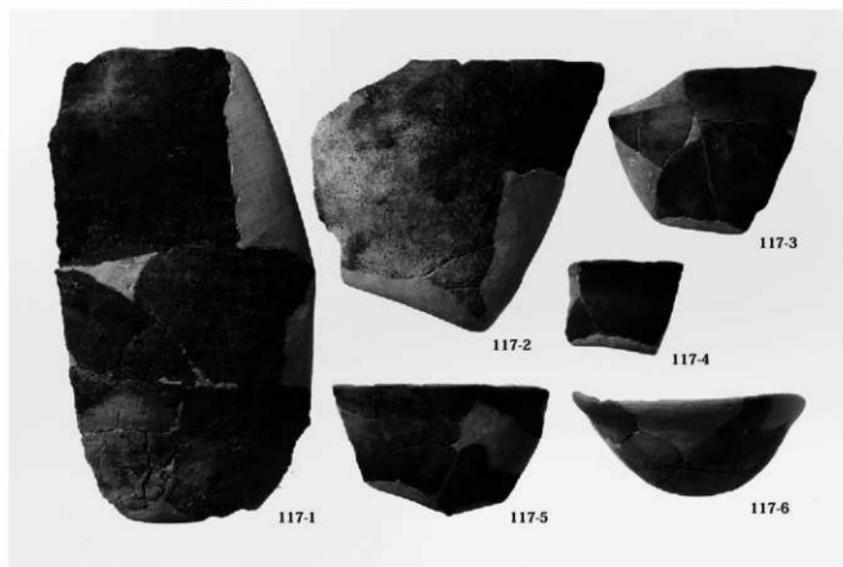
H区第4遺構面出土遺物 (1)



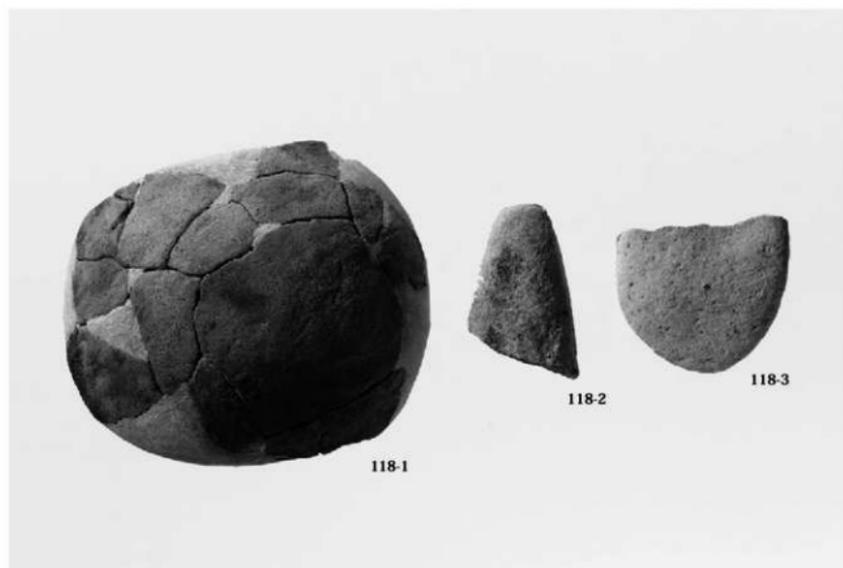
H区第4遺構面出土遺物(2)



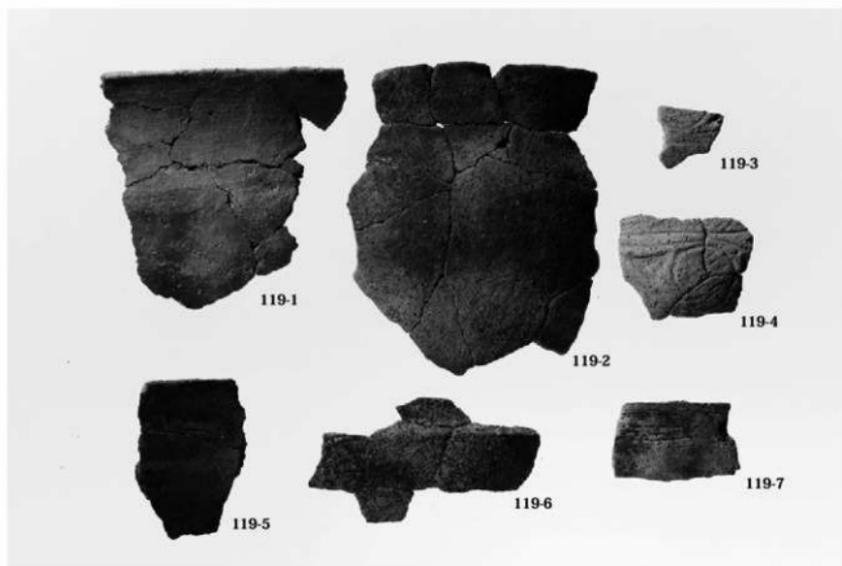
I区第4遺構面出土遺物



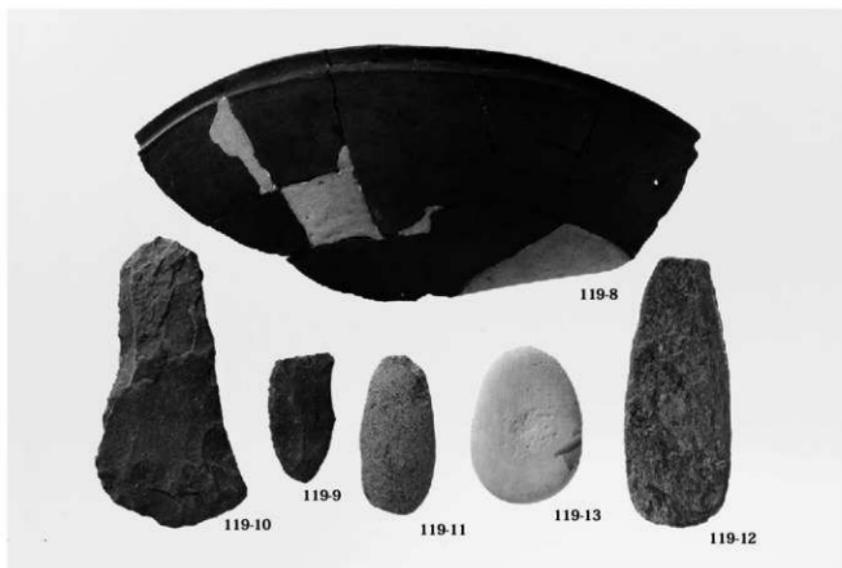
I区炭だまり (SK)18 出土遺物 (1)



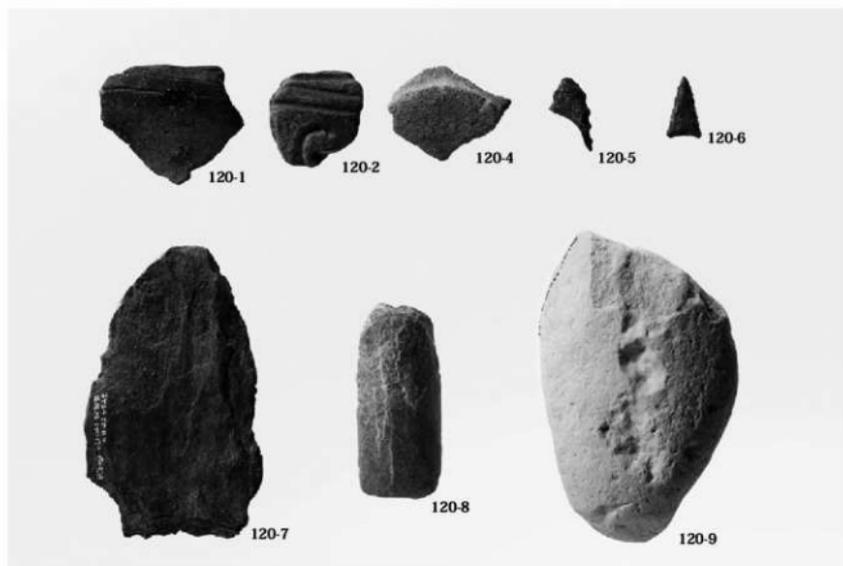
I区炭だまり (SK)18 出土遺物 (2)



H区第5遺構面出土遺物(1)



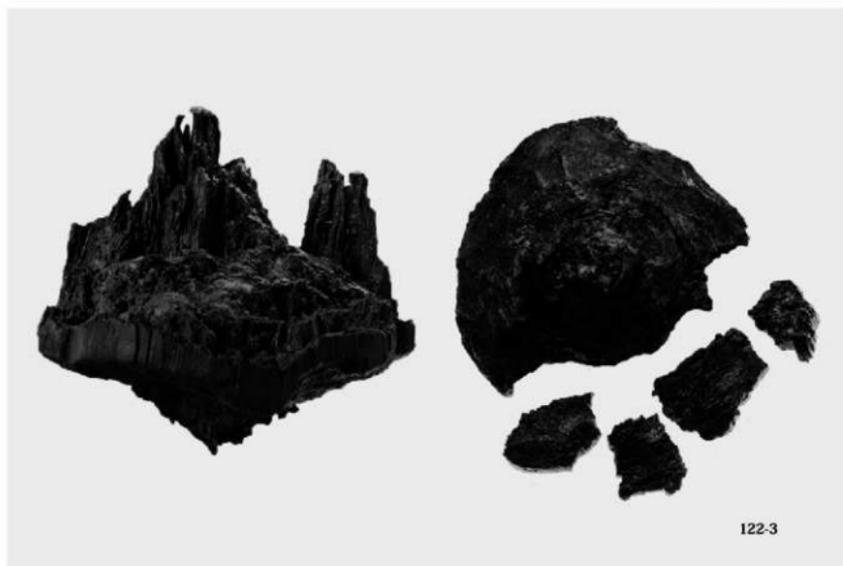
H区第5遺構面出土遺物(2)



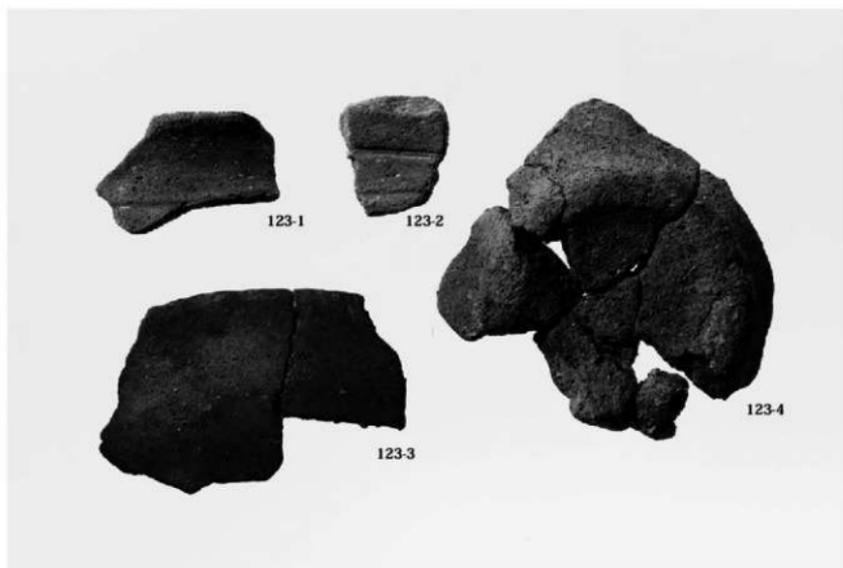
I区第5遺構面出土遺物(1)



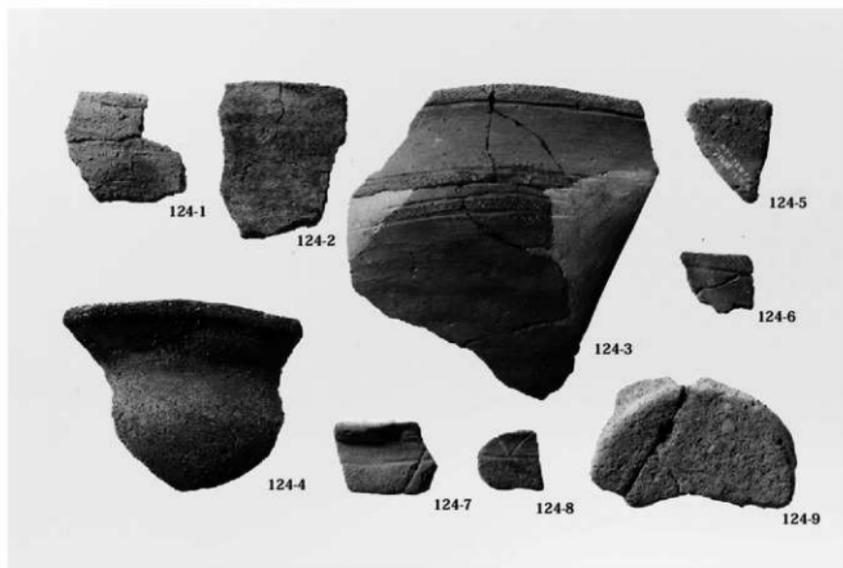
I区第5遺構面出土遺物(2)



H区第6遺構出土柱根



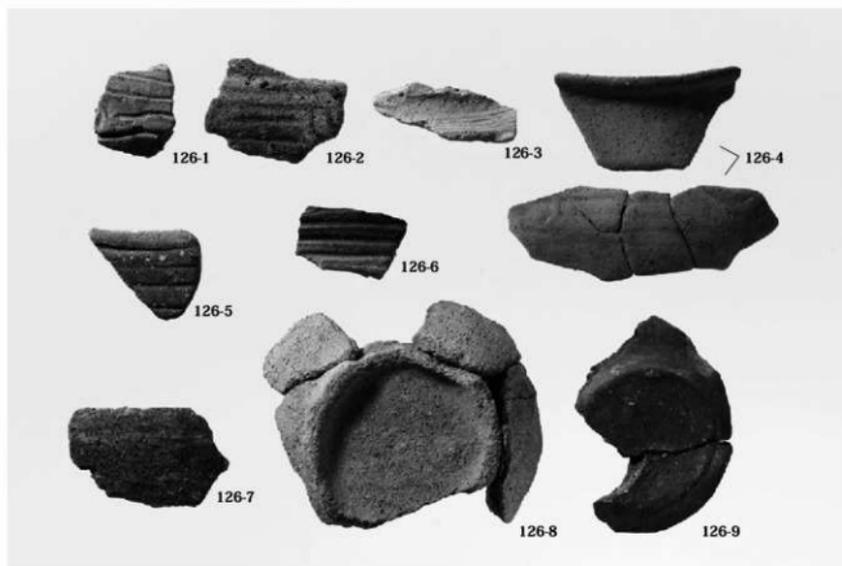
H区第6遺構面出土遺物



I区第6遺構面出土遺物(1)



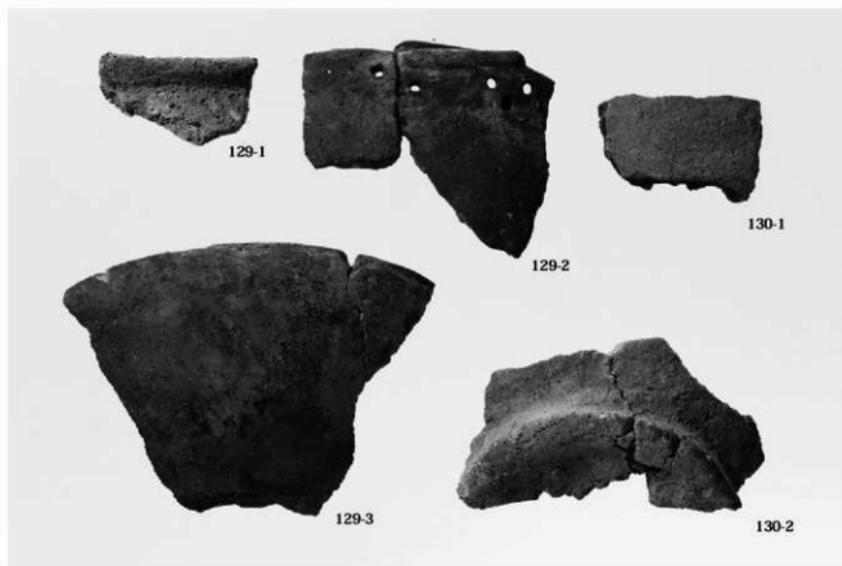
I区第6遺構面出土遺物(2)



H区第7遺構面出土遺物



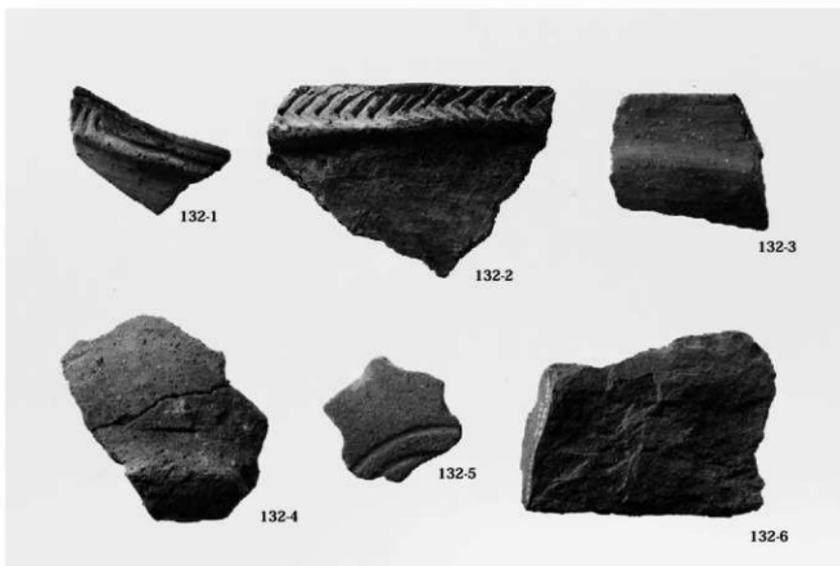
I区第7遺構面出土遺物



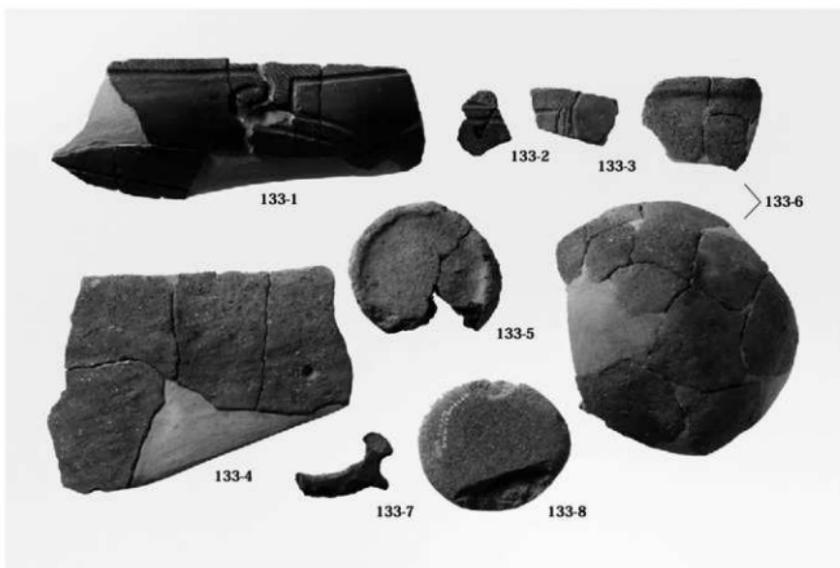
H区黒褐色粘質土4、黒褐色レキ層出土遺物



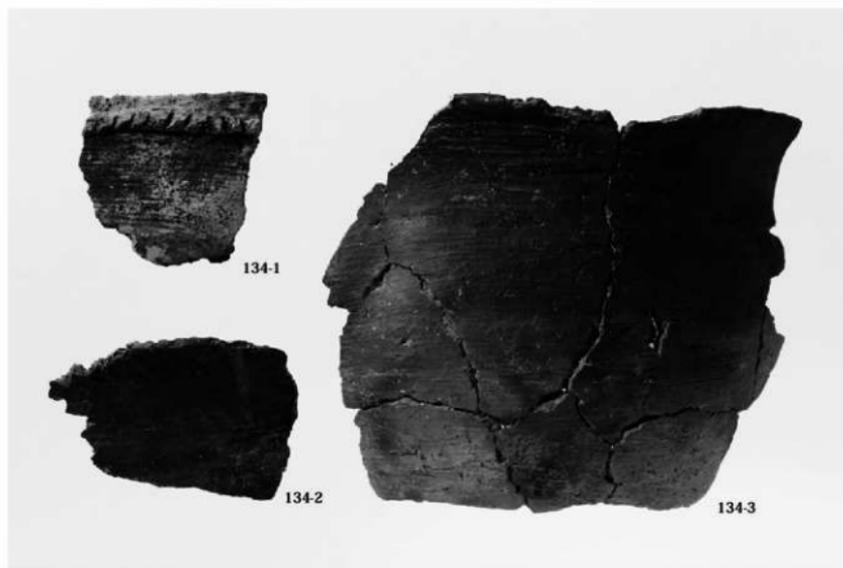
I区黒褐色レキ層出土遺物



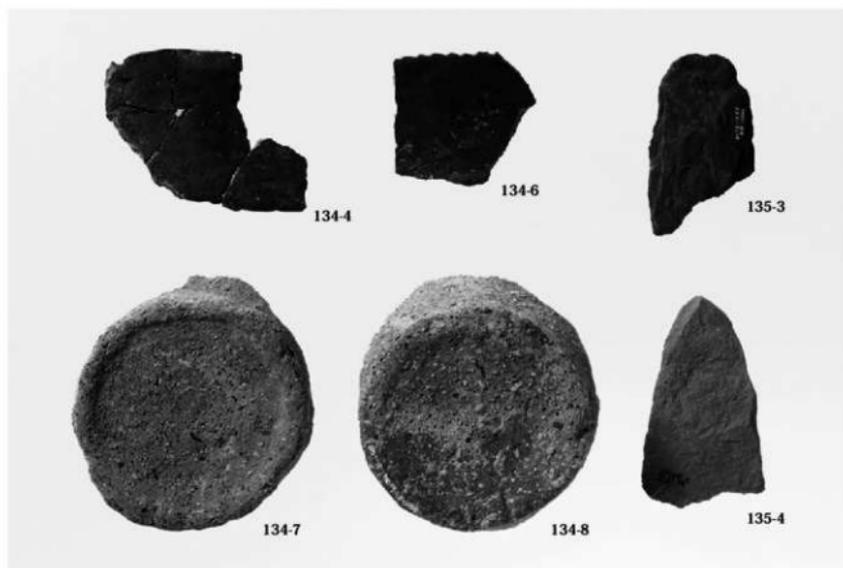
H区白灰色粘質土出土遺物



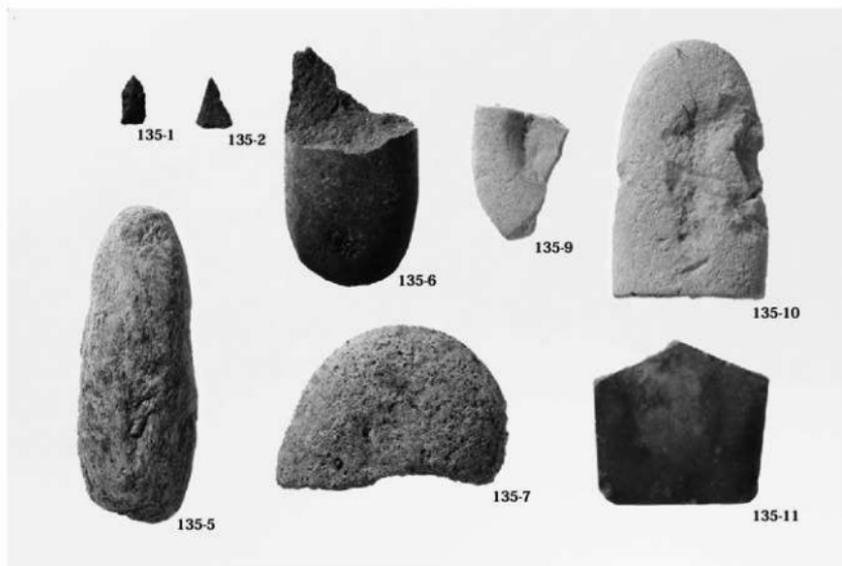
H区濃褐色粘質土出土遺物



H区その他の出土遺物 (1)



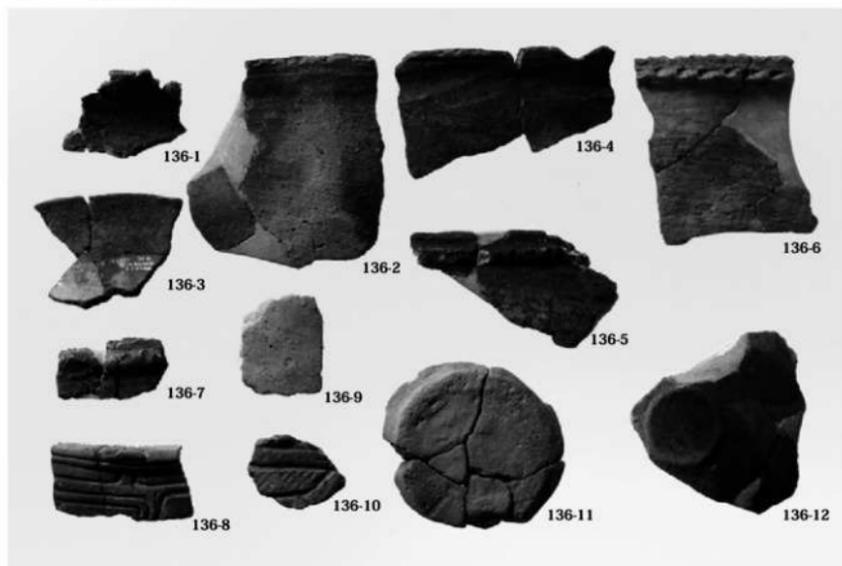
H区その他の出土遺物 (2)



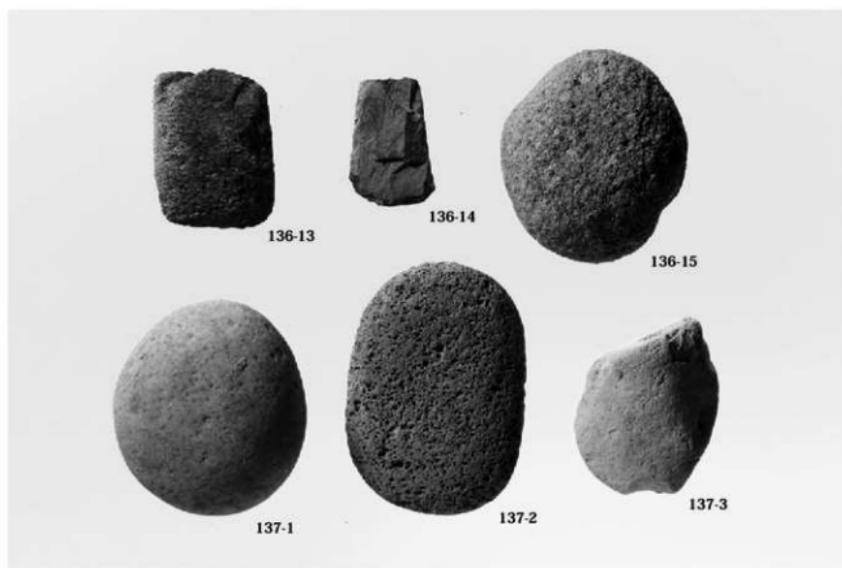
H区その他の出土遺物 (3)



H区その他の出土遺物 (4)



I区その他の出土遺物 (1)



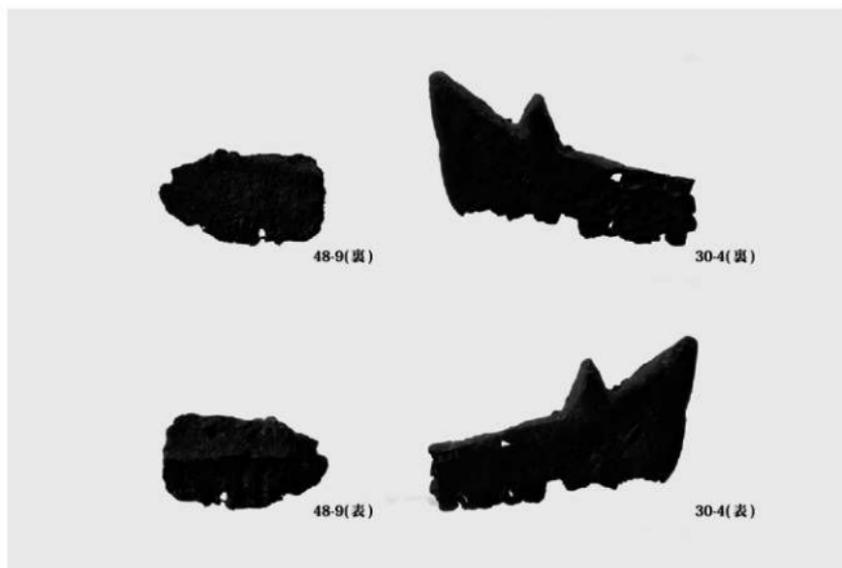
I区その他の出土遺物 (2)



H区その他の出土遺物 (5)



H区SD01 東杭列出土遺物



C区出土物

報告書抄録

ふりがな	ふるやしきいせき (C・F・H・I・く)							
書名	古屋敷遺跡 (C・F・H・I 区)							
シリーズ名	一般国道 9 号 (静岡仁摩道路) 改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	3							
編著者名	増田浩太・渡辺正巳・株式会社加速器分析研究所・奥山誠義・上山晶子 一般財団法人文化財科学研究センター・片岡太郎・村田泰輔・星野安治							
編集機関	島根県教育庁埋蔵文化財調査センター http://www.pref.shimane.lg.jp/maizobunkazai/							
所在地	〒690-0131 島根県松江市打出町33番地 E-mail:maibun@pref.shimane.lg.jp							
発行年月日	2017(平成 29)年 3 月 16 日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
ふるやしきいせき	しまねけん おおだし	32205	B61	35° 23' 36"	132° 55' 01"	20140509 ~ 20150131 20150514 ~ 20151225	2,200㎡ 1,900㎡	道路建設
古屋敷遺跡	島根県 大田市 にまちよう おおぐに 仁摩町 大国							
遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
古屋敷遺跡	集落	縄文 弥生	地床炉・炭だまり 溝状遺構	弥生土器・縄文土器 石器・石製品 土製品 漆塗り櫛 木杭 素材束		・県内初となる弥生時代前期の杭列を伴う溝状遺構を検出。 ・県内初となる縄文時代晩期の漆塗り櫛 2 点が出土。		
要約	古屋敷遺跡は大田市仁摩町大国の沖積平野東端に位置する、縄文後期から弥生前期の遺跡。本調査区では、弥生前期の杭列を伴う人工的な溝状遺構（水路）や縄文時代晩期を中心とする多くの地床炉・柱穴が検出された。またこれらに伴い、土器・石器を始め、縄文時代晩期の漆塗り櫛など様々な遺物が出土した。 本調査では、土器型式の変化や灌漑設備の導入など、縄文時代後期から弥生前期における遺跡の変遷を把握することができた。この地域が、水田農耕社会へと変化していく様子を検討する上で、貴重な資料を得た。							

(緯度・経度は世界測地系による)

一般国道9号(静岡仁摩道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書3

古屋敷遺跡(C・F・H・I区)

発行 2017(平成29)年3月
発行者 国土交通省松江国道事務所
島根県教育委員会
編集 島根県教育庁埋蔵文化財調査センター
〒690-0131 島根県松江市打出町33番地
電話 0852-36-8608
<http://www.pref.shimane.lg.jp/maizobunkazai/>
印刷 有限会社 古浦印刷